高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第151集

高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅺ

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ）

2018.2

高　知　県　教　育　委　員　会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅺ

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ）

2018.2

高　知　県　教　育　委　員　会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高田遺跡と宇賀遺跡の発掘調査は，国土交通省の進める高規格道路南国安芸道路建設に伴う緊急調査として平成27年度から実施してまいりました。宇賀遺跡は平成27年度で調査を終えましたが，高田遺跡につきましては平成29年度も3年目の調査を継続中です。

香南市ではこれまで物部川流域や香宗川流域をはじめ数多くの発掘調査が行われてきました。その調査成果によって地域の歴史が徐々に明らかになってきています。現在の野市台地は江戸時代の灌漑事業によって豊かな耕作地が広がっていますが，台地の南部においては，本格的な発掘調査が行われておらず，江戸時代以前の様相は把握できていませんでした。

今回の調査では，特に高田遺跡において弥生時代後期末から古墳時代初頭に営まれていた集落の存在と古代の役所に関連すると考えられる掘立柱建物跡群などの遺構と遺物が確認されました。この調査成果は香南市の歴史のみならず，弥生時代の高知平野の集落の移り変わりや古代における物部川下流域の地理的な重要性など，本県の歴史にとっても多くの知見をもたらしてくれるものとなりました。

最後になりましたが，発掘調査の実施につきましては，国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所，香南市教育委員会をはじめ，地元の皆様に多大なご理解とご協力を得ることができました。また，発掘作業・整理作業に従事していただきました作業員の皆様，報告書作成にあたりご指導並びにご教示いただきました関係各位に心から厚く御礼を申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人高知県文化財団　埋蔵文化財センター
所長　松田直則

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い，平成27年度に実施した高田遺跡調査第Ⅰ～Ⅲ区及び字賀遺跡，平成28年度に実施した高田遺跡の調査区のうち調査第Ⅱ－2区及び調査第Ⅳ区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は，高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から受託し，公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 高田遺跡は，物部川左岸に広がる野市台地の縁辺部に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落跡や古代の掘立柱建物跡群など多くの遺構・遺物が確認されている。字賀遺跡は，高田遺跡の東方約500mに位置する。調査面積は，平成27年度の字賀遺跡が2,735㎡，高田遺跡調査第Ⅰ～Ⅲ区は2,865㎡，平成28年度の高田遺跡調査第Ⅱ－2区及び調査第Ⅳ区は1,451㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成27年度

総　　括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　松田直則
総　　務：同次長兼総務課長　東勝彦，同総務係長　吉森和子，同主任　黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼第一班長　吉成承三
調査担当：同調査第二班長　池澤俊幸，同調査員　矢野雅子
　　調査補助員　坂本憲彦・岡林真史・前田早苗
事務補助員：廣内美登利

平成28年度

総　　括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　松田直則
総　　務：同次長兼総務課長　東勝彦，同総務係長　吉森和子，同主幹　三谷有紀
調査総括：同調査課長兼第一班長　吉成承三
調査担当：同調査第三班長　坂本裕一，同専門調査員　江間盛男，同主任調査員　筒井三菜
　　調査補助員　横山藍・松井喬行
事務補助員：奥宮千恵子

平成29年度（整理作業）

総　　括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　松田直則
総　　務：同次長兼総務課長　和田安弘，同総務係長　吉森和子，同主幹　三谷有紀
調査総括：同調査課長兼第一班長　吉成承三
調査担当：同調査第三班長　坂本裕一，調査補助員　松井喬行
事務補助員：谷幸絵

5. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章，第Ⅲ章の1.と2.(2)(3)及び第Ⅳ章の3.を坂本，第Ⅲ章の2.(1)及び第Ⅳ章の1.と2.を矢野，第Ⅴ章をパリノ・サーヴェイ株式会社が行い，編集は坂本が行った。現場写真は平成27年度は池澤，矢野，平成28年度は坂本，筒井が撮影し，遺物写真は高田遺跡調査第Ⅰ～Ⅲ区及び字賀遺跡を矢野，高田遺跡調査第Ⅱ－2区及び調査第Ⅳ区を坂本が撮影した。
6. 遺構については，ST（竪穴建物跡），SB（掘立柱建物跡），SA（柵列・塀跡），SK（土坑），SG（土器棺墓），

SD（溝跡），P（ピット），SX（性格不明遺構）で表記した。遺構番号については，宇賀遺跡及び高田遺跡の調査第Ⅰ～Ⅳ区はそれぞれで通し番号となっている。その他の調査区は，基本的に各調査区での通し番号となっているが，SG（土器棺墓）に関しては，高田遺跡全体で通し番号としている。また，掘立柱建物跡の一部については，模式図（S=1/200）とした。掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Ｎは世界測地系のGNである。

7. 遺物については，原則として弥生土器は縮尺 1/4，その他は縮尺 1/3 で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表記している。また，遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。

8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては，下記の方々のご指導及び貴重なご教示，ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏，パリノ・サーヴェイ株式会社

9. 調査にあたっては，国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力をいただいた。また，地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力をいただき，厚く感謝の意を表したい。

10. 現場作業及び整理作業については，下記の方々に労を厭わず従事していただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略，五十音順）

発掘調査作業員

池徹・岩崎啓・大野久雄・大和田延子・小笠原正貴・小川保雄・北村博・桑原富士子・小池美知子・小松小百合・西藤信之・坂田慎吾・島内修敏・島村孝男・島村雄二・田中召子・西内崇人・野村安正・濱田啓・廣末登・松木富子・森木義彦・山本実・山本和男・吉川すみ子

整理作業員

川添明美・小林貴美・高橋加奈・田島歩・藤原ゆみ・松田美香・横山めぐみ・吉本由佳・若江紗映

11. 出土遺物は，「15 － 2KU」，「15 － 3KT」，「16 － 2KT」と注記し，高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　序章 1
1. はじめに 1
2. 調査の契機と経過 1
3. 調査の概要 2
(1) 遺跡の概要 2
(2) 調査の方法 4
第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境 5
1. 地理的環境 5
2. 歴史的環境 6
(1) 縄文時代 6
(2) 弥生時代 7
(3) 古墳時代 8
(4) 古代 8
(5) 中世 9
(6) 近世以降 11
第Ⅲ章　高田遺跡 13
1. 調査の概要と基本層序 13
(1) 調査の概要 13
(2) 基本層序 13
2. 検出遺構と遺物 16
(1) Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 16
(2) Ⅱ－2区 92
(3) Ⅳ区 93
第Ⅳ章　宇賀遺跡 117
1. 調査の概要と基本層序 117
(1) 調査の概要 117
(2) 基本層序 117
2. 検出遺構と遺物 118
(1) 溝跡 118
(2) 出土遺物 119
3. まとめ 120
第Ⅴ章　自然科学分析 121
1. 高田遺跡の火葬人骨について 121
はじめに 121
(1) 試料 121
(2) 分析方法 121

(3) 結果 121
(4) 考察 121
2. 宇賀遺跡の自然科学分析 124
はじめに 124
(1) 試料 124
(2) 分析方法 124
(3) 結果 124
(4) 考察 126

挿図目次

図1－1　高田遺跡・宇賀遺跡位置図 1
図1－2　高田遺跡・宇賀遺跡調査区位置図 2
図1－3　高田遺跡グリッド図 3
図1－4　宇賀遺跡グリッド図 3
図2－1　高田遺跡・宇賀遺跡と周辺の地形 5
図2－2　周辺の遺跡(S=1/40,000) 10
図3－1　高田遺跡調査区配置図 13
図3－2　Ⅰ・Ⅱ区南壁セクション図 14
図3－3　Ⅳ区北壁セクション図 15
図3－4　ST1・8 16
図3－5　ST1埋土出土遺物実測図 16
図3－6　ST2 17
図3－7　ST2出土遺物実測図 18
図3－8　ST3 19
図3－9　ST3上層出土遺物実測図 20
図3－10　ST3中層出土遺物実測図 20
図3－11　ST3下層出土遺物実測図 21
図3－12　ST3埋土出土遺物実測図 22
図3－13　ST4・5 24
図3－14　ST4上層出土遺物実測図 24
図3－15　ST4下層出土遺物実測図 25
図3－16　ST4床面出土遺物実測図 26
図3－17　ST4中央ピット出土遺物実測図 26
図3－18　ST4埋土出土遺物実測図 26
図3－19　ST5検出面出土遺物実測図 27
図3－20　ST5上層出土遺物実測図 27
図3－21　ST5下層出土遺物実測図 28
図3－22　ST5床面出土遺物実測図 29
図3－23　ST5埋土出土遺物実測図 29
図3－24　ST6 30
図3－25　ST6検出面出土遺物実測図 31
図3－26　ST6上層出土遺物実測図 31
図3－27　ST6中層出土遺物実測図 32
図3－28　ST6下層出土遺物実測図 32
図3－29　ST6埋土出土遺物実測図 33
図3－30　ST6埋土(ST3)出土遺物実測図 34

図3－31　ST7 ……34
図3－32　ST7検出面出土遺物実測図 ……34
図3－33　ST7下層出土遺物実測図 ……34
図3－34　ST7埋土出土遺物実測図 ……35
図3－35　ST8埋土出土遺物実測図 ……36
図3－36　ST8埋土・包含層（Ⅲ層）出土遺物実測図 ……36
図3－37　ST8埋土・包含層（Ⅰ層）出土遺物実測図 ……37
図3－38　ST9 ……37
図3－39　ST9埋土出土遺物実測図 ……37
図3－40　SB1 ……37
図3－41　SB2 ……38
図3－42　SB3 ……38
図3－43　SB3出土遺物実測図 ……39
図3－44　SB4出土遺物実測図 ……39
図3－45　SB4 ……39
図3－46　SB5 ……39
図3－47　SB5出土遺物実測図 ……39
図3－48　SB6 ……40
図3－49　SB7 ……40
図3－50　SB8 ……40
図3－51　SB6出土遺物実測図 ……41
図3－52　SB7出土遺物実測図 ……41
図3－53　SB8出土遺物実測図 ……41
図3－54　SB9 ……42
図3－55　SB10 ……42
図3－56　SB10出土遺物実測図 ……42
図3－57　SB11 ……43
図3－58　SB11出土遺物実測図 ……43
図3－59　SB12 ……44
図3－60　SB12出土遺物実測図 ……45
図3－61　SB13 ……46
図3－62　SB14 ……46
図3－63　SB15 ……47
図3－64　SB16 ……47
図3－65　SB17 ……47
図3－66　SB14出土遺物実測図 ……47
図3－67　SB15出土遺物実測図 ……47
図3－68　SB18～22 ……48

図3－ 69　SB18・19・21・22出土遺物実測図 49
図3－ 70　SB23 50
図3－ 71　SB24 50
図3－ 72　SB25 50
図3－ 73　SB26 50
図3－ 74　SB27 50
図3－ 75　SB28 50
図3－ 76　SB24・27出土遺物実測図 51
図3－ 77　SB29 52
図3－ 78　SB30 52
図3－ 79　SB31 52
図3－ 80　SB32 52
図3－ 81　SB33 52
図3－ 82　SB34 53
図3－ 83　SA1 53
図3－ 84　SA2 53
図3－ 85　SA2出土遺物実測図 53
図3－ 86　SK1～3・6・8・17・18出土遺物実測図 54
図3－ 87　SK4出土状況図 54
図3－ 88　SK9出土遺物実測図 55
図3－ 89　SK11出土遺物実測図 56
図3－ 90　SK15出土遺物実測図 57
図3－ 91　SK20出土状況図 57
図3－ 92　SG1出土状況図 58
図3－ 93　SG2出土状況図 58
図3－ 94　SG1・2出土遺物実測図 59
図3－ 95　SD1 60
図3－ 96　SD2 60
図3－ 97　P1～10出土遺物実測図 62
図3－ 98　P11～20出土遺物実測図 63
図3－ 99　P18出土状況図 65
図3－100　P21～30出土遺物実測図 67
図3－101　P32～40出土遺物実測図 68
図3－102　P41～53出土遺物実測図 70
図3－103　SX6出土遺物実測図 74
図3－104　SX9出土状況図 74
図3－105　SX9出土遺物実測図 74
図3－106　SX11出土状況図 75

図3－107　SX11出土遺物実測図 76
図3－108　SX12出土遺物実測図 76
図3－109　第Ⅰ～Ⅱ層出土遺物実測図 76
図3－110　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図1 77
図3－111　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図2 78
図3－112　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図3 79
図3－113　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図4 80
図3－114　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図5 81
図3－115　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図6 82
図3－116　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図7 83
図3－117　第Ⅲ層出土遺物実測図1 84
図3－118　第Ⅲ層出土遺物実測図2 84
図3－119　第Ⅲ層出土遺物実測図3 85
図3－120　第Ⅲ層出土遺物実測図4 86
図3－121　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図1 87
図3－122　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図2 88
図3－123　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図3 89
図3－124　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図4 91
図3－125　SD1出土遺物実測図 92
図3－126　ピット出土遺物実測図 92
図3－127　包含層出土遺物実測図 92
図3－128　SB1 93
図3－129　SB2 94
図3－130　SB2出土遺物実測図 94
図3－131　SB3～6 95
図3－132　SA1出土遺物実測図 96
図3－133　SA1 96
図3－134　SK1～12 97
図3－135　SK5・7・8・10出土遺物実測図 98
図3－136　SK13出土状況図 99
図3－137　SK13出土遺物実測図 100
図3－138　SK14～17 101
図3－139　SG3出土状況図 102
図3－140　SG4出土状況図 102
図3－141　SG3出土遺物実測図 103
図3－142　SG4出土遺物実測図 103
図3－143　SG5出土状況図・出土遺物実測図 104
図3－144　SG6出土状況図・出土遺物実測図 105

図３－145　SD1 106
図３－146　SD1出土遺物実測図 106
図３－147　ハンダ土坑２出土遺物実測図 107
図３－148　SX2～４出土状況図 108
図３－149　SX3・４出土遺物実測図 108
図３－150　ピット出土遺物実測図 109
図３－151　第Ⅳ層出土遺物実測図１ 110
図３－152　第Ⅳ層出土遺物実測図２ 111
図３－153　第Ⅳ層出土遺物実測図３ 112
図３－154　第Ⅳ層出土遺物実測図４ 113
図３－155　包含層出土遺物実測図１ 114
図３－156　包含層出土遺物実測図２ 114
図３－157　包含層出土遺物実測図３ 115
図３－158　包含層出土遺物実測図４ 116
図４－１　宇賀遺跡調査区配置図 117
図４－２　Ⅳ区北壁セクション図 118
図４－３　SD16セクション図 118
図４－４　SD17セクション図 118
図４－５　SD18セクション図 119
図４－６　出土遺物実測図 119

遺物観察表目次

高田遺跡　遺物観察表１ 131
高田遺跡　遺物観察表２ 132
高田遺跡　遺物観察表３ 133
高田遺跡　遺物観察表４ 134
高田遺跡　遺物観察表５ 135
高田遺跡　遺物観察表６ 136
高田遺跡　遺物観察表７ 137
高田遺跡　遺物観察表８ 138
高田遺跡　遺物観察表９ 139
高田遺跡　遺物観察表10 140
高田遺跡　遺物観察表11 141
高田遺跡　遺物観察表12 142
高田遺跡　遺物観察表13 143
高田遺跡　遺物観察表14 144
高田遺跡　遺物観察表15 145

高田遺跡　遺物観察表16 146
高田遺跡　遺物観察表17 147
高田遺跡　遺物観察表18 148
高田遺跡　遺物観察表19 149
高田遺跡　遺物観察表20 150
高田遺跡　遺物観察表21 151
高田遺跡　遺物観察表22 152
高田遺跡　遺物観察表23 153
高田遺跡　遺物観察表24 154
高田遺跡　遺物観察表25 155
宇賀遺跡　遺物観察表 1 156

遺構計測表目次

高田遺跡　遺構計測表 1 159
高田遺跡　遺構計測表 2 160

図版目次

高田遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
図版 1　調査前風景(東より)
調査区南壁セクション(北東より)
図版 2　Ⅰ区遺構検出状態(北より)
Ⅱ区遺構検出状態(東より)
図版 3　Ⅰ区遺構完掘状態(東より)
Ⅱ区遺構完掘状態(東より)
図版 4　ST8セクション(南より)
ST1･8完掘状態(北東より)
図版 5　ST3床面検出状態(南東より)
ST3完掘状態(南より)
図版 6　ST4･5セクション(南より)
ST4･5完掘状態(南より)
図版 7　ST6セクション(南西より)
ST6完掘状態(南西より)
図版 8　SB2･3･9･10完掘状態(東より)
SB6セクション(南より)
図版 9　SB6完掘状態(西より)
SB28完掘状態(南西より)
図版10　ST2弥生土器(9)出土状態，ST3東西セクション(南より)，ST3焼土検出状態(南東より)，ST3石製品(43)出土状態，ST3作業風景，ST3弥生土器出土状態，ST3弥生土器(46)出土状態，ST4･5焼土検出状態(南東より)
図版11　ST6弥生土器(116)出土状態，ST7弥生土器(152)出土状態，SB7P11須恵器(176)出土状態，SB22P9土製品(206)出土状態，SK1土師器(212･213)出土状態，SK20骨出土状態，SG1弥生土器(230)出土状態，SG2弥生土器(231～233)出土状態
図版12　P17土師質土器(258)出土状態，P18土師器(259～262)出土状態，P44土師質土器(294)出土状態，SX9遺物出土状態，SX11北側検出状態，SX11南側土師器(317～322)出土状態，第Ⅲ層青磁(426)出土状態，第Ⅲ～Ⅳ層須恵器(449)出土状態

図版13　SG1弥生土器(甕)
図版14　SG2弥生土器(壺)
図版15　弥生土器(壺・甕・高杯)
図版16　弥生土器(壺・甕)
図版17　弥生土器(壺・鉢)
図版18　弥生土器(壺・鉢)
図版19　弥生土器(甕・鉢)
図版20　弥生土器(鉢)，土師器(椀)，土師質土器(椀)
図版21　土師器(高杯)，土師質土器(杯・椀)，青磁(碗)，土製品(羽口・土錘)
図版22　弥生土器(甕・鉢)，須恵器(蓋)，土師質土器(羽釜)，石製品(管玉・石包丁)，金属製品
図版23　土師器(杯・皿)，須恵器(円面硯)，土師質土器(小皿)，石製品(叩石・石包丁)
図版24　土師器(杯・皿)，須恵器(蓋・杯)，土師質土器(杯)，金属製品(銅釘)
図版25　土師器(皿・カマド)，緑釉陶器，土製品(支脚)
図版26　須恵器(甕・円面硯)，緑釉陶器(椀)，石製品(石鏃)，金属製品，鉄塊
Ⅱ－2区
図版27　遺構検出状態(北西より)
遺構完掘状態(北西より)
図版28　SB13完掘状態(南より)，SB13P1セクション(南より)，SB13P2セクション(南より)，SB13P3セクション(西より)，弥生土器(鉢)，土師器(椀)，石製品(砥石)
Ⅳ区
図版29　調査前風景(南東より)
遺構検出状態(東より)
図版30　遺構完掘状態(上空より)
調査区北壁セクション(南東より)
図版31　調査区下層北壁セクション(南東より)
SB1完掘状態(南より)
図版32　SB2完掘状態(南より)
SB3完掘状態(南より)
図版33　SA1完掘状態(北東より)
SG6弥生土器(512・513)出土状態
図版34　SK13遺物出土状態
SK13土師器(502)出土状態
図版35　SB1P1セクション(南より)，SB1P2セクション(南より)，SB1P3セクション(南より)，SB1P3完掘状態(南より)，SB1P4セクション(西より)，SB1P5セクション(西より)，SB1P6セクション(西より)，SB4P3セクション(南より)
図版36　SG3検出状態(北より)，SG3半裁状態(南より)，SG4検出状態(東より)，SG4・P234セクション(南より)，SG4弥生土器(509)出土状態，SG5検出状態(北より)，SG5半裁状態(西より)，SG6検出状態(南東より)
図版37　SD1完掘状態(南東より)，SD1セクション(南より)，SD1金属製品(514)出土状態，SD2セクション(南より)，SD3セクション(北より)，SD4セクション(東より)，SD5セクション(西より)，SD6セクション(西より)
図版38　SK1セクション(南より)，SK2セクション(南東より)，SK3セクション(南より)，SK4セクション(南より)，SK5セクション(南より)，SK6セクション(南より)，SK7セクション(南より)，SK8・10セクション(西より)
図版39　SK8土師質土器(499)出土状態，SK9セクション(西より)，SK10セクション(北より)，SK10土師器(501)出土状態，SK11セクション(南より)，SK12セクション(南より)，SK13灰釉陶器(504)出土状態，SK13土製品(505)出土状態
図版40　SK14セクション(南より)，SK15セクション(西より)，SK16セクション(南より)，SK17セクション(南より)，P159土師器(524)出土状態，P160土師

器(525)出土状態，P215 土師器(526)出土状態，SX2集石出土状態
図版41　SX3・4集石出土状態，SX5集石出土状態，表土掘削作業風景(北東より)，遺構検出作業風景(南より)，遺構掘削作業風景(南東より)，地元説明会風景，航測作業風景(南東より)，埋め戻し作業風景(北東より)
図版42　遺構出土遺物：弥生土器，土師器
図版43　遺構出土遺物：弥生土器，土師器，土師質土器，灰釉陶器，土製品，石製品，金属製品
図版44　遺構出土遺物：弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶器，磁器
図版45　Ⅳ層出土遺物：弥生土器，土師器，須恵器
図版46　Ⅳ層出土遺物：須恵器，緑釉陶器，瓦器，白磁，瓦
図版47　Ⅳ層及び包含層出土遺物：土師器，須恵器，緑釉陶器，土製品，石製品
図版48　包含層出土遺物：陶器，瓦，石製品，金属製品
宇賀遺跡
図版49　調査前風景(東より)
Ⅰ－2区北部遺構検出状態(南より)
図版50　Ⅰ－2区南東部遺構完掘状態(北西より)，Ⅰ－2区北部遺構完掘状態(南より)
図版51　Ⅰ－2区遺構掘削作業風景(北西より)，SD2バンクセクション(東より)，Ⅳ区遺構完掘状態(西より)，Ⅲ区表土掘削作業風景(東より)，Ⅳ区遺構掘削作業風景(北西より)
図版52　弥生土器(甕)，土師器(皿)，土師質土器(杯)，陶器(碗・擂鉢)，青磁(皿)，磁器(碗)

付図目次

付図1　高田遺跡調査第Ⅰ～Ⅳ区遺構平面図（S=1/200）
付図2　宇賀遺跡遺構平面図（S=1/200）

第Ⅰ章　序章

1．はじめに

本書は，高知県教育委員会が平成26・27年度に実施した試掘調査の結果を受け，平成27・28年度に実施した高知南国道路埋蔵文化財発掘調査のうち高田遺跡におけるⅠ～Ⅳ区及び宇賀遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は，国土交通省（四国地方整備局土佐国道事務所）が計画し実施している一般国道南国安芸道路建設工事に伴い，工事によって影響を受ける遺跡（埋蔵文化財）について発掘調査を行ったうえで出土遺物などの整理作業を行い，遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

高田遺跡は，香南市野市町下井地区に所在する遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）であり，平成26年度に実施した試掘調査の結果，遺跡範囲が西側に拡大された。古期扇状地を浸食した物部川の左岸の河岸段丘である野市台地に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代から古墳時代の集落や古代の掘立柱建物跡群，近世の耕作関連の遺構などが確認されている。宇賀遺跡は，香南市野市町下井地区に所在し，高田遺跡から東方約500mに位置する。平成26年度に実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡であり，耕作関連の遺構や弥生時代から近世までの遺物が出土している。

2．調査の契機と経過

南国安芸道路は，高知市と安芸市を結ぶ一般国道55号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として高知県中部と東部の広域交通の高速性と安全性を確保し生活環境の改善や地域活動の活性化などを図るとともに，四国横断自動車道と一体的に機能して高知県内あるいは県外との高速ネットワークを形成することを目的とする道路である。

高知東部自動車道は，高知県内で最も遺跡の集中する高知平野を延長36kmに渡り横断することから，路線上には多くの遺跡が所在する。また，未確認の遺跡が所在する可能性が十分考えられるため，その取り扱いについて平成15年度から国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育

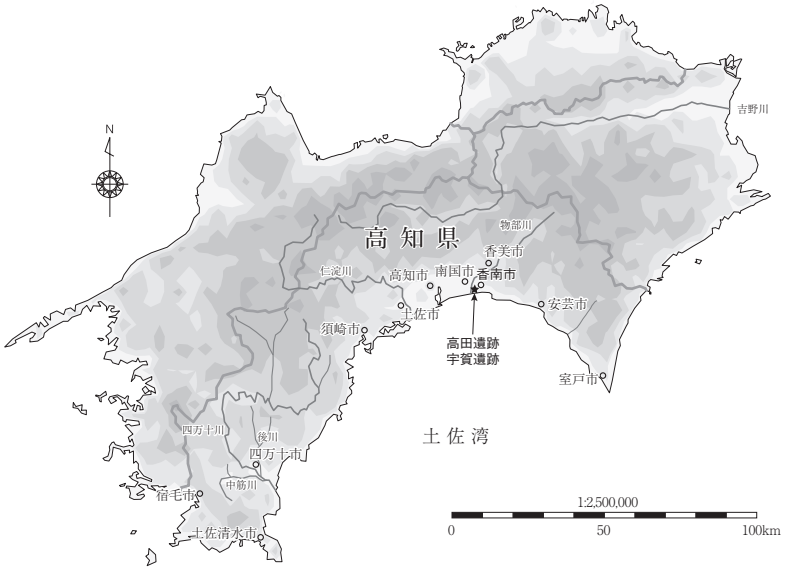


図1－1　高田遺跡・宇賀遺跡位置図

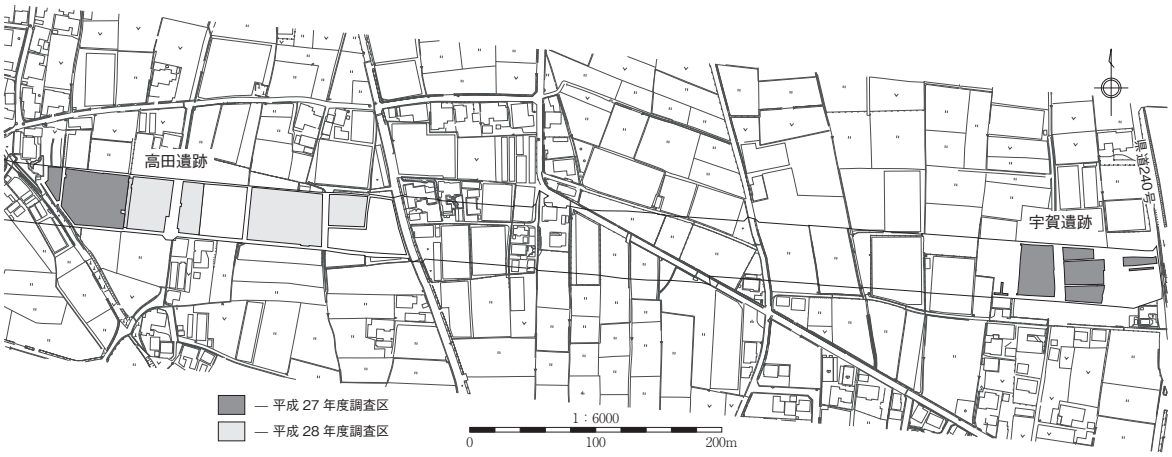


図1－2　高田遺跡・宇賀遺跡調査区位置図

委員会が調整を行った。その結果，工事予定区域について遺跡の有無及び遺存状況を明らかにするとともに工事の遺跡への影響を把握するため，土地の買収が完了した箇所から試掘調査及び確認調査を平成 19 年度までは財団法人(現公益財団法人)高知県文化財団埋蔵文化財センター，平成 20 年度以降は高知県教育委員会が順次実施し，必要な箇所については発掘調査を実施することとなった。

平成 16 年度以降に南国安芸道路の路線内で本発掘調査が実施された遺跡は，口槇ヶ谷遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)や花宴遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)，徳王子前島遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)，坪井遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ)，徳王子大崎遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ)，徳王子広本遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ)，東野土居遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ～Ⅸ)であり，順次発掘調査報告書が公刊されている。

平成26年度には上岡地区及び下井地区が工事対象となり試掘調査が実施された結果，上岡地区で遺構と遺物が確認され，高田遺跡の範囲が拡大された。また，下井・宇賀地区においても遺構と遺物が確認され，宇賀遺跡が新設された。そこで，国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知県教育委員会と公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターとの間で業務委託契約が締結され，平成27年度に高田遺跡のⅠ～Ⅲ区と宇賀遺跡，平成28年度に高田遺跡のⅡ－2・Ⅳ～Ⅶ区の本発掘調査を実施した。高田遺跡については，平成29年度も継続して本発掘調査を行っている。

3. 調査の概要

(1) 遺跡の概要

① 高田遺跡

高田遺跡は平成元年に実施された分布調査で確認されていた遺跡で，平成 26 年度の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が拡大され，弥生時代から近世にかけての遺構と遺物が確認される複合遺跡となった。

本遺跡は物部川左岸の河岸段丘である野市台地上に立地しており，弥生時代では調査対象区の中部と西部において弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡が10軒以上検出されており，当該

期に集落が存在していたことが明らかとなった。調査区は河岸段丘の縁辺部にあたることから，集落は北側に広がると考えられる。古代では調査区全域で掘立柱建物跡群が確認されており，当該期の役人層が使ったとみられる道具類や搬入品などが出土していることから当時の官衙に関連する施設があったと考えられる。中世の遺構や遺物はほとんど確認されておらず，近世以降になると溝などの耕作関連の遺構が確認されている。

② 宇賀遺跡

宇賀遺跡は，平成 26 年度に実施された試掘調査で発見され新設された遺跡である。高田遺跡の東方約 500m に位置する。近世以降と考えられる溝跡などの耕作関連の遺構が確認され，遺物は包含層などから弥生時代から近世までの遺物が出土している。

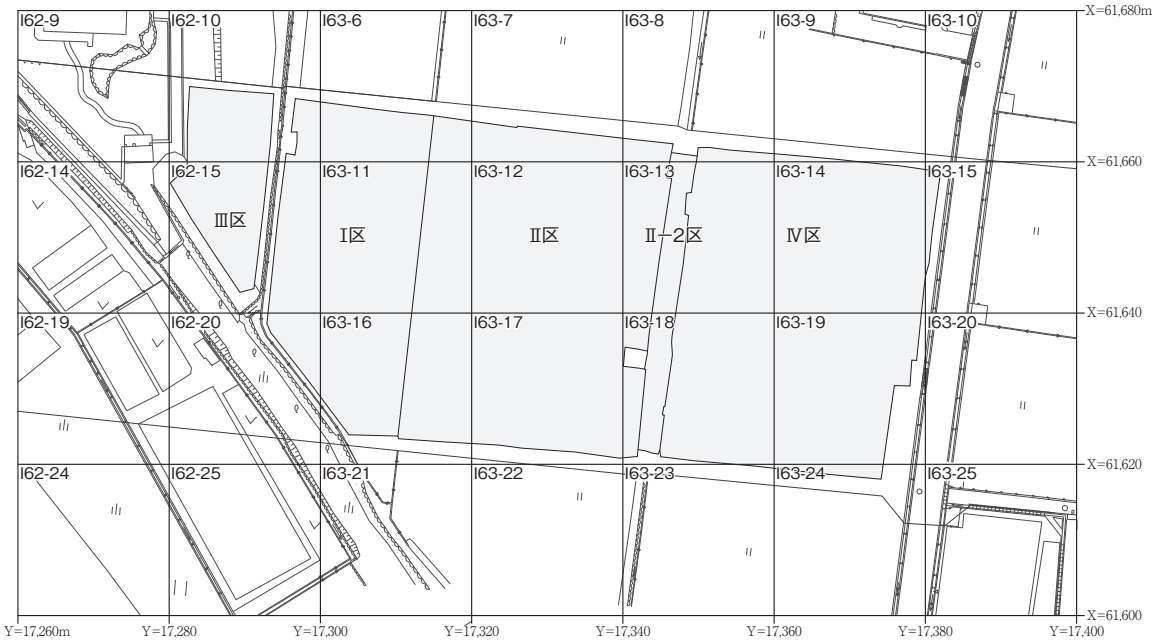


図1－3　高田遺跡グリッド図

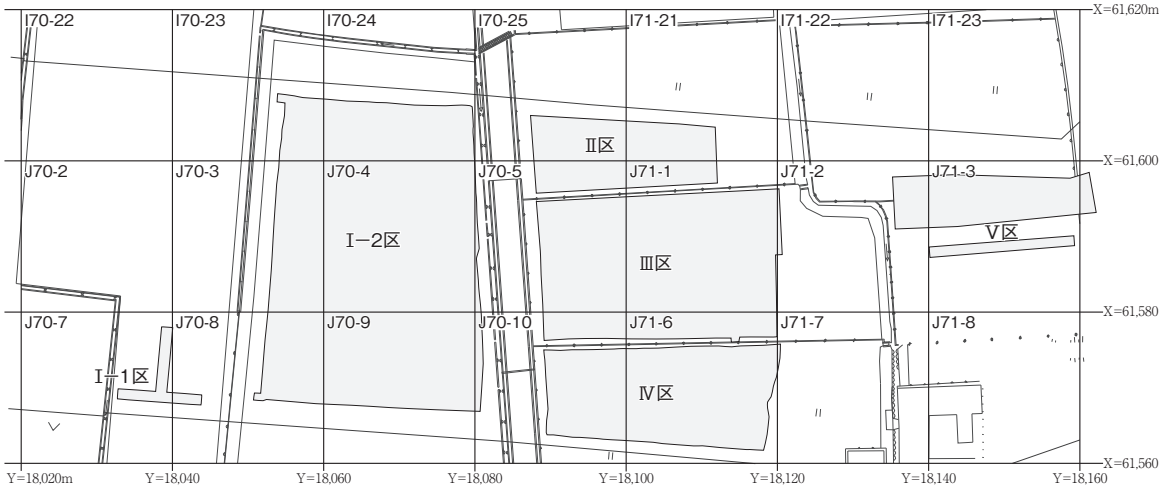


図1－4　宇賀遺跡グリッド図

⑵ 調査の方法

試掘調査の結果を受けて高田遺跡及び宇賀遺跡の調査区の設定を行い，グリッドの設定は西野々遺跡からの一連のものを使用して行った。世界測地系第４座標系（Ⅳ系）の基準点を使用し，X=62,500m，Y=11,000m（北緯33°　33′　49″，東経133°　37′　07″，真北方向角 －0°　03′　56″）を原点とし，A0を組んでいる。X軸にアルファベット，Y軸にアラビア数字を配し，100m四方の大グリッド，20m四方の中グリッド，４ｍ四方の小グリッドを設定し，大中小グリッドの間は「－」で区切って表記した。なお，遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。遺構平面図，遺物出土状況図などの作図及び遺物取り上げなどの測量はこのグリッド，座標を使用して行った。

調査に際しての堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上まではバックフォーを使用し，遺物包含層以下は人力で行った。なお，遺物包含層であっても遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮してバックフォーで掘削を行った。遺構検出後は，必要に応じて写真撮影と実測図面の作成を行いながら遺構の掘削を行った。調査終了後は下層確認のためにトレンチ掘削を行った。

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

1．地理的環境

高田遺跡と宇賀遺跡が所在する高知県香南市は，県中央部に広がる高知平野の東部で香長平野と呼ばれる東端部に位置する。平成18年3月1日に香南5町村（赤岡町，香我美町，野市町，夜須町，吉川村）が合併して誕生した市である。東西約20km，南北約15km，面積126.26㎢，人口は約34,000人で東は安芸市と安芸郡芸西村，西は南国市，北は香美市に接している。剣山系白髪山（香美市物部）に源流を発し香南市吉川で土佐湾（太平洋）に注ぐ県下三大河川の一つである物部川の左岸に位置する。市域には県都高知市と県東部を結ぶ国道55号や土佐くろしお鉄道ごめんなはり線が走っている。主要産業は，物部川と市域東部を流れる香宗川により形成された扇状地や沖積平野の肥沃な土地を活かした米作が中心であったが，近年は園芸農業が主体となっている。

地形的には，北側から北東側に標高約300～600mの山地地形があり，南西側が台地から沖積地などの平坦地形で，南部は土佐湾に面する海岸地帯である。山地は北西側から三宝山のある秋葉山地，月見山のある香美山地，手結山のある安芸山地に区分される。山地はそれぞれ北東及び北西方向に延びる。これらの山地は海洋プレートの沈み込みにより形成された付加体により構成されている。秋葉山地は秩父帯南帯三宝山帯にあたり，海溝充填堆積物である砂岩泥岩などと遠洋性堆積物であ

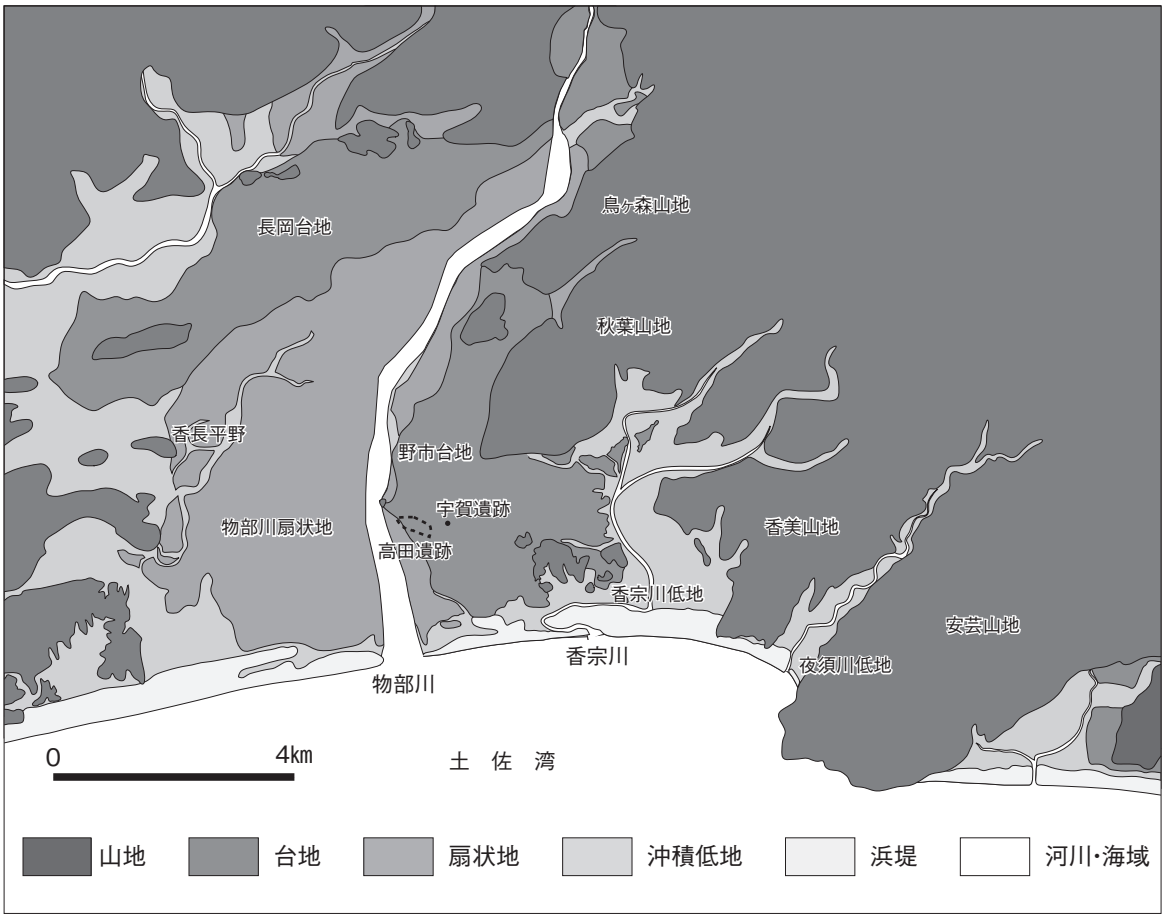


図2－1　高田遺跡・宇賀遺跡と周辺の地形

る石灰岩，チャートなどが混在している。香美山地から安芸山地にかけては四万十帯に属し，低地部は主に海溝充填堆積物である砂岩泥岩互層を基盤として，香美山地の月見山，安芸山地の手結山は海洋地殻，遠洋性堆積物などのブロックが混在するメランジュ帯から構成される。香宗川支流の山北川流域に小規模な河岸段丘が，安芸山地には数段の海岸段丘がみられることから，これらの地域は地盤の隆起量が大きいとみられる。一方で秋葉山地，香美山地では谷底平野がみられ，谷の開析が進んでいることから隆起量は小さいとみられる。

平坦部は秋葉山地南側と香美山地の間に野市台地と香宗川低地があり，香美山地と安芸山地の間には溺れ谷が埋積された夜須低地が存在する。野市台地は物部川古期扇状地であり，緩傾斜の平坦面が数面みられる。また，台地の南側に物部川，香宗川の影響を受けた還流丘陵とみられる残丘が香美山地の延長部に残されている。この丘陵地は野市台地を大きく2つの斜面に境界しており，この境界に沿って烏川が流れている。現在の野市台地は西側が野市地区市街地となっており，市街地以外は灌漑によりほぼ全域が耕作地となっているが，更新世後期に物部川により形成された扇状地であるとみられており，形成時には物部川の分流が現在の香宗川流域に流入し，野市台地の東側斜面が形成されたとみられる。また，香宗川低地地下においても物部川もしくは香宗川により開析された谷を扇状地性堆積物が埋積していることがボーリング調査によって明らかになっており，古期扇状地は香宗川低地に及ぶ。近年この物部川古期扇状地の表層を覆うローム層中に姶良丹沢火山灰を挟在することが明らかになりつつあり，古期扇状地の離水は約3万年前以前とみられる。また，南国市の長岡台地では阿蘇4火山灰に類似した角閃石がローム層中にみられるという報告もあり，古期扇状地の離水は12万年前まで遡る可能性もある。野市台地上には離水後に形成されたとみられる河道跡がいくつか認められ，これらは烏川の旧河道である可能性が高いため，烏川は現在の赤岡ではなく下分から須留田の辺りで香宗川に合流していたとみられる。

海岸側には物部川や香宗川などの河川が流した土砂と海岸に沿って移動してきた漂砂が堆積して形成された複数列の浜堤（砂堆）が弓状に延びて旧汀線を示しており，背後には潟湖性の低地が認められる。この浜堤上には吉川，赤岡，岸本地区などの市街地がみられる。物部川河口の吉川地区と香宗川の河口の赤岡地区には漁港が造られている。

高田遺跡は，この野市台地の西南部，物部川河口に近い河岸段丘の南西側縁辺部に所在する。古来，土佐湾から物部川に入り陸路へと繋がる流通の要衝となる場所である。宇賀遺跡は高田遺跡から約500m東側に位置する。

2. 歴史的環境

(1) 縄文時代

南四国における縄文時代以前の遺跡分布は西高東低で，香南市域においても分布密度は希薄であり旧石器時代の遺跡は確認されておらず，縄文時代の遺跡は5遺跡のみである。草創期の有舌尖頭器が採集された手結遺跡[(1)]，後期前葉の宿毛式，松ノ木式，後期中葉の片粕式の土器片が出土した拝原遺跡[(2)]，貯蔵穴が確認され埋土中から晩期中葉とされる深鉢と黒色磨研浅鉢が出土した十万遺跡[(3)]などの例が知られていたが，いずれも断片的な出土状況であった。庭ヶ渕遺跡[(4)]において，晩期末の刻目突帯文土器や弥生時代前期前半の遠賀川式土器などとともに住居の可能性のある竪穴状遺構などが確認され，縄文晩期から弥生時代前期前半にかけての移行期の集落として注目されている。

⑵ 弥生時代

高知平野の弥生文化は前期初頭に物部川右岸の田村遺跡群（南国市）に始まり周辺に広がりをみせる。香南市域で最も古い弥生時代の遺跡は香宗川左岸の徳王寺大崎遺跡[5]で，前期前半の土坑と同中葉の竪穴建物跡が確認された。庭ヶ渕遺跡では前期前葉から中葉（遠賀川式）の土器が出土している。明確な遺構は未確認であるが，縄文晩期の刻目突帯文土器もまとまって出土しており，田村遺跡群からの伝播を受けた移行期の遺跡と考えられている。

前期末になると，上岡遺跡[6]，下分遠崎遺跡[7]，北地遺跡[8]，拝原遺跡，十万遺跡など集落数は急増する。下分遠崎遺跡は低湿地に所在し4次にわたる調査が行われ，鋤や鍬などの木製品やカツオの脊椎骨をはじめツキノワグマ，シカ，イノシシ，イヌなどの様々な魚骨・獣骨類，ドングリ類，メロンやヒョウタンなどの種子類が出土し，遺構出土の炭化米の分析から熱帯ジャポニカのDNAが検出されるなど多くの知見があった。北地遺跡では高知平野で確認例の少ない中期前葉の竪穴建物跡が確認されている。また，陰石と陽石が出土しており，弥生時代のこの種の石器としては初めてのものである。下分遠崎遺跡や北地遺跡などいくつかの遺跡では集落が弥生前期末から中期前葉・中葉にかけて継続して営まれるが，前期末のみの短命な遺跡もみられる。

中期末から後期の初めにかけては，高地性集落的な要素をもつ集落がみられる。本村遺跡[9]は標高30m前後を測る低丘陵の斜面部に立地しており，竪穴建物跡とともに段状遺構など典型的な遺構群が確認されている。土器は凹線文土器が主体でガラス製の勾玉も出土している。同遺跡の北東に連なる標高230mの山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡[10]や，日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡[10]などがほぼ同時期に営まれており，これらの遺跡は中部瀬戸内からの影響を受けた可能性が指摘されている。

後期前半には下ノ坪遺跡[11]と上岡北遺跡[12]が登場する。下ノ坪遺跡では，後期前葉・中葉の竪穴建物跡15軒や溝，土坑などを確認している。また，鉄斧や摘鎌，鉇などの鉄器が多く出土し，多数のガラス小玉が出土した大型竪穴建物跡も確認された。トレンチ調査であったことを考えると，これに数倍する規模の集落が想定される。当遺跡は田村遺跡群の盛行期と時期を同じくしており，田村遺跡群を核とした衛星的集落の一つと位置づけられている。そして田村遺跡群同様に後期中葉段階で終焉を迎える。これは高知平野の弥生集落全体にみられる傾向で大規模な自然災害の可能性が考えられている。

後期後半になると深渕遺跡[13]や拝原遺跡，十万遺跡など新たな小規模集落が登場し，西野遺跡群ルノ丸地区[14]，徳王寺大崎遺跡，幅山遺跡[15]，稗地遺跡[16]，東野土居遺跡[17]など古墳時代初頭にかけて集落数はさらに増加し盛行する。高田遺跡もこの時期に営まれた集落である。ヒビノキⅡ式土器から始まるこれらの遺跡では，これまでとは土器組成に変化がみられ長胴タタキ甕と鉢を主体とし，河内産の庄内式土器や東阿波型土器などの搬入品がみられる。また，竪穴建物跡も円形から方形に変化する。古墳時代の初めのヒビノキⅢ式土器（古式土師器Ⅰ期）を過ぎると集落遺跡は再び激減する。

その他に深渕遺跡，東野土居遺跡，幅山遺跡では竪穴建物跡とともに土器棺墓が確認され，兎田柳ヶ本遺跡[18]では方形周溝墓の可能性をみせる遺構が検出されている。高田遺跡においても土器棺墓が確認されているが，当地域において当該時期の墓制や祭祀空間などの様相を把握するにはさらに今後の資料の蓄積を待たねばならない。

香南市域は青銅器の注目される地域でもある。兎田八幡宮所蔵の絵画銅剣[19]は，中細銅剣の翼にシ

カやカエル，カマキリなどが陽刻されたものである。南四国の銅剣は高知平野西部の仁淀川流域やさらに西方の新荘川流域に分布の中心があり，兎田八幡宮のものは最も東部の例である。中期に周辺の遺跡にもたらされた可能性が考えられる。遺跡で発見されたものとしては，北地遺跡の後期前葉の竪穴建物跡から舶載鏡片がある。田村遺跡群や周辺の遺跡からは４点の舶載鏡片が出土しているが，物部川以東では初めての例であり，鏡式を正確に把握できないが漢代の中国鏡である。西野遺跡群ルノ丸南Ａ地区[14]からは，中広形銅矛の転用品が出土し注目された。弥生時代の青銅祭器としての役割を終えた後，再加工された可能性がある。

(3) 古墳時代

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降，高知平野では遺跡の確認例がほとんどなくなり，集落数は激減する。拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期(4 世紀)の竪穴建物跡が２軒確認された数少ない例である。香南市域では初期須恵器の出土は徳王寺広本遺跡[20]のみであり，香南市を含め高知平野は前期古墳の例がほとんどみられない前期古墳空白地帯となっている。中期においても徳善天王古墳の記述が『香我美町史』[21]にみられるが確証を得ることができず，それ以外は６世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり，存在が伝えられているが現況を残していないものも少なくないため，詳細な時期が特定できないものも多く，４～５世紀前後の様相はほとんど解明されていない状況である。

香南市域の古墳分布は，三宝山系の西側斜面や母代寺遺跡のある丘陵の西部，東野土居遺跡のある中央部，香宗川上流の東部の３地域に大別できる。西部には大谷古墳や溝渕山古墳，日吉山古墳など消滅したものも含めて９基を数える。中央部には大崎山古墳，東部は幅山古墳や鳴子古墳など数基の古墳が存在したと記録されている[10・21]。ほとんどが未調査であるが，開口例や伝承などからほとんどが円墳で横穴式石室を有するものと考えられる。これらの古墳のうち発掘調査が実施されたのは大谷古墳[22]と大崎山古墳[23]のみである。大谷古墳は直径 12m の円墳で，玄室は 4.5m×2m を測り，ガラス切子玉や金環，銀環，鉄鏃などが出土しており，６世紀後半の築造である。大崎山古墳は直径 10m の円墳で，玄室は 5.4m×1.9m を測り，床面から長脚二段透高杯６点を始めガラス小玉などが出土しており，香南地域の中では最も古相で且つ大型の石室墳である。

大谷古墳や大崎山古墳は高知平野の後期古墳の導入と時期を同じくするものと捉えることができるが，集落遺跡も６世紀後半頃から認められるようになる。西部の深渕遺跡からは６世紀中葉～後葉の竪穴建物跡４軒と６世紀中葉～７世紀代の掘立柱建物跡４棟を確認し，下ノ坪遺跡ではカマド付きの竪穴建物跡４軒と掘立柱建物跡２棟が確認されている。東部の拝原遺跡からは竪穴建物跡３軒，掘立柱建物跡１棟が確認されており，竪穴建物跡の２軒にはカマドが造り付けられる。こうした集落と古墳被葬者との関連性については今後の検討を要するが，古代における深渕郷，宗我郷，大忍郷などの原型となったものと考えられる。

(4) 古代

律令期には水運の要衝に立地した遺跡が注目され，西部の物部川流域では下ノ坪遺跡と深渕遺跡，香宗川流域では十万遺跡と曽我遺跡[24]をあげることができる。下ノ坪遺跡は，８世紀前半～９世紀中葉頃にかけての香長条理に沿った大型で企画性のある掘立柱建物跡が 15 棟確認されている。特に９世紀前半に盛行期があり建物規模も大きくなり，南四国最大級の総柱掘立柱建物跡も確認されている。遺物は全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡や帯金具の鉈尾や丸鞆，円面硯，風字硯，佐波理椀，緑釉陶器火舎，多量の赤彩土師器，鍛治工房の存在を示す取り瓶などが出土している。また，土坑か

ら当該時期の土師器・須恵器の一括資料が出土しており，土佐における律令期の標識資料となっている。こうした遺構の規模や遺物の質・量から官衙的性格をもつとともに川津としての機能が考えられる遺跡である。深渕遺跡は，建物の規模や性格について明確にできるものはないが，鉈尾や二彩陶器，緑釉陶器，墨書土器，円面硯，風字硯などが出土している。また，古代瓦がまとまって出土しており，上限は白鳳期，下限は平安期に求められる。スサ入りの窯壁塊もともに出土しており，古代瓦窯の存在も想定され殿の内瓦窯跡[13]と呼ばれている。

香宗川流域の十万遺跡からは８世紀代の企画性をもった建物跡が14棟確認されている。中央部に「コ」の字に配された中心建物が建ち，西部には倉庫群が整然と配置されており，官衙的性格を帯びた建物群と考えられる。曽我遺跡は９世紀代を中心とする建物跡が８棟確認されている。調査範囲の関係で規模は正確に把握できないが，建物跡群は軸線を共有し整然と配置されており官衙的な性格が伺える。遺物は円面硯６点，転用硯４点，緑釉陶器45点，黒色土器，灰釉陶器などが出土している。

古代の窯跡として西部の佐古地区周辺に亀山窯跡，アゴデン白岩窯跡[10]，東部の徳王子地区に徳王寺古窯群[21]が確認されている。亀山窯跡で生産された瓦は平安京大極殿や藤原氏の氏寺である法勝寺に使用された記録が残っており，古代における土佐と中央の関係を知る上で重要な遺跡と捉えられている。徳王寺１号窯は登窯で残存状態は良くないが，７世紀末から８世紀前葉の須恵器杯（身・蓋），高杯，鉄鉢などが出土している。同２号窯は瓦窯で縄蓆文がみられる瓦が出土している。

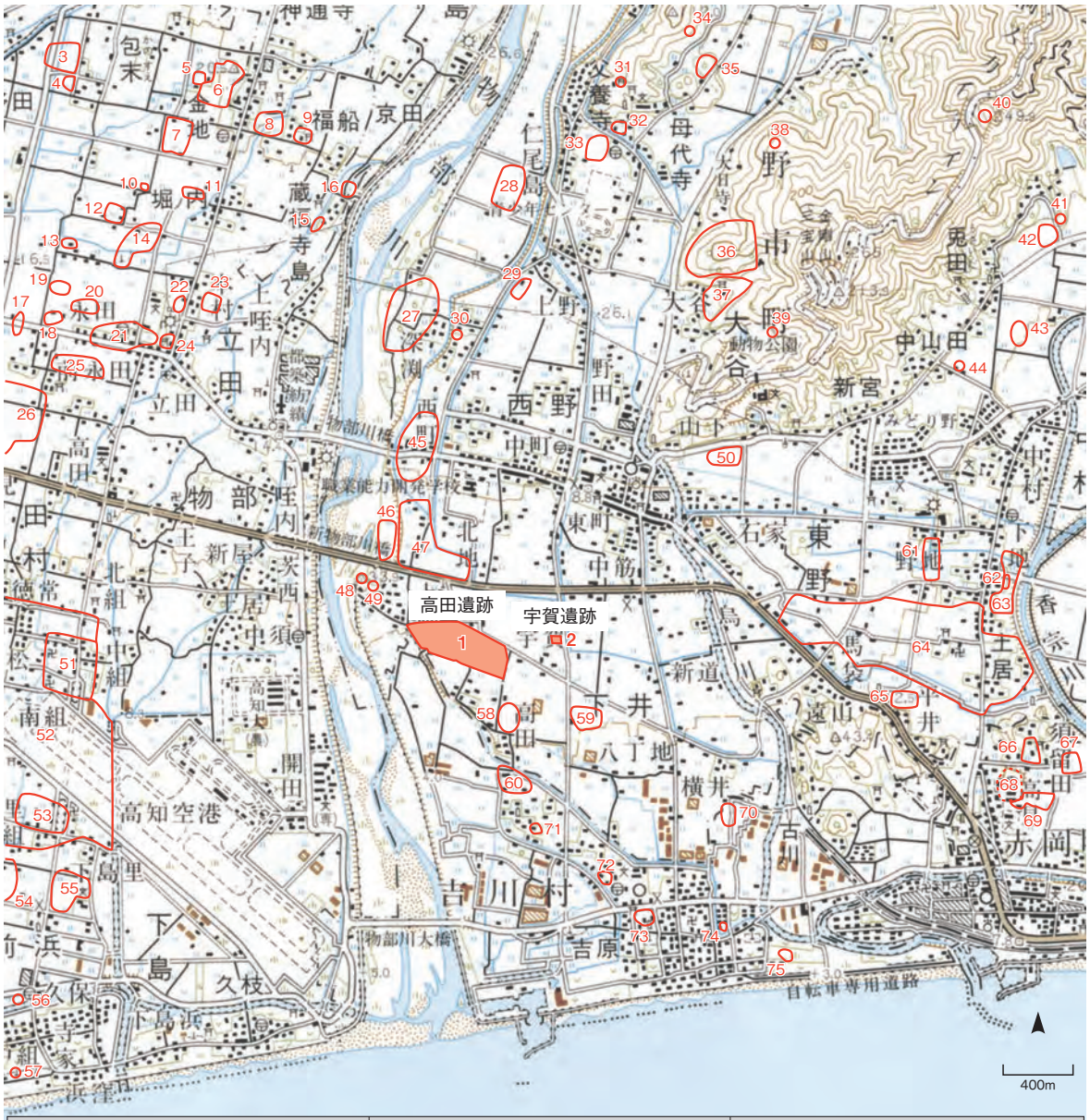
古代の香美郡は『倭名類聚鈔』によると８郷よりなっていたとされ，香南地域は西から深渕郷，曽我郷，大忍郷が該当する。これまでに確認された遺構が律令体制下の地方支配とどのように関わりをもっていたかは明らかでないが，官衙的性格をもった建物群が河川交通の要衝と考えられる地点に存在したことは明らかである。これらの建物群は９世紀までは存続するが10世紀に至ると激減する。この時期は古代末から中世初頭にかけてみられる各地の荘園の成立時期にあたり，土佐における古代社会の変容を知る上での貴重な資料となっている。

(5) 中世

香美郡内に成立した大忍庄（荘）は土佐湾に面した香南市香我美町岸本から山間部の香美市奥物部に跨がる広大な荘域を有していた。大忍郷が荘園化したものと考えられ，鎌倉時代の後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が，次いで南北朝期には紀州の熊野神社が荘領主となり，15 世紀には室町幕府管領で土佐守護の細川氏の所領となるなど，権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏が台頭する。香宗我部氏は鎌倉時代初期に中原秋家が深渕・宗我部両郷の地頭職に任じられ土佐に入部したことに始まるとされている。地名を氏としての宗我部氏を名乗ったが，長岡郡の宗我部（秦）氏と区別するため郡名を冠して香宗我部氏を称したとする。鎌倉期から南北朝期を通して地域支配を固め勢力を拡大し，戦国期には東の安芸氏，西の長宗我部氏などと並ぶ土佐の七勇に数えられるまでに成長している。東野土居遺跡[17]では一辺約 35 ～ 55m を測る 16 区画の屋敷跡や幅４～５m，深さ 2m を測る堀に囲まれた一辺約 80m，敷地面積が 2,000 ㎡を越える屋敷跡が確認されている。これらの屋敷群は 14 ～ 15 世紀の香宗我部氏が最も隆盛した時期の給人層の屋敷地と考えられている。

16 世紀代に入り守護代細川氏の勢力の衰えにともない，その権力を背景としていた香宗我部氏も台頭する長宗我部氏の勢力に抗えず，その傘下となり長宗我部国親の三男親泰を養子に迎えることとなる。香宗城跡[10]はこの時期の香宗我部氏の居城とされ八幡社と土塁の一部を存しており，現在は



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1. 高田遺跡	弥生～近世	26. 修理田遺跡	弥生～平安	51. 田村城跡	中世
2. 宇賀遺跡	弥生～近世	27. 深渕遺跡	縄文～近世	52. 田村遺跡群	縄文～近世
3. 包末井ノ内遺跡	縄文・古墳～平安	28. 深渕北遺跡	弥生～中世	53. 千屋城跡	中世
4. 包末土居城跡	中世	29. 西上野遺跡	弥生	54. 委重遺跡	古墳～近世
5. 包地土居城跡	中世	30. 深渕城跡	中世	55. 司例田遺跡	古墳～近世
6. 垣添遺跡	古墳～中世	31. 父養寺古墳（消滅）	古墳	56. 中屋敷遺跡	弥生
7. 芝田遺跡	古墳～中世	32. 城八幡城跡	中世	57. 前浜砲台跡	近世
8. 若宮遺跡	弥生～平安	33. 母代寺遺跡	平安・中世	58. 野口遺跡	弥生～中世
9. 岩村土居城跡	中世	34. 日吉山古墳群	古墳	59. 下井遺跡	平安・中世
10. 屋根添遺跡	古墳	35. 亀山窯跡	平安	60. 野口遺跡	弥生～中世
11. 芝ノ端遺跡	古墳	36. 大谷城跡	中世	61. 東野遺跡	平安
12. 石神遺跡	弥生～平安	37. 大谷遺跡	古墳・平安	62. 香宗城跡	中世
13. 柚木内遺跡	古墳～平安	38. 溝渕山古墳	古墳	63. 香宗遺跡	中世
14. 古流曽遺跡	古墳～平安	39. 大谷古墳	古墳	64. 東野土居遺跡	弥生～近世
15. ヲサガ渕遺跡	奈良～中世	40. 笹ヶ峰遺跡	弥生	65. 平井遺跡	古墳～平安
16. 東屋敷遺跡	中世	41. 大崎山古墳	古墳	66. ハザマ遺跡	弥生～中世
17. 表中内遺跡	弥生～平安	42. 西ノ谷遺跡	平安	67. 大東遺跡	古墳～平安
18. 平杭遺跡	弥生・古墳	43. 兎田柳ケ本遺跡	古墳	68. 須留田城跡（消滅）	中世
19. 上横田遺跡	古墳～平安	44. 中山田土居城跡	中世	69. 御所の前遺跡	弥生～中世
20. 大北遺跡	古墳～中世	45. 西野遺跡群	弥生・古墳・平安	70. 小屋敷遺跡	中世
21. 寺ノ前遺跡	弥生～中世	46. 下ノ坪遺跡	平安	71. 吉原城跡	中世
22. 北角田遺跡	弥生～平安	47. 北地遺跡	弥生	72. 八反遺跡	中世
23. 立田土居城跡	中世	48. 上岡北遺跡	弥生・近世	73. 浜口遺跡	弥生・古墳
24. 徳弘土居城跡	中世	49. 上岡遺跡	弥生・中世	74. 南中曽遺跡	弥生・古墳
25. 高添遺跡	弥生～平安	50. 山下遺跡	平安・中世	75. 住吉砂丘遺跡	弥生

図２－２　周辺の遺跡(S＝1/40,000)

市史跡に指定されている。香宗我部氏の菩提寺の宝鏡寺跡には観音堂や五輪塔などが造立されており，香宗我部親泰の墓もみられる。

その他に中世のまとまった遺構が確認されている遺跡としては，十万遺跡[3]をあげることができる。十万遺跡では古代の建物跡群の上層から溝で区画された屋敷地と多くの掘立柱建物跡群が確認されている。屋敷地はL字形に巡る3条の大溝によって1,000㎡前後或いはそれ以上の面積を有する3つの区画からなっている。屋敷群の東側の山上には十万城跡が屹立し，山城に近い東の屋敷地が最も広く大溝の規模も3m前後と最も大きい。屋敷地の中には14～16世紀の掘立柱建物跡が39棟確認され，各区画には中心となる建物の存在も明らかになっており，大忍庄内における名主層などの在地勢力が構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されている。また，深渕北遺跡[25]では白磁など日宋貿易に関係する遺物や布目瓦などが出土しており，古代末から中世前期にかけて機能した川津と考えられている。母代寺土居屋敷遺跡[26]からは屋敷跡と大量の瓦と土器による廃絶儀礼が行われたとみられる井戸跡が確認されている。

(6) 近世以降

近世前期になると物部川に山田堰が築かれ，分水による香長平野全域の灌漑施設整備が行われ，野市台地も開墾が進み豊かな穀倉地帯となった。高田遺跡の西側，物部川左岸に位置する上岡北遺跡[12]からは物部川の治水を手がけた土佐藩執政家老の野中兼山による築堤と推測される石積み遺構が確認されている。堤防上面からは18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器が出土しているが，堤防内から時期判定可能な遺物は皆無であったため築堤の時期を特定することはできていないが，近世の絵図面と形態を手がかりに17世紀頃と推定されている。この築堤は埋め戻され保存されている。

現在，野市台地は開墾され主に水田域となっているが，地籍図には江戸時代に新たに付けられたとみられる字名のみで，旧来の字名を知る資料は残存しない。江戸時代の野中兼山による整備事業を皮切りに大規模な開墾が行われたことによるものとみられる。野市は物部川西岸の南国市後免に対する東岸の開発拠点として西野周辺に集落が形成され，民家・商家が発展し，明治以降は町村制度施行による幾度かの合併を経て，今日に至っている。

参考文献

（1）夜須町教育委員会『夜須町史　上巻』1984年

（2）香我美町教育委員会『拝原遺跡』1993年

（3）香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988年

（4）香南市教育委員会『庭ヶ渕遺跡』2012年

（5）高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『徳王寺大崎遺跡』2013年

（6）野市町教育委員会『上岡遺跡』2005年

（7）香我美町教育委員会『下分遠崎遺跡』1987年

（8）香南市教育委員会『北地遺跡』2011年

（9）野市町教育委員会『野市町本村遺跡調査報告書』1993年

(10) 野市町教育委員会『野市町史　上巻』1992年

(11) 野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ』1997・1998年

(12) 野市町教育委員会『上岡北遺跡』2009年

(13) 野市町教育委員会『深渕遺跡発掘調査報告書』1989年
(14) 更谷大輔「香南市西野遺跡群ルノ丸地区南・ルノ丸地区南Ａ」『埋文高知第21号』高知県教育委員会2008年
(15) 香我美町教育委員会『幅山遺跡』1999年
(16) 香我美町教育委員会『稗地遺跡』1993年
(17) 高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『東野土居遺跡Ⅱ・Ⅲ』2015・2016年
(18) 香南市教育委員会『兎田柳ヶ本遺跡』2010年
(19) 岡本健児・岡本桂典「高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画を持つ銅剣」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要　第３号』高知県立歴史民俗資料館1989年
(20) 高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『徳王寺広本遺跡』2014年
(21) 香我美町教育委員会『香我美町史』1986年
(22) (財)高知県文化財団『大谷古墳』1991年
(23) 香南市教育委員会『大崎山古墳』2013年
(24) 野市町教育委員会『曽我遺跡発掘調査報告書』1996年
(25) 野市町教育委員会『深渕北遺跡』1996年
(26) 香南市教育委員会『母代寺土居屋敷遺跡』2010年

第Ⅲ章　高田遺跡

1. 調査の概要と基本層序

⑴ 調査の概要

本報告の平成27年度調査のⅠ～Ⅲ区，平成28年度調査のⅡ－2・Ⅳ区の概要については以下のとおりである。平成28年度調査Ⅴ～Ⅶ区については，次刊で報告する。

Ⅰ～Ⅲ区は調査対象地の西端に位置する。面積は2,865㎡である。遺構は調査区全域から検出されており，竪穴建物跡9軒，掘立柱建物跡34棟などを中心に弥生時代から古代の土坑やピットが多数検出されている。遺物は弥生時代から古代のものが多数出土している。

Ⅱ－2区はⅡ区とⅣ区の間の既設水路部分に位置する。調査面積は148㎡である。水路付け替え工事の際にⅡ区の北東隅のSB13の未検出部分を確認する為に調査を行い，調査区北側でピット5個が検出された。その他に溝跡1条，ピット86個が検出された。

Ⅳ区は調査対象地の西寄りに位置する。調査面積は1,303㎡である。調査区全体に後世の削平を受けており包含層は非常に薄く，表土直下でⅢ層またはⅣ層のいずれかが残存，もしくはどちらも残存しない部分が大半である。遺構検出面は表土下14～30cmであり，大半がⅧ層の上面である。西端のみⅤ～Ⅶ層の上面が遺構検出面となる。遺構密度は，調査区中央が薄く東西両側が濃い。検出遺構は，掘立柱建物跡6棟，柵列跡1列，溝跡6条，土器棺墓4基，性格不明遺構5基，ピット905個である。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，緑釉陶器，灰釉陶器，瓦質土器，陶磁器類，石製品(石鏃，砥石)，金属製品(刀子，銭貨)などである。

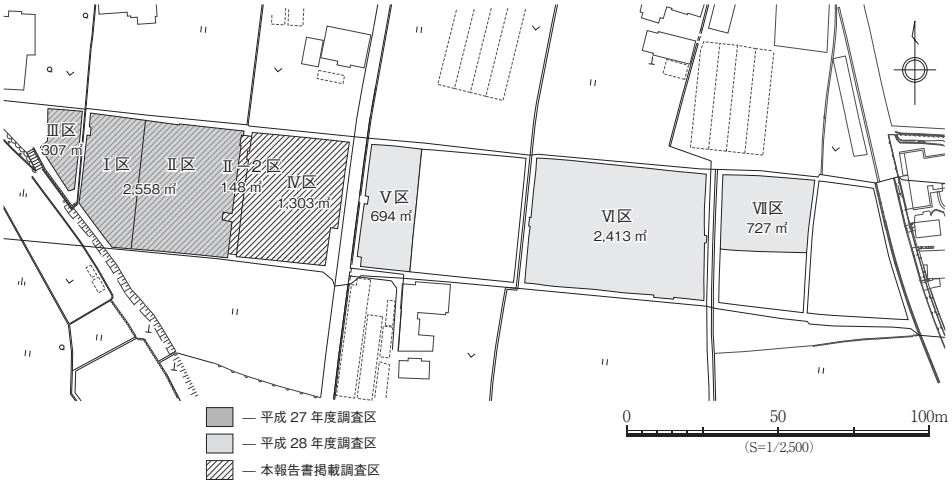


図3－1　高田遺跡調査区配置図

⑵ 基本層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。Ⅱ－2区については，周囲がすでに埋め戻されていたため，調査区セクションは作製できなかった。

①Ⅰ・Ⅱ区南壁セクション(図3－2)

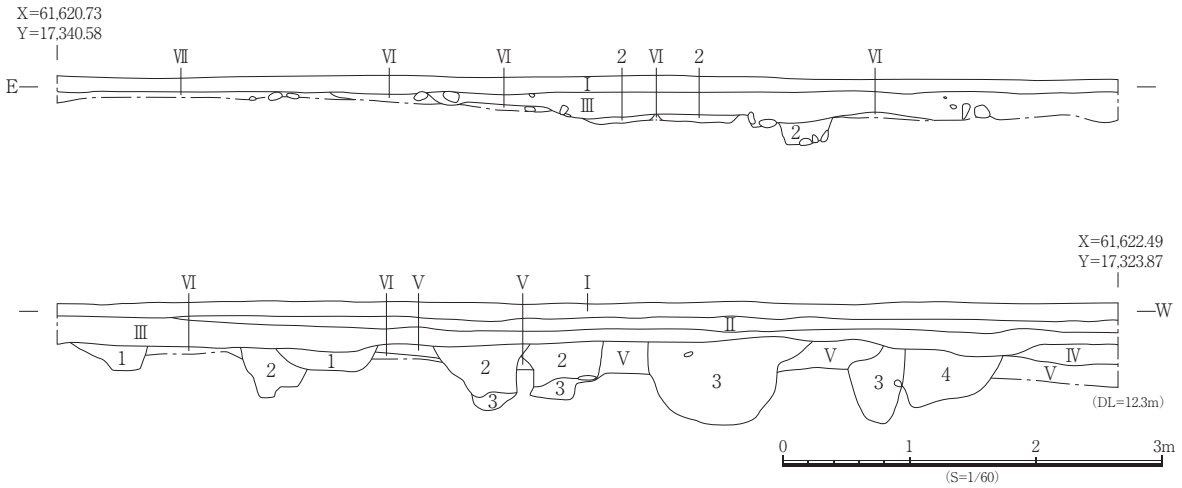
第Ⅰ層　現耕作土

第Ⅱ層　暗褐色粘土質シルト層(砂岩風化礫を含む：包含層)

第Ⅲ層　黒褐色粘土質シルト層(円礫を含む：包含層)
第Ⅳ層　黒褐色粘土質シルト層(包含層)
第Ⅴ層　Ⅳ層と褐色粘土質シルト(地山)が大斑状に混じる層(包含層)
第Ⅵ層　褐色粘土質シルト層(地山)
第Ⅶ層　砂礫層(地山)

② Ⅳ区北壁セクション(図3－3)

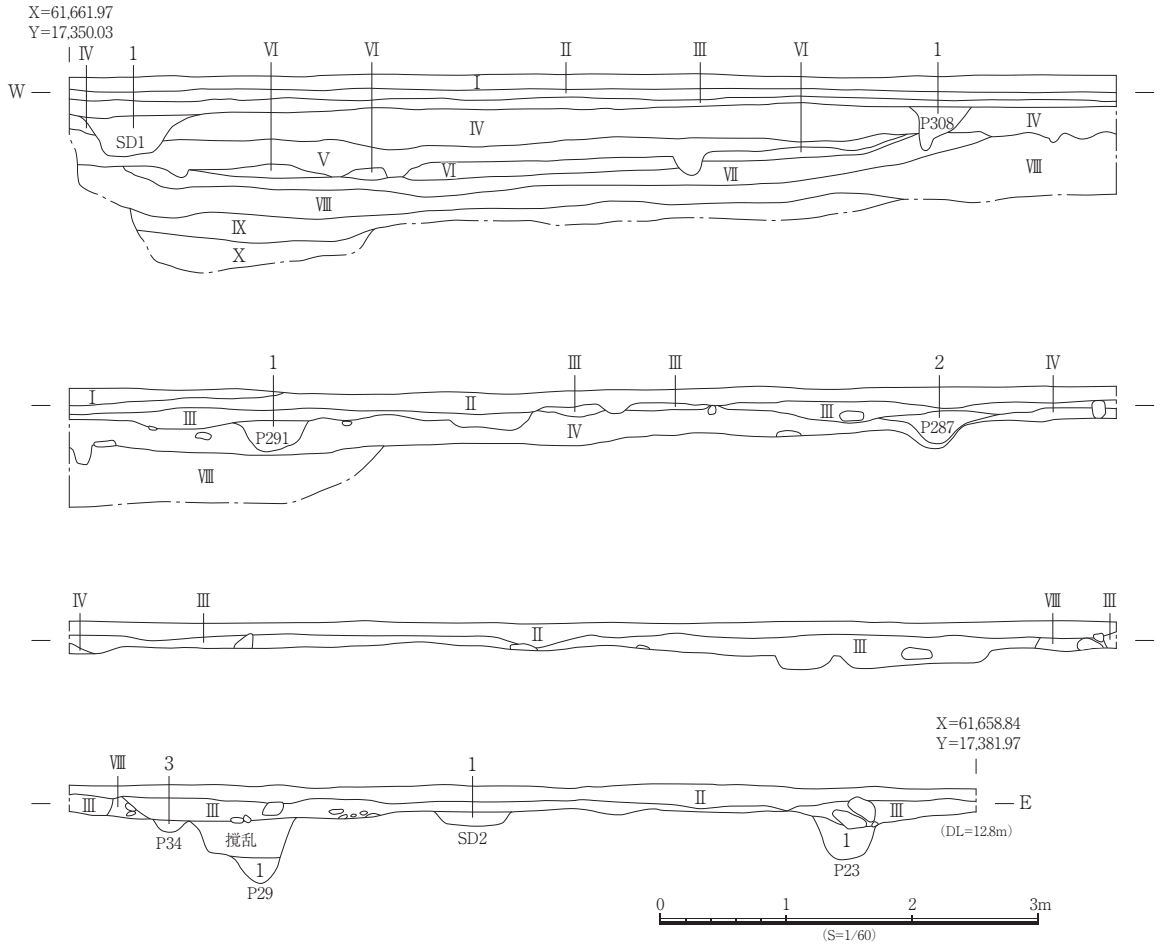
第Ⅰ層　現耕作土
第Ⅱ層　暗灰黄色粘質シルト層(床土)
第Ⅲ層　黒褐色粘質シルト層(遺物包含層)
第Ⅳ層　黒褐色粘質シルト層(遺物包含層)
第Ⅴ層　黒色粘質シルト層(褐色土ブロックが混じる：地山)
第Ⅵ層　暗褐色シルト層(砂礫を多く含む：地山)
第Ⅶ層　黒褐色粘質シルト層(0.5～1cm大の円礫及び砂粒を多く含む：地山)
第Ⅷ層　褐色粘質シルト層(円礫を多く含む：地山)
第Ⅸ層　砂礫層(にぶい黄褐色粘質土が混じる：地山)
第Ⅹ層　暗オリーブ褐色砂礫層(地山)



層位
第Ⅰ層　現耕作土
第Ⅱ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層(砂岩風化礫を含む：包含層)
第Ⅲ層　黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層(円礫を含む：包含層)
第Ⅳ層　黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト層(包含層)
第Ⅴ層　Ⅳと褐色(10YR4/4)粘土質シルト(地山)が大斑状に混じる層(包含層)
第Ⅵ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層(地山)
第Ⅶ層　砂礫層(地山)

遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト(炭粒含む)
2. 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト
3. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト(褐色(10YR4/4)粘土質シルト(地山)塊含む)
4. 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト(焼土粒多く含み，炭化物含む)

図3－2　Ⅰ・Ⅱ区南壁セクション図



層位

第Ⅰ層　現耕作土
第Ⅱ層　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト層(床土)
第Ⅲ層　黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層(遺物包含層)
第Ⅳ層　黒褐色(10YR2/2)粘質シルト層(遺物包含層)
第Ⅴ層　黒色(10YR2/1)粘質シルト層
(褐色(10YR4/4)土ブロックが混じる：地山)
第Ⅵ層　暗褐色(10YR3/4)シルト層(砂礫を多く含む：地山)
第Ⅶ層　黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト層(0.5～1cm大の円礫及び砂粒を多く含む：地山)
第Ⅷ層　褐色(10YR4/4)粘質シルト層(円礫を多く含む：地山)
第Ⅸ層　砂礫層(にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトが混じる：地山)
第Ⅹ層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂礫層(地山)

遺構埋土

1. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
2. 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト
3. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(にぶい黄褐色土が混じる)

図3－3　Ⅳ区北壁セクション図

2. 検出遺構と遺物

(1) Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区

① 竪穴建物跡

ST1（図3－4）

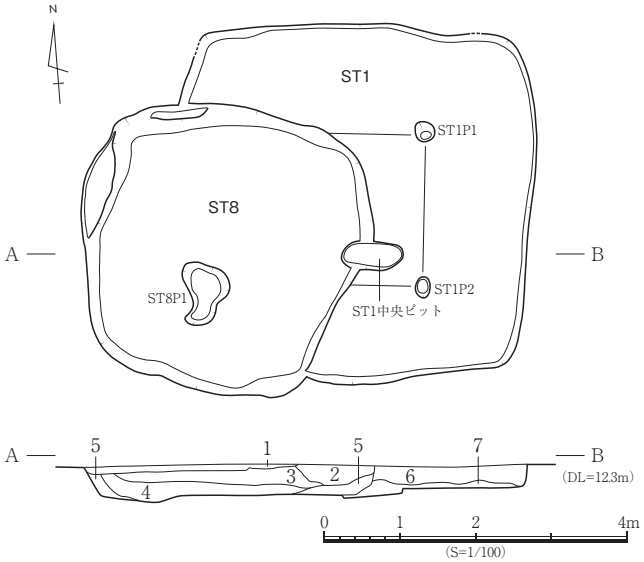
ST1は調査区中央の北側に位置し，南西部はST8に切られる。隅丸方形を呈し，長軸は約4.77 m，短軸は約4.74 m，検出面からの深さは約34㎝を測り，床面の標高は約11.9mである。埋土は1層が灰褐色粘土質シルトで，2層が地山をブロック状に含み，炭化物を若干含む灰褐色粘土質シルトである。

床面では中央ピットとピットを検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置し，平面形は東西に長い楕円形を呈する。長軸約0.8m，短軸約0.4m，床面からの深さは約7㎝を測る。埋土は1層が灰褐色粘土質シルト，2層が地山をブロック状に含み，炭化物を若干含む灰褐色粘土質シルトである。検出した床面のピットは西側がST8に削平されていて不明だが，位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が16㎝，P2が19㎝を測る。

出土遺物は埋土から弥生土器6点(1～6)が図示できた。

埋土出土遺物（図3－5）

1～6は弥生土器である。1は広口壺で，直立気味の頸部から口縁部が強く外反し，端部には櫛描波状文を施す。内面は口縁部にハケ，頸部にはハケとナデ調整がみられ，外面口縁部に回



1. 灰褐色シルト(ST8)
2. 暗褐灰色シルト(黒ボク主体，褐色シルト(砂に1cm大の礫を含む：地山)をブロック状に含み，一部焼土を含む：ST8)
3. 暗褐灰色シルト(黒ボク主体：ST8)
4. 暗褐灰色粘土質シルト(黒ボク主体：ST8)
5. 暗褐灰色粘土質シルト(黒ボク主体，地山をブロック状に含む：ST8)
6. 灰褐色粘土質シルト(ST1)
7. 灰褐色粘土質シルト(地山をブロック状に含み，炭化物を若干含む：ST1)

図3－4　ST1・8

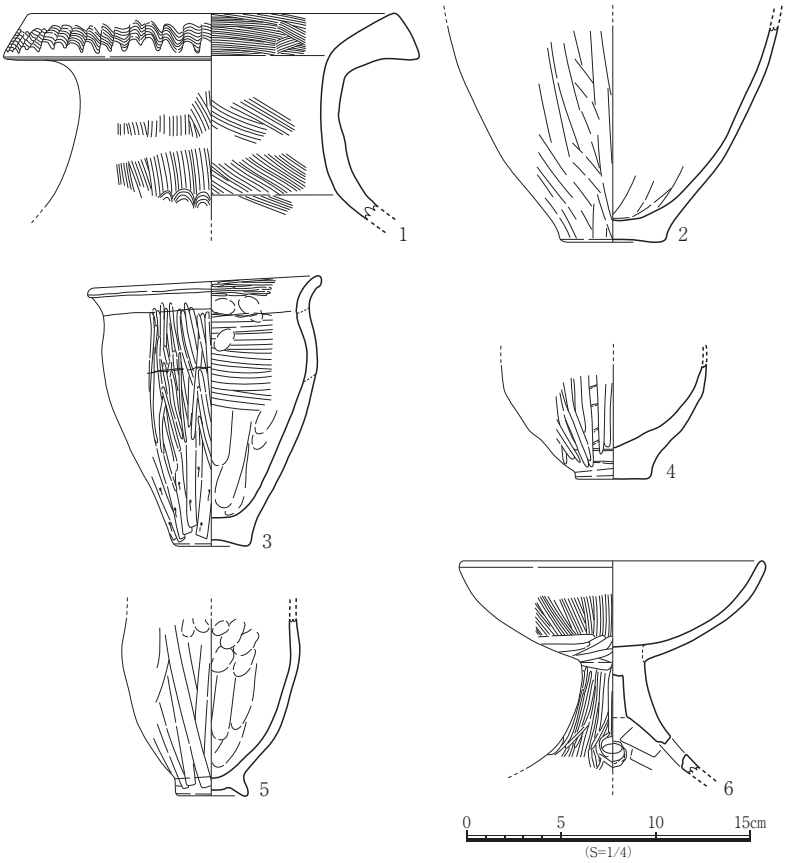


図3－5　ST1埋土出土遺物実測図

転ナデ，頸部にはタテハケを一部ナデ消す調整が認められ，肩部には櫛描波状文が施される。2・3は甕である。2は内外面のハケをナデ消す調整が認められ，底部は平底を呈する。3は小型の甕で，器面は磨耗しているが，内面は口縁部から胴部を粗いハケのちナデ，底部にはナデ調整と指頭圧痕が認められる。外面には粗いヘラミガキ調整が施され，煤が付着する。4・5は鉢である。4は内面がナデ，外面はタタキのちナデ調整が認められ，ヘラミガキ調整で仕上げる。底部は平底で一部煤が付着する。5は内外面ナデ調整が認められ，底部は高台状を呈し，一部煤が付着する。6は高杯である。杯部の口縁端部は面をなし，脚部に径1.2㎝の穿孔が4ケ所施される。杯部の口縁部はヨコナデ，内面に丁寧なナデ，外面にはハケとナデ調整がみられ，脚部内面はナデ，外面にはヘラミガキが施される。

ST2（図3－6）

ST2は調査区中央に位置し，SK10・11に切られる。不整方形を呈し，長軸は約7.13ｍ，短軸は約6.67ｍ，検出面からの深さは約30㎝を測り，床面の標高は約11.8ｍである。埋土は1層が2.0～3.0㎝大の礫と焼土塊をブロックで若干含む灰褐色粘土質シルト，2層が2.0～3.0㎝大の礫と若干の炭粒を含む灰褐色粘土質シルトである。

床面では中央ピットとピット，壁溝，ベッド状遺構を検出した。中央ピットは床面の南寄りに位置し，平面形は東西に長い楕円形を呈する。長軸約1.7ｍ，短軸約0.7ｍ，床面からの深さは約23㎝を測る。埋土は灰褐色粘土質シルトで，灰黄色粘土質シルトと砂塊を含み，下層の一部に10.0㎝大の円礫を多く含む。検出したピットのうちP1～5は位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が63㎝，P2が44㎝，P3が47㎝，P4が30㎝，P5が47㎝を測る。壁溝は北側に残り，幅約10～30㎝，深さ約1～19㎝を測る。ベッド状遺構の床面との比高差は北東側が約6㎝，南側が約11㎝，北西側が約7㎝である。

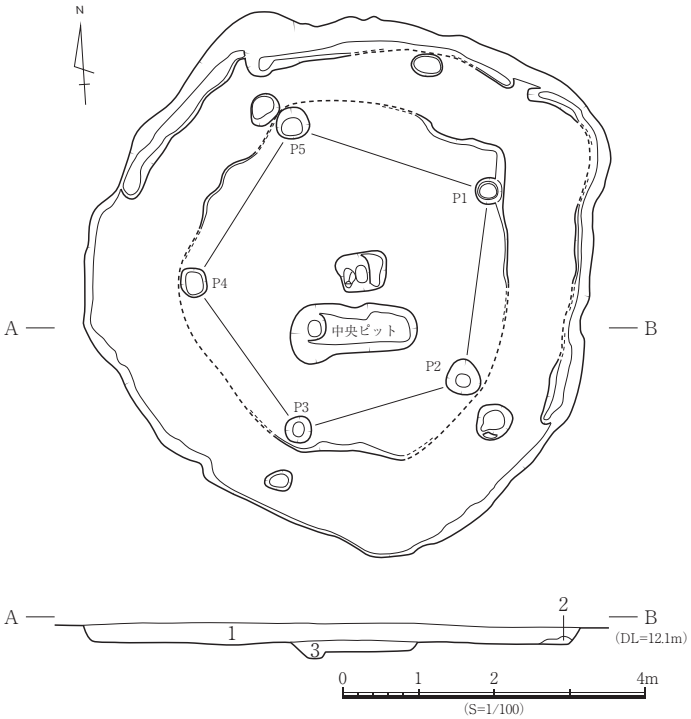
出土遺物は検出面から弥生土器1点(7)と土製品1点(8)，下層から弥生土器2点(9･10)，埋土から弥生土器6点(11～16)，ST1及びST3から出土したものと接合した弥生土器2点(17・18)が図示できた。

検出面出土遺物（図3－7）

7は弥生土器の壺である。ミニチュア土器で，内外面に指頭圧痕とハケ調整が認められる。8は土製品の土錘で，表面には丁寧なナデ調整が認められる。

下層出土遺物（図3－7）

9・10は弥生土器の鉢である。9は内面にハケのちナデ，口縁端部は面をなす。外面にはタタキのちナデ調整が施される。10は器面が摩耗しているが，口縁部にヨコナデ，体部にはミガキが



1. 灰褐色粘土質シルト（2～3㎝大の礫及び焼土塊ブロックを若干含む）
2. 灰褐色粘土質シルト（2～3㎝大の礫及び炭粒を若干含む）
3. 灰褐色粘土質シルト（灰黄色粘土質シルト及び砂塊を含み，下層の一部に10㎝大の円礫を多く含む：中央ピット）

図3－6　ST2

認められる。

埋土出土遺物(図3－7)

11～16は弥生土器である。11～13は甕で，11は内面口縁部にハケ，胴部にはナデと指頭圧痕がみられ，外面口縁部はタテハケ，胴部にはタタキ目が認められる。12は内面口縁部にハケ，胴部にはナデ調整がみられ，外面口縁部はハケのちヨコナデ，胴部にはタテハケが施され，煤が付着する。13は器面が摩耗しているが，内面口縁部にハケ調整が施され，端部は面をなす。胴部にはナデと指頭圧痕がみられる。外面口縁部はハケのちヨコナデ，胴部にはタテハケ調整が認められ，煤が付着する。14は鉢である。内面に丁寧なナデ調整と爪のような圧痕がみられ，外面にはハケ調整と一部ミガキが認められる。15は広口壺で，搬入品と考えられる。内面はハケのちミガキ，口縁端部にはハケ状原体による斜格子の刻目が施され，外面はハケのちナデ調整が認められる。16は高杯で，径0.8㎝の穿孔が施される。内面にハケ調整，外面にはヘラミガキ，裾部にはヨコナデが認められる。

埋土(ST1・3)出土遺物(図3－7)

17・18は弥生土器である。17は高杯で，ST1検出面から出土したものと接合した。穿孔が1ヶ所認められる。内面脚部はハケ，外面脚部にはタテハケ，内外面裾部はヨコナデ調整がみられ，器面調整のち全体にミガキを施す。受部との接合部付近に板状の圧痕が認められる。18は壺で，ST3上層か

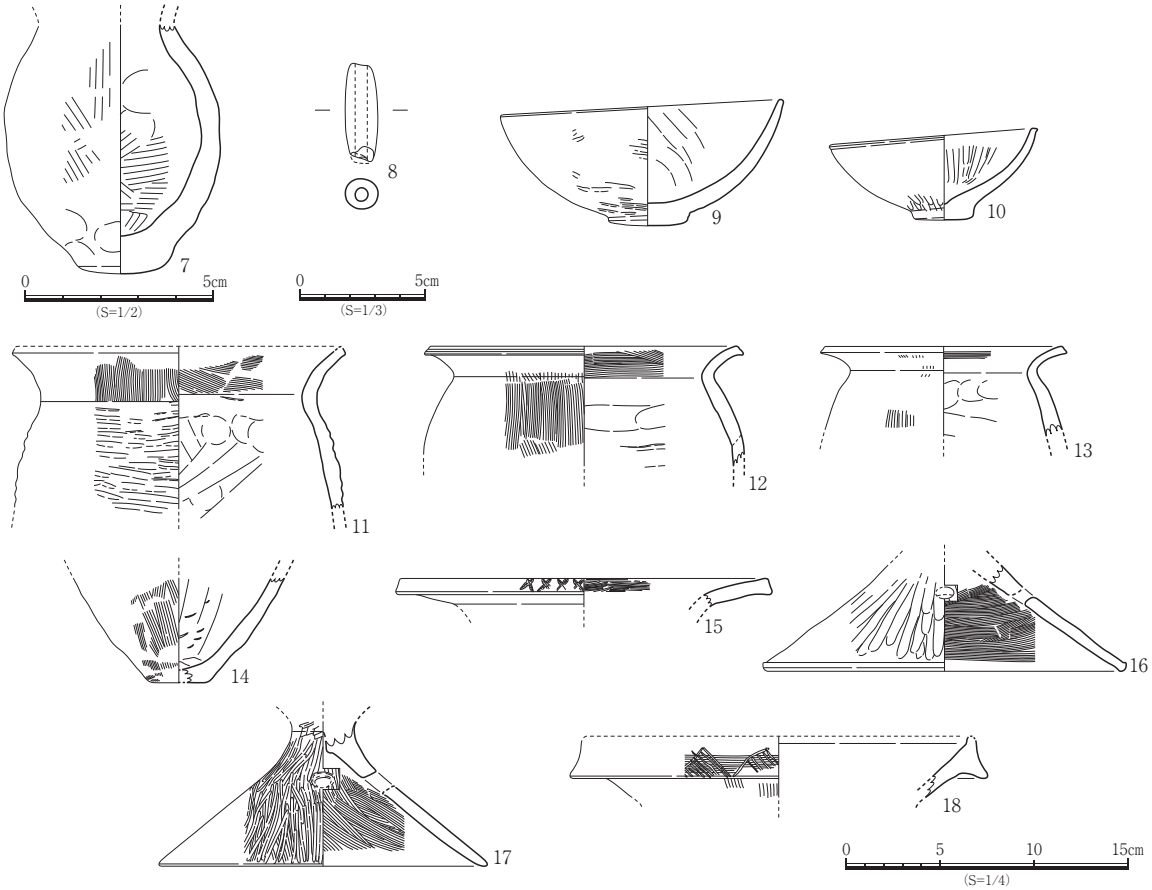


図3－7　ST2出土遺物実測図

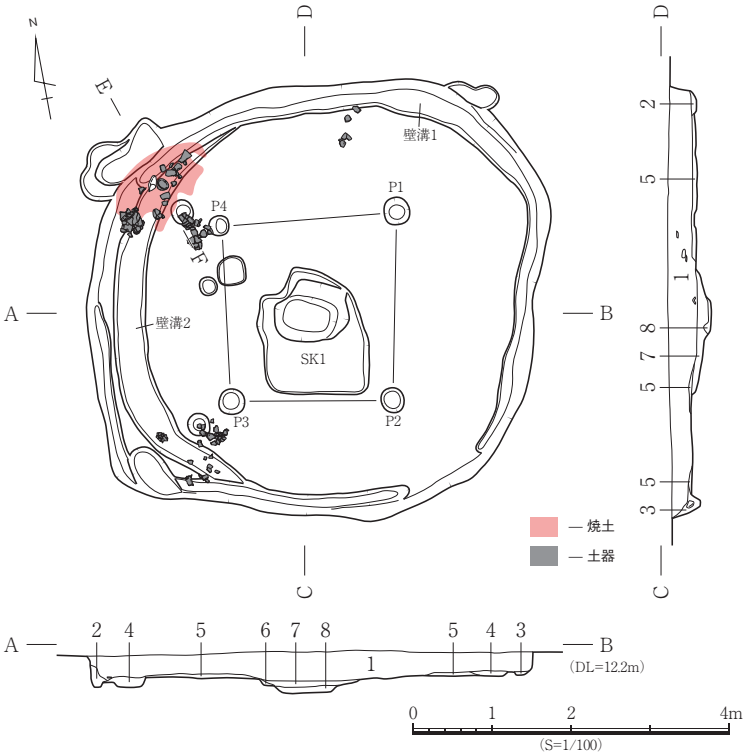
ら出土したものと接合した。器面の摩耗が著しいが，ハケ調整が認められ，鋸歯文が施される。

ST3（図3－8）

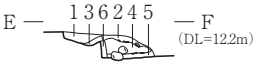
ST3は調査区の北東側に位置し，SB6に切られる。不整方形を呈し，長軸は約5.66 m，短軸は約5.44m，検出面からの深さは約36㎝を測り，床面の標高は約11.8mである。埋土は1層が1.0～1.5㎝大の礫と地山（暗褐色10YR3/3粘土質シルト）ブロックを含む黒色（10YR2/1）粘土質シルト，2層が地山を斑に含む黒色（10YR2/1）粘土質シルト（壁溝1埋土），3層が地山を若干含む黒色（10YR2/1）粘土質シルト（壁溝1埋土），4層が地山を斑に含む黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土（壁溝2埋土），5層が地山を斑に含む黒色（10YR2/1）粘土質シルト（貼床）である。

遺構内の北西隅では焼土を検出し，床面では土坑とピット，壁溝を検出した。焼土は長軸約1.4m，短軸約1.0m，床面からの厚さは約30㎝を測る。焼土断面は1層が地山に黄灰色シルトと砂塊を若干含む。2層が地山に黄灰色シルトと砂塊を若干含み，焼土を多く含む。3層が黄灰色シルト塊と焼土を若干含む暗褐灰色粘土質シルト，4層が焼土，5層が暗褐色シルト質粘土，6層が焼土を若干含む暗褐色シルト質粘土である。焼土内に土器はほとんどみられなかったが，焼土を取り除いた床面からは土器が集中して検出された。SK1は床面中央に位置し，平面形は不整形を呈する。中央ピットの可能性も考えられ，長軸約1.6m，短軸約1.4m，床面からの深さは約25㎝を測る。埋土は1層が地山をブロック状に多く含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，2層が焼土と炭化物を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，3層が地山を若干含み，炭塊を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。検出したピットのうちP1～4は位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が53㎝，P2が47㎝，P3が48㎝，P4が46㎝を測る。壁溝1は床面北東側にみられ，残存長約14.7m，幅約16～31㎝，深さ約1～13㎝を測る。壁溝2は南西側で壁溝1の内側にみられ，残存長約5.8m，幅約32～47㎝，深さ約2～7㎝を測る。

出土遺物は埋土の上層から弥生土



1. 黒色（10YR2/1）粘土質シルト（1～1.5㎝大の礫及び暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト（地山）のブロックを含む）
2. 黒色（10YR2/1）粘土質シルト（地山を斑に含む：壁溝1）
3. 黒色（10YR2/1）粘土質シルト（地山を若干含む：壁溝1）
4. 黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土（地山を斑に含む：壁溝2）
5. 黒色（10YR2/1）粘土質シルト（地山を斑に含む：貼床）
6. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（地山をブロック状に多く含む）
7. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（焼土及び炭化物を含む）
8. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（地山を若干含み，炭塊を含む）



1. 黄灰色シルト（地山及び砂塊を若干含む）
2. 黄灰色シルト（地山及び砂塊を若干含み，焼土を多く含む）
3. 暗褐灰色粘土質シルト（黄灰色シルト塊及び焼土を若干含む）
4. 焼土
5. 暗褐色シルト質粘土
6. 暗褐色シルト質粘土（焼土を若干含む）

図3－8　ST3

器2点(19・20)，中層から弥生土器5点(21～25)，下層から弥生土器17点(26～42)，管玉1点(43)，埋土から弥生土器10点(44～53)，須恵器1点(54)，金属製品1点(55)が図示できた。

上層出土遺物(図3－9)

19・20は弥生土器である。19は壺で，内面口縁部にヨコ方向のミガキが施され，口縁端部を上下に拡張し，凹線文を巡らせる。外面口縁部にはナデ調整が認められる。20は高杯で，径1.0cmの穿孔が1ヶ所認められる。内面はヨコハケのちナデ調整がみられ，外面にはハケ調整のちミガキが施される。

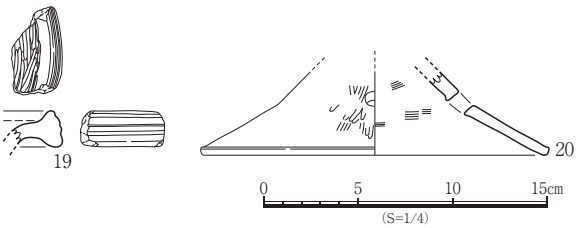


図3－9　ST3上層出土遺物実測図

中層出土遺物(図3－10)

21～25は弥生土器である。21は壺で，器面が摩耗しているが，内面はナデ調整がみられ，口縁端部は面をなす。外面口縁部はヨコナデ，頸部にはタテハケ調整が認められる。22～24は甕で，22は口縁部が丸みをもって外反し，端部は面をなす。内面口縁部にヨコナデ，頸部はハケ，胴部にはケズリが施される。外面口縁部はヨコナデ，胴部にはハケ調整が認められ，煤が付着する。23は内面にハケとナデ調整がみられる。外面にはハケ，底部にも一部ハケ調整が認められ，煤が付着する。24は内面にナデ調整，外面にはタテハケが施される。25は鉢で，内面にハケ調整がみられ，外面はタタキのちハケ調整をナデ消し，煤が付着する。

下層出土遺物(図3－11)

26～42は弥生土器である。26は壺で，器面はやや摩耗しているが，内面にナデとハケ調整が認められ，外面にはハケのちミガキが施される。27～32は甕で，27は口縁端部が面をなし，内面口縁部はヨコナデ，胴部にはハケ調整がみられる。外面口縁部はヨコナデ，胴部にはタタキ目をナデ消したのちハケ調整が施される。28は内面口縁部にナデ調整，端部は面をなし，頸部はハケとナデ，胴部にはケズリ，外面口縁部はヨコナデ，胴部にはタテハケ調整が認められ，煤が付着する。29の口縁端部は面をなし，内面口縁部はハケとナデ，胴部にはナデ調整がみられる。外面口縁部はハケ，頸部にはヨコナデ，胴部はハケ調整が認められ，煤が付着する。30は器面の摩耗が著しいが，内面はナデ調整がみられ，外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。31は内面口縁部にナデ，胴部にはケズリが施さ

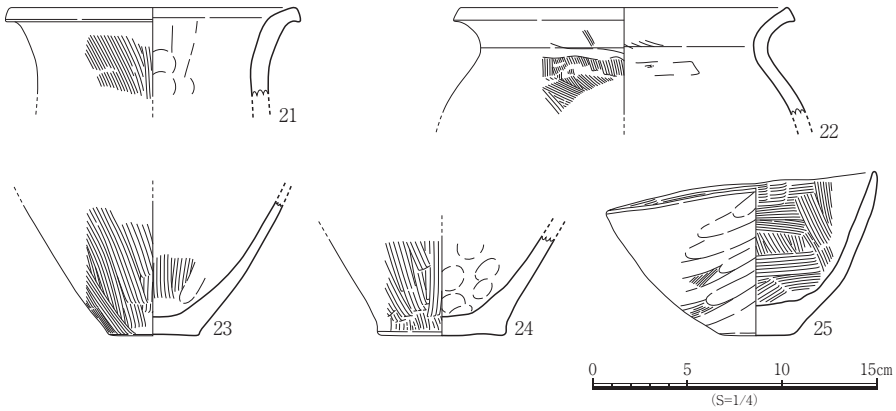


図3－10　ST3中層出土遺物実測図

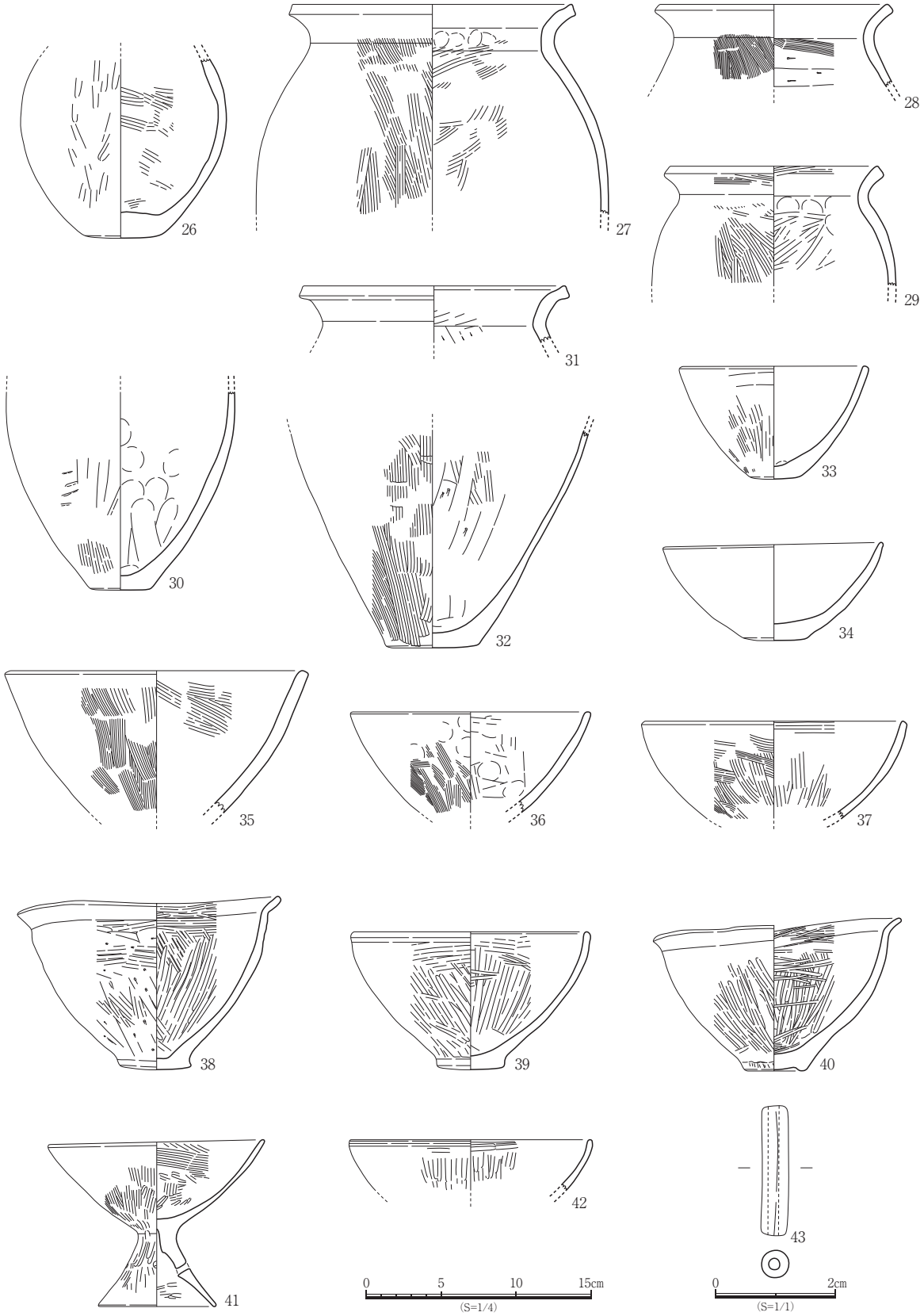


図3－11　ST3下層出土遺物実測図

れ，外面はナデ調整が認められる。32は内面胴上部にハケ，中央部はケズリ，下部にはナデ調整がみられ，外面はタタキ目をハケで消す。底部はナデと一部ハケ調整が認められ，煤が付着する。33～40は鉢で，33は口縁部にヨコナデ，内面体部には丁寧なナデ調整，底部は指頭圧痕がみられ，外面体部はハケとナデ調整が認められる。34は内面口縁部にヨコ方向のナデ，体部から底部には丁寧なナデ調整がみられ，外面口縁部はヨコ方向のナデ，体部はハケをナデ消し，底部はやや丸みを帯びる。35は器面の摩耗が著しいが，口縁部にはナデがみられ，内面はハケとナデ，外面にはタテハケ調整が認められる。36は内面にナデと指頭圧痕がみられ，外面にはハケと指頭圧痕が認められる。37は内面口縁部にヨコハケ，体部にはナデのち粗いハケ調整を施し，外面はハケ調整が認められる。38は内面口縁から口縁部直下にヨコ方向のミガキ，体部にはタテ方向の丁寧なミガキがみられる。外面口縁

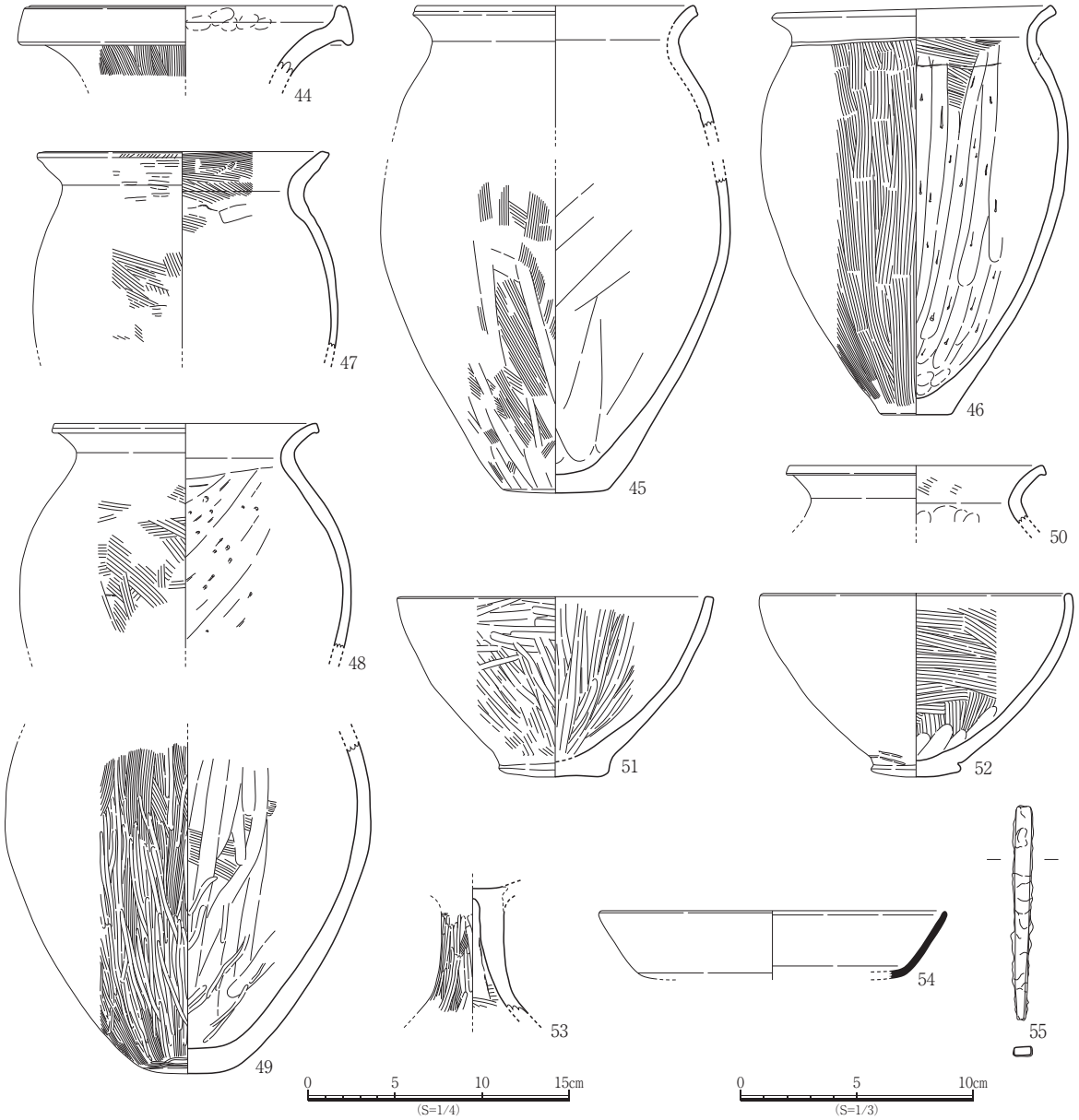


図3－12　ST3埋土出土遺物実測図

部はヨコナデ，口縁部直下から体部全体にはケズリが施され，口縁部直下から体上半部の一部にヨコ方向のミガキ，体中央から下半部にタテ方向のミガキが認められる。39は内面にミガキ，底部にはナデ調整がみられる。外面口縁部はヨコ方向のミガキ，体部にはタテ方向のミガキが施され，煤が付着する。40は内面口縁部にヨコ方向のミガキ，体部にはハケのちタテ方向のミガキが認められ，外面口縁部はヨコナデ，体部はナデ調整のち粗いミガキが施される。41は高杯で，径0.5㎝の穿孔が4ヶ所施される。器面はやや摩耗しているが，杯部内面にハケ調整のちミガキがみられ，外面口縁部はヨコナデ，端部の直下にヨコ方向のミガキが施される。脚部内面はナデと一部ミガキ，外面にはタテ方向のミガキが認められる。42は搬入品の鉢で，口縁部はヨコ方向のヘラミガキ，端部にもミガキが施され，体部はタテ方向のヘラミガキが認められる。43は管玉である。全長2.2㎝，全幅0.5㎝，全厚0.5㎝，重量0.7g，孔径0.2㎝を測る。全面丁寧な研磨により滑らかに仕上げられる。碧玉製。

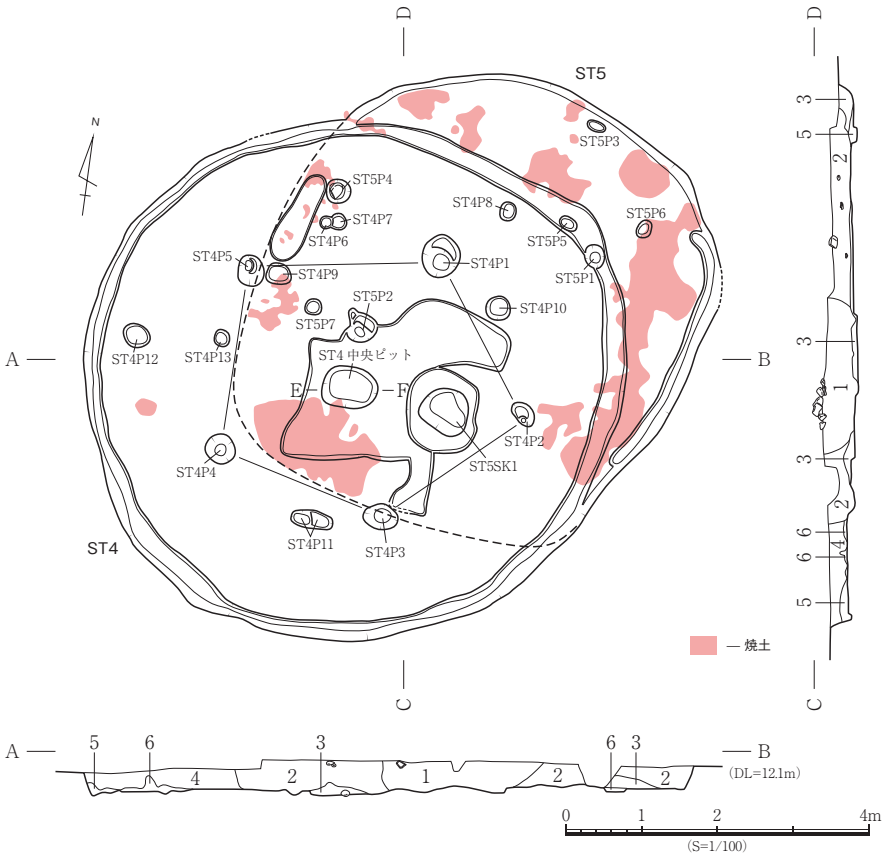
埋土出土遺物（図3－12）

44～53は弥生土器である。44は広口壺で，口縁部はラッパ状に外反し，端部を上下に拡張する。内面は摩耗しているが，指頭圧痕が認められる。外面口縁端部はヨコナデ，端部直下にはタテハケのちヨコナデがみられ，頸部はタテハケが施される。45～50は甕である。45は口縁部内外面が摩耗しているが，内面口縁部はナデ，胴部にはハケがみられる。外面胴部はハケのち一部にミガキが認められ，煤が付着する。46は内面口縁部にヨコナデ，頸部はハケ，胴部にはケズリが施される。外面口縁部はヨコナデ，胴部にはタテハケが認められ，煤が付着する。47の口縁端部は面をなし，中央部は凹状を呈する。器面は摩耗しているが，内面口縁部はヨコハケ，頸部接合部までハケ，胴部には丁寧なナデ調整がみられる。外面口縁部から肩部はタタキのちナデ，肩部から胴部にはタタキのちハケ調整が認められ，煤が付着する。48の口縁端部は面をなし，内外面口縁部はヨコナデ，内面頸部直下から下方にケズリが施され，外面胴部はタタキ目をハケで消す。49は内面にナデ調整がみられ，外面にはハケのちミガキが施される。50は内面口縁部にハケのちヨコナデ，頸部には指頭圧痕がみられ，外面はヨコナデ調整が認められる。51・52は鉢である。51の口縁端部は面をなす。内面にはタテ方向のミガキ，外面口縁部から体上部はヨコ方向のミガキがみられ，体中央から下部にはタテ方向のミガキが施される。52の口縁部はやや内傾し，内面口縁部はヨコナデ，体部にはハケ，底部はナデ調整がみられる。外面口縁部にはヨコナデ，体部はタタキ目をナデ消す。53は高杯で，内面はナデ，裾部にはハケ調整がみられ，外面は一部ハケが残るミガキが施される。54は須恵器の杯である。内外面は回転ナデ，外面底部にはヘラケズリが認められる。55は鉄製品で，全長9.3㎝，全幅0.7㎝，全厚0.4㎝，重量8.3gを測る。

ST4（図3－13）

ST4は調査区中央の南側に位置し，北東部をST5に，南西側をSB7に切られる。円形を呈し，長軸は約7.38ｍ，短軸は約7.00ｍ，検出面からの深さは約30㎝を測り，床面の標高は約11.6ｍである。埋土は1層が黒ボクを多く含む褐灰色粘土質シルト，2層が1.0～3.0㎝大の礫と地山塊を含む褐灰色粘土質シルト，3層が地山塊を多く含む褐灰色粘土質シルトである。

床面では中央ピットとピット，壁溝を検出した。中央ピットは床面の中央に位置し，平面形は東西に長い楕円形を呈する。長軸約0.7ｍ，短軸約0.5ｍ，床面からの深さは約27㎝を測る。埋土は1層が炭化物と1.0㎝大の礫を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，2層は焼土が混じり，炭化物と0.5～1.5㎝大の礫を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，3層は地山が若干混じり，炭化物と0.5～4.0㎝大の



1. 褐灰色粘土質シルト（黒ボクを多く含む：ST5）
2. 褐灰色粘土質シルト（黒ボクを含み，土器細片を若干多く含む：ST5）
3. 褐灰色粘土質シルト（砂粒が混じり，黒ボクを焼土の大塊を含む：ST5）
4. 褐灰色粘土質シルト（黒ボクを多く含む：ST4）
5. 褐灰色粘土質シルト（1～3cm大の礫及び地山塊を含む：ST4）
6. 褐灰色粘土質シルト（地山塊を多く含む：ST4）

1. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（炭化物及び1cm大の礫を含む）
2. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（焼土が混じり，炭化物及び0.5～1.5cm大の礫を含む）
3. 黒色（10YR2/1）粘土質シルト（地山が若干混じり，炭化物及び0.5～4cm大の礫を含む）

図3－13　ST4・5

礫を含む黒色(10YR2/1)粘土質シルトである。検出したピットのうちP1～5は位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が49cm，P2が45cm，P3が52cm，P4が57cm，P5が44cmを測る。壁溝は床面を全周し，幅約15～43cm，深さ約1～7cmを測る。

出土遺物は上層から弥生土器1点(56)，土師器1点(57)，須恵器1点(58)，下層から弥生土器10点(59～68)，金属製品1点(69)，床面から弥生土器1点(70)，石製品1点(71)，中央ピットから弥生土器1点(72)，埋土から弥生土器3点(73～75)，金属製品1点(76)が図示できた。

上層出土遺物(図3－14)

56は弥生土器の甕である。内面口縁部はヨコナデ，胴部にヘラケズリが施され，外面口縁部はヨコナデ，胴部

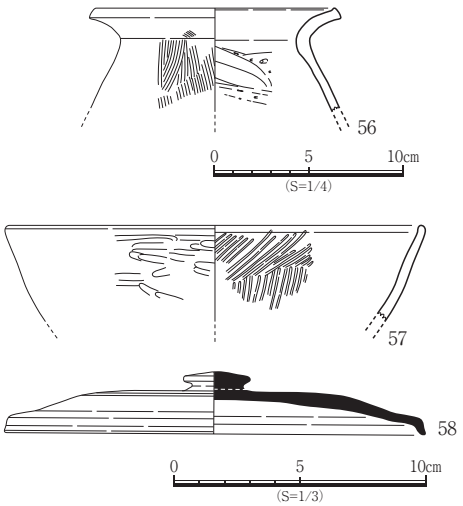


図3－14　ST4上層出土遺物実測図

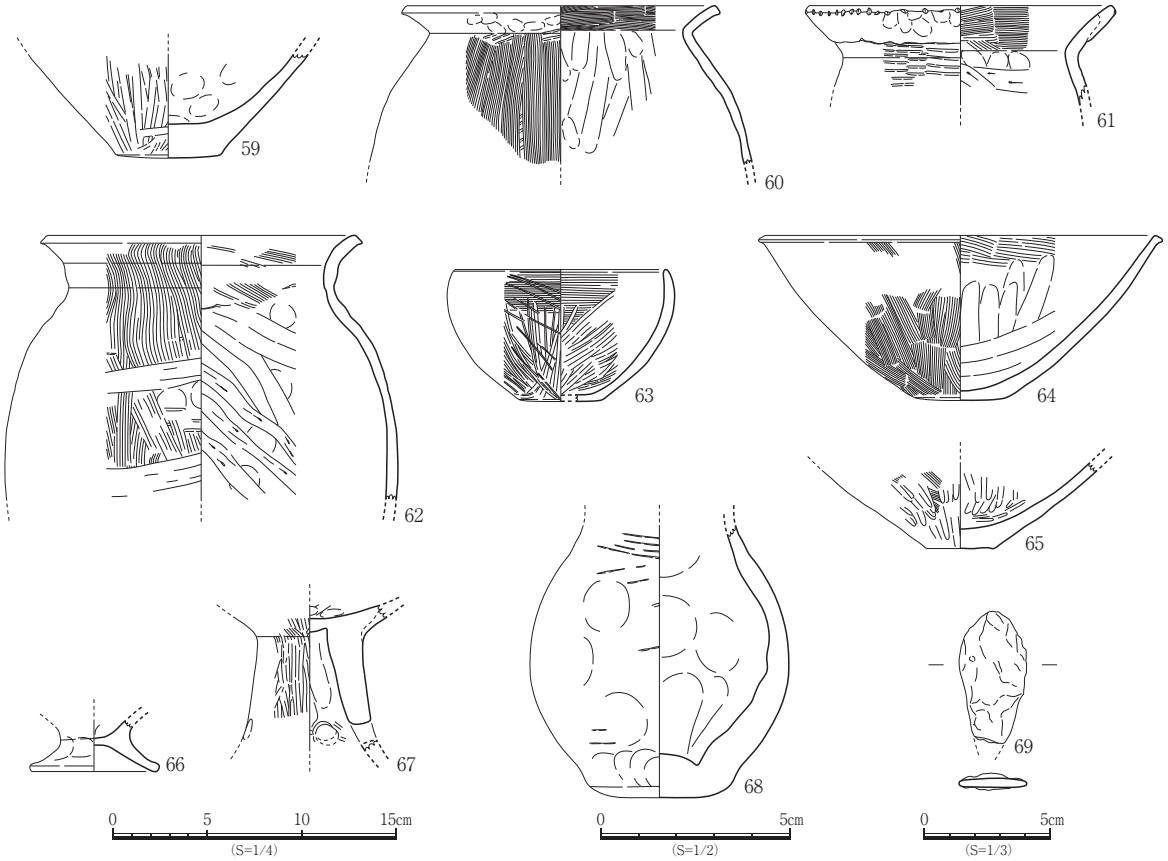


図3－15　ST4下層出土遺物実測図

にはハケ調整が認められる。57は土師器の杯である。内外面は回転ナデ，内面上半部にナナメ方向のミガキ，下半部にはタテ方向のミガキが認められ，外面は粗いミガキが施される。58は須恵器の蓋である。二次被熱を受けており，外面に炭化物が付着する。径2.7㎝の擬宝珠形のつまみが付き，内面にはナデと指頭圧痕，外面は回転ナデ調整が認められる。

下層出土遺物（図3－15）

59～68は弥生土器である。59は壺で，内面にはナデと指頭圧痕がみられ，外面はミガキ，底部にはナデ調整が認められる。60～62は甕である。60の口縁端部は面をなす。内面口縁部はヨコハケ，胴部にナデ調整がみられ，外面口縁部には指頭圧痕，胴部はタタキ目をハケでナデ消す。61は口縁端部に刻目を施す。内面口縁部はヨコハケ，頸部に指頭圧痕，胴部にはヘラケズリがみられ，外面口縁部はナデと指頭圧痕，頸部から胴部にはタタキ目が認められる。62は内面口縁部にナデ，頸部はハケ，胴部にはナデとヘラケズリが施され，外面口縁部はナデ，頸部にハケ，胴部にはタタキ目とハケ調整が認められる。63～66は鉢である。63は内外面口縁部にヨコハケと一部ミガキがみられ，体部にはミガキが施される。64は内面口縁部にヨコハケ，体部はハケをナデ消し，外面口縁部はハケとナデ，体部にはハケ調整が認められる。65は内面に丁寧なヘラミガキが施され，外面はハケとヘラミガキ，底部にナデ調整が認められ，煤が付着する。66は台付鉢で，内面にナデ，外面はナデと指頭圧痕が認められる。67は高杯である。径1.1㎝の穿孔が2ヶ所に認められ，受部内面はナデ，外面にハケがみられ，

脚部内面はナデ，外面にはヘラミガキが施される。68はミニチュア土器の壺である。内面にナデと指頭圧痕がみられ，外面はナデと一部ミガキ状になる。胴上半部には一部タタキ目が残り，下半部は一部ハケが残る。煤が付着する。69は柳葉式の鉄鏃と考えられる。残存長5.3cm，全幅2.7cm，全厚0.4cm，重量13.0gを測る。茎部を欠損する。

床面出土遺物(図3－16)

70は弥生土器の甕である。器面の摩耗が著しいが，内面口縁部はハケ，胴部にナデ調整がみられ，外面口縁部から肩部にはハケ，胴部はタタキ目をハケで消す。煤が付着する。71は叩石である。全長16.3cm，全幅11.7cm，全厚5.0cm，重量1306.2gを測り，側面に使用痕が認められる。砂岩製。

中央ピット出土遺物(図3－17)

72は弥生土器の甕である。口縁端部は面をなし，器面が摩耗しているが，内面口縁部はハケ，胴上半部にナデ，中央部にはケズリがみられる。外面口縁部はヨコナデ，胴部にはハケ調整が認められ，煤が付着する。

埋土出土遺物(図3－18)

73～75は弥生土器である。73・74は甕で，73は内面口縁部にヨコナデ，頸部はハケ，胴部にはヘラケズリがみられ，外面口縁部はヨコナデ，胴部にハケが施される。74は内面口縁部にハケのちナデ，胴部にはヘラケズリと指頭圧痕がみられ，外面口縁部はヨコナデ，胴部にタテハケが認められ，煤が付着す

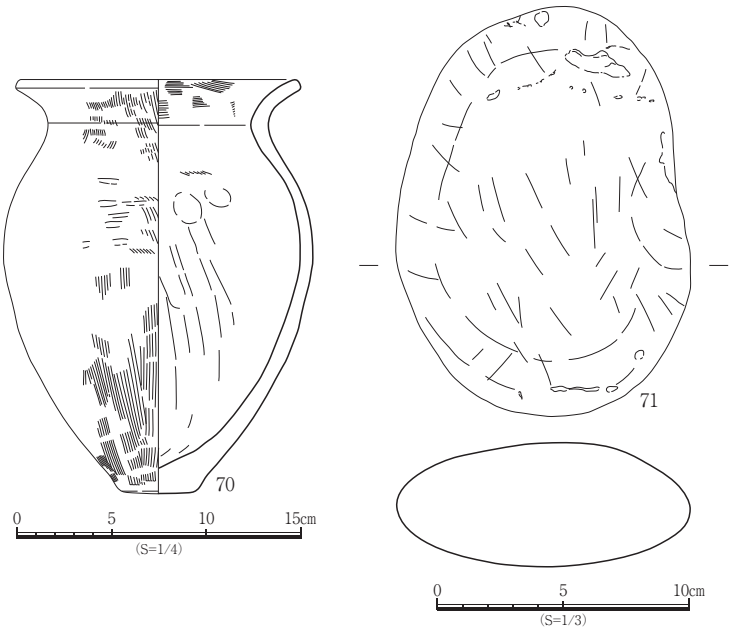


図3－16　ST4床面出土遺物実測図

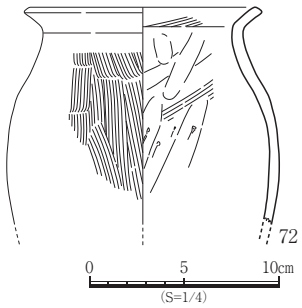


図3－17　ST4中央ピット出土遺物実測図

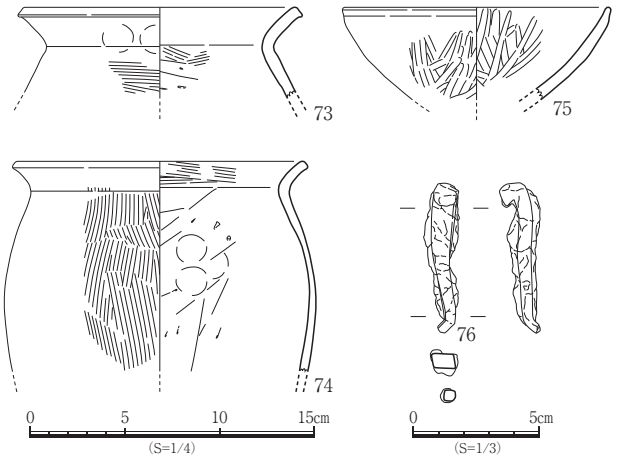


図3－18　ST4埋土出土遺物実測図

る。75は鉢である。内面にミガキ，外面口縁部はナデ，体部にはミガキが施される。76は鉄釘である。全長6.0㎝，全幅1.3㎝，全厚1.1㎝，重量10.7gを測る。

ST5（図3－13）

ST5は調査区中央の南側に位置し，ST4を切る。隅丸方形を呈するとみられ，長軸は約6.50ｍ，短軸は約5.86m，検出面からの深さは約28㎝を測り，床面の標高は約11.7mである。埋土は1層が黒ボクを多く含む褐灰色粘土質シルト，2層が黒ボクを含み，土器細片を若干多く含む褐灰色粘土質シルト，3層が黒ボクと焼土の大塊を含み，砂粒が混じる褐灰色粘土質シルト，4層が地山の小塊を含み，小円礫が混じる褐色粘土質シルトである。

検出の際には遺構中央部1層で約5～25㎝大の礫が約2mの範囲で集中して出土する。また，床面の広い範囲に焼土が検出されたことから焼失したと考えられる。床面では土坑，ピット，壁溝を検出した。SK1は床面の南寄りに位置し，平面形は南北に長い楕円形を呈する。貯蔵穴と考えられ，長軸約1.1m，短軸約0.9m，床面からの深さは約41㎝を測る。埋土は黒色（10YR2/1）粘土質シルトである。検出したピットのうちP1・2は位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が44㎝，P2が47㎝を測る。壁溝は南東側にみられ，残存長約3.5m，幅約12～19㎝，深さ約4～6㎝を測る。

出土遺物は検出面から弥生土器2点（77・78），土師器1点（79），埋土上層から弥生土器1点（80），須恵器2点（81・82），下層から弥生土器8点（83～90），金属製品1点（91），床面から弥生土器6点（92～97），埋土から弥生土器7点（98～104），須恵器1点（105），石製品1点（106）が図示できた。

検出面出土遺物（図3－19）

77・78は弥生土器である。77は壺で，内面はハケのちナデ調整，外面は器面が摩耗しているが，鋸歯文が認められる。78は鉢で，内面はナデとヘラナデとハケ調整がみられ，外面はタタキ目に一部ハケ調整が認められる。煤が付着する。79は土師器の皿である。手づくね成形で，内外面に指頭圧痕がみられ，丁寧なナデ調整が施される。外面底部には板状圧痕が認められる。

上層出土遺物（図3－20）

80は弥生土器の鉢である。口縁端部は面をなす。内面口縁部はヨコナデ，体部にハケのちナデ調整がみられ，外面口縁部はヨコナデ，体部にはハケ調整が認められる。煤が付着する。81・82は須恵器の壺

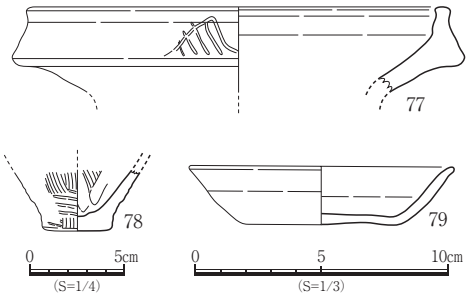


図3－19　ST5検出面出土遺物実測図

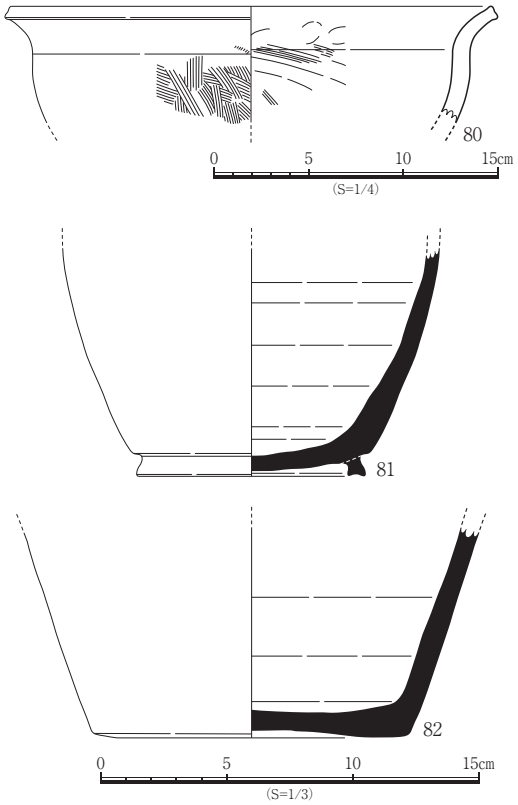


図3－20　ST5上層出土遺物実測図

である。81 は内外面に回転ナデ調整が認められ，内面底部には自然釉が溜まる。高台端部は凹状を呈する。82 は内外面に回転ナデ調整が認められ，外面底部には黒いシミ状のものが認められる。

下層出土遺物(図3－21)

83～90は弥生土器である。83・84は甕で，83の口縁端部は面をなす。器面が摩耗しているが，内面口縁部はハケとナデ，胴部にはハケと指頭圧痕がみられ，外面口縁部はヨコナデ，胴部にはハケが認められる。84は内面にナデ，外面はハケが施され，煤が付着する。85～89は鉢である。85は内面にナデ調整，外面にはタタキ目が認められる。86の口縁部は内外面ともにヨコナデ，体部にはハケ調整が認められる。87の口縁端部は面をなし，内面はハケのちナデがみられ，外面口縁部にはナデと指頭圧痕，体部にはハケ調整が認められる。88は内面にハケとナデ調整がみられ，外面はタタキ目をハケで消す。89は内面口縁部にナデ，体上半部はハケ，下半部にはハケとナデ調整がみられ，外面はタタキ目をハケで消す。90はミニチュア土器の壺である。器面が摩耗しているが，内面口縁部はハケ，頸部にナデ調整がみられ，外面にはハケとミガキが認められる。91は鉄製品である。残存長4.7㎝，全幅0.7㎝，全厚0.3㎝，重量3.8gを測る。

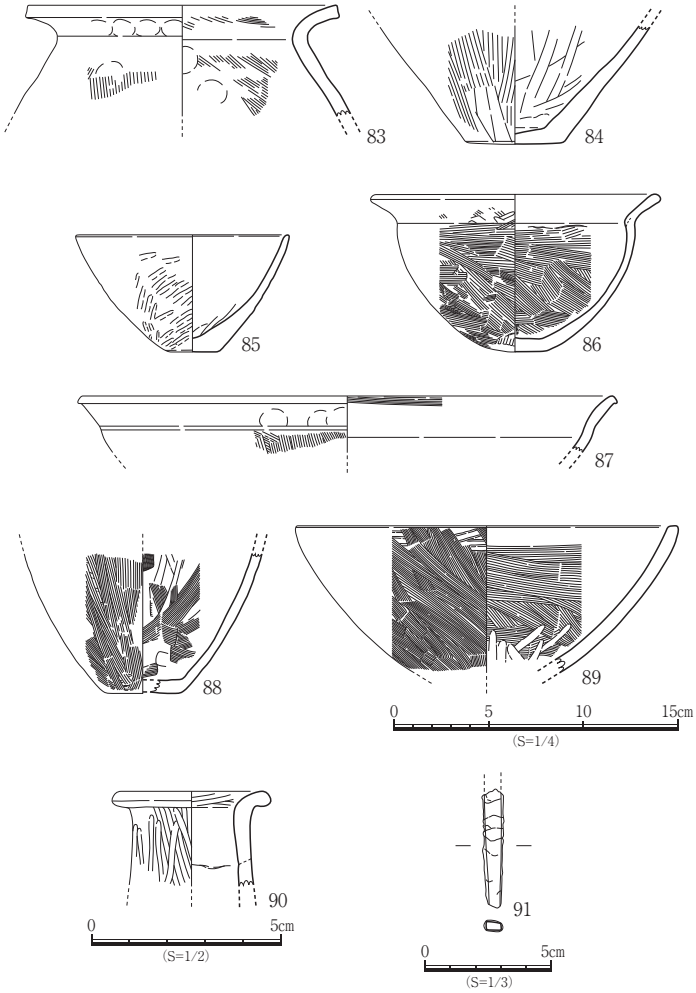


図3－21　ST5下層出土遺物実測図

床面出土遺物(図3－22)

92～97は弥生土器である。92・93は甕で，92は器面の摩耗が著しいが，内面口縁部はナデ調整，胴上部にはハケと指頭圧痕がみられ，外面口縁部から頸部はタテハケ，胴部にはタタキ目が認められ，煤が付着する。93の口縁端部は面をなす。内面口縁部はハケのちナデ，胴部にナデ，底部には指頭圧痕がみられ，外面口縁部から頸部はタタキのちタテハケ，胴上半部にタタキ目，下半部はタタキ目をタテハケで消し，底部にはタタキ目が顕著に残る。煤が付着する。94～97は鉢である。94は内面口縁部はヨコナデ，体部にはハケとナデがみられ，外面の体部はハケ，厚みのある底部はナデ調整が認められる。95の口縁端部は面をなし，内外面にハケ，口縁部はヨコナデ，外面には煤が付着する。96は内面口縁部にハケ，体部にはナデがみられ，外面はタタキのちナデ調整が施される。97は内面にナデ調整，外面はタタキ目をナデ消す。

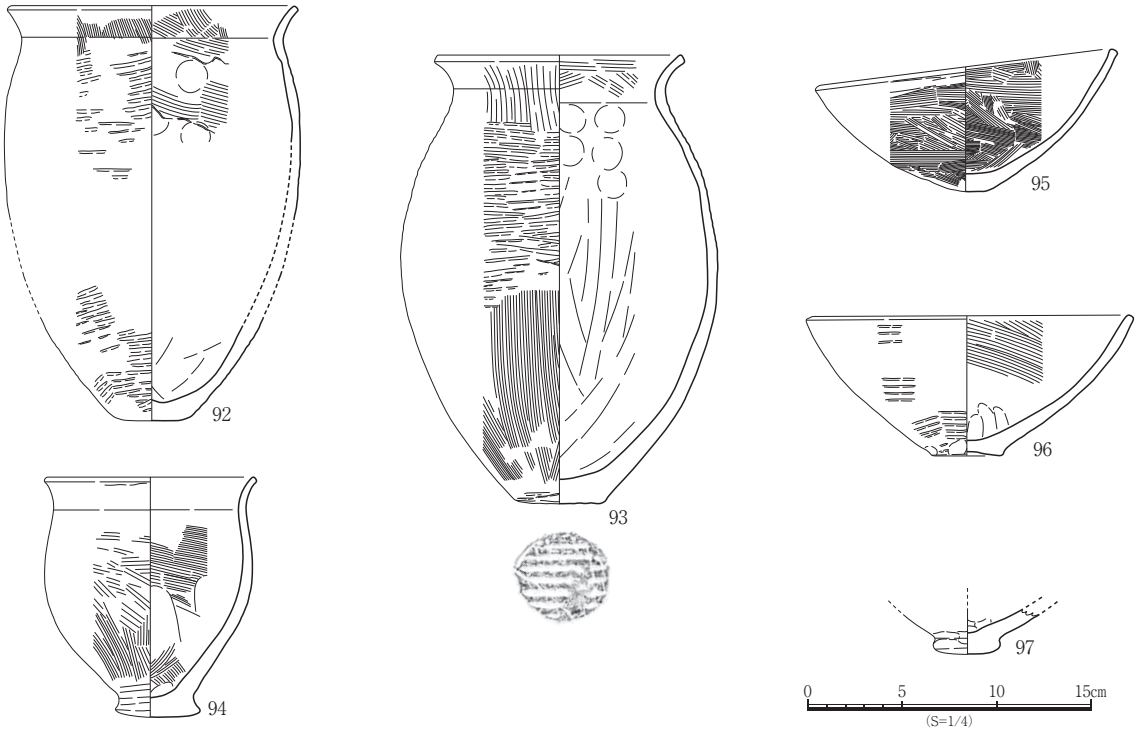


図3－22　ST5床面出土遺物実測図

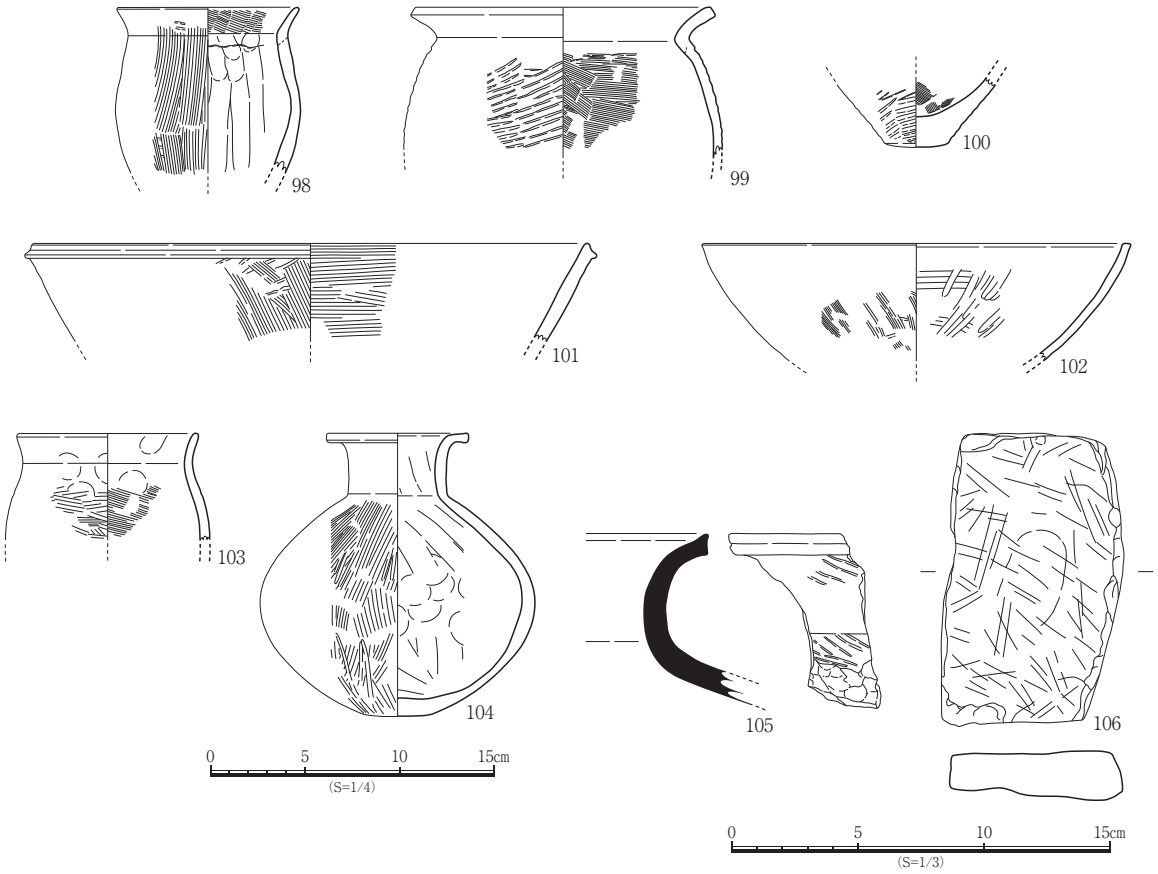


図3－23　ST5埋土出土遺物実測図

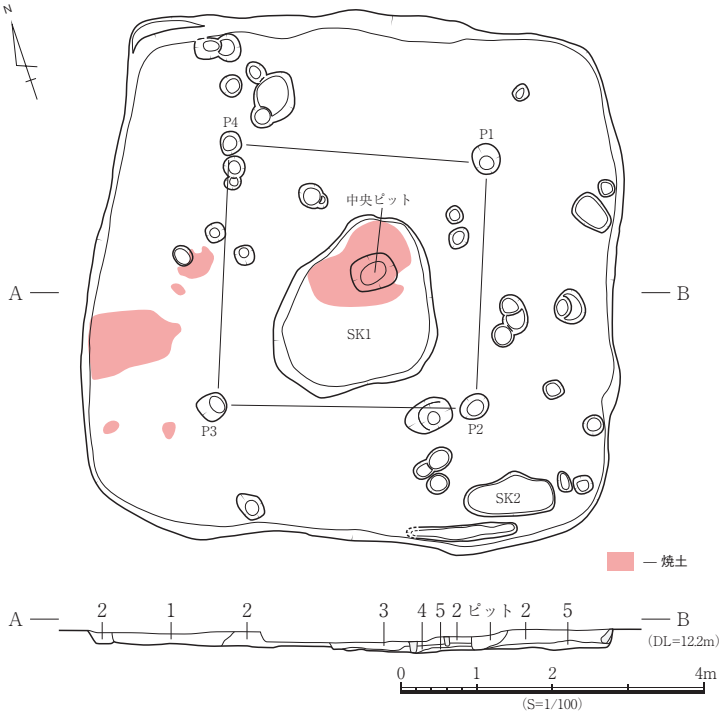
埋土出土遺物(図3－23)

98～104は弥生土器である。98～100は甕で，98は内面にナデと指頭圧痕，口縁部はハケ，外面口縁部にはナデ，胴部はタタキのちハケ調整が施され，煤が付着する。99の口縁端部は面をなす。内面口縁部はヨコナデ，胴部にハケと指頭圧痕がみられ，外面口縁部から頸部はヨコナデ，胴部にはタタキ目が認められる。100は内面にハケ調整，外面はタタキ目が認められる。101～103は鉢である。101の口縁端部は強いナデにより凹状をなす。内面口縁部はヨコナデ，体部にハケ調整がみられ，外面はタタキ目とハケ調整が認められる。102の口縁端部は面をなす。内面口縁部はヨコナデ，体部にはハケのちミガキが施され，外面口縁部はヨコナデ，体部にナデとハケ調整が認められ，一部タタキ目が残る。煤が付着する。103は内面口縁部にヨコナデと指頭圧痕，胴部はハケ調整がみられ，外面口縁部にヨコナデ，胴部には内面とは異なるハケ調整が認められる。104は搬入品の壺である。内面口縁部から頸部はヨコナデ，胴部にナデと指頭圧痕がみられ，外面口縁部から頸部はヨコナデ，胴上半から中央部にハケとミガキ，下半部にはミガキ調整が施され，煤が付着する。105は須恵器の甕である。口縁端部はナデにより凹状をなし，内外面は回転ナデ調整，外面口縁部と胴部にはタタキ目が残る。106は砥石である。全長11.7㎝，全幅7.2㎝，全厚2.0㎝，重量314.8gを測る。表面と両側面の3面に使用痕が認められる。砂岩製。

ST6(図3－24)

ST6は調査区中央の東端に位置し，SD2とSX8に切られる。隅丸方形を呈し，長軸約6.90ｍ，短軸約6.49ｍ，検出面からの深さは約27㎝を測る。床面の標高は約11.8mである。埋土は1層が黒ボクと焼土を含む褐色粘土質シルト，2層が褐色粘土質シルト，3層が焼土，4層が暗褐色シルト質粘土と土器を多く含む褐色粘土質シルト，5層が貼床と考えられる地山粘土塊を多く含む褐色粘土質シルトである。

床面では中央ピット，土坑，ピット，壁溝を検出した。中央ピットは床面の中央に位置し，平面形は東西に長い楕円形を呈する。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。SK1は床面のほぼ中央に位置し，平面形は不整方形を呈する。長軸約2.3m，短軸約2.2m，床面からの深さは約13㎝を測る。埋土は1層が炭化物を多く含む橙色(7.5YR7/6)シルト，2層が炭化物を多く含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。検出したピットのうちP1～4は位置関係から主柱穴とみられ，床面から



1. 褐色粘土質シルト(黒ボク及び焼土を含む)
2. 褐色粘土質シルト
3. 焼土
4. 褐色粘土質シルト(暗褐色シルト質粘土を含み，土器を多く含む)
5. 褐色粘土質シルト(地山粘土塊を多く含む：貼床)

図3－24　ST6

の深さはP1が37㎝, P2が33㎝, P3が43㎝, P4が46㎝を測る。壁溝は南側にみられ, 残存長約1.4m, 幅16～21㎝, 深さ1.6～3.9㎝を測る。

出土遺物は検出面から弥生土器4点(107～110), 埋土上層から弥生土器3点(111～113), 須恵器1点(114), 金属製品1点(115), 中層から弥生土器10点(116～125), 金属製品1点(126), 下層から弥生土器1点(127), 金属製品1点(128), 埋土から弥生土器17点(129～145), 埋土とST3検出面から出土したものが接合した弥生土器1点(146)が図示できた。

検出面出土遺物(図3－25)

107～110は弥生土器である。107は小型の壺で, 内面はナデ調整がみられ, 外面口縁部から頸部はナデ, 胴上部にはハケのちナデ, 胴中央から下部はハケ調整が認められる。108～110は甕で, 108の口縁端部は面をなし, 内面口縁部はハケのちナデ, 肩部にはハケ調整がみられ, 外面口縁部はヨコナデ, 肩部にハケ調整が認められる。また, 吹きこぼれの痕がみられる。109の口縁端部は面をなし, 内面口縁部はハケ, 胴部にはナデ調整がみられ, 外面口縁部はタタキのち粗いハケ, 胴部にはタタキ目と一部ハケが認められる。110の口縁端部は面をなし, 内面口縁部はヨコナデ, 頸部にハケ, 肩部には異なるハケ調整がみられる。外面口縁部はヨコナデ, 肩部にはタテハケ調整が認められ, 煤が付着する。

上層出土遺物(図3－26)

111～113は弥生土器である。111は甕で, 口縁端部は面をなす。内面口縁部はハケ, 胴部にナデ, 外面口縁端部直下には成形時の粘土塊が付着する。口縁部から胴部には丁寧なタテハケと一部タタキ目が残る。112・113は鉢である。112は内面にハケ, 外面には丁寧なナデ調整が認められる。113は内面に丁寧なハケ, 外面はナデ調整が認められる。114は須恵器の杯である。貼付高台を有し, 器面の摩耗は著しいが, 内面に回転ナデ調整が認められる。115は棒状鉄片である。残存長3.1㎝, 全幅1.7㎝, 全厚0.3㎝, 重量4.4gを測る。

中層出土遺物(図3－27)

116～125は弥生土器である。116は壺で, 口縁部は内外面ともにヨコナデ, 口縁端部に2条の凹線文が施される。頸部内面はナデと指頭圧痕がみられ, 外面はタタキ目をハケで消す。117は甕である。丸底を呈し, 内面は丁寧なナデ, 外面口縁部にはヨコナデ, 胴部

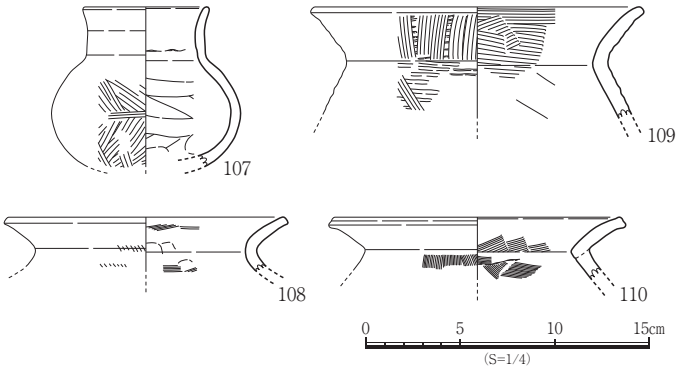


図3－25　ST6検出面出土遺物実測図

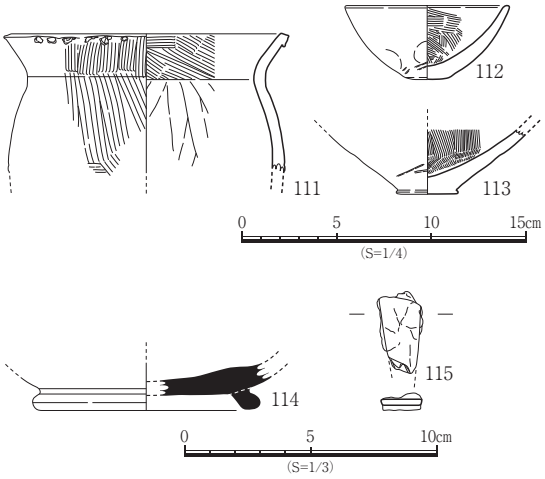


図3－26　ST6上層出土遺物実測図

はタテハケが施される。118～125は鉢である。118は器面の摩耗が著しいが，内面はハケ，外面にはタタキ目とナデ調整が認められる。119は内面口縁部にハケのちナデ，体上部はハケ，体中央部にはナデ調整がみられ，外面口縁部はヨコナデ，体部にはタタキ目とナデ調整が認められる。120は口縁部の1ヶ所をU字状に凹ませ注口状を呈する。内面はハケ状原体による粗いナデ，外面にはミガキが施される。121の口縁端部は面をなし，内面はハケ，底部にナデ，外面はタタキのちナデ調整が認められる。122は手づくね成形で，内面に指頭圧痕とナデ，外面には指頭圧痕がみられる。123の口縁端部は摘みにより面をなし，内面にハケ，外面はタタキ目が認められる。124は内面にハケ，外面はタタキのちナデ調整が認められる。125は内外面に一部煤が付着し，内面にハケ，外面はタタキのちナデ調整が施される。126は棒状鉄片である。全長2.9cm，全幅1.4cm，全厚0.2cm，重量3.0gを測る。

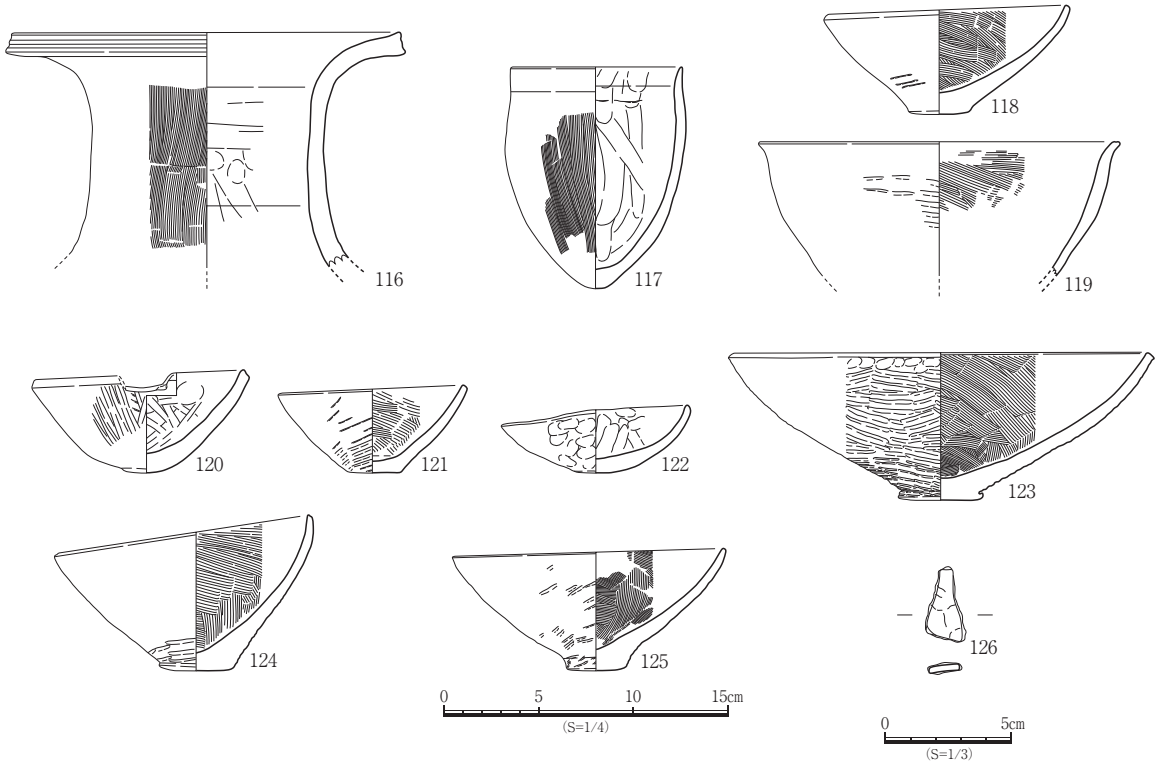


図3－27　ST6中層出土遺物実測図

下層出土遺物(図3－28)

127は弥生土器の鉢である。内面はハケ，外面口縁部から体上部にはタタキのちナデ，体中央から下部はタタキ目が認められ，体下部には調整の際の面が残る。128は鉄釘である。全長5.7cm，全幅0.8cm，全厚0.5cm，重量5.3gを測る。

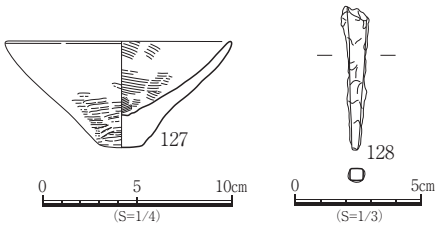


図3－28　ST6下層出土遺物実測図

埋土出土遺物(図3－29)

129～145は弥生土器である。129～134は甕で，129は内面胴部にハケ，底部はナデ調整がみられ，外面にはタタキ目と粗いハケが認められる。130の口縁端部は面をなし，内面口縁部にハケ，胴部はナデ，外面口縁部から頸部にはヨコナデ，胴部はタテハケ調整が施され，煤が付着する。131の口縁部は「く」の字状に屈曲する。器面の摩耗がみられるが，内面はハケ，外面口縁部にハケとナデ，胴部

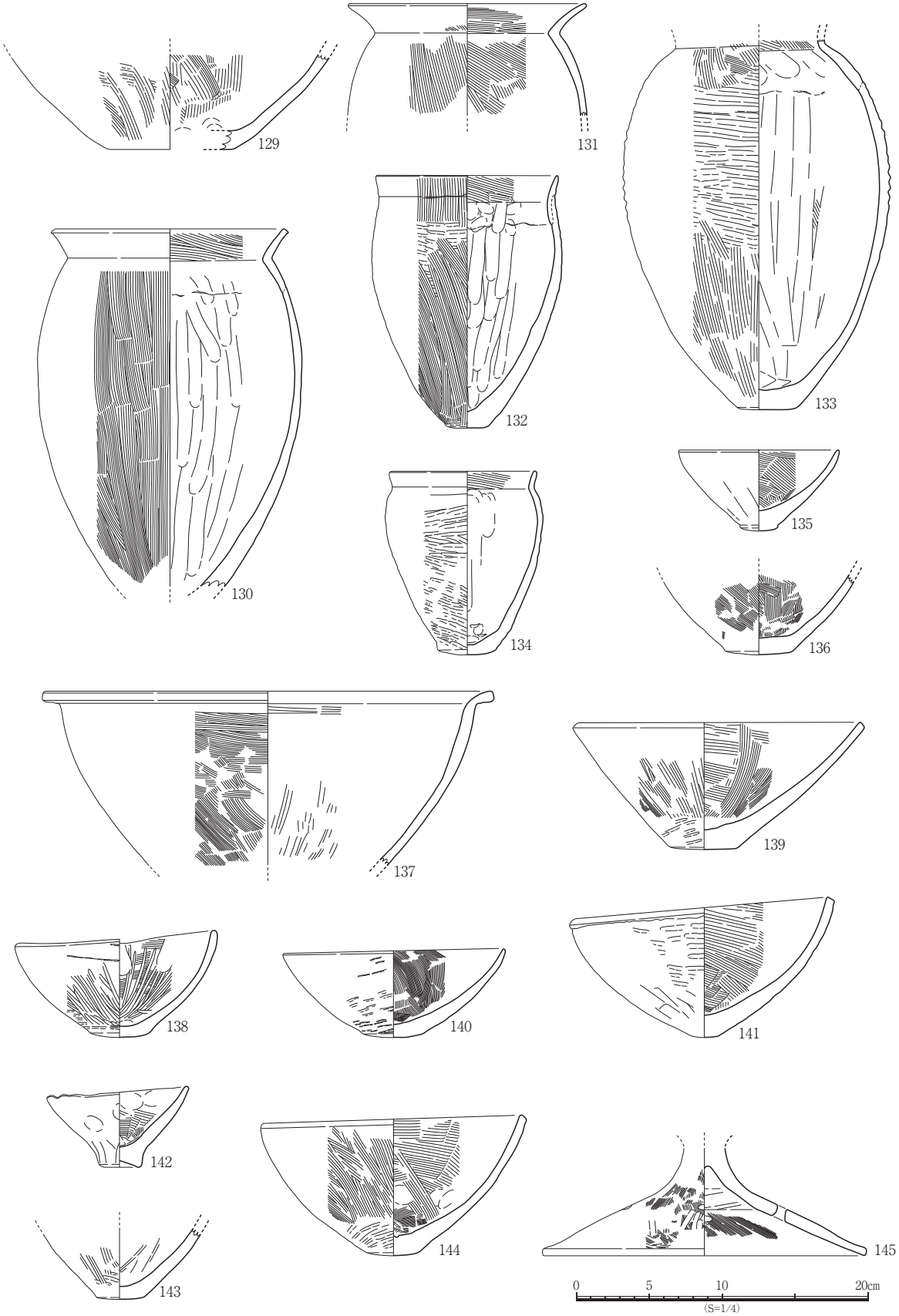


図3－29　ST6埋土出土遺物実測図

にはタテハケ調整が認められ，煤が付着する。132は内面口縁部にヨコハケ，頸部はナデと指頭圧痕，胴部から底部にはタテ方向のナデ調整がみられる。外面口縁部から頸部はタタキのちタテ方向のハケ，胴上部にはタタキ目とハケ，胴中央から下部はタタキ目をタテ方向のハケで消す。煤が付着する。133は内面口縁部にハケ，胴部はナデ，接合痕が顕著にみられる。外面肩部はハケ，胴上半から中央部にタタキ目，胴下半部にはタテハケ調整が施され，煤が付着する。134は内面口縁部にハケ，胴部は丁寧なナデ，底部には指頭圧痕がみられる。外面口縁部はナデ，胴部にタタキ目，底部にはタタキ目が残る。135～144は鉢である。135は内面にハケ，外面はナデ調整が認められる。136は内面にハケ，底部に指頭圧痕がみられ，外面はハケ調整が施される。137の口縁端部は凹状をなし，内面口縁部はハケのちヨコナデ，体部にミガキが施され，外面はタタキ目をハケで消す。138は内面にハケのちミガキ，底部には指頭圧痕がみられる。外面口縁部はナデ，体部にタタキのちミガキが施され，底部にはタタキ目が残る。139の器面は摩耗しているが，内面にハケ，外面体上半部はタタキのちナデ，体中央部にはタテハケ，体下半部はタタキのちナデ調整が認められる。140の口縁端部は面をなし，底部は丸みを帯びる。内面はハケ，外面にはタタキのちナデ調整が施される。 141の口縁端部は面をなし，底部は丸底を呈する。内面はハケ，外面にはタタキのちナデ調整が施される。 142の底部は高台状を呈する。内面口縁部は指頭圧痕，体部にハケ調整がみられ，外面はナデと指頭圧痕が認められる。143は内面にハケのちナデ調整が施され，外面はハケと一部タタキ目が残る。144の口縁端部は摘み，内外面はハケ調整がみられ，外面体下半部にはタタキ目が残る。145は高杯である。径0.8 cmの穿孔が3ヶ所認められる。内面上部はナデ，中央部にハケ，裾部にはヨコナデ調整がみられ，外面はハケと一部にミガキが施される。

埋土(ST3)出土遺物(図3－30)

146は弥生土器の高杯である。ST3検出面出土のものと接合した。径1.0 cmの穿孔が2ヶ所に認められる。杯部内底は丁寧なナデ，脚部内面にはナデ，裾部はハケ調整がみられ，外面には丁寧なミガキが施される。

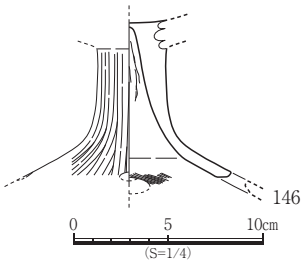


図3－30　ST6埋土(ST3)出土遺物実測図

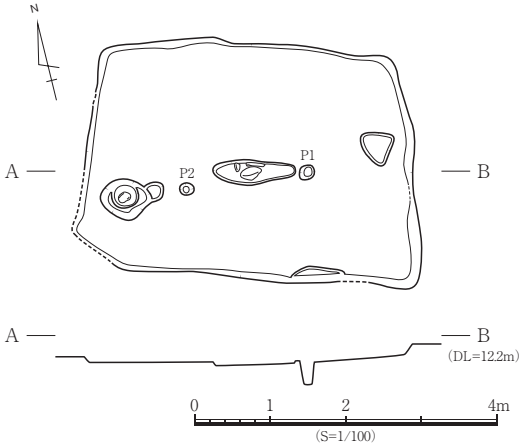


図3－31　ST7

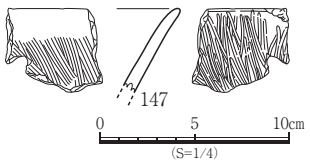


図3－32　ST7検出面出土遺物実測図

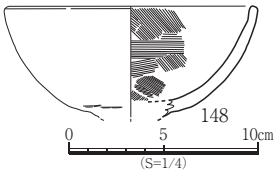


図3－33　ST7下層出土遺物実測図

ST7（図3－31）

ST7は調査区東側に位置する。不整方形を呈し，長軸は約4.50 m，短軸は約3.14m，検出面からの深さは約24 cmを測り，床面の標高は約11.9mである。埋土は砂粒が混じる灰褐色粘土質シルトである。

床面ではピットを検出した。検出したピットのうちP1・2は位置関係から主柱穴とみられ，床面からの深さはP1が31 cm，P2が47 cmを測る。

出土遺物は検出面から弥生土器1点(147)，下層から弥生土器1点(148)，埋土から弥生土器4点(149～152)，小型丸底鉢1点(153)，石製品1点(154)が図示できた。

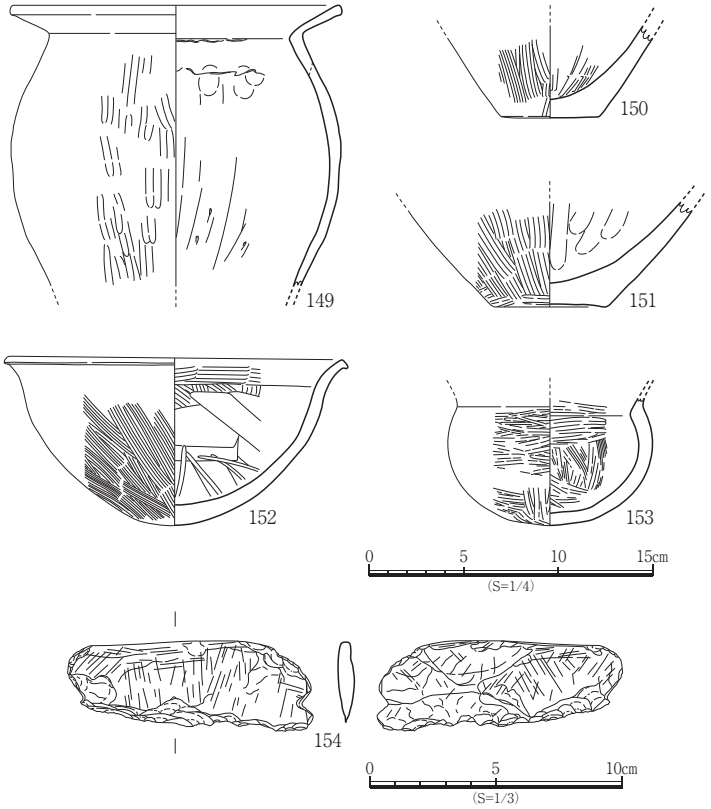


図3－34　ST7埋土出土遺物実測図

検出面出土遺物（図3－32）

147は弥生土器の高杯である。内面口縁部はヨコナデ，杯部にハケ，外面にはミガキが施される。

下層出土遺物（図3－33）

148は弥生土器の鉢である。内面にハケ，口縁端部はハケのちナデにより面をなし，外面にはナデ調整が認められる。

埋土出土遺物（図3－34）

149～152は弥生土器である。149～151は甕で，149は内面口縁部にヨコナデ，端部には指頭圧痕，頸部は接合痕が顕著にみられ，胴部にタテ方向のケズリが認められる。外面口縁部はナデ，胴部にはタタキのちミガキが施され，煤が付着する。150は内面に粗いケズリ，外面はタテハケ，胴部には細やかなハケ調整が施され，煤が付着する。151は内面にナデ，外面はタタキのちハケ，底部にはナデ調整が認められる。152は鉢である。口縁端部はナデにより面をなし，底部は丸底状を呈し摩耗する。内面口縁部はヨコハケのちナデ，体部にはハケのちナデ，外面口縁部はヨコナデ，体部にはハケ調整が施され，煤が付着する。153は小型丸底鉢である。内面頸部にはヨコ方向のミガキ，体部はハケのちミガキ，外面頸部にはナデ，体部はミガキが認められる。154は石包丁である。全長9.8cm，全幅3.6cm，全厚0.6cm，重量31.2gを測る。両側に抉りが入れられ，両面に背ミガキが施される。貢岩製。

ST8（図3－4）

ST8は調査区中央の北側に位置し，ST1を切る。不整方形を呈し，一辺約3.97 m，検出面からの深さは約43 cmを測り，床面の標高は約11.7mである。埋土は黒ボク主体で1層が灰褐色シルト，2層が地山をブロック状に含み，一部焼土を含む暗褐灰色シルト，3層が暗褐灰色シルト，4層が地山をブ

ロック状に含む暗褐灰色粘土質シルト，5層が地山をブロック状に多く含む暗褐灰色粘土質シルトである。床面ではピットを検出した。P1の床面からの深さは11cmを測る。

出土遺物は埋土から弥生土器1点(155)，土師器2点(156・157)，黒色土器1点(158)，土師質土器3点(159～161)，金属製品2点(162・163)，包含層から出土したものと接合した土師器2点(164・165)が図示できた。

埋土出土遺物(図3－35)

155は弥生土器の甕である。底部をわずかに摘み出し，内面にナデ調整，外面はタタキ目をナデ消す。156・157は土師器である。156は杯で，内外面はナデ調整，外面底部は回転ヘラ切りのちナデ調整が認められる。157は甕で，口縁端部は強いナデにより凹状をなし，内外面はハケのちナデ調整が施される。158は搬入品の黒色土器椀で，内外面はヘラミガキ，口縁部内面に1条の沈線が施される。159～161は土師質土器である。159は杯で，内外面に回転ナデ調整，外面底部には回転ヘラ切りが認められる。160は甕で，口縁端部は面をなす。内面口縁部にヨコナデ，胴部はハケのちナデ調整がみられ，外面口縁部にはヨコナデ，胴部はハケ調整が施される。161は搬入品の羽釜で，口縁端部と鍔端部は強いナデにより凹状をなす。内面は一部にハケが残るナデ調整がみられ，外面はヨコナデ調整が認められる。162・163は金属製品である。162は銅製と考えられ，残存長4.2cm，残存幅1.8cm，全厚1.0cm，重量10.6gを測る。163は鉄製で，全長5.1cm，全幅3.1cm，全厚1.2cm，重量43.0gを測る。

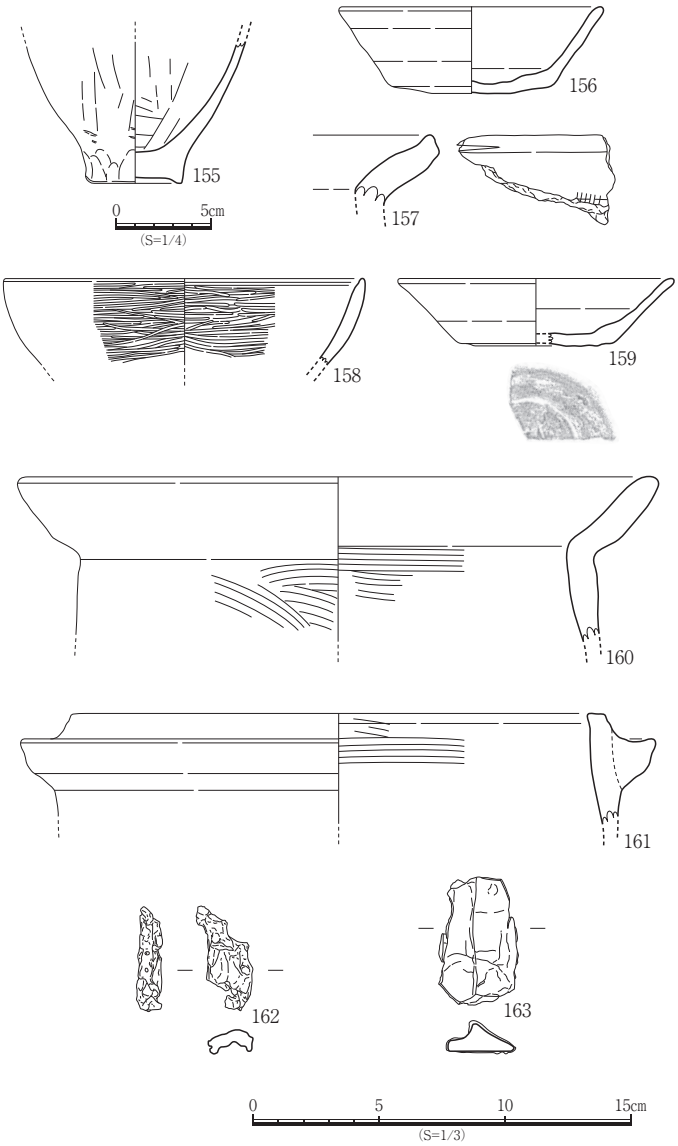


図3－35　ST8埋土出土遺物実測図

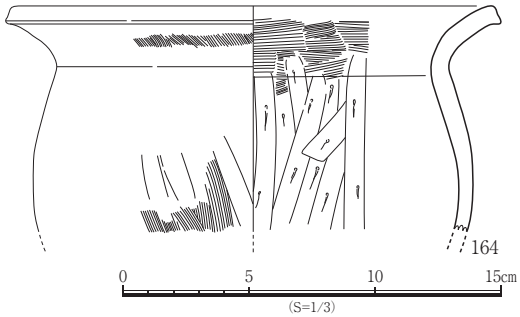


図3－36　ST8埋土・包含層(Ⅲ層)出土遺物実測図

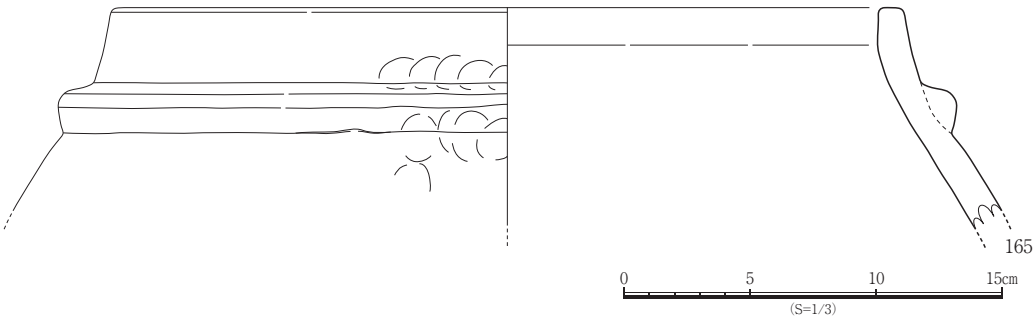


図3－37　ST8埋土・包含層（Ⅰ層）出土遺物実測図

埋土・包含層出土遺物（図3－36・37）

164・165は土師器である。164は甕で，包含層Ⅲ層から出土したものと接合した。口縁端部は面をなす。内面口縁部はハケのちヨコナデ，胴部にケズリがみられ，外面口縁部はタテハケのちヨコナデ，胴部はハケとナデ調整が認められ，煤が付着する。165はカマドで，包含層Ⅰ層から出土したものと接合した。口縁端部は面をなす。器面が摩耗し，被熱により割れているが，口縁部にヨコナデが認められる。

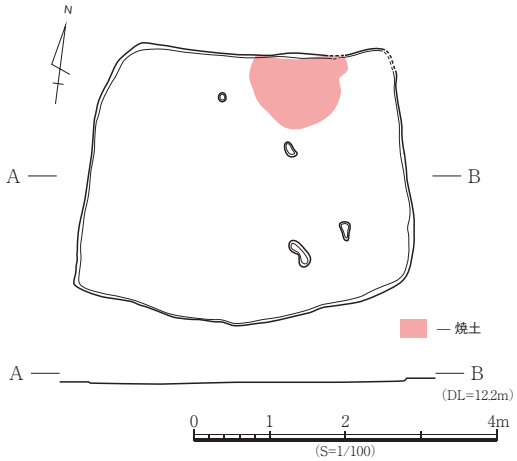


図3－38　ST9

ST9（図3－38）

ST9は調査区中央の東端に位置する。隅丸方形状を呈し，長軸は約4.16 m，短軸は約3.57m，検出面からの深さは約6 cmを測り，床面の標高は約12.1mである。埋土は1層が黒色粒を若干含む褐灰色粘土質シルト，2層が焼土を多く含む褐灰色粘土質シルトである。床面ではピットを検出した。また，北側壁際の床面に焼土がみられ，カマドがあったと考えられる。

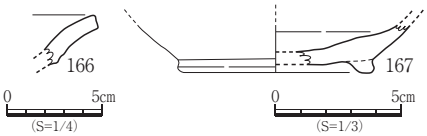


図3－39　ST9埋土出土遺物実測図

出土遺物は埋土から弥生土器1点（166），土師質土器1点（167）が図示できた。

埋土出土遺物（図3－39）

166は弥生土器の二重口縁壺である。口縁端部は面をなし，内面にはヨコナデ，外面はハケのちナデ調整が認められる。167は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，器面は摩耗が著しく調整不明である。

② 掘立柱建物跡

SB1（図3－40）

調査区中央部の西側に位置する。桁行2間（2.4m）以上，梁行2間（3.9m）の東西棟で，軸方向はN－71°－Wである。柱間寸法は桁行2.40m，梁行1.65～2.25mを測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺39～78 cm，深さ33～48 cmを測る。埋土は黒色（10YR1.7/1）粘土質シルト，黒褐色（10YR2/2）

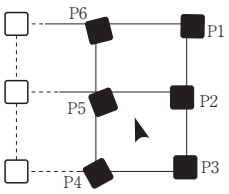


図3－40　SB1

粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB2（図3－41）

調査区西側の北端に位置し，SB9に切られる。桁行3間(4.5m)，梁行2間(3.3m)の南北棟で，軸方向はN－1°－Eである。柱間寸法は桁行1.20～1.65m，梁行1.50～1.80mで，面積は14.9㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺46～91㎝，深さ28～49㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB3（図3－42）

調査区北西側に位置し，SB10に切られる。桁行3間(4.5m)，梁行2間(3.9m)の南北棟で，軸方向はN－5°－Eである。柱間寸法は桁行1.35～1.65m，梁行1.95mで，面積は17.6㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺41～116㎝，深さ24～63㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP1の須恵器1点(168)が図示できた。

P1出土遺物（図3－43）

168は須恵器の壺である。口縁端部は面をなし，内外面にナデ調整が認められる。

SB4（図3－45）

調査区中央部の西側に位置し，

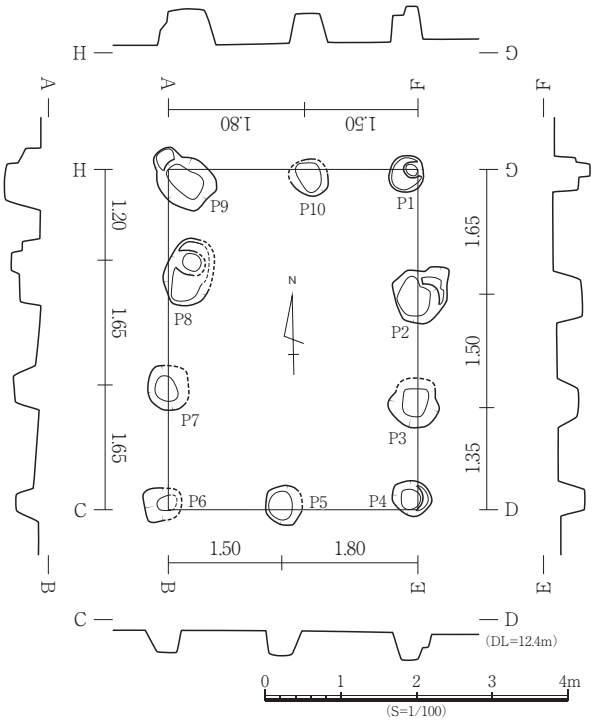


図3－41　SB2

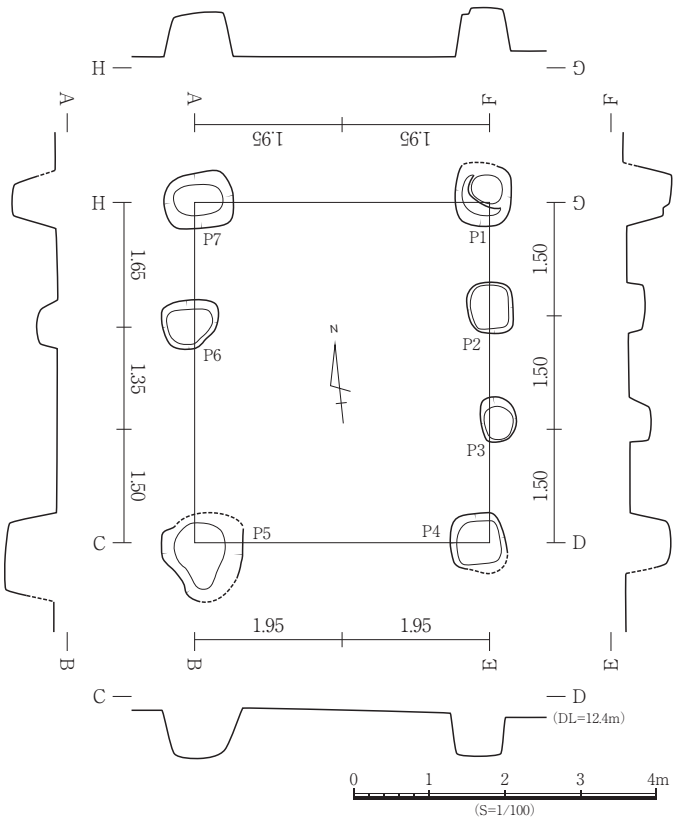


図3－42　SB3

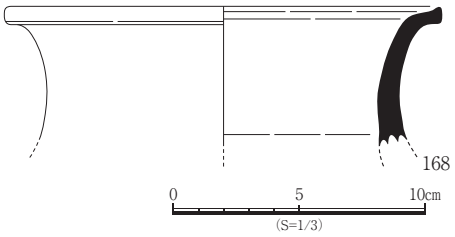


図3－43　SB3出土遺物実測図

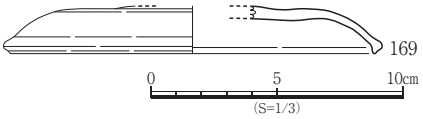


図3－44　SB4出土遺物実測図

SB20を切る。桁行2間(3.9m)，梁行2間(3.3m)の南北棟で，軸方向はN－5°－Eである。柱間寸法は桁行1.95m，梁行1.50～1.80mで，面積は12.9㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺58～104㎝，深さ25～76㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物はP7の土師器1点(169)が図示できた。

P7出土遺物(図3－44)

169は土師器の蓋である。器面は摩耗しているが，内外面にナデ調整が認められる。

SB5(図3－46)

調査区中央部の北側に位置する。桁行4間(7.2m)，梁行2間(3.6m)の南北棟で，軸方向はN－4°－Eである。柱間寸法は桁行1.50～1.95m，梁行1.50～2.10mで，面積は25.9㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺31～84㎝，深さ12～48㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP10の金属製品1点(170)が図示できた。

P10出土遺物(図3－47)

170は金属製品である。全長8.0

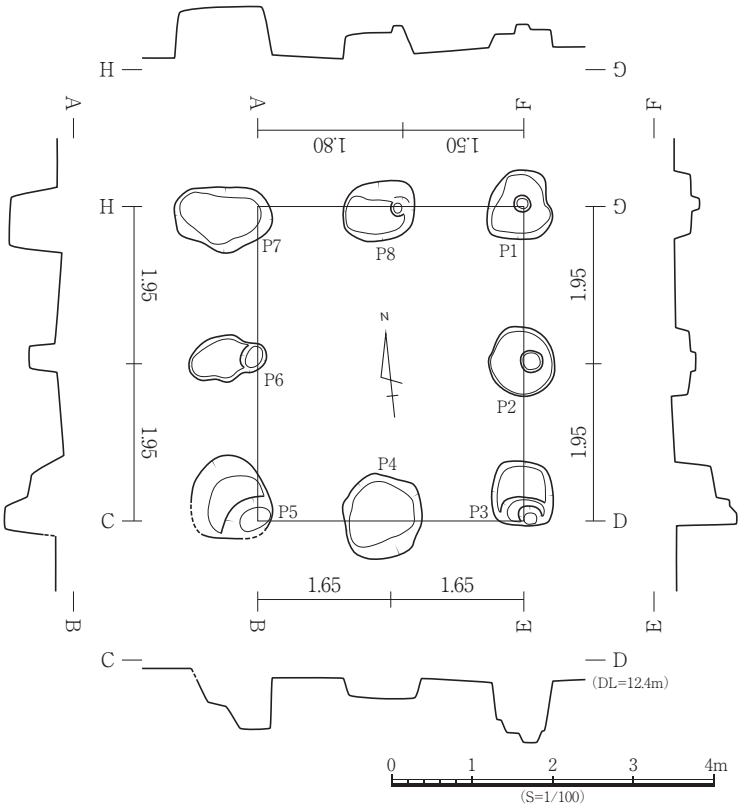


図3－45　SB4

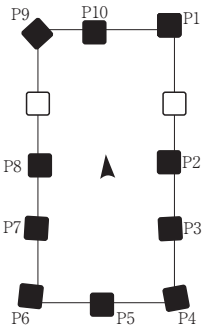


図3－46　SB5

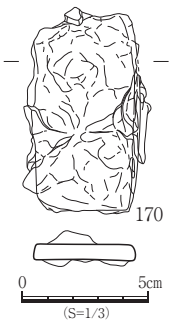


図3－47　SB5出土遺物実測図

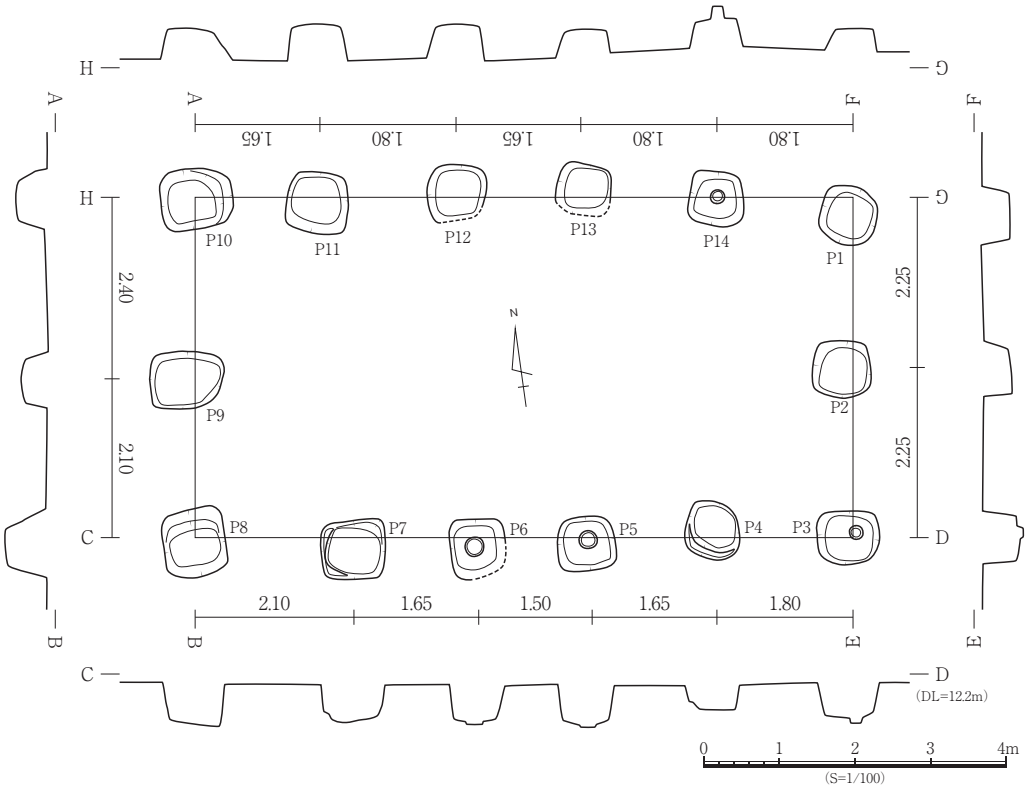


図3－48　SB6

cm，全幅4.3㎝，全厚0.6㎝，重量102.3gを測る。

SB6（図3－48）

調査区中央部の北側に位置し，ST3を切る。桁行5間（8.7m），梁行2間（4.5m）の東西棟で，軸方向はN－82°－Wである。柱間寸法は桁行1.50～2.10m，梁行2.10～2.40mで，面積は39.2㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺72～98㎝，深さ31～57㎝を測る。埋土は黒色（10YR1.7/1）粘土質シルト，にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトを含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物はP9の須恵器1点（171）が図示できた。

P9出土遺物（図3－51）

171は須恵器の高杯である。脚部は欠損し，内外面に回転ナデ調整，外面底部にはケズリが施される。

SB7（図3－49）

調査区中央部の南側に位置し，ST4とSB14を切る。桁行4間（8.1m），梁行2間（4.2m）の東西棟で，軸方向はN－83°－Wである。柱間寸法は桁行1.65～2.25m，梁行1.95～2.25mで，面積は34.0㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺42～106㎝，深さ19～66㎝を測る。埋土は褐色（10YR4/4）シルトを含む黒色

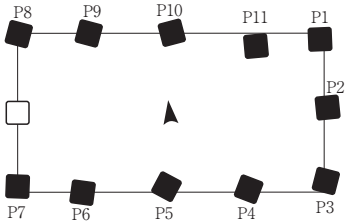


図3－49　SB7

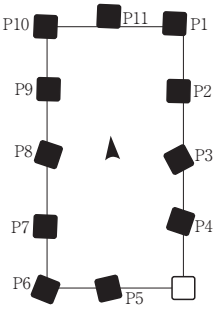


図3－50　SB8

(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物はP3の石製品1点(172), P10の須恵器3点(173～175), P11の須恵器1点(176)が図示できた。

P3出土遺物(図3－52)

172は砥石である。残存長8.9㎝, 残存幅7.1㎝, 全厚2.8㎝, 重量201.8gを測り, 2面に使用痕が認められる。砂岩製。

P10出土遺物(図3－52)

173～175は須恵器である。173は壺の底部で, 内外面に回転ナデ調整が認められる。174は皿で, 内外面に回転ナデ調整が認められる。175は杯で, 内外面に回転ナデ調整, 外面底部は回転ヘラ切りである。

P11出土遺物(図3－52)

176は須恵器の蓋である。外面つまみ部は扁平に近く, 中央部がやや凸状をなす。器面は摩耗しているが, 天井部は回転ヘラケズリ, 口縁部は回転ナデ, 内面には回転ナデ調整が認められる。つまみ径は3.3㎝である。

SB8(図3－50)

調査区東側の南端に位置する。SB18との切り合い関係は不明で, 上層ではSX9が検出される。桁行4間(6.9m), 梁行2間(3.6m)の南北棟で, 軸方向はN－4°－Eである。柱間寸法は桁行1.65・1.80m, 梁行1.65～1.95mで, 面積は24.8㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し, 一辺46～108㎝, 深さ29～66㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト, 褐色(10YR4/4)シルトを含む黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物はP3の土師質土器1点(177)が図示できた。

P3出土遺物(図3－53)

177は土師質土器の椀である。貼付高台を有し, 内面は回転ナデと一部ミガキがみられ, 外面に回転ナデ調整が認められる。

SB9(図3－54)

調査区西側の北端に位置し, SB2を切る。桁行3間(4.8m), 梁行2間(3.6m)の南北棟で, 軸方向はN－1°－Eである。柱間寸法は桁行1.50～1.80m, 梁行1.80mで, 面積は17.3㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し, 一辺67～102㎝, 深さ38～55㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト, にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

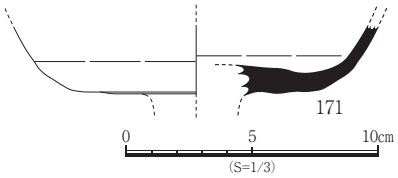


図3－51　SB6出土遺物実測図

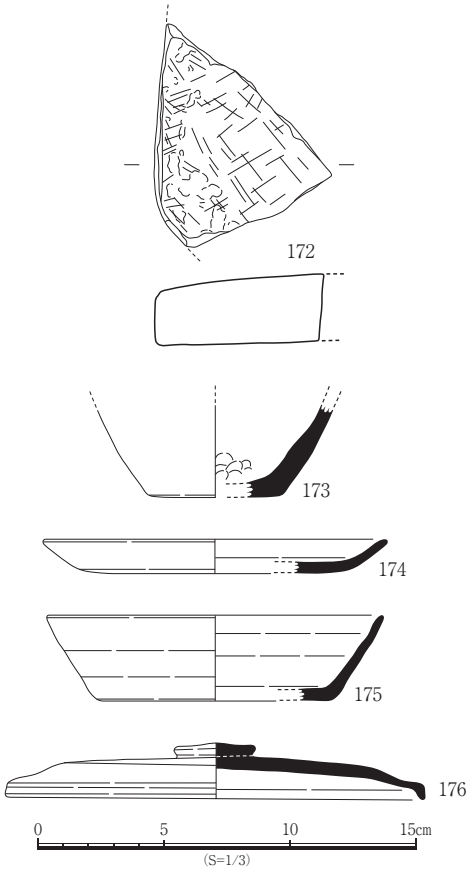


図3－52　SB7出土遺物実測図

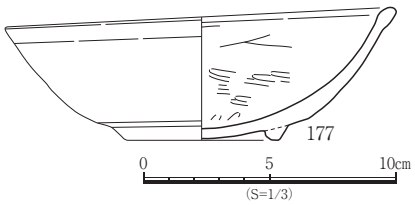


図3－53　SB8出土遺物実測図

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB10（図3－55）

調査区北西側に位置し，SB3を切る。桁行3間(4.2m)，梁行2間(3.6m)の南北棟で，軸方向はN－1°－Eである。柱間寸法は桁行1.35～1.50m，梁行1.80mで，面積は15.1㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺47～115㎝，深さ40～67㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP4の石製品1点(178)，P6の土師器1点(179)が図示できた。

P4出土遺物（図3－56）

178は叩石である。全長11.7㎝，

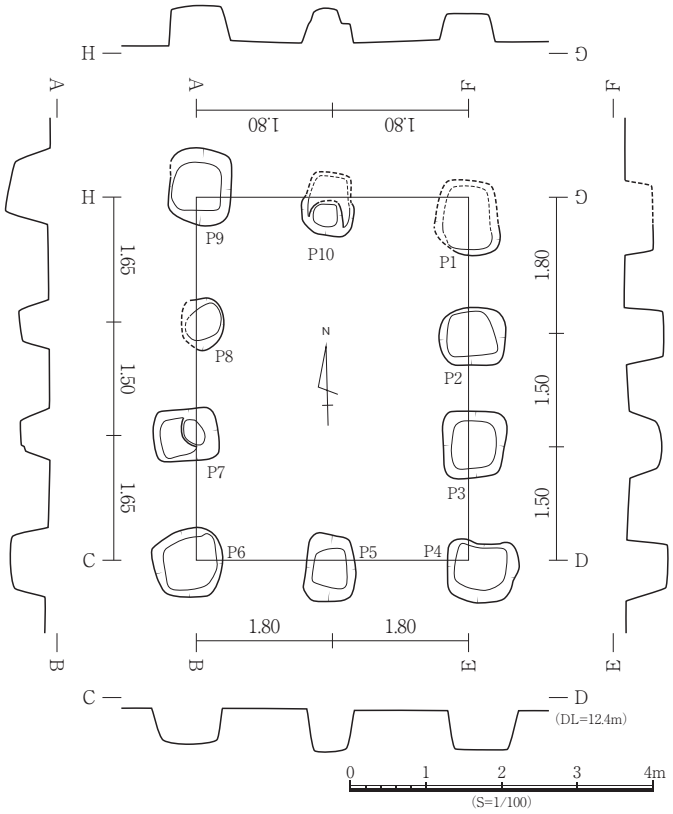


図3－54　SB9

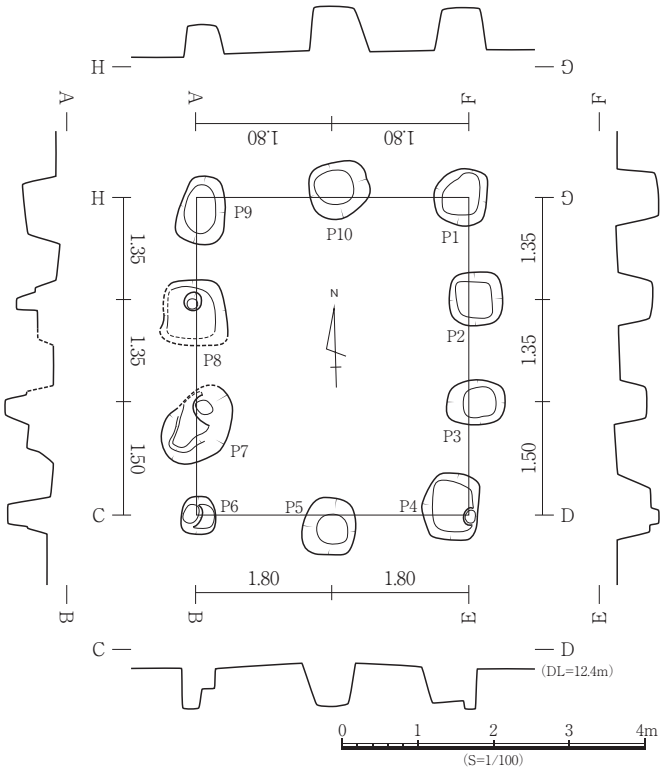


図3－55　SB10

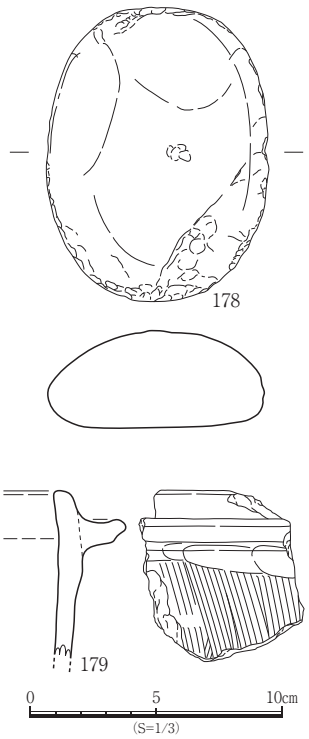


図3－56　SB10出土遺物実測図

全幅 8.8 ㎝，全厚 3.9 ㎝，重量 541.5g を測る。側面に使用痕が認められる。砂岩製。

P6 出土遺物（図3－56）

179 は土師器の羽釜である。搬入品で，内面にナデ，外面口縁部から鍔下部はナデ，胴部にはタテハケが認められ，煤が付着する。

SB11（図3－57）

調査区中央部の南端に位置し，南側は調査区外へ続く。桁行 2 間（3.3m）以上，梁行 1 間（3.3m）の南北棟と考えられ，軸方向はＮ－０°－Ｅである。柱間寸法は桁行 1.50 ～ 1.80m，梁行 1.65m で，検出部分での面積は 10.9 ㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺 60 ～ 101 ㎝，深さ 27 ～ 64 ㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

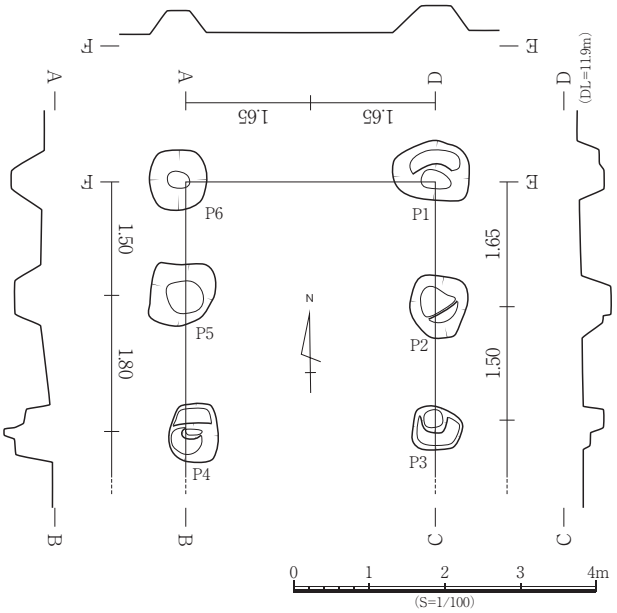


図3－57　SB11

出土遺物はP1の金属製品1点（180）が図示できた。

P1 出土遺物（図3－58）

180 は鉄製の鋤先とみられる。装着部はＹ字状の断面形で，残存長9.2㎝，全幅3.3㎝，全厚1.2㎝，重量47.5g を測る。

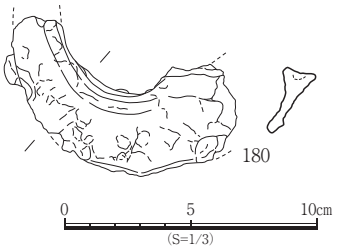


図3－58　SB11 出土遺物実測図

SB12（図3－59）

調査区中央部の南端に位置し，SB30 と SK6・8・9 を切り，SK10 に切られる。桁行 5 間（9.9m），梁行3間（5.4m）の東西棟で，軸方向はＮ－89°－Ｗである。柱間寸法は桁行1.65～2.10m，梁行1.65～2.10m で，面積は 53.5 ㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺 63 ～ 104 ㎝，深さ 26 ～ 47 ㎝を測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，褐色（10YR4/4）粘土質シルト塊を含む褐灰色（10YR4/1）粘土質シルトである。

出土遺物はP4 の瓦器 1 点（181），土師質土器 1 点（182），白磁 1 点（183），土製品 1 点（184），金属製品 1 点（185），P7 の石製品 1 点（186），P8 の石製品 1 点（187），P9 の須恵器 2 点（188・189），P10 の製塩土器 1 点（190），土師器 1 点（191），P12 の土師質土器 1 点（192），土製品 1 点（193），P13 の須恵器 2 点（194・195），P15 の須恵器 1 点（196）が図示できた。

P4 出土遺物（図3－60）

181 は瓦器の椀である。高台は三日月状に外反し，内面口縁部はナデ，体部に粗いミガキが施され，外面口縁部はナデ，体部には指頭圧痕が認められる。和泉型に似せた在地のもの。182 は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，器面は摩耗しているが，内面にミガキ，外面には回転ナデ調整と一部ミガキが施される。183 は白磁の碗で，口縁部は外反する。184 は土製品の土錘である。有溝土錘で，

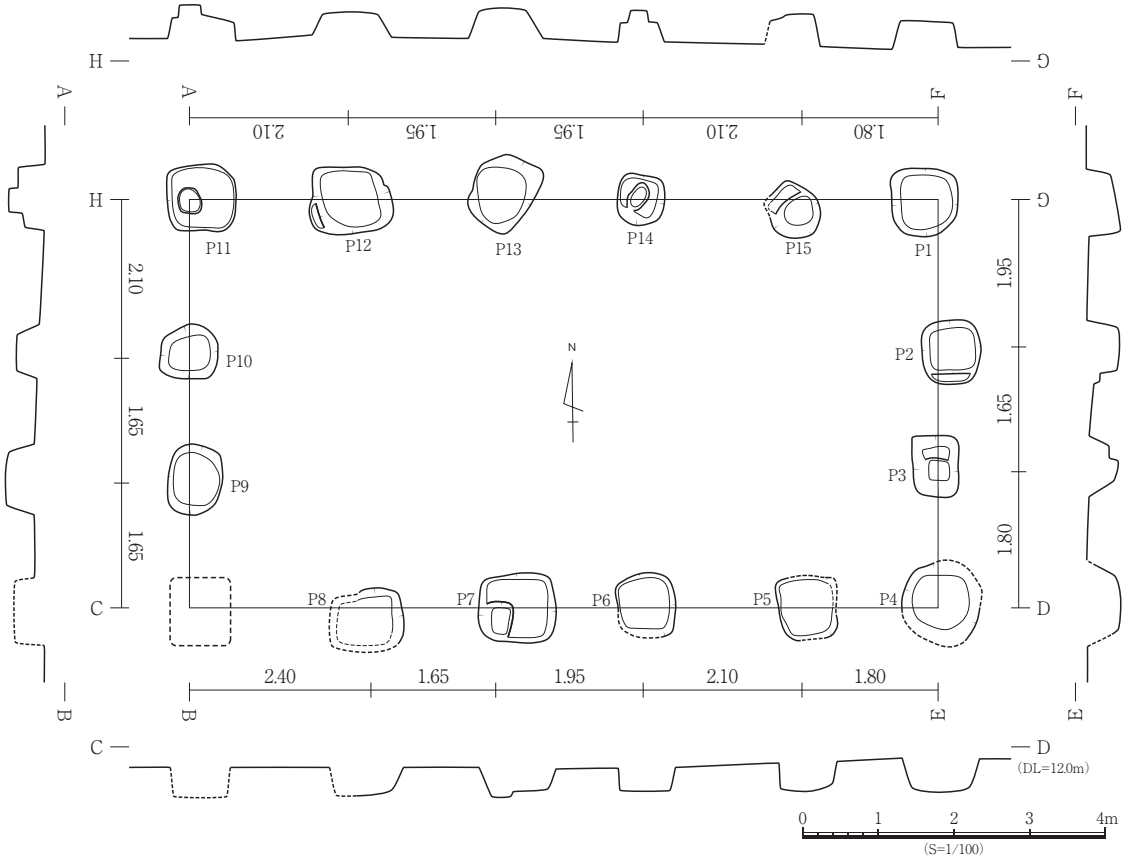


図3－59　SB12

ナデと指頭圧痕が認められ，残存長5.9㎝，残存幅2.3㎝，全厚4.6㎝，重量55.3gを測る。185は鉄製の紡錘車と考えられる。全長4.2㎝，全幅4.2㎝，全厚0.3㎝，重量13.0gを測る。

P7出土遺物（図3－60）

186は叩石である。片面に敲打痕が認められる。全長9.4㎝，全幅8.8㎝，全厚7.9㎝，重量851.8gを測る。砂岩製。

P8出土遺物（図3－60）

187は砥石である。4面に使用痕が認められる。全長14.8㎝，全幅14.7㎝，全厚4.1㎝，重量1360.5gを測る。砂岩製。

P9出土遺物（図3－60）

188・189は須恵器である。188は甕で，二次被熱する。内外面に回転ナデ調整が認められる。189は皿で，内外面に回転ナデ調整，外面底部は回転ヘラ切りが認められる。

P10出土遺物（図3－60）

190は製塩土器である。内面に布目痕が認められる。191は土師器のカマドである。内面はケズリ，外面にはハケ調整が施される。

P12出土遺物（図3－60）

192は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。193は土製品の土錘である。摩耗しており調整不明。残存長4.3㎝，全幅1.9㎝，全厚1.7㎝，重量10.8g，孔径0.5㎝を測る。

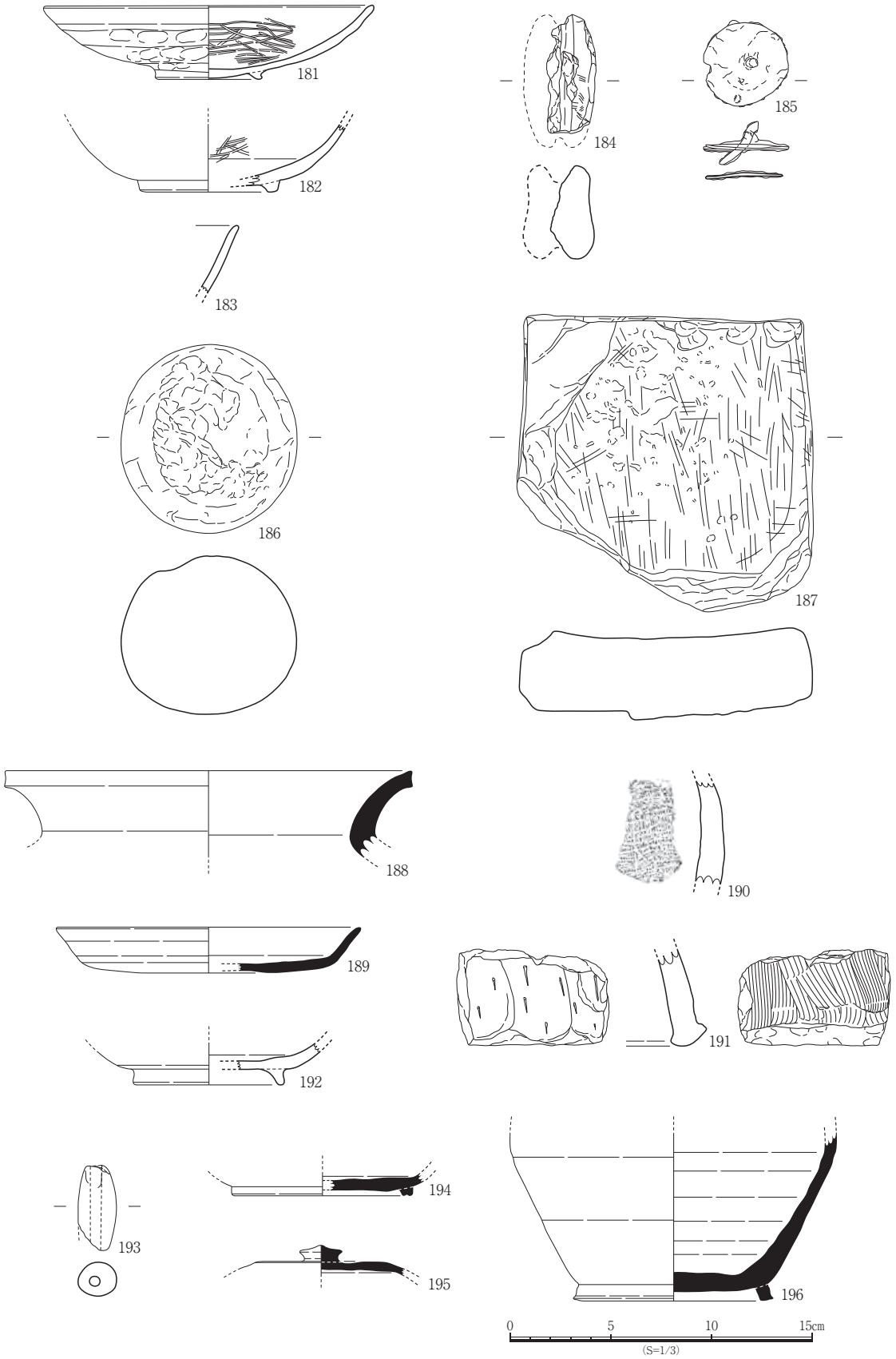


図3－60　SB12出土遺物実測図

P13出土遺物(図3－60)

194･195は須恵器である。194は杯で，貼付高台を有し，端部は凹状をなす。底部の内面はナデ調整，外面はヘラ切りである。195は蓋で，二次被熱する。径2.1㎝の宝珠形のつまみが付き，内外面にナデ調整が認められる。

P15出土遺物(図3－60)

196は須恵器の壺である。高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。

SB13(図3－61)

調査区北東隅に位置する。桁行4間(7.5m)，梁行3間(4.5m)の南北棟で，軸方向はN－6°－Wである。柱間寸法は桁行1.80～1.95m，梁行1.20～1.80mで，面積は33.8㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺72～124㎝，深さ42～67㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

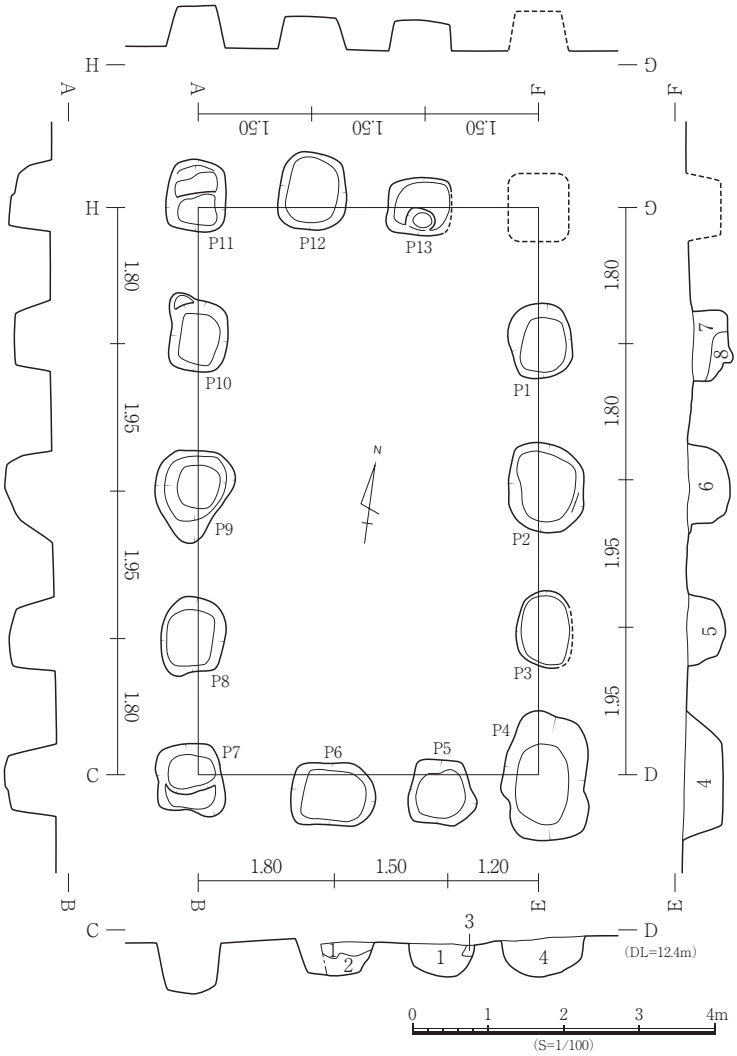


図3－61　SB13

SB14(図3－62)

調査区中央部の南寄りに位置し，ST4を切り，SB7に切られる。桁行3間(5.4m)，梁行2間(3.3m)の東西棟で，軸方向はN－78°－Wである。柱間寸法は桁行1.65～1.95m，梁行1.65mで，面積は17.8㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺22～96㎝，深さ5～42㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

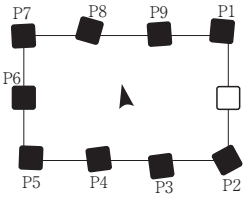


図3－62　SB14

出土遺物はP3の土師器1点(197)，土製品1点(198)，P5の土師器1点

(199)が図示できた。

P3出土遺物(図3－66)

197は土師器の杯である。内面口縁部は強いナデにより凹状をなし，体部から底部にナデのちミガキ，底部中央が強いナデにより凸状に盛り上がる。外面にはナデのちミガキ，底部はヘラ切りのちナデ調整が認められる。198は土製品の土錘である。摩耗しているが，ナデ調整が認められ，全長3.8㎝，全幅1.3㎝，全厚1.2㎝，重量5.2g，孔径0.5㎝を測る。

P5出土遺物(図3－66)

199は土師器の杯である。器面は摩耗が著しく体部の調整は不明。外面底部に回転ヘラ切りが認められる。

SB15(図3－63)

調査区中央部の南寄りに位置し，SB26とSK5に切られる。桁行3間(4.2m)，梁行2間(3.0m)の東西棟で，軸方向はN－82°－Wである。柱間寸法は桁行1.20～1.50m，梁行1.35～1.65mで，面積は12.6㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺23～91㎝，深さ3～60㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，褐色(10YR4/4)シルト(地山)塊を含む黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物はP3の弥生土器1点(200)，P11の須恵器1点(201)が図示できた。

P3出土遺物(図3－67)

200は弥生土器の甕である。口縁端部は面をなし，器面は摩耗しているが，内外面にナデ調整が認められる。

P11出土遺物(図3－67)

201は須恵器の皿である。内外面に回転ナデ調整，外面底部は回転ヘラ切りが認められる。

SB16(図3－64)

調査区中央部の南寄りに位置する。桁行3間(4.5m)，梁行2間(3.3m)の東西棟で，軸方向はN－88°－Eである。柱間寸法は桁行1.35～1.65m，梁行1.50～1.80mで，面積は14.9㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺32～81㎝，深さ5～35㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

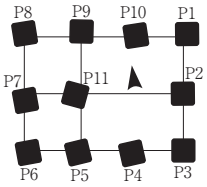


図3－63　SB15

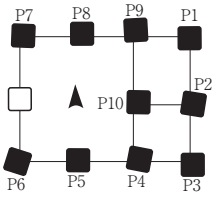


図3－64　SB16

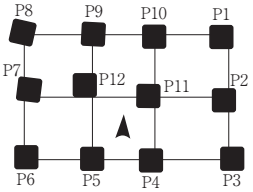


図3－65　SB17

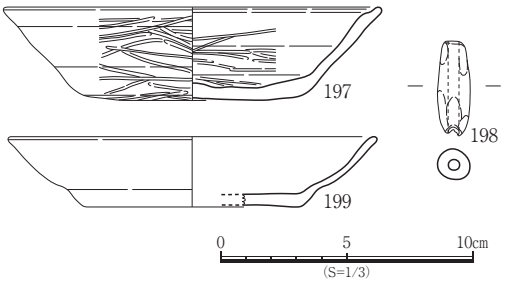


図3－66　SB14出土遺物実測図

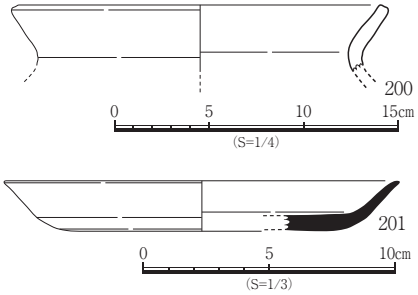


図3－67　SB15出土遺物実測図

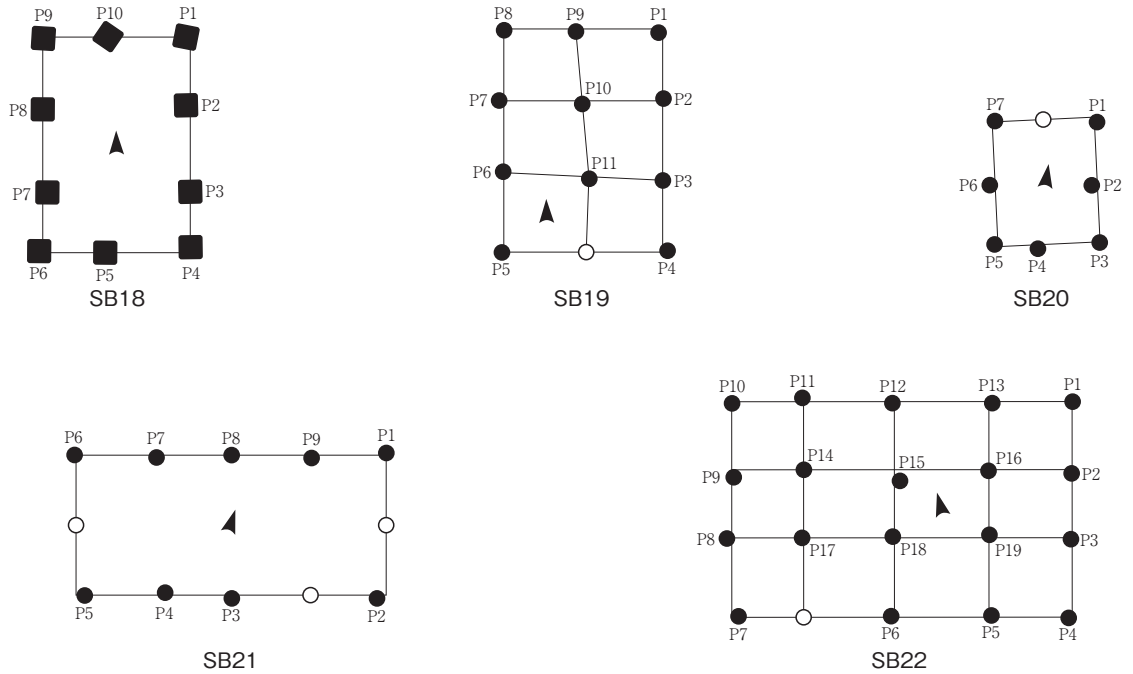


図3－68　SB18～22

SB17（図3－65）

調査区中央部の南側に位置する。SB7との切り合い関係は不明である。桁行3間(5.4m)，梁行2間(3.3m)の東西棟総柱建物跡で，軸方向はN－87°－Eである。柱間寸法は桁行1.65～1.95m，梁行1.35～1.95mで，面積は17.8㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺41～78㎝，深さ10～44㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB18（図3－68）

調査区東側の南端に位置する。SB8との切り合い関係は不明である。桁行3間(5.6m)，梁行2間(3.9m)の南北棟で，軸方向はN－0°－Eである。柱間寸法は桁行1.65～2.25m，梁行1.80～2.10mで，面積は21.8㎡を測る。柱穴の掘方は不整隅丸方形を呈し，一辺37～90㎝，深さ10～49㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP1の土師質土器1点(202)，P10の土師質土器1点(203)が図示できた。

P1出土遺物（図3－69）

202は土師質土器の小皿である。器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部は回転糸切りが認められる。

P10出土遺物（図3－69）

203は土師質土器の椀である。器面の摩耗が著しいが，外面に回転ナデ調整が認められ，底部は切り離し痕をナデ消す。

SB19（図3－68）

調査区西側の北端に位置する。SB2との切り合い関係は不明である。桁行3間(5.9m)，梁行2間(4.2m)の南北棟で，軸方向はN－1°－Eである。柱間寸法は桁行1.90～2.10m，梁行1.90～2.30mで，面積は24.8㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径30～64㎝，深さ12～34㎝を測る。埋土は黒

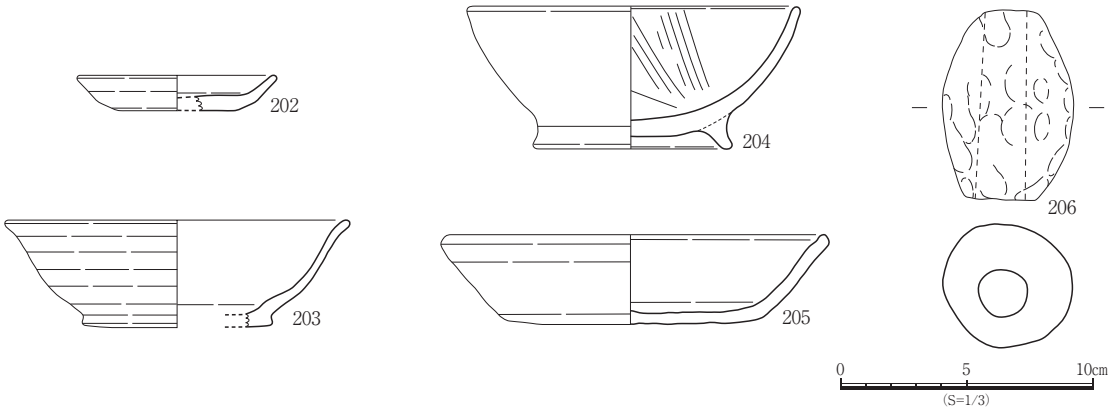


図3－69　SB18・19・21・22出土遺物実測図

褐色(10YR2/2)粘土質シルト，にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP7の土師器1点(204)が図示できた。

P7出土遺物(図3－69)

204は土師器の椀である。貼付高台を有し，器面は摩耗するが，内面口縁部はヨコナデ，体部にはハケが放射線状にみられ，底部はナデ，外面は回転ヨコナデ調整が認められる。

SB20(図3－68)

調査区中央部の西側に位置し，SB4に切られる。桁行2間(3.3m)，梁行2間(2.7m)の南北棟で，軸方向はN－11°－Wである。柱間寸法は桁行1.35m，梁行1.65mで，面積は8.9㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径28～46㎝，深さ18～37㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB21(図3－68)

調査区中央部の西寄りに位置する。桁行4間(8.0～8.2m)，梁行2間(3.7m)の東西棟で，軸方向はN－72°－Eである。柱間寸法は桁行1.80～2.30m，梁行1.85mで，面積は30.0㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径22～56㎝，深さ5～34㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP1の土師器1点(205)が図示できた。

P1出土遺物(図3－69)

205は土師器の杯である。ロクロ成形で，口縁部内面はナデにより凹状をなし，端部は面をなす。器面は摩耗しているが，内外面ともに回転ナデ，外面底部には回転ヘラ切りのち丁寧なナデを施す。

SB22(図3－68)

調査区中央部の西寄りに位置する。SD2との切り合い関係は不明で，上層ではSX4が検出される。桁行4間(9.0m)，梁行3間(5.7m)の東西棟総柱建物跡で，軸方向はN－75°－Wである。柱間寸法は桁

行1.90～2.50m，梁行1.70～2.10mで，面積は51.3㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径20～54㎝，深さ10～58㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は，P9の土製品1点(206)が図示できた。

P9出土遺物(図3－69)

206は土製品の土錘である。指頭圧痕とナデ調整がみられ，両端部は面をなす。全長7.6㎝，全幅5.2㎝，全厚4.9㎝，重量150.3g，孔径1.4㎝を測る。

SB23(図3－70)

調査区中央部の西寄りに位置する。桁行3間(6.7m)，梁行2間(3.8m)の東西棟総柱建物跡で，軸方向はN－75°－Wである。柱間寸法は桁行1.95～2.55m，梁行1.80～2.00mで，面積は25.5㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径26～40㎝，深さ20～39㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB24(図3－71)

調査区中央部の西寄りに位置する。SD2との切り合い関係は不明である。桁行3間(6.5m)，梁行3間(5.4m)の東西棟総柱建物跡で，軸方向はN－75°－Wである。柱間寸法は桁行2.15m，梁行1.60～1.90mで，面積は35.1㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径17～84㎝，深さ27～46㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物はP3の土師質土器2点(207・208)，P12の土師質土器1点(209)が図示できた。

P3出土遺物(図3－76)

207･208は土師質土器である。207は椀で，断面方形状の貼付高台を有する。器面は摩耗しているが，外面底部に回転ヘラ切りが認められる。208は小皿で，内面と外面口縁部には回転ナデ調整がみられ，外面底部は回転糸切りが認められる。

P12出土遺物(図3－76)

209は土師質土器の椀である。器面は摩耗しているが，内面にナデ調整がみられ，広範囲にタールが付着する。外面はナデ調整，底部に回転糸切りがわずかに認められる。

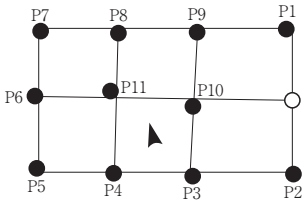


図3－70　SB23

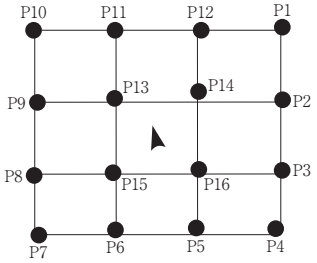


図3－71　SB24

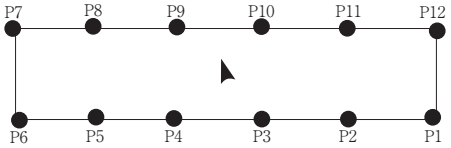


図3－72　SB25

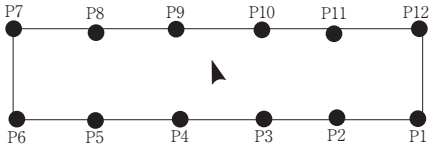


図3－73　SB26

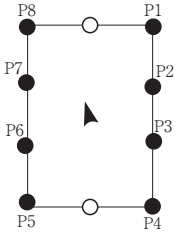


図3－74　SB27

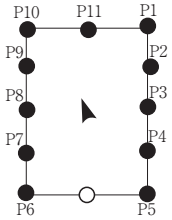


図3－75　SB28

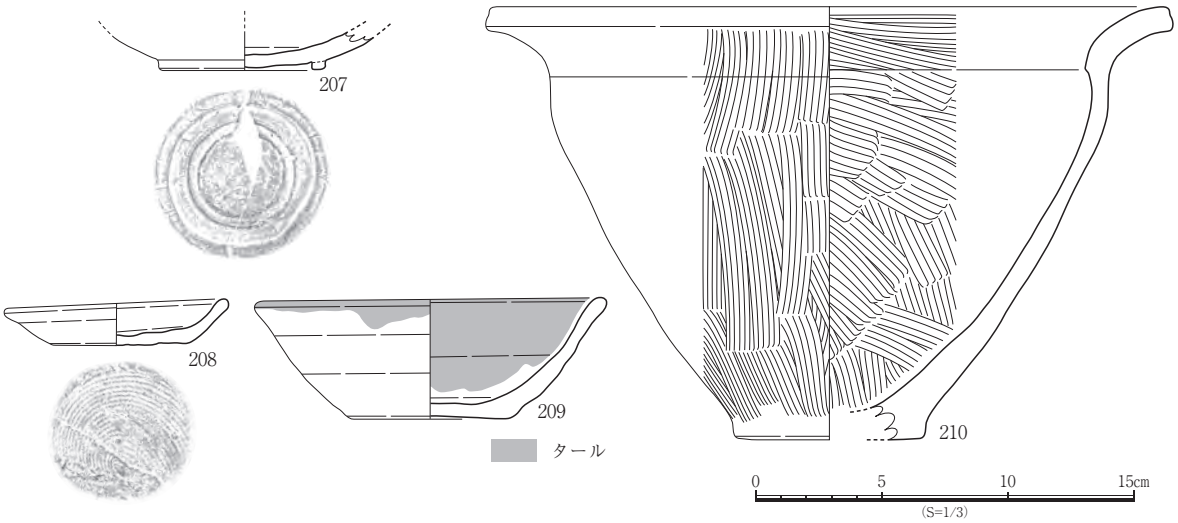


図3－76　SB24・27出土遺物実測図

SB25（図3－72）

調査区中央部に位置する。桁行5間（11.1m），梁行1間（2.4m）の東西棟で，軸方向はN－72°－Wである。柱間寸法は桁行2.10～2.40m，梁行2.40mで，面積は26.6㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径20～74㎝，深さ12～38㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。SB26と規模がほぼ同じで並行して建つことから同時期に営まれていたと考えられる。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB26（図3－73）

調査区中央部に位置する。SB15を切り，SB27との切り合い関係は不明である。桁行5間（10.8m），梁行1間（2.4m）の東西棟で，軸方向はN－72°－Wである。柱間寸法は桁行1.95～2.30m，梁行2.40mで，面積は25.9㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径27～46㎝，深さ19～43㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。SB25と規模がほぼ同じで並行して建つことから同時期に営まれていたと考えられる。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB27（図3－74）

調査区中央部の南寄りに位置する。SB26との切り合い関係は不明である。桁行3間（4.8m），梁行2間（3.3m）の南北棟で，軸方向はN－15°－Eである。柱間寸法は桁行1.50～1.70m，梁行1.65mで，面積は15.8㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径26～47㎝，深さ19～53㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物はP4の土師器1点（210）が図示できた。

P4出土遺物（図3－76）

210は土師器の甕である。内外面はハケ，口縁端部にはナデ調整が認められる。

SB28（図3－75）

調査区中央部の東寄りに位置する。桁行4間（4.4m），梁行2間（3.2m）の南北棟で，軸方向はN－19°－Eである。柱間寸法は桁行1.00～1.15m，梁行1.60mで，面積は14.1㎡を測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径22～42㎝，深さ14～30㎝を測る。埋土は黒色（10YR1.7/1）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

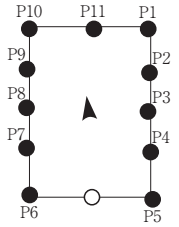


図3－77　SB29

SB29（図3－77）

調査区中央部の東寄りに位置する。桁行4間（4.5m），梁行2間（3.2m）の南北棟で，軸方向はN－7°－Eである。柱間寸法は桁行1.00～1.30m，梁行1.50～1.70mで，面積は14.4㎡を測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径24～38㎝，深さ17～35㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

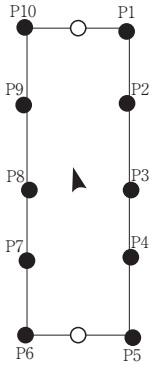


図3－78　SB30

SB30（図3－78）

調査区中央部の南端に位置し，SB12に切られる。桁行4間（8.1m），梁行2間（2.7m）の南北棟で，軸方向はN－15°－Eである。柱間寸法は桁行1.75～2.30m，梁行1.35mで，面積は21.9㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径25～56㎝，深さ10～47㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトを含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

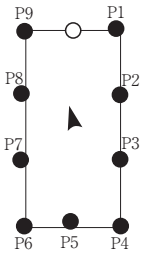


図3－79　SB31

SB31（図3－79）

調査区北東側に位置する。桁行4間（5.2m），梁行2間（2.5m）の南北棟で，軸方向はN－14°－Eである。柱間寸法は桁行1.65～1.80m，梁行1.25mで，面積は14.9㎡を測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径25～41㎝，深さ14～33㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

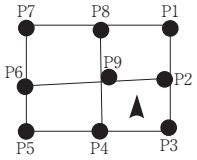


図3－80　SB32

SB32（図3－80）

調査区北東側に位置し，ST5を切る。桁行2間（3.8m），梁行2間（2.8m）の東西棟で，軸方向はN－89°－Eである。柱間寸法は桁行1.80～1.90m，梁行1.20～1.60mで，面積は10.6㎡を測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径20～45㎝，深さ17～43㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

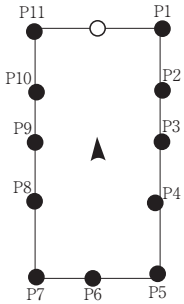


図3－81　SB33

SB33（図3－81）

調査区北東側に位置する。桁行4間（6.6m），梁行2間（3.3m）の南北棟で，軸方向はN－2°－Eである。柱間寸法は桁行1.40～2.10m，梁行1.60～1.70mで，面積は21.8㎡を測る。柱穴の掘方は概ね円形を呈し，径24～71㎝，深さ20～43㎝を

測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SB34(図3－82)

調査区東側の南端に位置する。桁行3間(4.6m)，梁行2間(3.5m)の東西棟で，軸方向はN－87°－Wである。柱間寸法は桁行1.20～2.00m，梁行1.50～2.00mで，面積は16.1㎡を測る。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し，径30～62㎝，深さ4～33㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

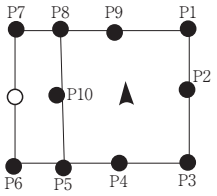


図3－82　SB34

出土遺物は図示できるものはなかった。

③ 柵列・塀跡

SA1(図3－83)

調査区中央部の北西寄りに位置し，SB21の北側で検出した東西方向の塀跡(N－71°－W)である。3間を検出し，柱間寸法は2.4～3.1mで，柱穴は径26～34㎝の円形である。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

図3－83　SA1

SA2(図3－84)

調査区中央部に位置し，SD2の北側で検出した東西方向の塀跡(N－88°－E)である。8間を検出し，柱間寸法は1.0～2.4mで，柱穴は径23～50㎝の円形及び楕円形である。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト，炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

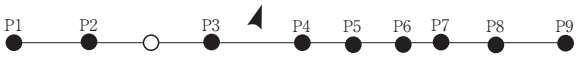


図3－84　SA2

出土遺物は須恵器1点(211)が図示できた。

出土遺物(図3－85)

211はP6出土の須恵器の円面硯である。陸部は欠損しているが，台脚部に十字状の透かしが施される。

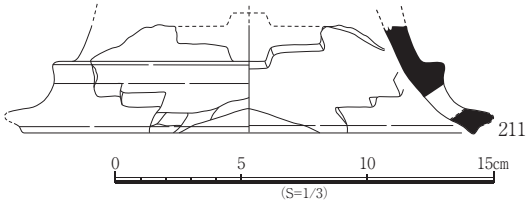


図3－85　SA2出土遺物実測図

④ 土坑

SK1

調査区中央部の西側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸0.80 m，短軸0.71 m，深さ25.9㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は土師器2点(212・213)が図示できた。

出土遺物(図3－86)

212・213は土師器で，212は杯である。手づくね成形で，粘土帯の接合痕が顕著である。内面にナデ，外面口縁部はヨコナデ，体部には指頭圧痕がみられ，底部はヘラ切りが認められる。213は皿である。手づくね成形で，内面にナデ，外面口縁部はナデ，体部には指頭圧痕がみられ，底部はヘラ切りが認められる。

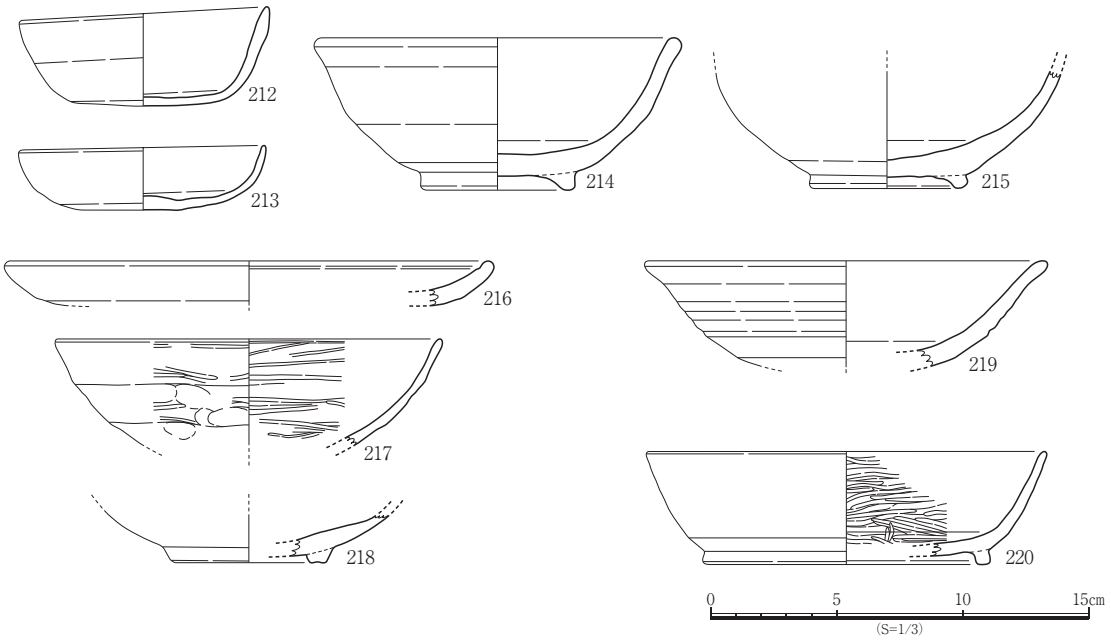


図3－86　SK1～3・6・8・17・18出土遺物実測図

SK2

調査区中央部の西側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.50 m，短軸0.57 m，深さ24.3㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物は土師質土器2点(214・215)が図示できた。

出土遺物(図3－86)

214・215は土師質土器の椀である。214は貼付高台を有し，接合部が顕著。口縁部は内外面ともにヨコナデ，内面体部はナデ，外面体上半部にナデ，下半部はケズリが認められる。215は貼付高台を有し，接合部に丁寧なナデ調整がみられる。器面は摩耗し，外面底部には糸切り痕が認められる。

SK3

調査区中央部の北端に位置し，SK17を切る。平面形は不整隅丸方形を呈する。長軸1.13 m，短軸0.94 m，深さ20.3㎝を測り，埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は土師器1点(216)が図示できた。

出土遺物(図3－86)

216は土師器の皿である。SK17とSK18の埋土から出土したものと接合した。器面は摩耗が著しいが，内外面に回転ナデ調整がみられ，化粧土が認められる。

SK4(図3－87)

調査区中央部の南西側に位置する。平面形

図3－87　SK4出土状況図

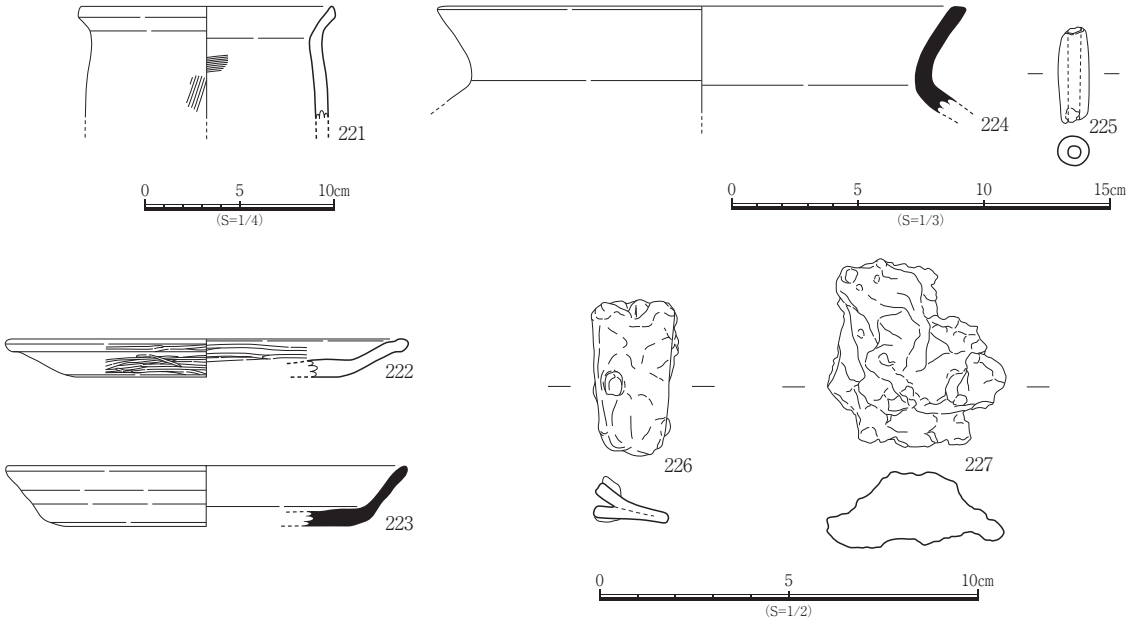


図3－88　SK9出土遺物実測図

は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.55 m，短軸1.03 m，深さ12.6㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。遺構内に石列が検出された。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK5

調査区中央部の南寄りに位置し，SB15P6 を切る。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸 1.35 m，短軸1.29 m，深さ21.9㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK6

調査区南東側に位置し，SB12P2･3に切られる。平面形は不整楕円形を呈し，長軸2.05 m，短軸1.40 m，深さ 19.9 ㎝を測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は瓦器1点(217)，土師質土器2点(218・219)が図示できた。

出土遺物(図3－86)

217 は瓦器の椀である。内面はミガキ，外面には指頭圧痕がみられ，一部ミガキが施される。218・219 は土師質土器の椀である。218 は貼付高台を有し，内面にナデ，外面は回転ナデ調整が認められる。219 は器面が摩耗しており，一部に強い被熱痕がみられる。内外面ともに回転ナデ，外面下半部には回転ヘラケズリが認められる。

SK7

調査区中央部の南側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸 1.33 m，短軸 0.70 m，深さ13.5㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK8

調査区中央部の南側に位置し，SB12P10・11 に切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸

2.20 m，短軸1.04 m，深さ13.1 cmを測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は土師質土器1点(220)が図示できた。

出土遺物(図3－86)

220は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，内外面にミガキが施される。

SK9

調査区中央部の南側に位置し，SB12P12・13に切られる。平面形は不整形を呈し，長軸2.44 m，短軸 1.60 m，深さ 36.1 cmを測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器1点(221)，土師器1点(222)，須恵器2点(223・224)，土製品1点(225)，金属製品2点(226・227)が図示できた。

出土遺物(図3－88)

221 は弥生土器の甕である。器面は摩耗が著しいが，内外面にハケ調整が認められる。222 は土師器の皿である。内外面にミガキが施される。223・224は須恵器である。223は皿で，内外面に回転ナデ調整，外面底部にはヘラ切りが認められる。224は甕で，器面の摩耗が著しく調整は不明である。225は土製品の土錘である。摩耗しているため調整は不明である。全長3.8 cm，全幅1.3 cm，全厚1.2 cm，重量4.6g，孔径0.5 cmを測る。226は鉄製の鋤先と考えられる。全長4.2 cm，全幅2.2 cm，全厚1.1 cm，重量15.2gを測る。227は鉄滓である。全長5.0 cm，全幅4.7 cm，全厚2.0 cm，重量29.6gを測る。

SK10

調査区中央に位置し，ST2とSB12を切る。平面形は不整方形を呈し，長軸1.39 m，短軸1.07 m，深さ19.0 cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK11

調査区中央に位置し，ST2 を切る。平面形は不整方形を呈し，長軸1.19 m，短軸1.17 m，深さ21.7 cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

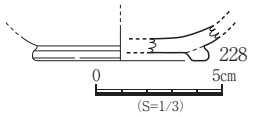


図3－89　SK11出土遺物実測図

出土遺物は土師質土器1点(228)が図示できた。

出土遺物(図3－89)

228 は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，内面はミガキ，外面には回転ナデ調整が認められる。

SK12

調査区中央部の北側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸0.97 m，短軸0.90 m，深さ15.7 cmを測る。埋土は火山灰2次堆積土主体の暗褐灰色から橙色土である。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK13

調査区の北東端に位置し，SK14に切られる。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸1.17 m，短軸1.12 m，深さ13.1 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK14

調査区の北東端に位置し，SK13を切り，ピットに切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.17 m，短軸0.37 m，深さ12.7 cmを測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK15

調査区の北東端に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.74 m，短軸0.43 m，深さ16.7 cmを測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器1点(229)が図示できた。

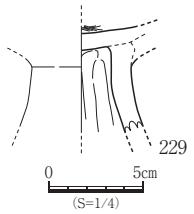


図3－90　SK15出土遺物実測図

出土遺物(図3－90)

229は弥生土器の高杯である。器面の摩耗が著しいが，杯部内底に一部ミガキがみられ，脚部内面にはナデ調整が認められる。

SK16

調査区中央部に位置し，SD1に切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸2.24 m，短軸0.90 m，深さ23.0 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK17

調査区中央部の北端に位置し，SK3・18に切られる。遺構範囲は北側が調査区外へ続くため平面形は不明で，検出部分での長軸0.94 m，短軸0.54 m，深さ14.6 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。

出土遺物は土師器1点が出土し，SK3とSK18から出土したものと接合した(図3－86　216)。

SK18

調査区中央部の北端に位置し，SK17を切る。遺構範囲は北側が調査区外へ続くが，検出部分での平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.94 m，短軸1.06 m，深さ16.1 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

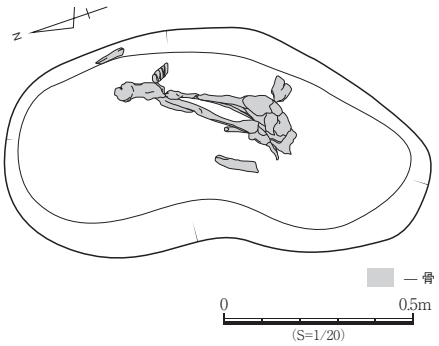


図3－91　SK20出土状況図

出土遺物は土師器1点が出土し，SK3とSK17から出土したものと接合した(図3－86　216)。

SK19

調査区中央部に位置し，ピットに切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸2.46 m，短軸0.59 m，深さ8.7 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SK20(図3－91)

調査区中央部に位置し，SD2を切る。平面形は不整楕円形を呈し，長軸1.13 m，短軸0.59 m，深さ18.8 cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。遺構中央部から人骨が出土したことか

ら埋納遺構と考えられる。

出土遺物は図示できるものはなかった。

⑤ 土器棺墓

SG1（図3－92）

調査区北東側に位置する。掘方の平面形は楕円形を呈し，長軸0.61 m，短軸0.45 m，深さ15.0㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器1点（230）が図示できた。

出土遺物（図3－94）

230は弥生土器の甕である。口縁端部は面をなし，内面にハケ，底部には指頭圧痕がみられ，接合痕が顕著である。外面口縁部にはナデ，胴部のハケは一部口縁部にまで達する。平底を呈し，一部圧痕がみられる。煤が付着する。

SG2（図3－93）

調査区北東側に位置する。掘方の平面形は不整楕円形を呈し，長軸0.49 m，短軸0.44 m，深さ14.0㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器3点（231～233）が重なりあった状態で出土し，図示できた。

出土遺物（図3－94）

231～233は弥生土器である。231は壺である。内面はハケのちナデ，外面口縁部にはタテハケと一部にミガキ，胴上から中央部はハケのち粗いミガキ，胴下部にはハケ調整が認められる。232は甕である。内面はタテ方向のハケ，外面胴中央部にはヨコ方向のハ

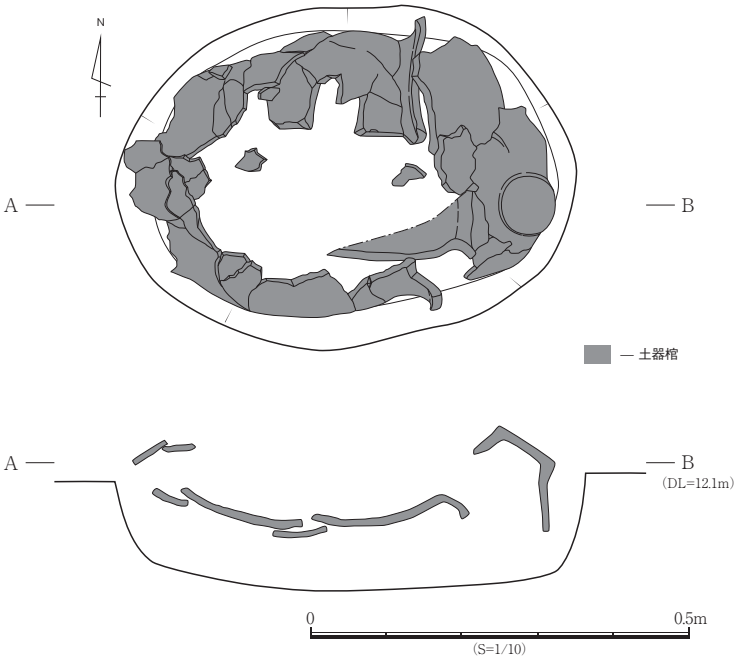


図3－92　SG1出土状況図

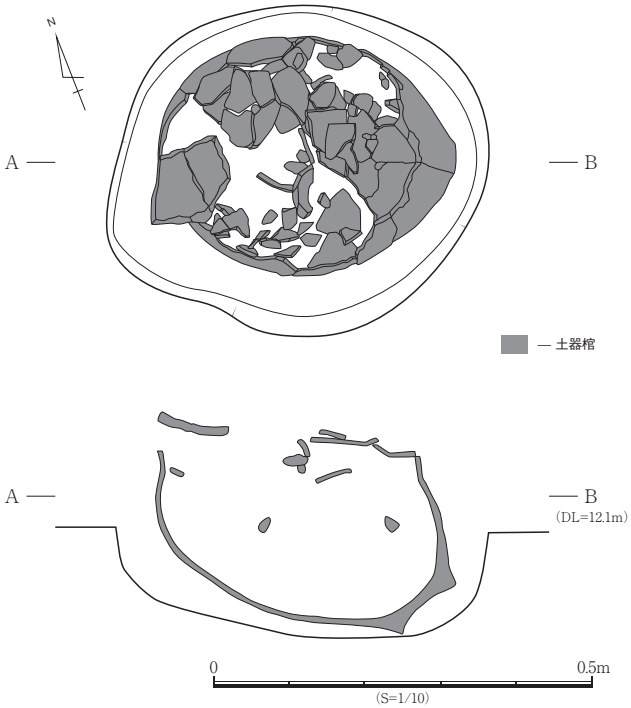


図3－93　SG2出土状況図

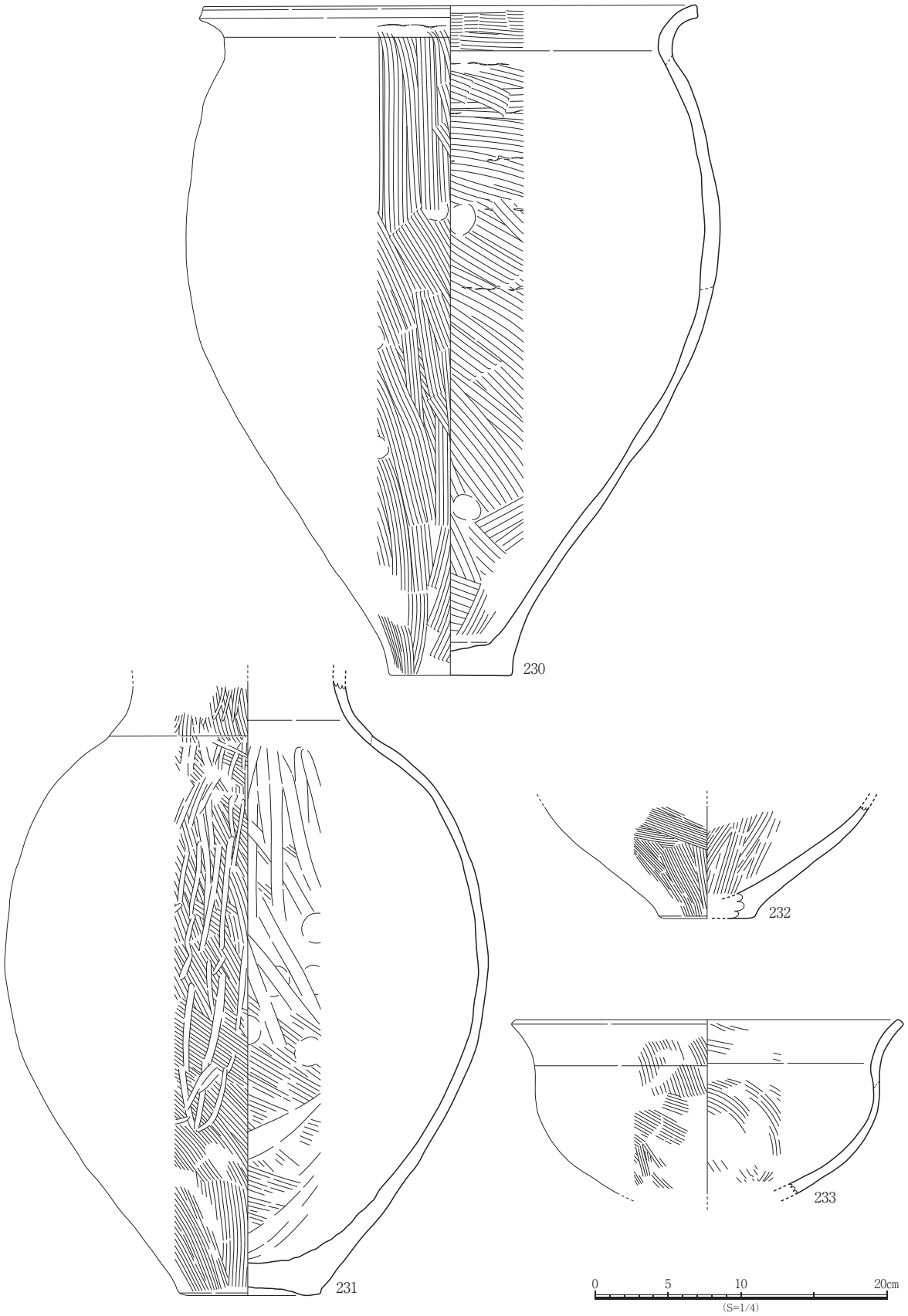


図3－94　SG1・2出土遺物実測図

ケ，下半部にタテ方向のハケ調整が認められる。233 は鉢である。器面は摩耗しているが，内面口縁部にハケのちナデ，体部にはハケがみられ，外面はハケ調整が認められる。

⑥ 溝跡

SD1（図3－95）

調査区中央部に位置し，SK16 を切る。東西方向へ延び，確認延長は10.7 m，幅0.23～0.90 m，深さ4.1～13.8㎝を測る。埋土は黒褐色（7.5YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

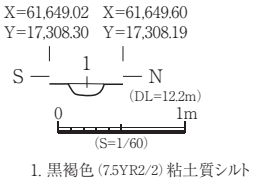


図3－95 SD1

SD2（図3－96）

調査区中央部に位置し，ST6 を切り，SK20 と SX8 に切られる。東西方向へ延び，確認延長は33.50 m，幅0.31～0.91 m，深さ3.6～23.5㎝を測る。埋土は1層が黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト，2層が褐色（10YR4/4）シルトを含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

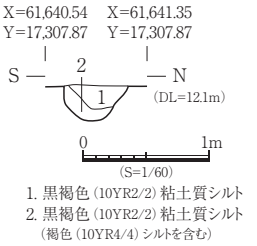


図3－96 SD2

SD3

調査区中央部に位置し，ST2に切られる。東西方向へと延び，確認延長は2.64m，幅0.18～0.24m，深さ4.6～13.5㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

⑦ ピット

P1

調査区北西隅に位置する。平面形は円形を呈し，径 0.4 m，深さ 18.5 ㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点（234）が図示できた。

出土遺物（図3－97）

234 は土師質土器の小皿である。器面の摩耗が著しいが，内外面に回転ナデがみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。

P2

調査区北西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸0.4 m，短軸0.3 m，深さ38.5㎝を測る。埋土は黒色（10YR1.7/1）粘土質シルトである。出土遺物は瓦器1点（235）が図示できた。

出土遺物（図3－97）

235 は瓦器の椀である。内面はナデのちミガキ，外面には指頭圧痕が認められ，ナデのちミガキが施される。

P3

調査区中央部の西端に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸0.4m，短軸0.3m，深さ33.0㎝を測る。埋土は黒色（10YR1.7/1）粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点（236）が図示できた。

出土遺物（図3－97）

236は土師器の椀である。貼付高台を有し，内面口縁部から体部はヨコナデ，底部にはミガキが施される。外面体上半から中央部は回転ナデ，下半部に回転ヘラケズリ，底部には回転ヘラ切りが認められる。

P4

調査区北隅に位置し，SB9P9を切る。平面形は隅丸方形を呈し，長軸・短軸0.3ｍ，深さ26.7㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は石製品１点(237)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

237は叩石である。側面に使用痕が認められ，全長12.4㎝，全幅10.9㎝，全厚2.8㎝，重量584.5gを測る。砂岩製。

P5

調査区中央部の西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸0.8ｍ，短軸0.5ｍ，深さ62.2㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は土師器１点(238)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

238は土師器の杯である。器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ，底部内面は指頭圧痕とナデ，外面にはヘラ切りのちナデ調整が認められる。

P6

調査区中央部の西側に位置し，撹乱に切られる。平面形は不整形を呈し，残存部分で長軸0.4ｍ，短軸0.2ｍ，深さ34.6㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は土師器１点(239)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

239は土師器の杯である。器面は摩耗しているが，内面にナデ，外面にはヨコナデ調整が認められる。

P7

調査区北側に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸0.6ｍ，短軸0.5ｍ，深さ16.7㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は金属製品１点(240)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

240は円盤形の紡錘車とみられる鉄製品で，全長4.9㎝，全幅4.9㎝，全厚1.9㎝，重量15.8gを測る。

P8

調査区北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し，長軸0.5ｍ，短軸0.4ｍ，深さ18.0㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は土師器５点(241～245)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

241～245は土師器の杯である。241・242はロクロ成形。内外面に回転ナデ，外面底部はヘラ切りのちナデ調整が施される。243は器面が摩耗しているが，外面にヨコナデ，底部は回転ヘラ切りが認められる。244は器面の摩耗が激しいが，内外面に回転ナデ調整が認められる。245は器面が摩耗しているが，内面体部にヨコナデ，外面底部はヘラ切り痕をナデ消す。

P9

調査区北側に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸0.5ｍ，短軸0.4ｍ，深さ29.8㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器２点(246・247)，黒色土器１点(248)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

246・247は土師器である。246は椀で，貼付高台を有する。器面は摩耗しているが，外面にナデ調整が認められる。 247は皿で，内外面にナデ，底部内面に指頭圧痕とナデ調整，外面にはヘラ切りのち

ナデ調整が認められる。248 は黒色土器の椀である。内面に黒色処理をし，内面はミガキ，外面にはナデ調整が認められる。

P10

調査区中央部の北側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸0.4ｍ，短軸0.2ｍ，深さ20.0㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は須恵器１点(249)が図示できた。

出土遺物(図３－97)

249は須恵器の杯である。内外面に回転ヨコナデが認められる。

P11

調査区中央部の北西寄りに位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸 0.3 ｍ，短軸 0.2 ｍ，深さ

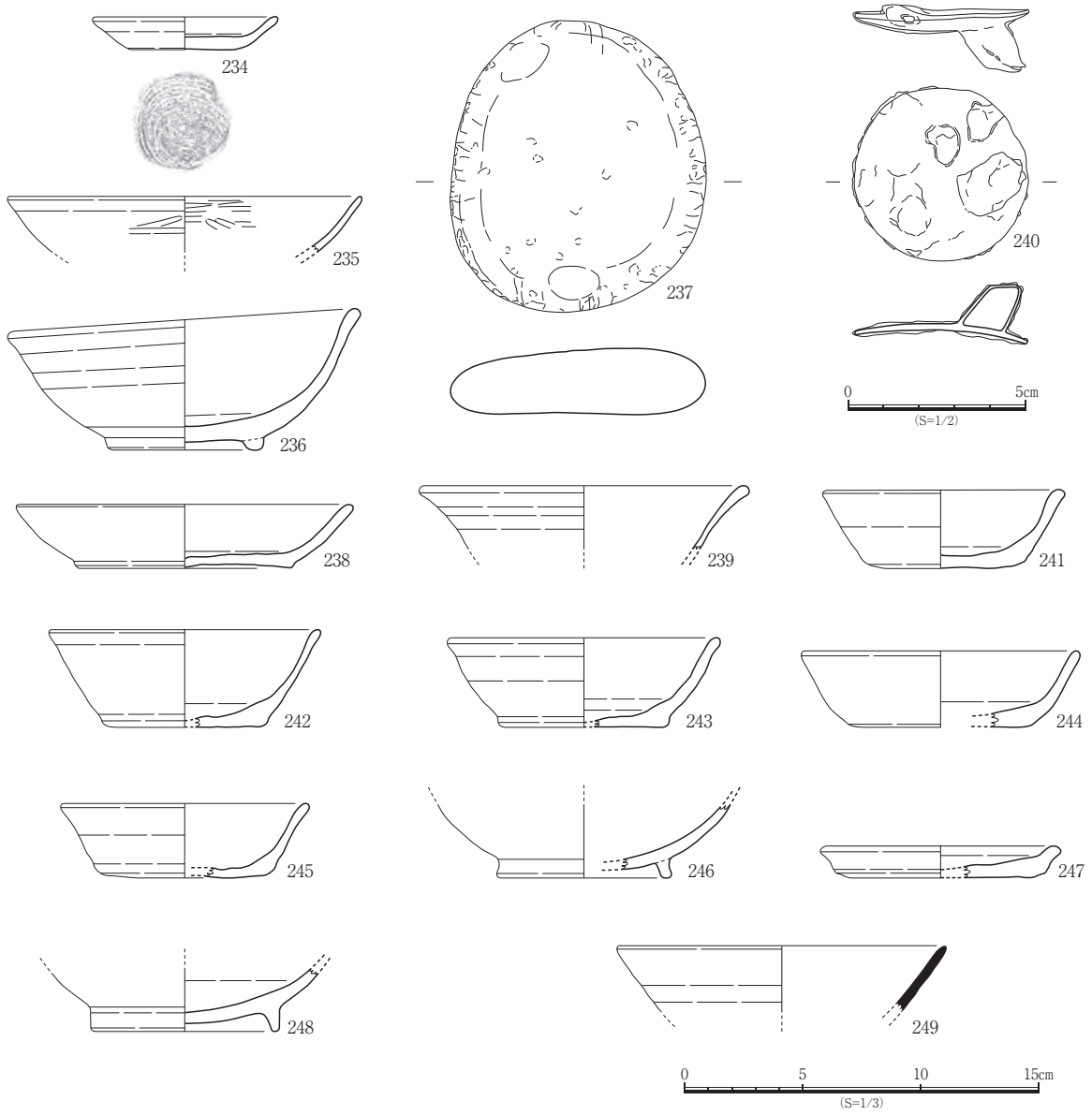


図３－97　P1～10出土遺物実測図

21.7㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は石製品1点(250)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

250は石包丁である。両面に自然面が残り，両側に抉りと使用痕がみられ，一部ミガキが施される。全長9.1㎝，全幅4.5㎝，全厚0.8㎝，重量41.5gを測る。結晶片岩製。

P12

調査区中央部の西寄りに位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は楕円形

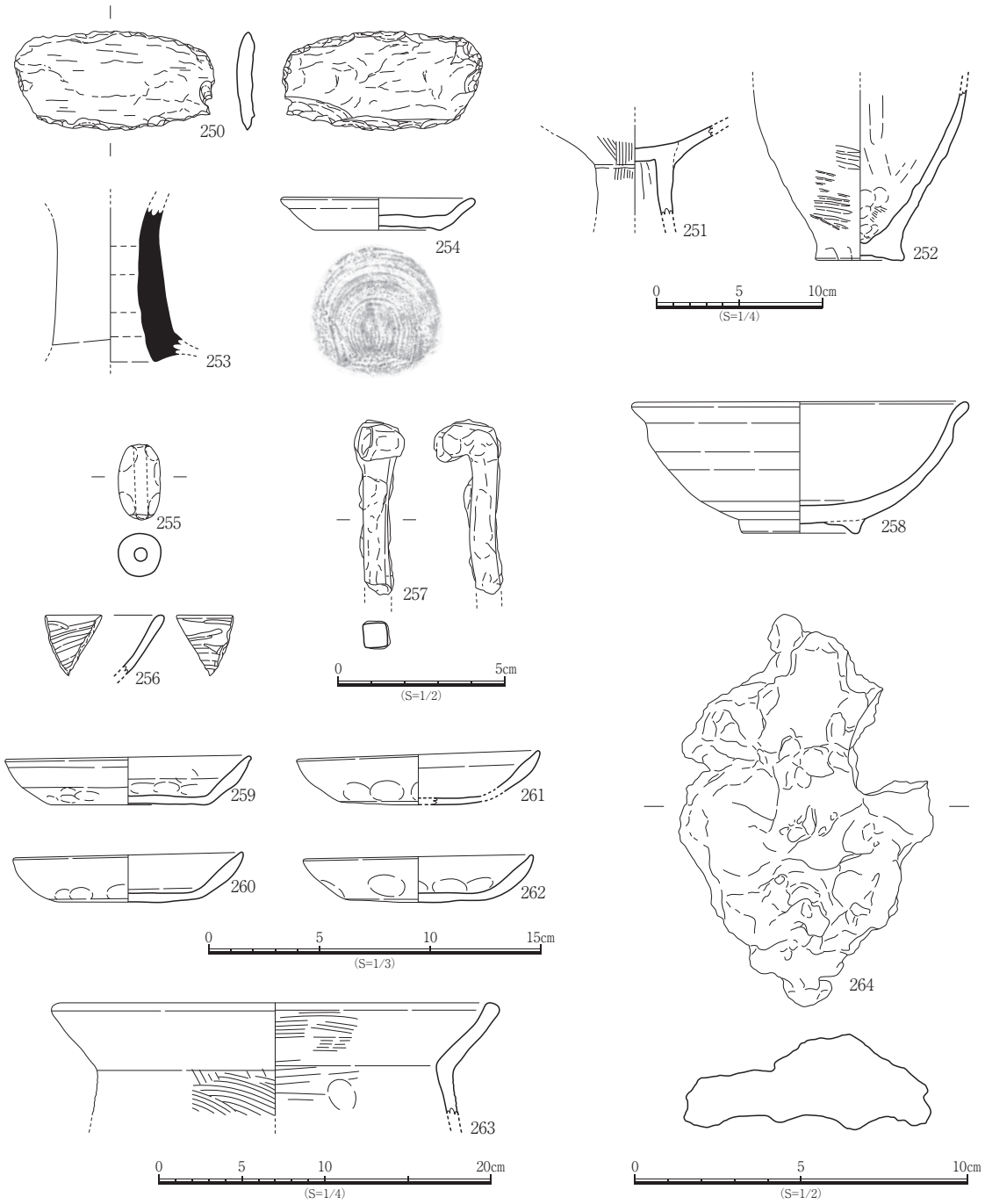


図3－98　P11～20出土遺物実測図

を呈し，長軸0.5 m，短軸0.4 m，深さ32.3㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器1点(251)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

251は弥生土器の高杯である。内面にミガキが施され，外面は器面が摩耗しているが，ハケがわずかに認められる。

P13

調査区中央部の西寄りに位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸0.3 m，短軸0.2 m，深さ20.3㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器1点(252)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

252は弥生土器の甕である。内面にナデ，底部には指頭圧痕がみられ，外面は器面が摩耗しているが，タタキ目が認められ，底部をわずかに摘み出す。

P14

調査区中央部の西寄りに位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は不整形を呈し，長軸0.7 m，短軸0.6 m，深さ35.6㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は須恵器1点(253)，土師質土器1点(254)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

253は須恵器の長頸壺である。内外面に回転ナデ調整が認められる。254は土師質土器の小皿である。内外面に丁寧な回転ナデ，外面底部は回転糸切りが認められる。

P15

調査区中央部の西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸0.4 m，短軸0.3 m，深さ29.0㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土製品1点(255)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

255は土製品の土錘である。摩耗しているため調整不明である。全長3.4㎝，全幅1.9㎝，全厚1.9㎝，重量11.0g，孔径0.6㎝を測る。

P16

調査区中央部の西寄りに位置し，SB22P14を切る。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.2 m，短軸0.8 m，深さ24.6㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は黒色土器1点(256)，金属製品1点(257)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

256は黒色土器の椀である。内外面に黒色処理をし，内面にミガキ，口縁端部にはナデ，外面はミガキと一部ナデが残る。257は鉄釘である。残存長5.2㎝，全幅1.5㎝，全厚2.0㎝，重量18.5gを測る。

P17

調査区中央部の西寄りに位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸・短軸0.4 m，深さ51.5㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点(258)が図示できた。

出土遺物(図3－98)

258は土師質土器の椀である。器面は摩耗しているが，内面にナデ，外面には体上半から中半部に回転ナデ，下半部にはヘラケズリが認められ，底部は回転糸切りのち高台を貼付する。

P18（図3－99）

調査区南西部に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸0.9ｍ，短軸0.7ｍ，深さ29.3㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師器4点（259～262）が図示できた。

出土遺物（図3－98）

259～262は土師器の皿で，すべて手づくね成形である。259の口縁部はヨコナデ，内外面体部から底部にはナデと指頭圧痕がみられ，外面底部に板状の圧痕が認められる。260の口縁部はヨコナデ，内面口縁部より下方は器面が摩耗しているが，内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。261の口縁部はヨコナデ，内面口縁部より下方は器面が摩耗しているが，内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。262の口縁部はヨコナデ，内外面にはナデと指頭圧痕が認められる。

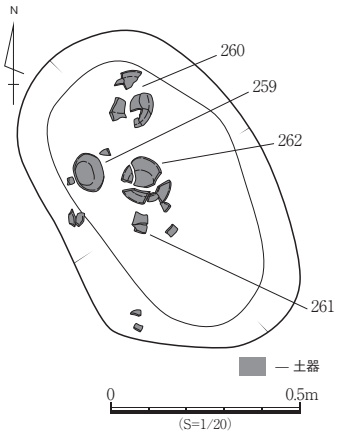


図3－99　P18出土状況図

P19

調査区中央部の南側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸0.7ｍ，短軸0.6ｍ，深さ32.0㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器1点（263）が図示できた。

出土遺物（図3－98）

263は弥生土器の甕である。口縁端部は面をなし，内面口縁部にハケのちヨコナデ，胴部にはハケのちナデ，外面口縁部はヨコナデ，胴部にハケ調整が認められる。

P20

調査区中央部の南側に位置し，SB11P5に切られる。平面形は不整隅丸方形を呈し，残存部分で長軸0.7ｍ，短軸0.4ｍ，深さ1.5㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は鉄塊1点（264）が図示できた。

出土遺物（図3－98）

264は鉄塊である。全長11.9㎝，全幅7.7㎝，全厚2.9㎝，重量242.5gを測る。

P21

調査区中央部に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸0.9ｍ，短軸0.6ｍ，深さ25.4㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトを含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は須恵器1点（265）が図示できた。

出土遺物（図3－100）

265は須恵器の蓋である。径2.5㎝，高さ1.2㎝の擬宝珠形のつまみを有し，先端部は潰れる。天井部外面はヘラケズリのちナデ，口縁部は回転ナデ，端部は垂直に落ちて面をなす。内面はナデ，口縁部は回転ナデ，端部は凹状をなす。

P22

調査区中央部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.0ｍ，短軸0.8ｍ，深さ37.2㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点（266），土師質土器1点（267）が図示できた。

出土遺物(図3－100)

266は土師器の皿である。手づくね成形で，口縁部は内外面ともにヨコナデ，体部内面はナデと指頭圧痕，外面には指頭圧痕が認められる。267は土師質土器の杯である。内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りと板状圧痕が認められる。

P23

調査区中央部の南寄りに位置し，他のピットを切る。平面形は不整隅丸長方形形を呈し，長軸0.7 m，短軸0.6 m，深さ27.2㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点(268)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

268は土師器の皿である。内面に丁寧なナデと一部ミガキが施され，外面には丁寧なナデ，底部は切り離し痕をナデ消す。

P24

調査区中央部の南側に位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は不整形を呈し，長軸0.5 m，短軸0.4 m，深さ28.7㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点(269)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

269は土師器の台付皿である。内外面はナデのちミガキが施され，口縁部は段をもつ。貼付高台を有し，外面底部にはヘラ切りのちナデ調整が認められ，一部煤が付着する。

P25

調査区中央部の南側に位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.7 m，短軸0.6 m，深さ18.5㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器1点(270)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

270は弥生土器の鉢である。口縁部内外面に指頭圧痕，体部内面はナデ，外面にはタタキ目とナデ調整がみられ，丸底の底部にもタタキ目が認められる。

P26

調査区中央部の南寄りに位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は円形を呈し，長軸・短軸0.2 m，深さ9.5㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は石製品1点(271)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

271は磨石である。両端に使用痕が認められる。全長13.9㎝，全幅4.8㎝，全厚2.9㎝，重量317.0gを測る。片岩製。

P27

調査区中央部の南側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸0.6 m，短軸0.4 m，深さ33.1㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点(272)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

272は土師器の皿である。内外面にミガキが施され，外面底部はヘラ切りが認められる。

P28

調査区中央部の南側に位置し，他のピットに切られる。平面形は不整円形を呈し，長軸0.6 m，短軸0.5 m，深さ36.3 cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器2点(273・274)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

273・274は土師器の皿である。273は内外面と底部外面にミガキが施され，底部にはヘラ切りが認められる。274は内外面にミガキが施され，高台部分は欠損，外面底部にはナデ調整が認められる。

P29

調査区中央部の南端に位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は不整隅丸

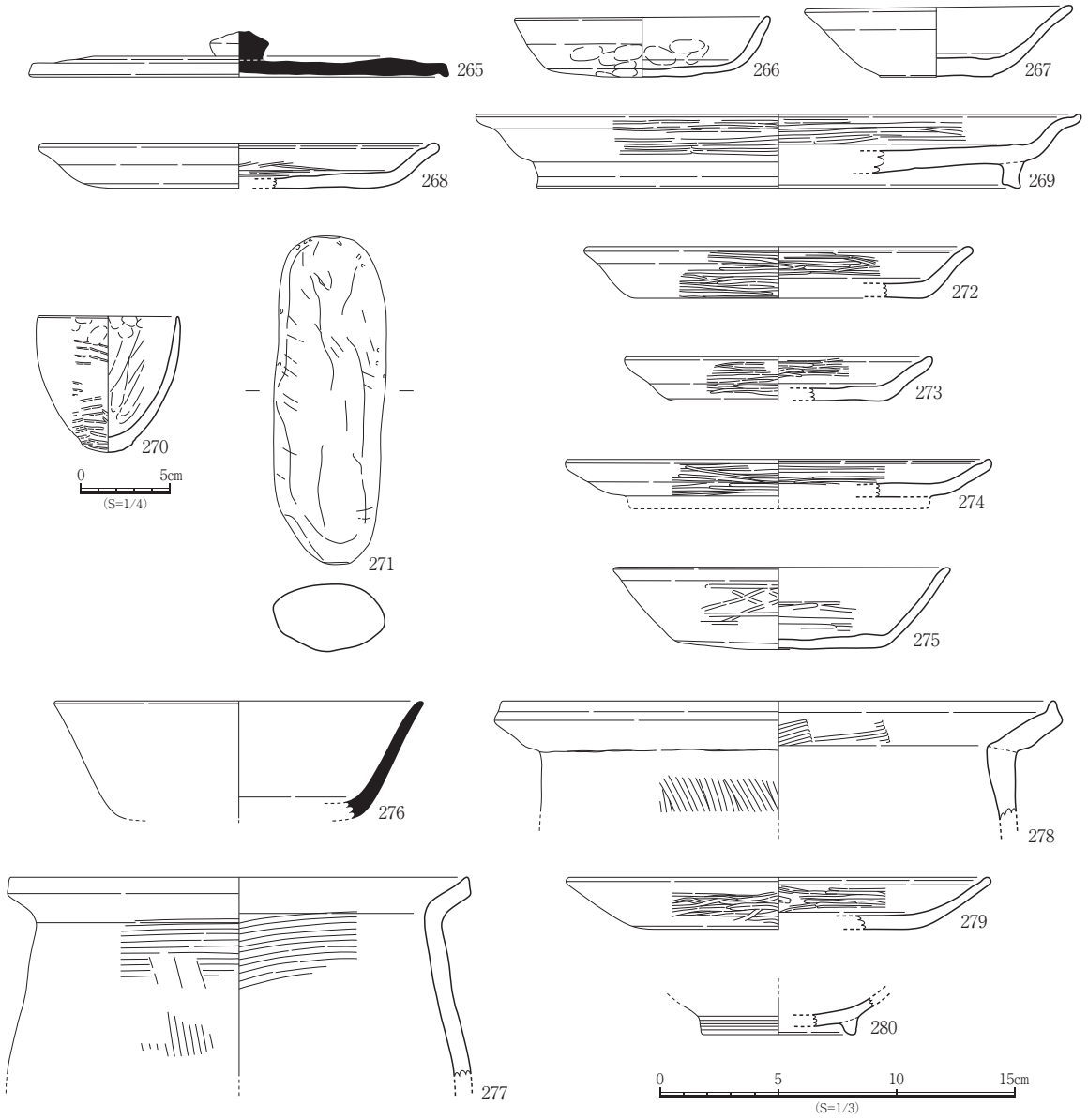


図3－100　P21～30出土遺物実測図

長方形を呈し，長軸0.6 m，短軸0.4 m，深さ29.4 cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(地山)塊を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点(275)，須恵器1点(276)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

275は土師器の杯である。内外面に回転ナデと一部ミガキが施され，外面底部には回転ヘラ切りが認められる。276は須恵器の杯である。内外面に回転ナデ調整が認められ，高台を有していたと考えられる。

P30

調査区南側に位置する。他のピットとの切り合い関係は不明である。平面形は不整楕円形を呈し，長軸0.6 m，短軸0.4 m，深さ26.8 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器3点(277～279)，緑釉陶器1点(280)が図示できた。

出土遺物(図3－100)

277～279は土師器である。277・278は甕で，277の口縁端部は面をなし，器面は摩耗しているが，内面上半部にハケ，下半部にはナデがみられ，外面口縁部はナデ，胴部にハケ調整が認められ，煤が付着する。278の器面は摩耗しているが，内面口縁部にハケ，

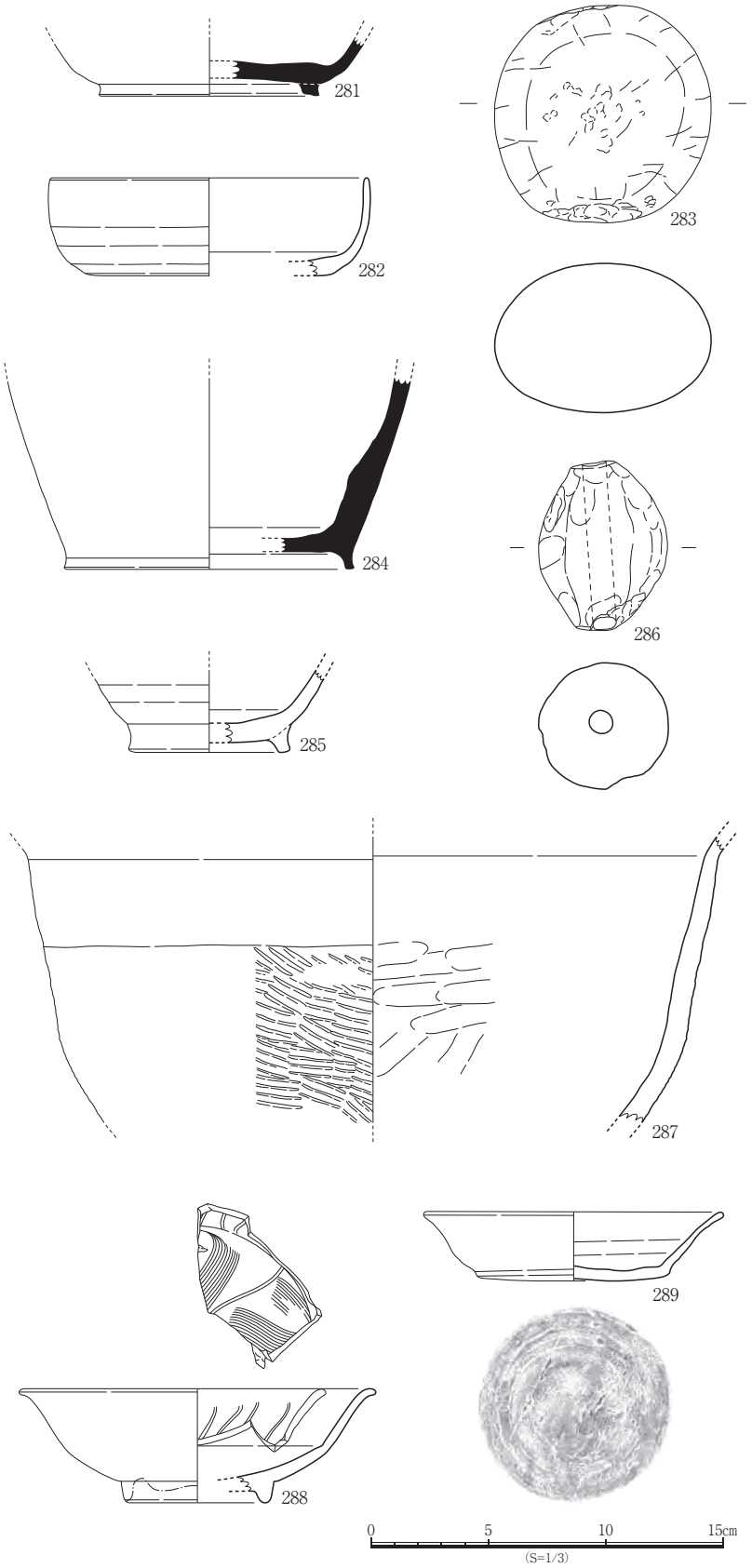


図3－101　P32～40出土遺物実測図

胴部にはナデ，外面胴部はタテハケ調整が認められる。279 は皿で，内外面に回転ナデ調整と粗いミガキが施される。280 は緑釉陶器の椀である。輪高台を有し，内外面に施釉する。高台の畳付から見込みは無施釉である。

P31

調査区南側に位置し，SB7P3を切る。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸・短軸0.8 m，深さ9.4 cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。遺物は石製品 1 点(172)が出土したが，SB7P3出土の可能性がある。

P32

調査区南側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸0.5 m，短軸0.3 m，深さ39.3cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は須恵器1点(281)が図示できた。

出土遺物(図3－101)

281 は須恵器の杯である。高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。

P33

調査区南側に位置する。他のピットに切られ，平面形は不明である。残存部分で長軸0.7 m，短軸0.5 m，深さ 44.7 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は瓦質土器1点(282)が出土し，図示できた。

出土遺物(図3－101)

282 は瓦質土器の杯である。器面の摩耗が著しいが，ナデ調整が認められる。

P34

調査区南端に位置し，SB12P7 に切られる。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため平面形は不明である。検出部分で長軸0.8 m，短軸0.2 m，深さ16.6 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は石製品1点(283)が図示できた。

出土遺物(図3－101)

283 は叩石である。側面に使用痕が認められ，全長9.3 cm，全幅9.2 cm，全厚6.4 cm，重量781.5gを測る。砂岩製。

P35

調査区南端に位置し，SB12P6を切る。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため平面形は不明である。検出部分で長軸 0.7 m，短軸 0.6 m，深さ 28.8 cmを測る。埋土は土器片が多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトである。出土遺物は須恵器1点(284)，土師質土器1点(285)，土製品1点(286)が図示できた。

出土遺物(図3－101)

284 は須恵器の壺の底部である。内外面に回転ナデ調整が認められる。285 は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。286 は土製品の土錘である。ナデ調整と指頭圧痕がみられ，両端部は面取りが施される。全長7.2 cm，全幅5.5 cm，全厚5.4 cm，重量173.5g，孔径1.0 cmを測る。

P36

調査区南側に位置する。他のピットに切られ，SB12P4 との切り合い関係は不明である。平面形は不明で，残存部分で長軸・短軸1.0 m，深さ18.5 cmを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。遺物は瓦器1点(181)が出土したが，SB12P4出土の可能性がある。

P37

調査区南端に位置する。他のピットに切られ，SB12P4 との切り合い関係は不明である。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため，平面形は不明である。検出部分で長軸 1.3 m，短軸 0.9 m，深さ 31.3 ㎝を測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(地山)塊を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。遺物は土師質土器1点(182)，土製品1点(184)が出土したが，SB12P4 出土の可能性がある。

P38

調査区南端に位置し，SB18P6 に切られる。平面形は不明で，残存部分で径 0.5 m，深さ 10.2 ㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器 1 点(287)が図示できた。

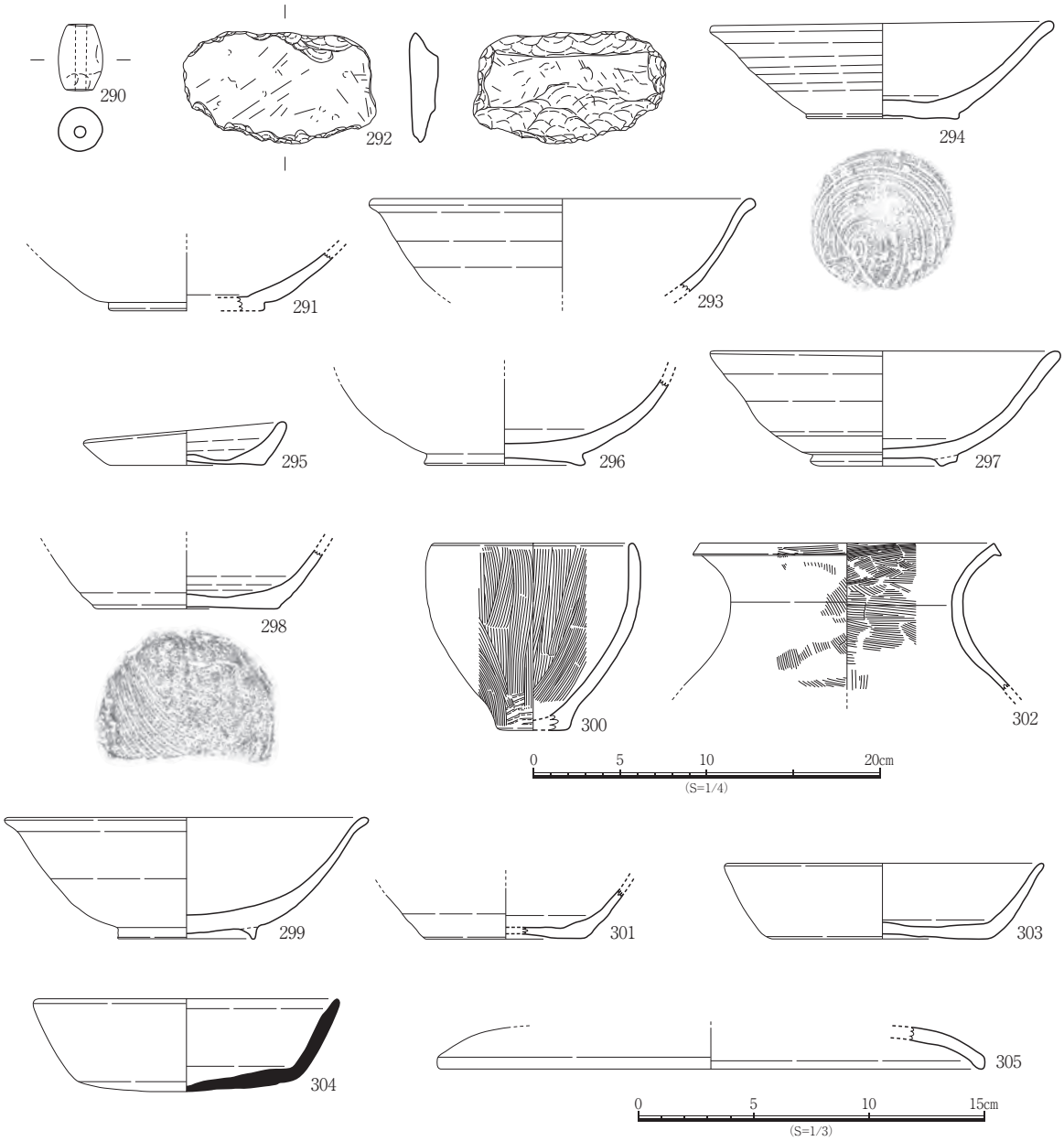


図3－102　P41～53出土遺物実測図

出土遺物（図3－101）

287は土師質土器の鍋である。内面にナデ，外面上部にはヨコナデ，下部はタタキ目が認められ，煤が付着する。

P39

調査区南端に位置し，他のピットを切る。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため，平面形は不明である。検出部分で長軸0.4ｍ，短軸0.1ｍ，深さ12.0㎝以上を測る。埋土は土器片が多く混じる黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は白磁1点（288）が図示できた。

出土遺物（図3－101）

288は白磁の碗である。口縁部は端反し，内面に施文がみられ，外面は無文，高台から見込みは無施釉である。

P40

調査区南側に位置し，他のピットに切られる。平面形は不整円形を呈し，径0.4ｍ，深さ17.9㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師器1点（289）が図示できた。

出土遺物（図3－101）

289は土師器の杯である。内外面に回転ナデ，外面底部はヘラ切りが認められる。

P41

調査区南側に位置し，SB8P8を切る。平面形は不整円形を呈し，長軸1.1ｍ，短軸1.0ｍ，深さ18.4㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土製品1点（290）が図示できた。

出土遺物（図3－102）

290は土製品の土錘である。完存する。ナデ調整と指頭圧痕が認められ，両端部は面取りが施される。全長2.9㎝，全幅1.9㎝，全厚1.9㎝，重量10.4g，孔径0.5㎝を測る。

P42

調査区南側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.0ｍ，短軸0.8ｍ，深さ13.6㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点（291），石製品1点（292）が図示できた。

出土遺物（図3－102）

291は土師質土器の椀である。円盤状高台を有し，器面は摩耗が著しいが，内外面にナデ調整が認められる。292は石包丁である。片側に抉りが入れられ，自然面が残る。全長8.4㎝，全幅4.9㎝，全厚1.2㎝，重量73.0gを測る。凝灰岩製。

P43

調査区南側に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸0.9ｍ，短軸0.8ｍ，深さ26.0㎝を測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点（293）が図示できた。

出土遺物（図3－102）

293は土師質土器の椀である。二次被熱し，器面は摩耗により調整不明である。

P44

調査区南側に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸0.8ｍ，短軸0.7ｍ，深さ13.6㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色（10YR2/2）粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器2点（294・295）が図示できた。

出土遺物(図3－102)

294・295は土師質土器である。294は杯で，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。295は小皿である。器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。

P45

調査区南東側に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸0.6 m，短軸0.5 m，深さ8.2㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点(296)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

296は土師質土器の椀である。内面に回転ナデ調整がみられ，外面は器面が摩耗しているが，ナデ調整がみられる。底部は回転糸切りが認められる。

P46

調査区南東側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸1.3 m，短軸0.7 m，深さ13.6㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点(297)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

297は土師質土器の椀である。貼付高台を有し，器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ，外面底部には板状圧痕が認められる。

P47

調査区南東端に位置し，他のピットを切る。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため，平面形は不明である。検出部分で長軸0.7 m，短軸0.3 m，深さ4.9㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器2点(298・299)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

298・299は土師質土器である。298は杯で，器面の摩耗が著しいが，内面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。299は椀である。貼付高台を有し，器面の摩耗が著しいが，内外面に回転ナデ調整が認められる。

P48

調査区南東側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.2 m，深さ13.3㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器1点(300)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

300は弥生土器の鉢である。内外面にハケ調整が認められ，外面に一部タタキ目が残る。

P49

調査区南東隅に位置する。遺構範囲は南側が調査区外へ続くため，平面形は不明である。検出部分で長軸1.0 m，短軸0.7 m，深さ50.2㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器1点(301)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

301は土師質土器の杯である。内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部は切り離し痕をナデ消す。

P50

調査区中央部の北東寄りに位置する。平面形は不整楕円形を呈し，長軸1.1 m，短軸0.9 m，深さ

15.1 ㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器１点(302)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

302 は弥生土器の甕である。内面口縁部から端部はハケ，胴部にハケとナデ調整がみられ，外面は摩耗しているが，ハケ調整が認められる。

P51

調査区中央部の東側に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し，長軸 0.5 m，短軸 0.4 m，深さ 20.2 ㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器１点(303)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

303 は土師器の杯である。器面の摩耗が著しく調整は不明である。

P52

調査区中央部の東側に位置し，他のピットを切る。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸0.8 m，短軸0.6 m，深さ 30.3 ㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は須恵器１点(304)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

304 は須恵器の杯である。内外面に回転ナデ，外面底部には回転ヘラケズリが認められる。

P53

調査区中央部の東側に位置する。平面形は不整円形を呈し，径0.3 m，深さ 41.1 ㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物は土師器１点(305)が図示できた。

出土遺物(図3－102)

305 は土師器の蓋である。器面は摩耗が著しいが，ナデ調整と外面の一部にミガキが認められる。

⑧性格不明遺構

SX1

調査区西端に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸3.5 m，短軸2.0 m，深さ 57.0 ㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX2

調査区北西側に位置する。遺構範囲は西側が調査区外へ続く可能性がある。平面形は不整形を呈し，検出部分で一辺1.6 m，深さ 25.3 ㎝を測る。埋土は円礫が多く混じる黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX3

調査区北西側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸 1.8 m，短軸 0.9 m，深さ 47.5 ㎝を測る。埋土は火山灰２次堆積土主体の暗褐灰色から橙色土である。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX4

調査区中央部の西側に位置し，ピットに切られる。平面形は不整形を呈し，長軸1.2 m，短軸1.1 m，

深さ30.6㎝を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX5

調査区中央部の西側に位置する。遺構範囲は不明瞭で，炭化物や被熱した河原石などが集中して検出された範囲で長軸1.3ｍ，短軸0.9ｍ，深さ36.1㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。SX9・11と同じ火葬遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX6

調査区南端に位置する。平面形は不整形を呈し，長軸2.7ｍ，短軸2.3ｍ，深さ61.3㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器3点(306～308)が図示できた。

出土遺物(図3－103)

306～308は弥生土器である。306・307は甕で，遠賀川式の特徴がみられる。306は口縁端部に刻目，内外面にヨコナデ調整，外面には1条の沈線が認められる。307は口縁端部に刻目，内外面はハケのちナデ，口縁部と胴部の境に2条の沈線が認められ，煤が付着する。308は口縁端部に刻目。内面にナデ，粘土帯を貼付けたのち刻む。外面にはハケ調整が認められ，煤が付着する。

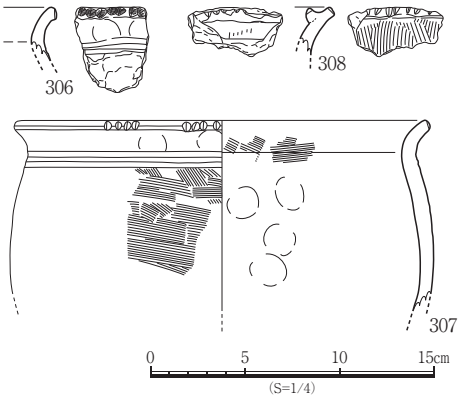


図3－103　SX6出土遺物実測図

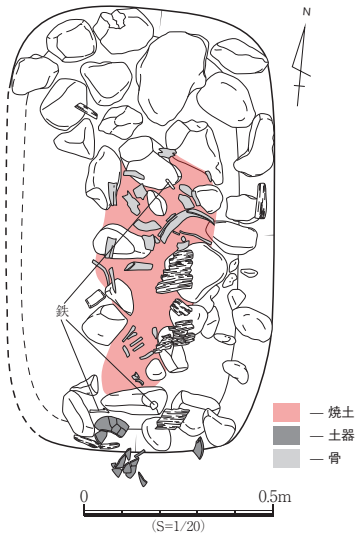


図3－104　SX9出土状況図

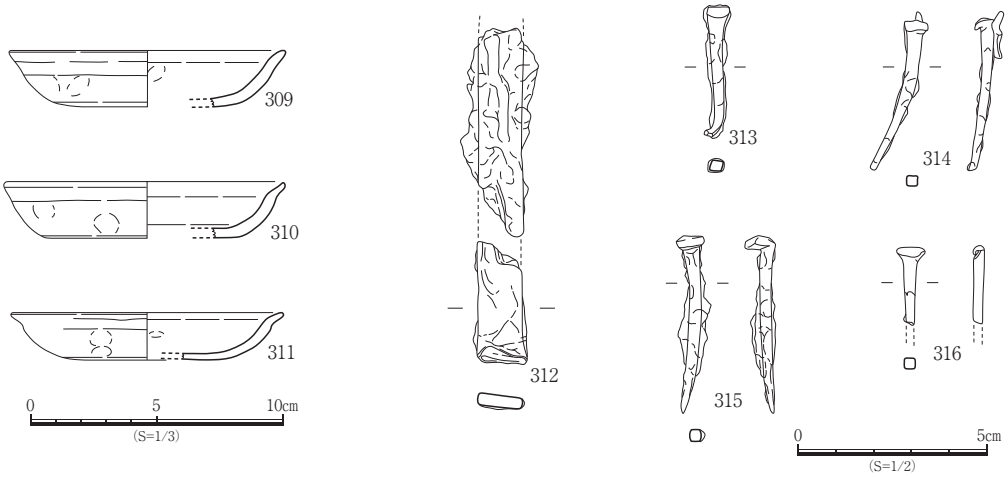


図3－105　SX9出土遺物実測図

SX7

調査区北東側に位置する。平面形は不整円形を呈し，長軸1.6 m，短軸1.5 m，深さ16.8㎝を測る。埋土は炭粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。検出面では集石がみられ，集石の下は地山が円形の溝状に掘り込まれているのを確認した。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX8

調査区東側に位置し，ST6とSD2を切る。平面形は不整円形を呈し，長軸1.9 m，短軸1.7 m，深さ20.2㎝を測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX9(図3－104)

調査区南側に位置する。遺構範囲は不明瞭だが，骨(人骨)や炭化物，被熱した河原石などが集中して検出された範囲では不整隅丸長方形を呈し，長軸1.2 m，短軸0.7 m，深さ12.2㎝を測る。埋土は焼土と炭化物を多く含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。SX5・11と同じ火葬遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は土師器3点(309～311)，金属製品5点(312～316)が図示できた。

出土遺物(図3－105)

309～311は土師器の皿で，すべて手づくね成形である。309は器面の摩耗が著しいが，指頭圧痕が認められる。310の器面は摩耗しているが，口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより凹状をなす。体部内面はナデ，外面は指頭圧痕が認められ，一部煤が付着する。311の口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより凹状をなす。体部内面はヨコナデ，外面には指頭圧痕がみられ，底部外面には板状圧痕が認められる。312は板状の鉄製品である。残存長9.1㎝，全幅1.2㎝，全

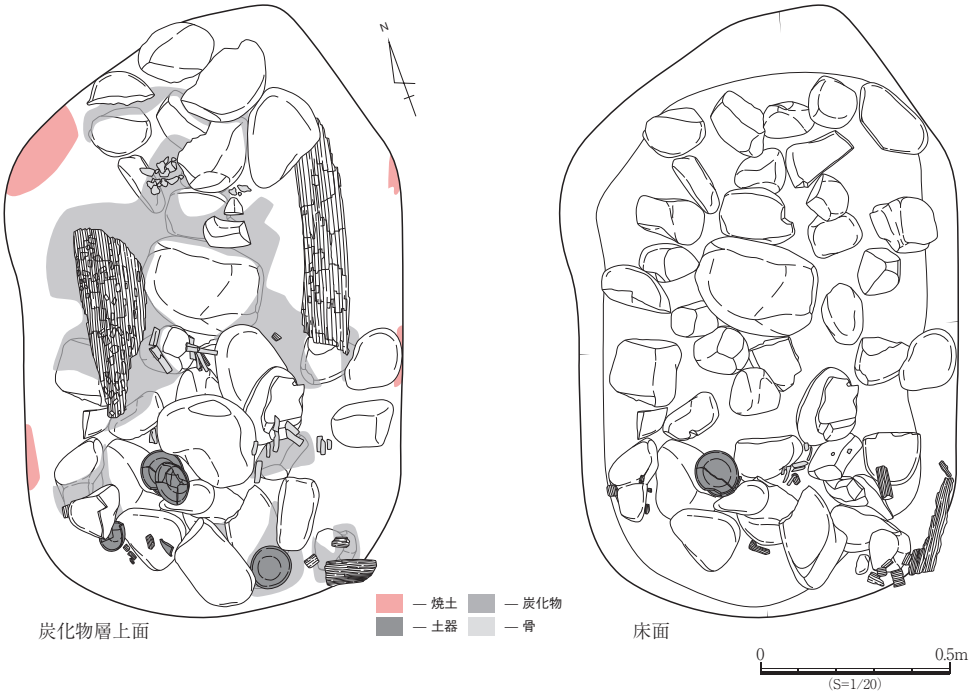


図3－106　SX11出土状況図

厚0.3㎝，重量12.6gを測る。313～315は鉄釘である。313は全長3.5㎝，全幅0.7㎝，全厚0.3㎝，重量1.3gを測る。314は全長4.0㎝，全幅0.7㎝，全厚0.3㎝，重量1.3gを測る。315は全長4.7㎝，全幅0.8㎝，全厚0.3㎝，重量1.4gを測る。316は銅製の釘の可能性がある。残存長2.1㎝，全幅0.8㎝，全厚0.3㎝，重量0.8gを測る。

SX10

調査区南側に位置し，SB12P5を切る。平面形は不整楕円形を呈し，長軸1.3ｍ，短軸1.1ｍ，深さ8.9㎝を測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は図示できるものはなかった。

SX11(図3－106)

調査区南端に位置する。遺構範囲は不明瞭だが，骨(人骨)や炭化物，被熱した河原石などが集中して検出された範囲では不整隅丸長方形を呈し，長軸1.6ｍ，短軸1.1ｍ，深さ18.5㎝を測る。埋土は焼土と炭化物を多く含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。SX5・9と同じ火葬遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は土師器6点(317～322)が図示できた。

出土遺物(図3－107)

317～322は土師器の皿で，すべて手づくね成形である。317の口縁部は内外面ともにヨコナデ，体部内面はヨコナデと一部指頭圧痕，外面には指頭圧痕がみられ，底部外面には板状の圧痕が認められる。318の口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより凹状をなす。体部内面はヨコナデと一部指頭圧痕，外面には指頭圧痕が認められる。319は骨が付着した状態で出土した。口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより凹状をなす。体部内面はナデと指頭圧痕，外面には指頭圧痕がみられ，底部外面に板状の圧痕が認められる。320の口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより浅く凹状をなす。体部内面にナデ，外面には指頭圧痕と一部に粘土紐接合痕がみられ

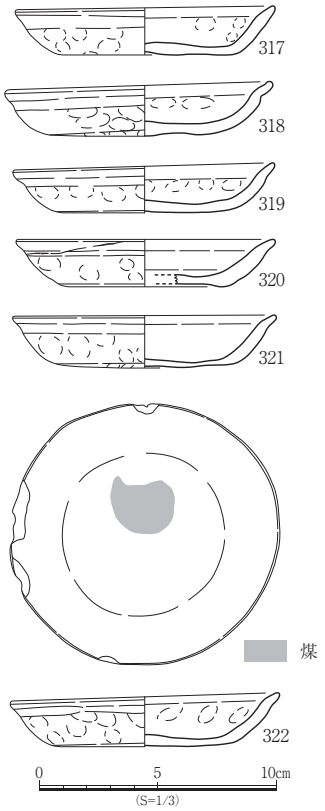


図3－107　SX11出土遺物実測図

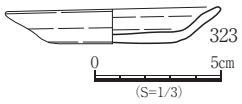


図3－108　SX12出土遺物実測図

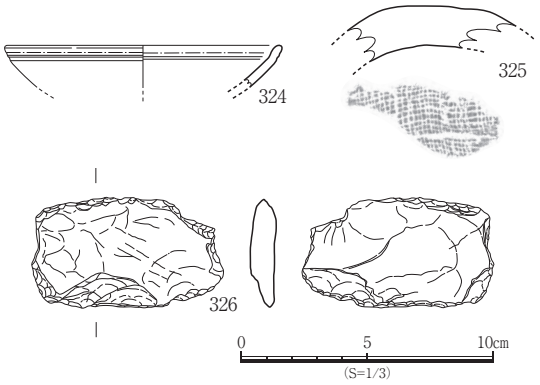


図3－109　第Ⅰ～Ⅱ層出土遺物実測図

る。底部外面には板状の圧痕が認められる。321 の口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより凹状をなす。体部内面にナデと指頭圧痕がみられ，底部外面には板状の圧痕が認められ，内外面に煤が付着する。322 の口縁部は内外面ともにヨコナデ，外面は強いナデにより浅く凹状をなす。体部内面はナデと指頭圧痕，外面には指頭圧痕が認められる。底部内面は一部煤が付着し，外面には板状の圧痕が認められる。

SX12

調査区南東側に位置し，SB8P2 を切る。平面形は不整隅丸長方形を呈し，長軸 1.9 m，短軸 1.3 m，深さ25.5㎝を測る。埋土は焼土粒を多く含み，炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。

出土遺物は土師質土器1点(323)が図示できた。

出土遺物(図3－108)

323 は土師質土器の小皿である。器面の摩耗が著しいが，内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りが認められる。

⑨ 遺物包含層

第Ⅰ～Ⅱ層出土遺物

緑釉陶器(図3－109)

324 は皿である。硬質で，内外面に施釉が認められる。口縁部内面には1条，外面に2条の凹線がみられ，釉が溜まる。

瓦(図3－109)

325 は内面に布目痕が認められ，残存長3.8㎝，残存幅7.5㎝，全厚1.7㎝を測る。

石製品(図3－109)

326 は石包丁である。両端に抉りが入れられ，両面に自然面が残る。全長7.6㎝，全幅4.4㎝，全厚1.0㎝，重量47.3g を測る。砂岩製。

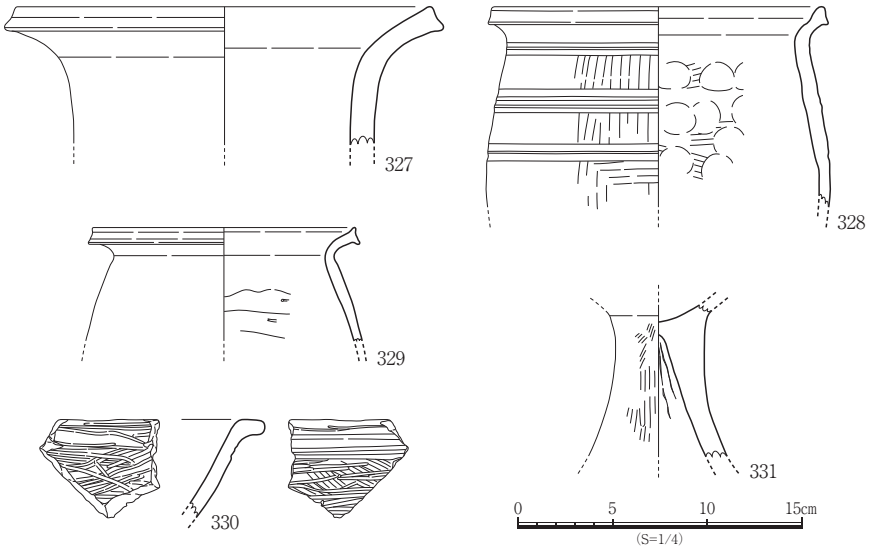


図3－110　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図1

第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図3－110)

327は壺である。内面はハケのちヨコナデ，口縁端部はナデにより凹状をなし，外面にはヨコナデ調整が認められる。328・329は甕である。328は内面口縁部にヨコナデ，口縁部直下は強いナデにより浅い凹状をなし，胴部にはハケのちナデと指頭圧痕がみられる。外面口縁部はヨコナデ調整が認められ，煤が付着する。胴部には2条・3条・2条の凹線文を巡らせ，その間には浅いタテの凹線文が施される。329は内面口縁部から肩部にヨコナデ，胴部にはケズリ，口縁端部は強いナデにより凹状を呈し，上下に拡張する。外面口縁部はヨコナデ，胴部には丁寧なタテハケが認められ，煤が付着する。330は鉢である。内面はハケのち粗いミガキ，口縁端部には一部ミガキがみられ，外面口縁部はヨコナデ，直下に2条の凹線文，体部にはハケのち粗いミガキが施される。331は高杯である。器面は摩耗しているが，内面に絞り目，外面にはハケのちミガキが施される。

土師器(図3－111)

332～334は杯である。332は内外面にナデのち粗いミガキが施され，外面底部にはヘラ切りが認められる。333は器面の摩耗が著しいが，内外面にナデのちミガキが認められ，外面底部はヘラ切り痕をナデ消す。334は貼付高台を有し，器面の摩耗が著しいが，ナデ調整がみられ，外面底部は切り

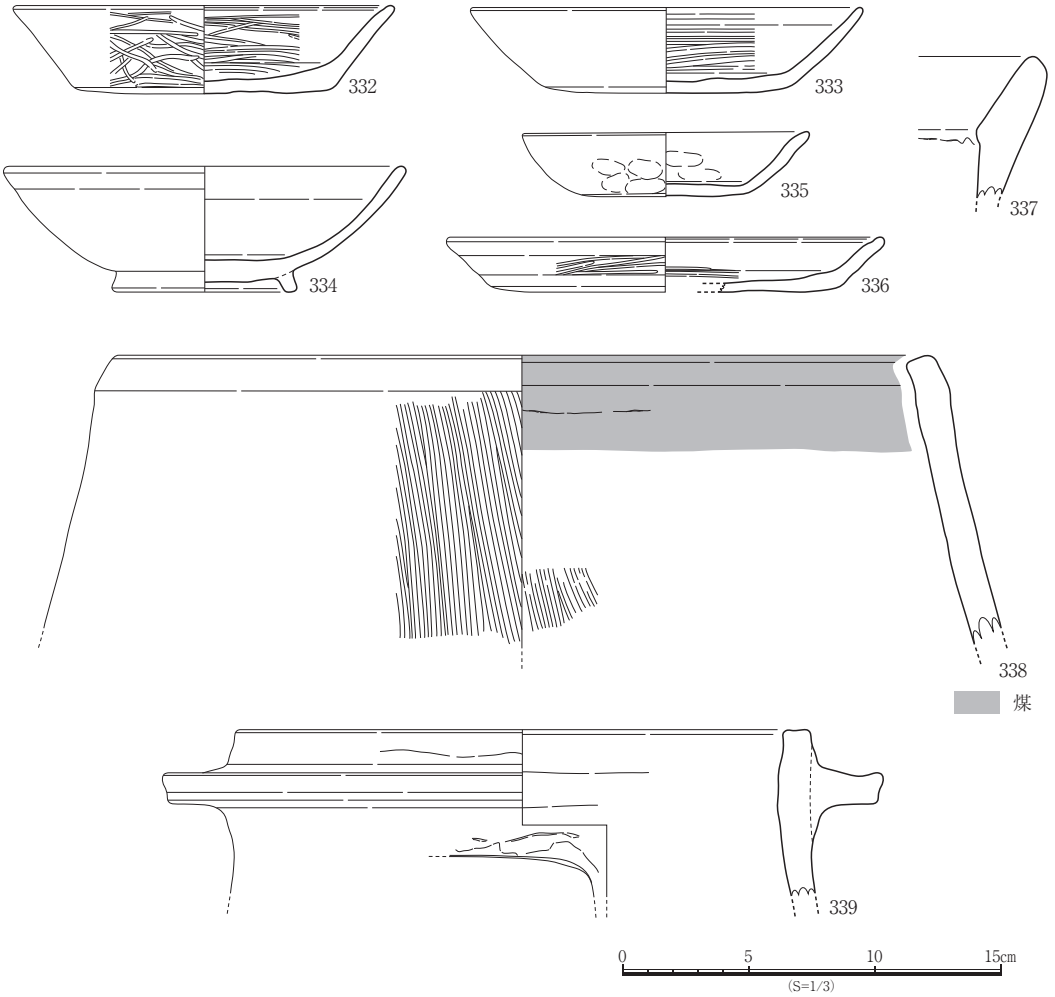


図3－111　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図2

離し痕をナデ消す。335・336は皿である。335は手づくね成形。内外面にナデ，外面底部には板状圧痕が認められる。336は器面の摩耗が著しいが，内面は一部ミガキが認められ，底部に赤色顔料が残存する。外面には一部ミガキが認められ，底部は切り離し痕をナデ消す。337は鍋である。被熱し，内外面にはナデ調整が認められる。338は甑である。内面は器面が摩耗しているが，一部ハケがみられ，口縁部には煤が付着する。外面口縁部はナデ，胴部にはタテハケが認められる。339はカマドと考えられる。器面が摩耗しているが，口縁部から鍔部にヨコナデ調整が認められる。摂津C型の羽釜と類似する。

須恵器（図3－112）

340～344は杯である。340は高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。341は高台を有し，

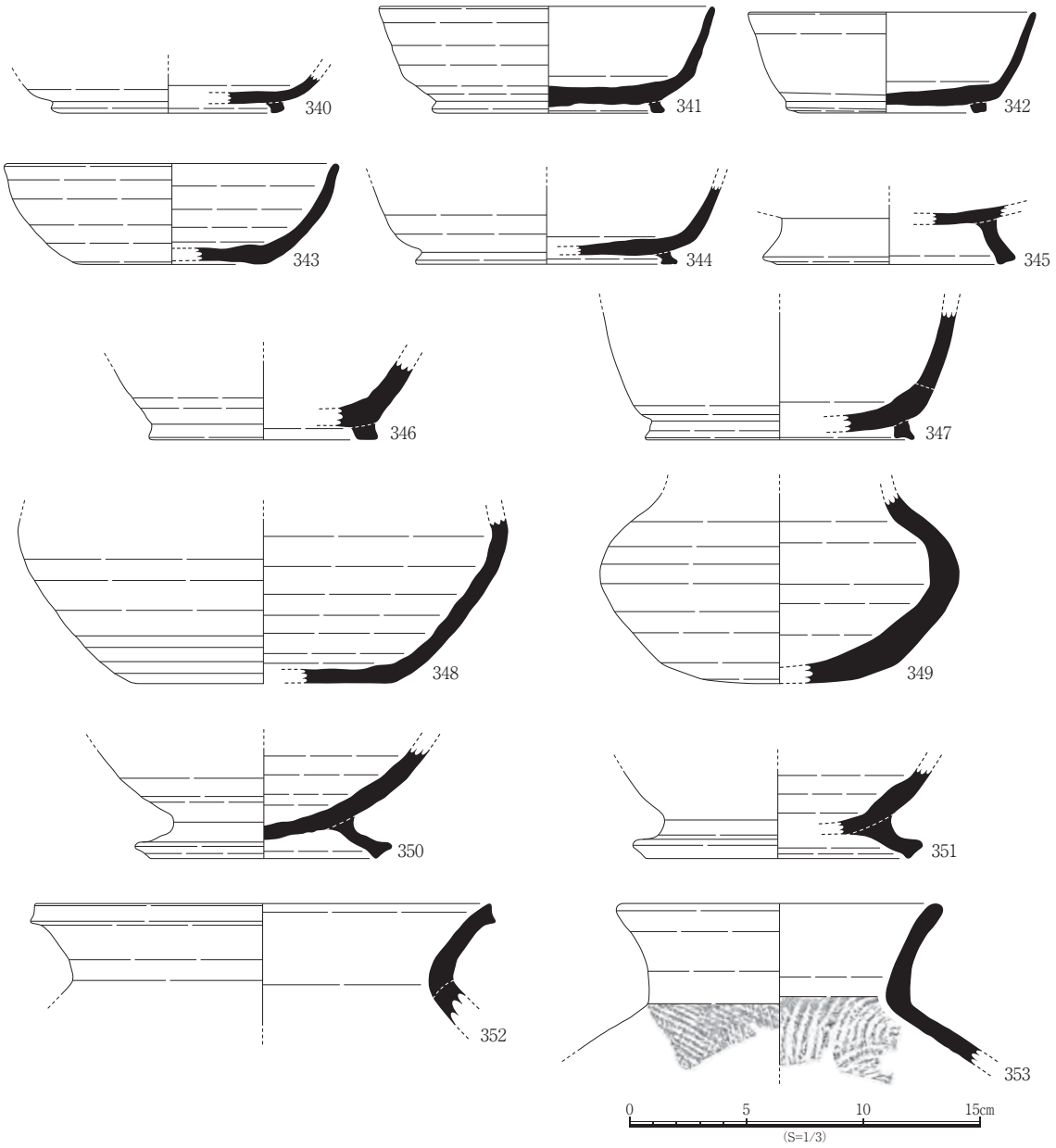


図3－112　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図3

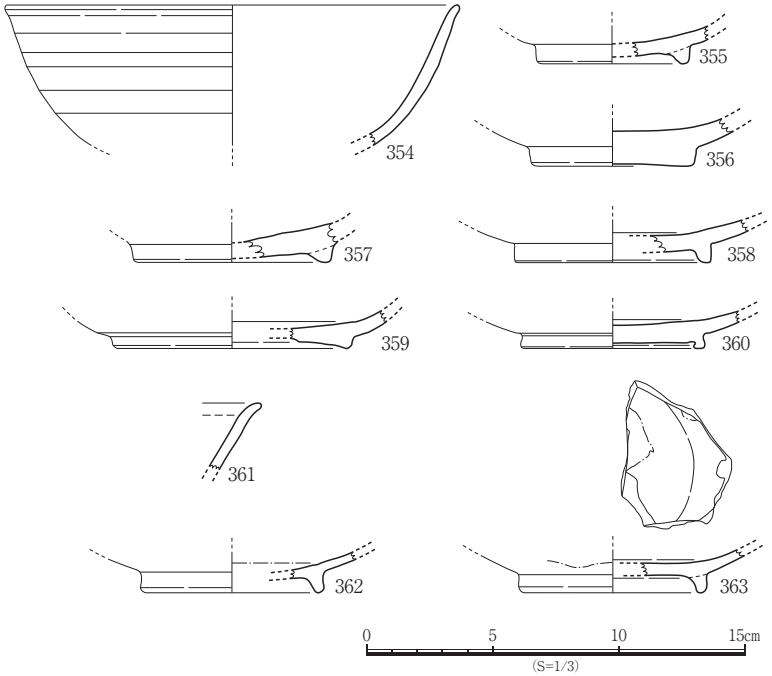


図3－113　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図4

内外面に回転ナデ，内面底部にはナデ調整が認められる。342は高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。343は内外面に回転ナデ，外面底部には回転ヘラ切りが認められる。344は高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。345は皿である。高台を有し，内面はナデ，外面には回転ナデ調整が認められる。346～351は壺である。346は高台を有し，内外面に回転ナデ調整がみられ，自然釉がかかる。347は高台を有し，内外面に回転ナデ調整が認められる。348は内面に回転ナデ，底部には自然釉がかかる。外面上半部はナデ，下半部にケズリ，底部は蛇ノ目状にケズリが施される。349は内外面に回転ナデ調整が認められる。350は内外面に回転ナデ調整がみられ，脚端部は強いヨコナデにより凹状を呈し，端部を摘み上げる。351は内外面に回転ナデ調整が認められ，脚端部を摘み上げる。352・353は甕である。352は二次被熱を受け，内外面に回転ナデ調整が認められ，外面には自然釉がかかる。353の口縁部は内外面ともに回転ナデ，胴部内面に同心円状のタタキ目，外面には格子状のタタキ目が認められる。

緑釉陶器（図3－113）

354～357は椀である。354は内外面にハケ塗りによる施釉が認められる。355は椀と考えられる。やや段状を呈する輪高台を有する。軟質で，内面はハケ塗りによる施釉，外面畳付から高台内は無施釉である。356は削り出しの円盤状高台を有する。軟質で，全面に施釉する。357は輪高台を有する。軟質で，器面の摩耗が著しいが，内底部，高台際，高台内に釉が認められる。358は輪高台を有する。硬質で，全面に施釉する。359は蛇ノ目高台を有する。硬質で，全面に施釉する。360は輪高台を有する。硬質で，全面に施釉する。本遺跡出土の輪高台の中では一番古いものと考えられる。

灰釉陶器（図3－113）

361・362は椀である。361は内外面に施釉が認められる。362は三日月高台を有し，内面に施釉，外面にはケズリがみられ，内外面ともに重ね焼きの際の高台接地痕が認められる。363は椀と考えられる。三日月高台を有し，内面体部の一部と見込みに蛇ノ目状に施釉が認められる。外面体部にも施釉。高台際から高台内は無施釉である。

土師質土器（図3－114）

364・365は杯である。364は内底部が摩耗するが，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。365は内面に丁寧なナデ調整がみられ，外面は回転ナデ，底部には回転糸切りが認められる。366・367は小皿である。366は器面の摩耗が著しいが，回転ナデ調整がみられ，外

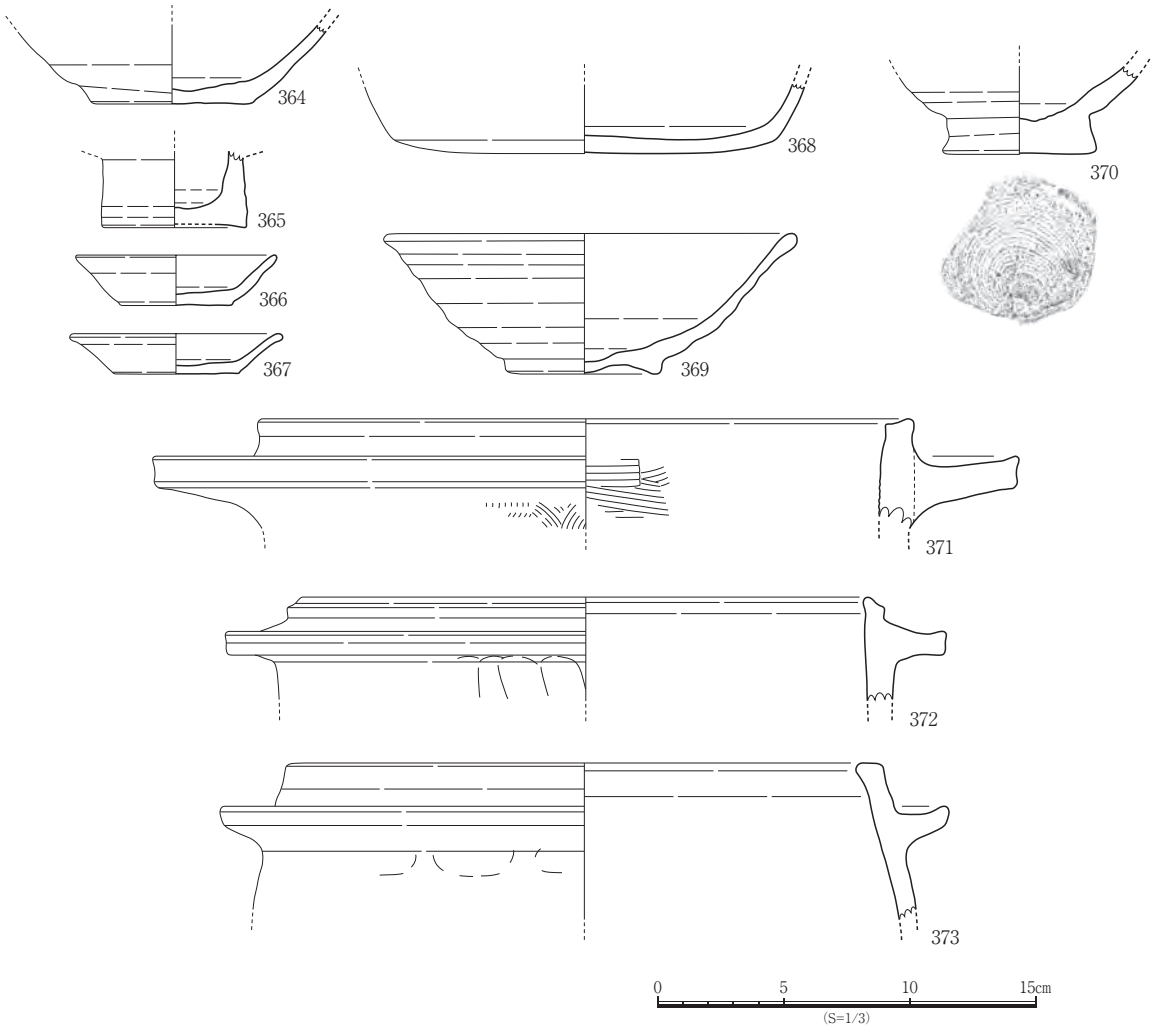


図3－114　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図5

面底部には回転糸切りが認められる。367 は器面が摩耗しているが，内外面にナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。368 は皿である。内面に丁寧なナデ，外面には回転ヘラケズリが認められる。369・370 は椀である。369 は円盤状高台を有し，器面が摩耗しているが，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。370 は円盤状高台を有し，内外面に回転ナデ調整がみられ，外面底部には回転糸切りが認められる。371 ～ 373 は羽釜である。371 は内面口縁部にハケ，外面口縁部から鍔部はヨコナデ，鍔下部にはハケ調整が認められる。372 は器面が摩耗しているが，内外面にナデ調整が認められる。373 の口縁端部は面をなし，内面にナデ，外面口縁部から鍔部にはヨコナデ調整が認められる。

白磁（図3－115）

374 ～ 381 は碗である。374 の口縁部は玉縁状に肥厚する。375 の口縁部は玉縁状に肥厚し，内外面に施釉する。376 の口縁部は玉縁状に肥厚し，内外面に施釉する。377 の口縁部はやや玉縁状を呈し，内外面に施釉する。細かい鬆が認められる。378 は内外面に施釉し，外面には鬆が認められる。379 は内外面に施釉が認められる。380 は内面に施釉する。外面はケズリがみられ，体部の一部に施釉が認められる。381 は内面に施釉し，外面は体部に施釉する。成形時のケズリ痕が残る。

青磁(図3－115)

382は碗である。全面に施釉し，高台内に砂塊が付着する。

瓦(図3－115)

383～386は平瓦である。383は側面にヘラケズリ，凹面に布目痕がみられ，凸面には縄目状のタタキ目が認められる。残存長5.2㎝，残存幅6.2㎝，全厚2.2㎝を測る。384は側面にヘラケズリ，凹面に布目痕がみられ，凸面にはタタキ目が認められる。残存長8.0㎝，残存幅4.6㎝，残存厚1.7㎝を測る。385は側面にヘラケズリ，凹面に布目痕がみられ，凸面には縄目状のタタキ目が認められる。残存長6.4㎝，残存幅6.4㎝，残存厚2.3㎝を測る。386は側面と凹面にヘラケズリ，凹面に布目痕がみられ，凸面にはタタキ目が認められる。残存長6.5㎝，残存幅4.4㎝，残存厚1.6㎝を測る。

磁器(図3－115)

387は唐津の灰釉皿である。内面見込みと外面高台に砂が付着し，全面に施釉が認められる。

土製品(図3－116)

388は支脚である。内面にナデ調整，外面にはハケのちナデと指頭圧痕が認められ，煤が付着。389～397は土錘である。389は摩耗が著しいが，ナデ調整が認められ，全長7.7㎝，全幅5.1㎝，残存厚3.0㎝，重量112.0g，孔径1.2㎝を測る。390は摩耗が著しく調整不明である。全長7.8㎝，残存幅4.1㎝，全厚4.0㎝，重量91.5g，孔径1.5㎝を測る。391は有溝土錘である。ナデ調整が認められ，残存長7.7㎝，残存幅3.1

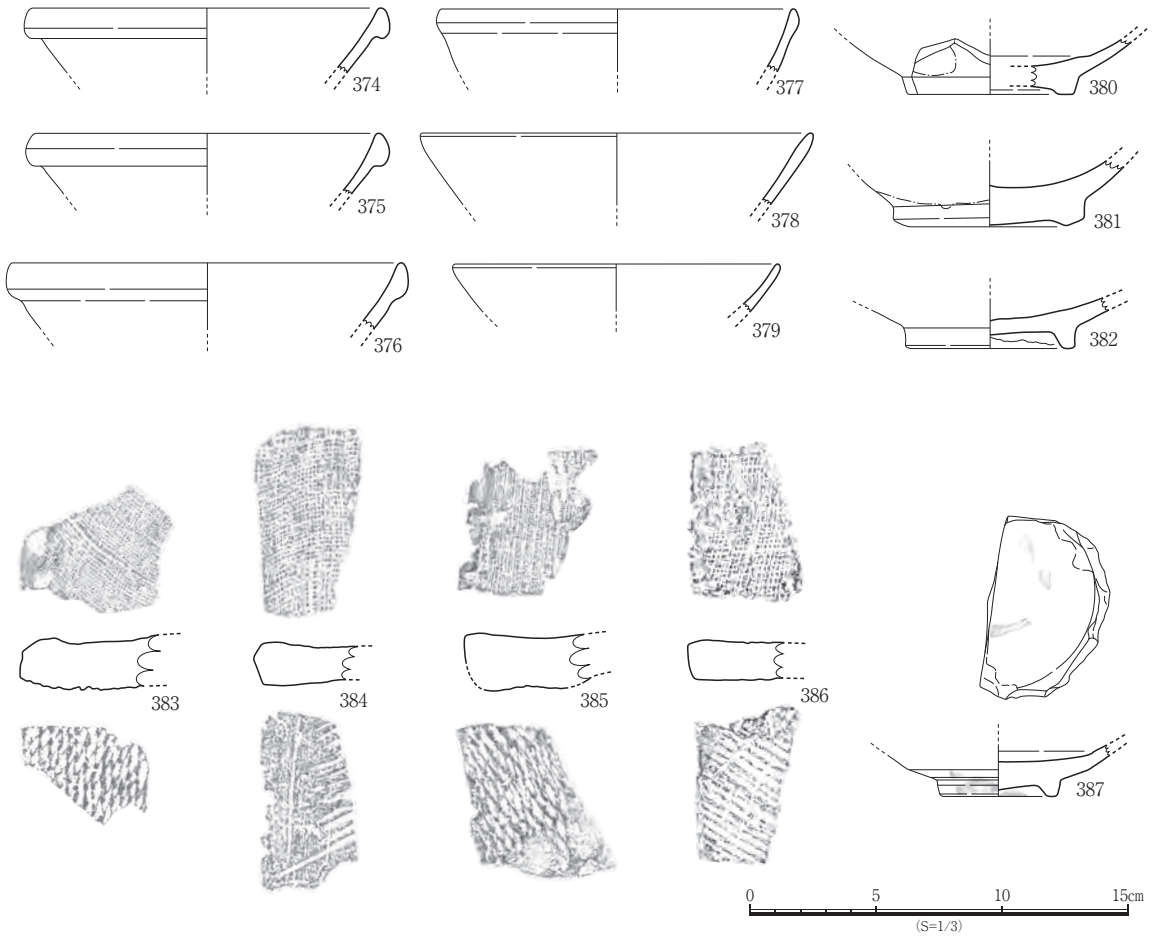


図3－115　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図6

cm, 全厚5.7cm, 重量98.7gを測る。392は摩耗が著しく調整不明である。全長3.7cm, 全幅2.1cm, 全厚2.1cm, 重量12.5g , 孔径0.7cmを測る。393は両端に面取りが施され, 丁寧なナデ調整が認められる。全長4.1cm, 全幅1.8cm, 全厚1.4cm, 重量10.9g , 孔径0.6cmを測る。394は摩耗しているが, ナデ調整が認められ, 全長4.1cm, 全幅1.9cm, 全厚1.3cm, 重量12.4g , 孔径0.5cmを測る。395は摩耗しているが, ナデ調整が認められ, 全長4.9cm, 全幅1.8cm, 全厚1.6 cm, 重量12.6g , 孔径0.5cmを測る。396は丁寧なナデ調整が認められ, 全長5.9cm, 全幅2.4cm, 全厚2.3cm, 重量26.2g , 孔径0.5cmを測る。397はナデと指頭圧痕が認められ, 全長8.7cm, 全幅2.8cm, 全厚2.4cm, 重量59.5g , 孔径0.5cmを測る。

金属製品(図3－116)

398・399は鉄製品である。398は全長7.0cm, 全幅1.6cm, 全厚0.7cm, 重量16.9gを測る。399は残存長3.5cm,

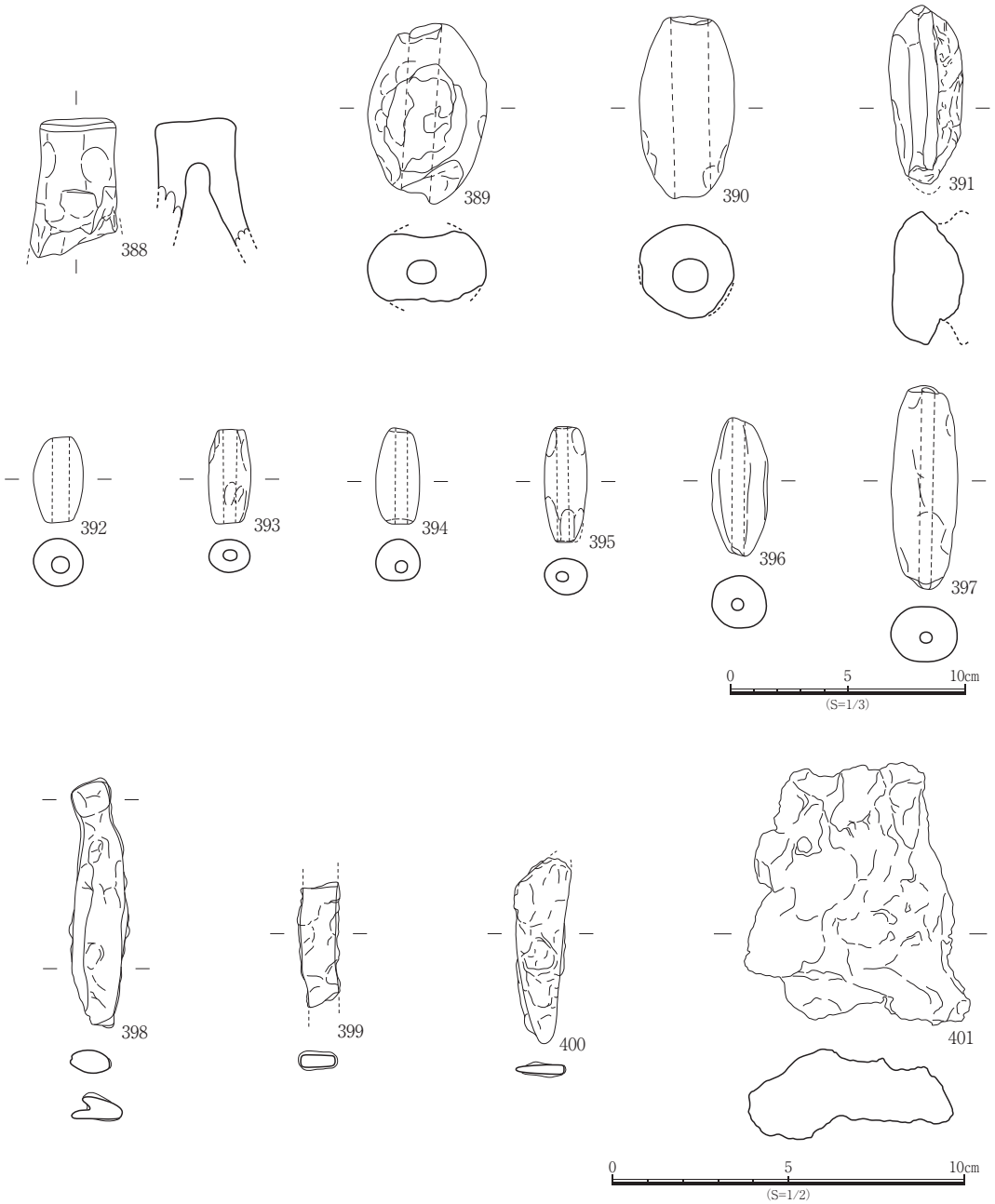


図3－116　第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物実測図7

全幅 1.1 cm，全厚 0.4 cm，重量 3.4g を測る。400は棒状鉄片である。残存長5.3cm，全幅1.6 cm，全厚0.3cm，重量6.1g を測る。401 は鉄滓である。全長 7.5 cm，全幅 6.4 cm，全厚 2.6 cm，重量 127.5g を測る。

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図3－117)

402 は壺である。内面口縁部にナデとミガキ，端部はナデ，胴部にはナデと指頭圧痕がみられる。外面口縁部はナデ，頸部にタテハケ，肩部はミガキとヘラ描沈線文が施され，胴上半部にミガキ，下半部は粗いミガキでハケが残る。403 は甕である。内面口縁部にヨコハケ，端部には指頭圧痕，肩部はナデ調整がみられる。外面にはタテハケが認められ，煤が付着する。404 の内面は摩耗し，外面には葉文様が描かれる。

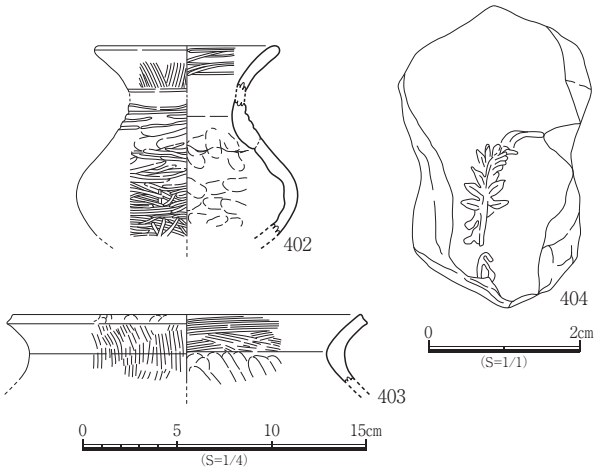


図3－117　第Ⅲ層出土遺物実測図1

土師器(図3－118)

405・406は甕である。405の器面は摩耗しているが，内面口縁部にヨコナデ，胴部はナデがみられ，外面口縁部にはナデ，胴部はタテハケのちヨコハケ調整が認められ，一部煤が付着する。406 の器面は摩耗しているが，内面にヨコナデ，外面には指頭圧痕が認められ，タールが付着する。407 は鍋である。被熱し，器面が摩耗しているが，内外面にナデ調整が認められる。408はカマドである。内外面にナデと指頭圧痕が認められる。

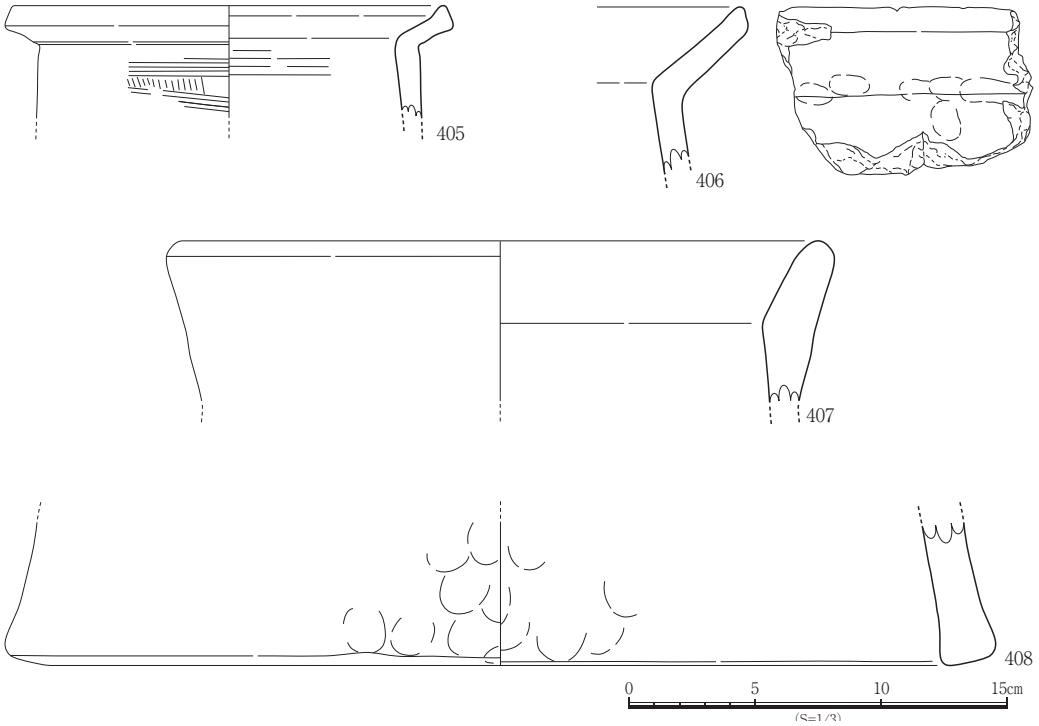


図3－118　第Ⅲ層出土遺物実測図2

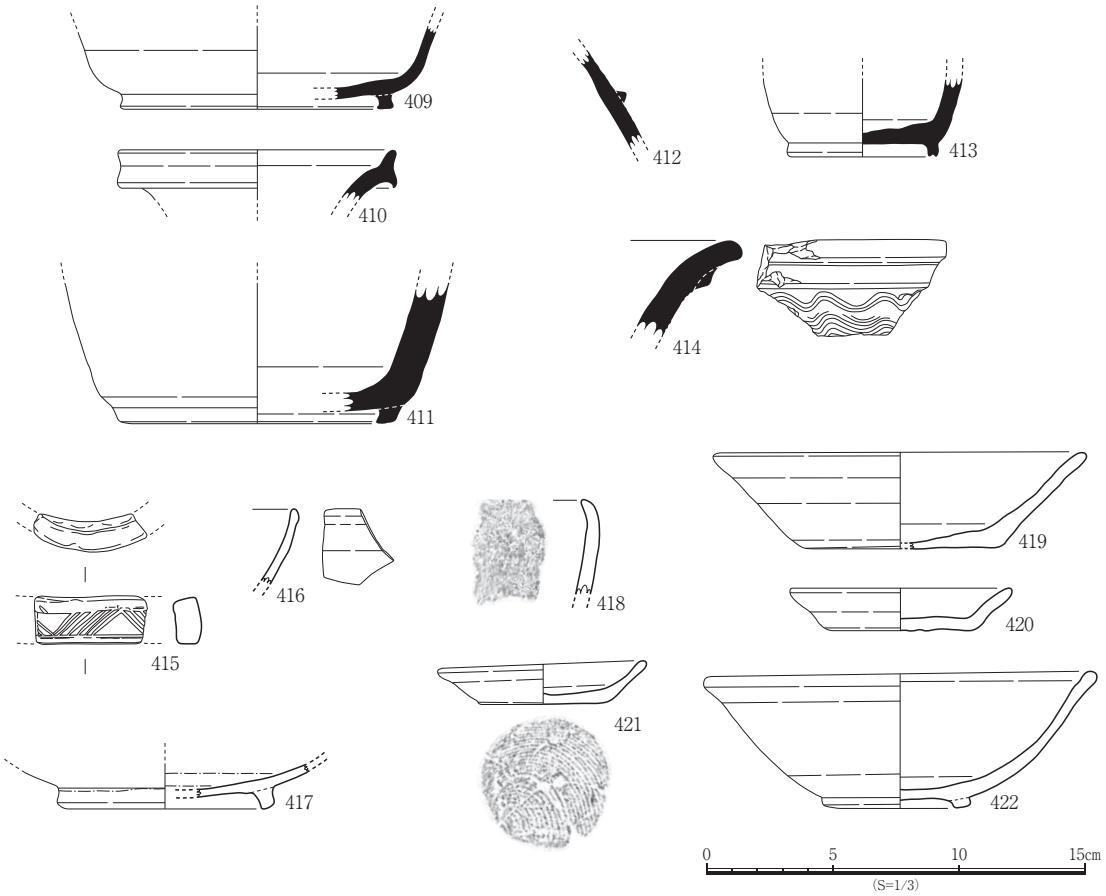


図3－119　第Ⅲ層出土遺物実測図3

須恵器(図3－119)

409は杯である。高台端部はわずかに凹み，内側に突出する。内外面に回転ナデ調整が認められる。410～413は壺である。410は内外面に回転ナデ調整が認められる。411の貼付高台は作りが粗雑で所々形が歪む。内面胴部に回転ナデ，底部はナデ調整がみられ，外面胴部にはナデ，高台際は回転ナデが認められる。412は内面に回転ナデ，外面には斜格子状のタタキ目がみられ，断面三角形の突帯が巡り，自然釉がかかる。413は内外面に回転ナデ調整が認められ，高台端部は凹状をなす。414は甕である。内外面に回転ナデ調整がみられ，口縁部下に突帯を貼付し，その下に2種類の波状文が認められる。

緑釉陶器(図3－119)

415は水注の把手と考えられるもので，文様は型押しである。

灰釉陶器(図3－119)

416は椀である。口縁部は玉縁状を呈する。417は皿である。内面見込みは蛇ノ目状に塗り分け，外面は体部のみ施釉が認められる。

製塩土器(図3－119)

418の器面は摩耗し調整不明である。

土師質土器(図3－119)

419は杯である。内外面に回転ナデ，内面は丁寧なナデ，外面底部には回転糸切りが認められる。420･421は小皿である。420は内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りと板状圧痕が認められる。421は内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りが認められる。422は椀である。貼付高台を有し，器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ調整が認められる。二次被熱する。

白磁(図3－120)

423～425は碗である。423の口縁部は玉縁状に肥厚する。424は内面に鬆が入る。425は外面底部

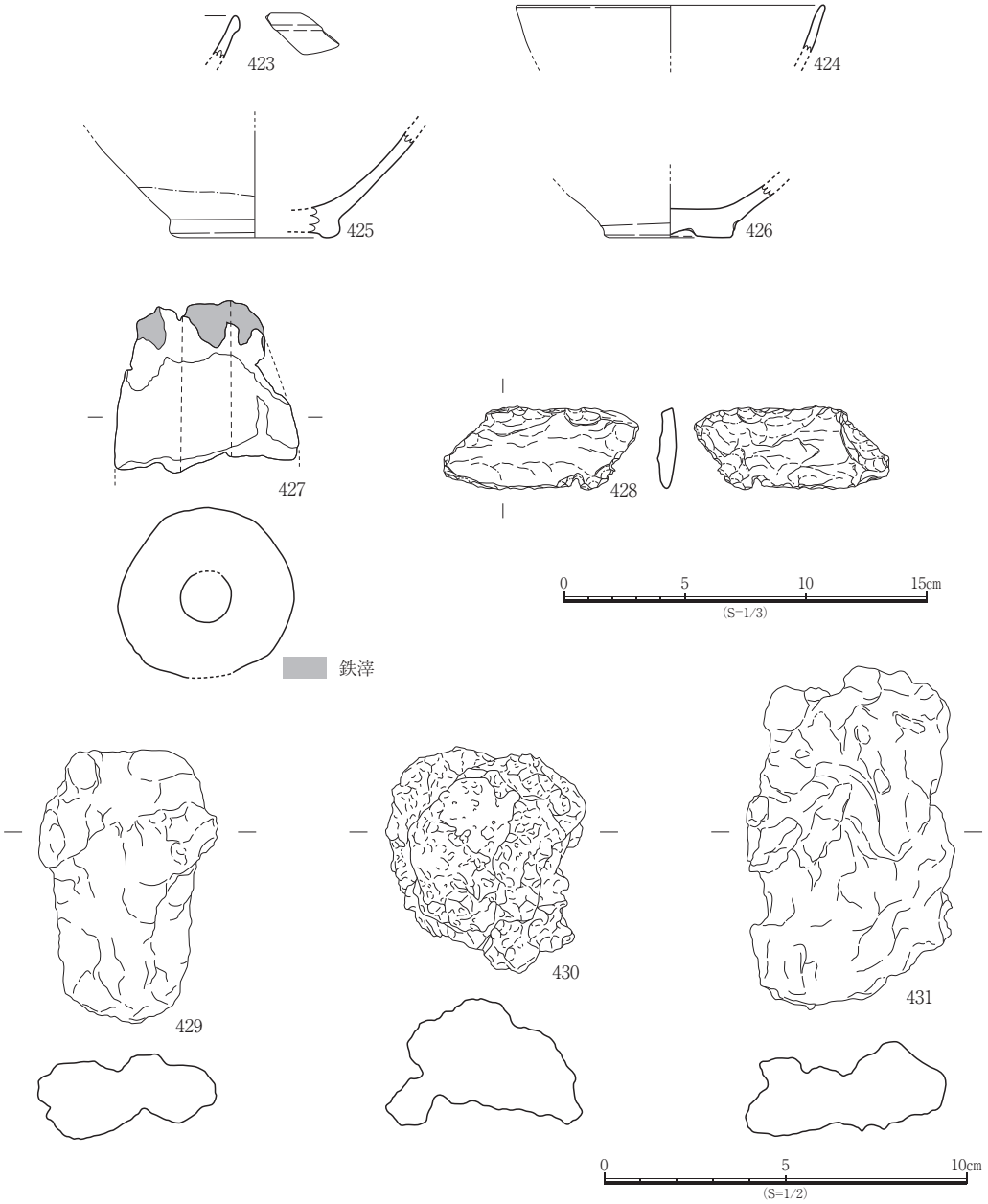


図3－120　第Ⅲ層出土遺物実測図4

にケズリを施し，高台畳付は摩耗する。

青磁（図3－120）

426は碗である。蛇ノ目高台を有し，底部の摩耗具合から，よく使用されていたと考えられる。

土製品（図3－120）

427は羽口である。面取りが3ヶ所みられ，孔径2.1cmである。表面は赤灰色（2.5YR6/1）から橙色（7.5YR7/6），断面は浅黄橙色（10YR8/4）である。先端部に発泡した鉄滓が付着し，周辺は赤色（10R5/6）に発色する。

石製品（図3－120）

428は石包丁である。未成品で2ヶ所に穿孔がみられる。全長8.1㎝，全幅3.5㎝，全厚0.8㎝，重量26.4gを測る。結晶片岩製。

金属製品（図3－120）

429は鉄塊である。全長7.6㎝，全幅4.9㎝，全厚2.3㎝，重量126.6gを測る。430は鉄滓である。全長6.3㎝，全幅5.5㎝，全厚3.5㎝，重量116.0gを測る。431は鉄塊である。全長9.5㎝，全幅5.6㎝，全厚2.6㎝，重量170.3gを測る。

第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物

弥生土器（図3－121）

432は壺である。内面口縁部は強いヨコナデにより浅く凹状をなし，ハケ調整，頸部はナデ調整が認められる。外面口縁部にはヨコナデ，頸部までタテハケ調整が施され，煤が付着する。433は甕である。内面にナデ，底部には指頭圧痕がみられる。外面はタタキのちハケ，底部は摘み出す。434は鉢である。内外面にハケ，底部は摘み出し高台状をなす。

土師器（図3－122）

435は高杯である。杯部は欠損する。1.8～2.0㎝幅で八角形に面取りが施される。内面はナデ調整，外面には丁寧なミガキが認められる。436は脚部が欠損しているが，高杯と考えられる。内面にナデのちミガキがみられ，外面口縁部はナデのちミガキ，体部にはヘラケズリのちミガキが施される。437・438は蓋である。437は径2.2㎝，高さ1.3㎝の宝珠状のつまみが付き，内面はミガキ，外面には丁寧なナデが施される。438は内面にナデ，外面はナデのち粗いミガキが施される。439～441は杯であ

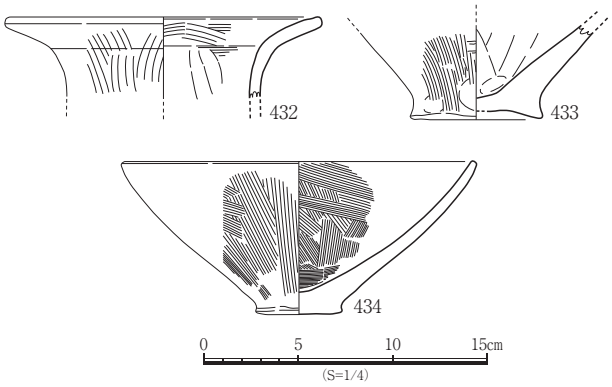


図3－121　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図1

る。439 は内面にヨコナデのち放射線状のヘラミガキ，口縁端部にもヘラミガキが施される。外面はハケと一部ナデ調整が認められる。440 は内外面に回転ナデ，底部内面は丁寧なナデ，外面にはヘラ切りが認められる。441 は内外面に回転ナデ調整がみられる。底部内面は中央が強いナデにより凸状に盛り上がり，外面にはヘラ切りのちナデ調整が認められる。442･443 は皿で，手づくね成形である。442 は内外面にナデと一部指頭圧痕が認められ，外面底部は切り離し痕をナデ消す。443 の口縁部は内外面ともにヨコナデ，体部から底部はナデと指頭圧痕が認められる。

須恵器（図3－122）

444 ～ 446 は杯である。444 は内外面に回転ナデ調整が認められる。445 は内面に丁寧なナデ，火襷がみられ，外面はナデ，底部には回転糸切りが認められる。446 は内面に回転ナデ，火襷がみられ，底部にはコテ当て痕が残る。外面には回転ナデ，底部は回転糸切りが認められる。447 は皿である。内外面に回転ナデ，外面底部は切り離し痕をナデ消す。448 は高杯である。杯部内底にナデ，脚部内外面には回転ナデ調整が認められる。449 は円面硯である。陸部は欠損し，台脚部に十字状の透かしが

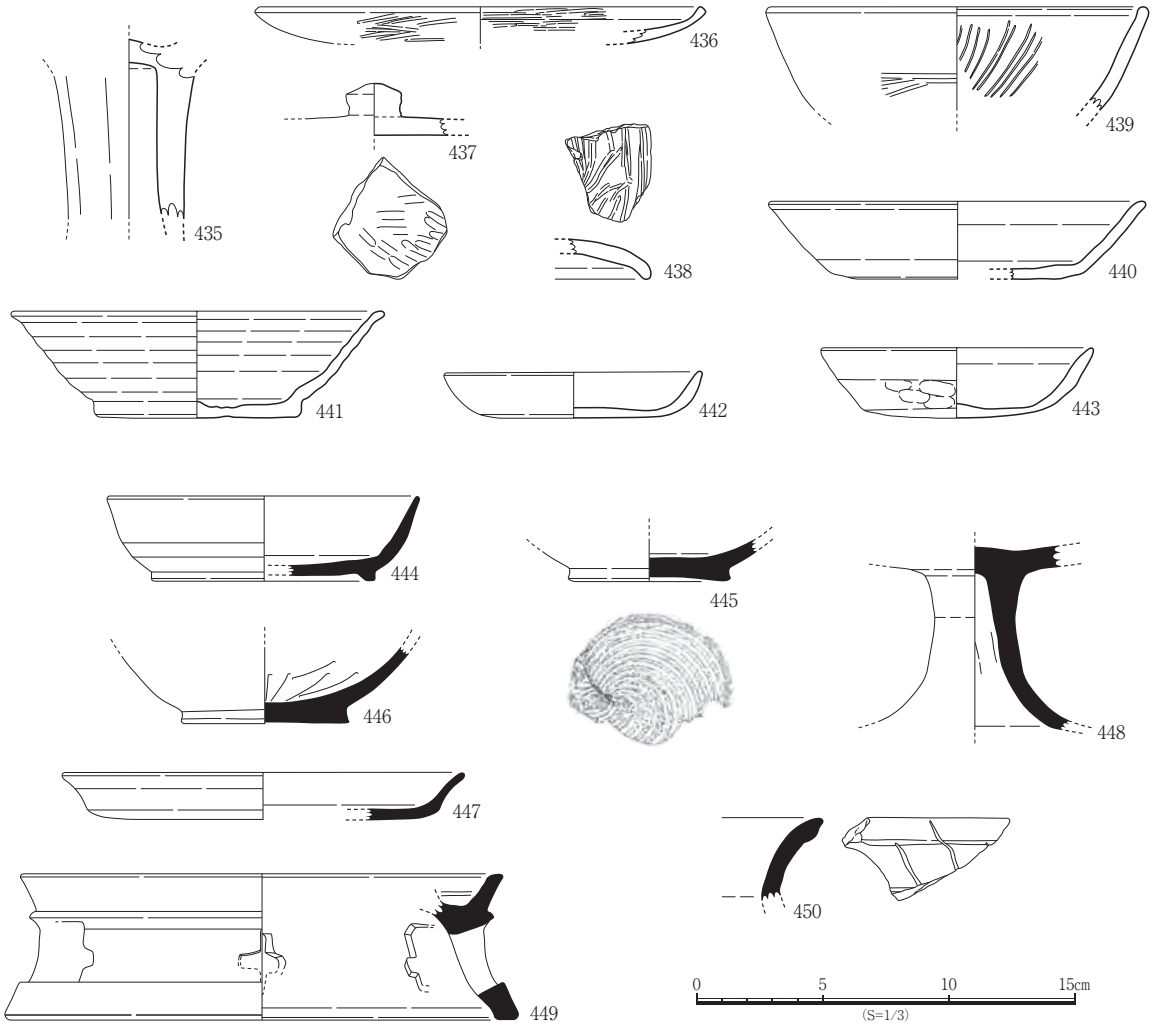


図3－122　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図2

施され，内面に自然釉が認められる。穿孔は十字形が５孔と考えられる。450 は甕である。内面に回転ナデ，外面にはヨコハケがみられ，タテ方向の深いヘラ描沈線とヨコ方向の浅いヘラ描沈線が施される。

緑釉陶器（図３－123）

451 は椀である。軟質で，円盤状高台を有する。器面は摩耗が著しいが，内面にトチン痕がみられ，全面に施釉が認められる。

灰釉陶器（図３－123）

452 は椀である。高台際にケズリが認められる。高台は摩耗し丸みを帯びる。見込みには回転糸切

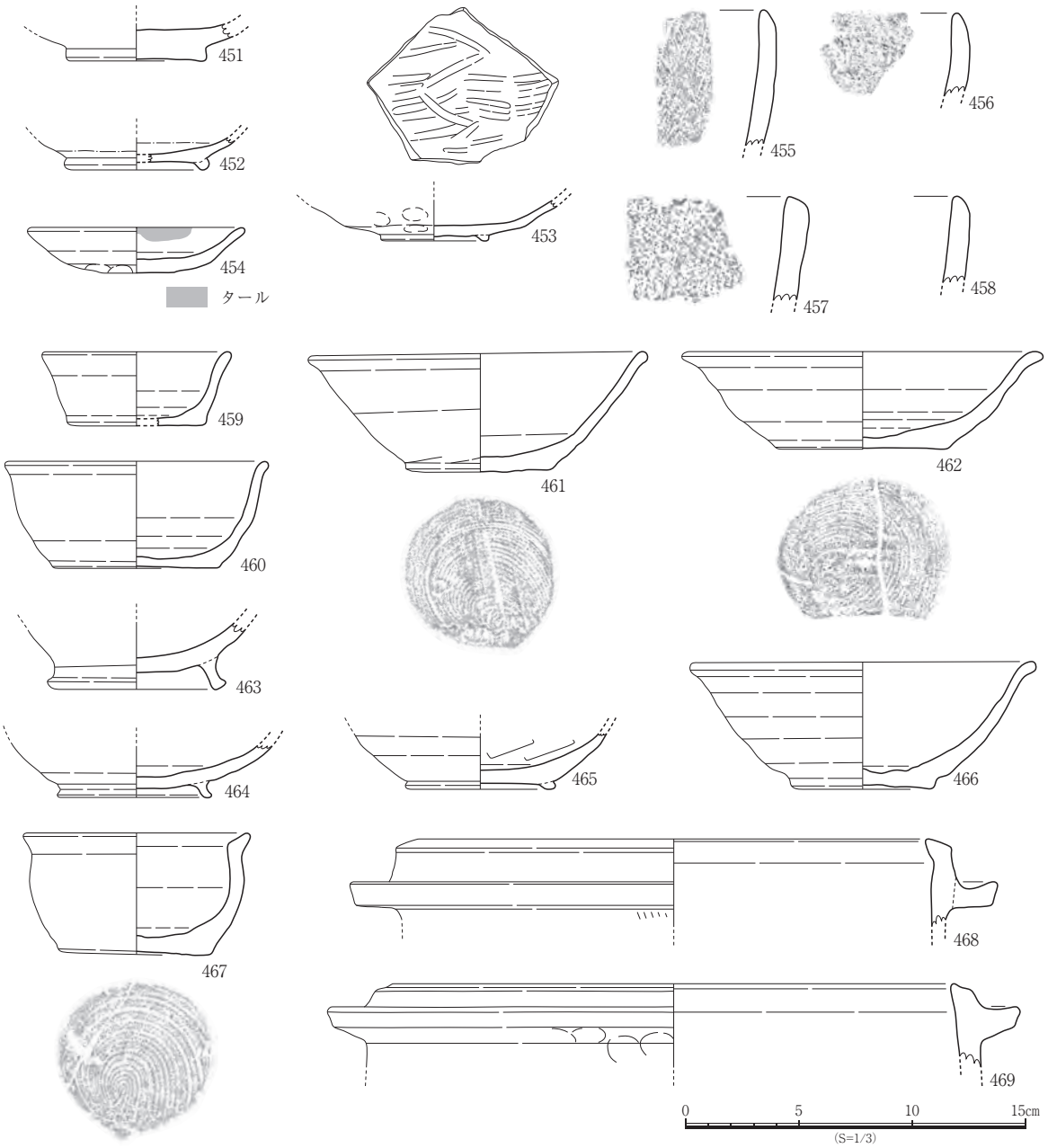


図３－123　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図３

り痕がみられる。内面の一部と外面に施釉が認められる。

瓦器(図3－123)

453は椀である。貼付高台を有し，内面はミガキ，外面には指頭圧痕とナデ調整が認められる。454は皿である。器面は摩耗しているが，口縁部にタールが付着し，一部ミガキが認められる。外面口縁部はヨコナデ，底部には指頭圧痕が認められる。灯明皿として使用されていたと考えられる。

製塩土器(図3－123)

455は器面の摩耗が著しいが，内面に布目痕が認められる。456は外面の摩耗が著しく調整不明である。内面には布目痕が認められる。457は器面の摩耗が著しいが，内面に布目痕が認められる。458は器面の摩耗が著しいが，内面に布目痕が認められる。

土師質土器(図3－123)

459は小杯である。内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りと板状圧痕が認められる。460～462は杯である。460の器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りが認められる。461の器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ，外面底部には回転糸切りと板状の圧痕が認められる。462は器面の摩耗が著しいが，外面底部に回転糸切りが認められる。463～466は椀である。463は貼付高台を有し，端部は摩耗する。内面にナデ調整，外面には回転ナデ調整が認められる。464は貼付高台を有し，器面の摩耗が著しいが，内面にナデ調整が認められる。465は貼付高台を有し，器面の摩耗が著しいが，内面にコテ当て痕が認められる。466は円盤状高台を有し，内面底部は凹状を呈する。器面は摩耗が著しく，二次被熱する。内外面に回転ナデ，外面口縁部の一部に灰釉とみられる釉が認められ，底部には回転糸切りがみられる。467は小壺である。口縁部は外反する。器面は摩耗しているが，内外面に回転ナデ，外面体下半部はヘラ状工具で面取り，底部は回転糸切りが認められ，煤が付着する。468・469は羽釜である。468の口縁端部は外傾し，内外面にヨコナデ，鍔下部にはタテハケ調整が施される。469の口縁端部は外傾し，内外面に回転ナデ，鍔下部には指頭圧痕が認められる。

白磁(図3－124)

470は碗である。口縁部は玉縁状に肥厚する。

瓦(図3－124)

471は丸瓦である。凹面に布目痕が認められる。残存長6.6㎝，残存幅9.8㎝，残存厚4.5㎝を測る。

土製品(図3－124)

472は羽口である。被熱し，外面に指頭圧痕が認められる。孔径約2.4㎝を測る。473～475は土錘である。473は摩耗が著しく調整不明。全長3.8㎝，全幅2.3㎝，全厚2.2㎝，重量15.3g，孔径0.8㎝を測る。474の両端部は面取りが施され，摩耗しているが，指頭圧痕とナデ，一部工具による圧痕が認められる。全長9.0㎝，全幅4.6㎝，全厚4.7㎝，重量158.7g，孔径1.2㎝を測る。475は摩耗しているが，ナデ調整が認められる。残存長4.5㎝，全幅1.6㎝，全厚1.6㎝，重量8.5g，孔径0.7㎝を測る。

石製品(図3－124)

476・477は石包丁である。476は両側に抉りが入れられ，両面に自然面が残る。全長8.1㎝，全幅4.3㎝，全厚0.9㎝，重量48.6gを測る。片岩製。477は両側に抉りが入れられ，両面に自然面が残る。全長9.3㎝，全幅4.8㎝，全厚1.7㎝，重量83.5gを測る。片岩製。478は石鏃の未成品と考えられる。打製で片面の一部に自然面が残る。両側に抉りがみられるが，成形時の欠損或いは欠損後の二次成形の可能性

もある。全長3.9cm, 全幅2.2cm, 全厚0.4cm, 重量3.3gを測る。サヌカイト製。

金属製品(図3－124)

479･480は鉄釘である。479は全長6.4cm, 全幅1.1cm, 全厚0.9cm, 重量10.1gを測る。480は全長5.6cm, 全幅0.8cm, 全厚0.9cm, 重量4.3gを測る。481は残存長4.6cm, 残存幅3.8cm, 全厚0.3cm, 重量12.0gを測る。482･483は棒状鉄片である。482は全長5.2cm, 全幅1.4cm, 全厚0.3cm, 重量9.2gを測る。483は残存長3.5

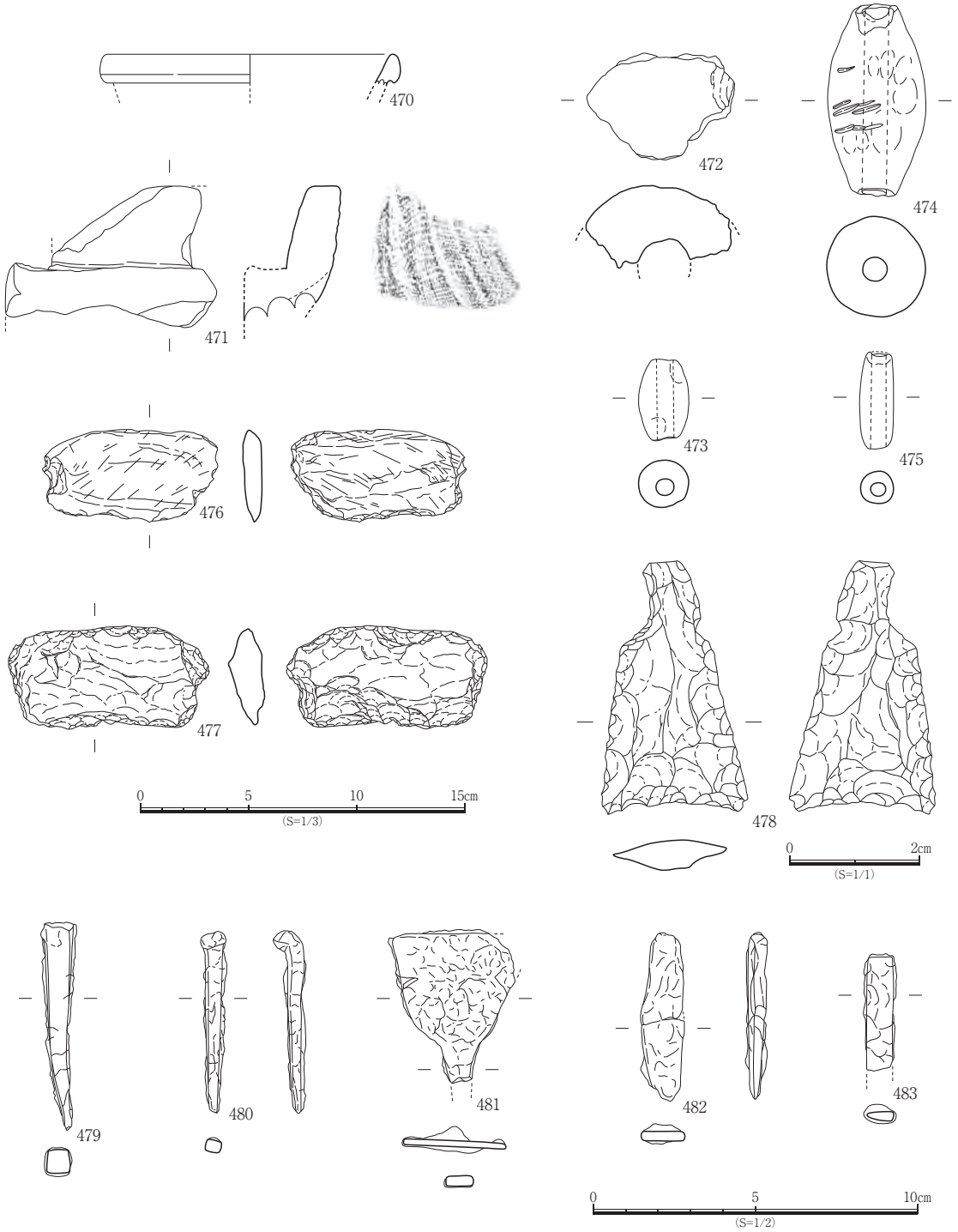


図3－124　第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物実測図4

cm，全幅0.8cm，全厚0.3cm，重量3.8gを測る。

(2) Ⅱ－2区

① 溝

SD1

調査区北端部に位置する。東西方向に延び，主軸方向はN－88°－Eである。検出長1.42m，幅0.29m，深さ6cmを測る。埋土は黒褐色である。遺物は，弥生土器と土師器の細片がわずかに出土し，弥生土器1点(484)を図示した。

出土遺物(図3－125)

484は弥生土器の壺である。口縁端部は平たくおさめ，下方に摘み出す。内外面ともにヨコ方向のナデ調整で，外面に指頭圧痕が残る。

② ピット

調査区中央部と北部で密度が高い。埋土は黒褐色または黒色土である。遺物は，弥生土器，土師器，黒色土器の細片がわずかに出土している。

P7

調査区南部に位置する。楕円形を呈し，長径43cm，短径40cm，深さ10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/3)である。遺物は弥生土器の細片が出土し，1点(485)を図示した。

出土遺物(図3－126)

485は弥生土器の鉢である。底部は平底で直径3.6cmを測る。内面は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げられる。外面はタテ方向の粗いハケ調整がみられ，底部側面に指頭圧痕が残る。

P19

調査区北部に位置し，SB13のピットに切られる。楕円形を呈し，長径39cm，短径33cm，深さ24cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/3)である。遺物は細片が多く出土し，図示し得たのは弥生土器1点(486)である。

出土遺物(図3－126)

486は弥生土器の鉢である。底部は丸みを帯びた平底で，直径3.3cmを測る。内面は丁寧なナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は底部側面までタテ方向の粗

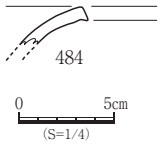


図3－125　SD1出土遺物実測図

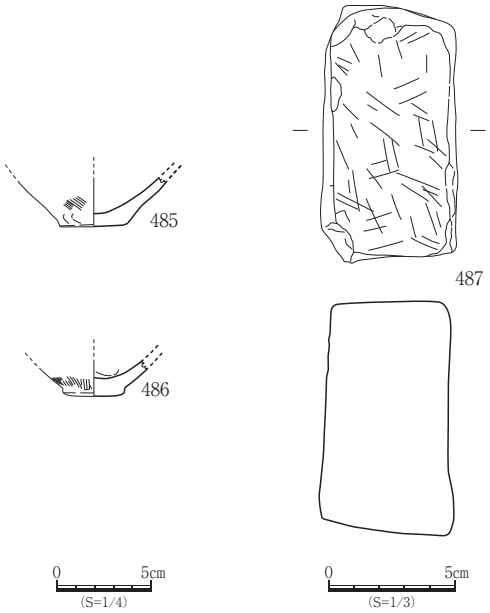


図3－126　ピット出土遺物実測図

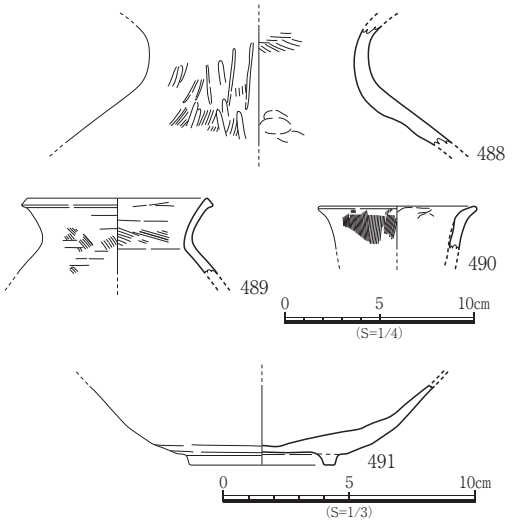


図3－127　包含層出土遺物実測図

いハケ調整である。

P31

調査区中央東寄りに位置する。楕円形を呈し，長径 33cm，短径 30cm，深さ 17cm を測る。埋土は黒褐色(10YR3/3)である。遺物は土師器細片がわずかに出土し，石製品1点(487)を図示した。

出土遺物(図3－126)

487 は砥石である。砂岩製で，被熱し赤色化する。表面に擦痕がみられ，裏面も使用している可能性がある。

③ 包含層出土遺物

弥生土器，土師器などが出土し，弥生土器3点(488～490)，土師器1点(491)を図示した。

出土遺物(図3－127)

488～490 は弥生土器である。488 は壺で，胴部から短く直立し，口縁部に向けて外反する。内面はヨコナデ調整による指頭圧痕が残り，口縁部は粗いハケ調整である。外面の頸部はヨコナデ調整のちタテ方向のヘラミガキ，上胴部はタテ方向のハケ調整のち全体にヘラミガキが施される。489 は甕である。口縁部は内面に稜をもって「く」の字に外反し，端部は外側に摘み出す。内面は上胴部がナデ調整，口縁部から頸部はナナメ方向のハケ調整である。外面はタテ方向のハケのちヨコナデ調整である。口縁上部外面には煤が付着する。490 は小型の鉢である。外面にタテ方向の細かいハケ調整が施される。491 は土師器の椀である。底部に断面台形状の高台が付き，体部は緩やかに丸みをもって立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整で指頭圧痕が残る。

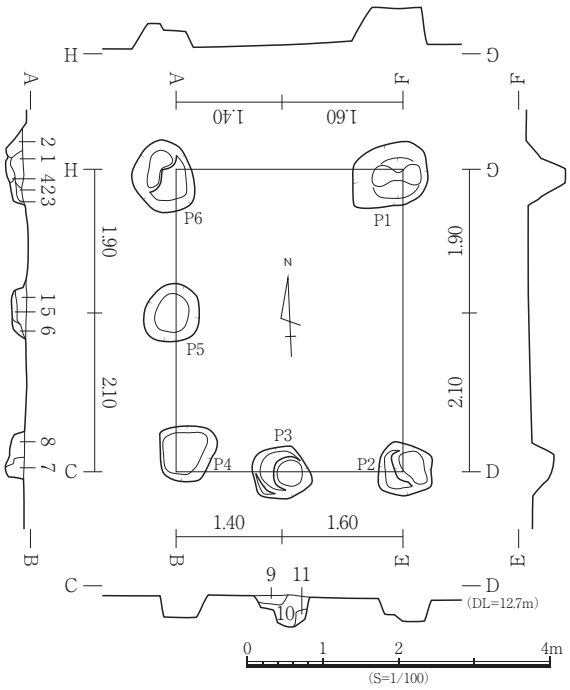
(3) Ⅳ区

① 掘立柱建物跡

6棟を検出した。西隣のⅡ区に比べると密集度は低く，柱穴の規模が 60cm 程度のものは調査区東寄りに多い。

SB1(図3－128)

調査区東部南寄りに位置する。桁行2間(4.1m)，梁行2間(3.0m)の南北棟で，棟方向はN－3°－Eである。柱穴の一部は精査をしたが検出できなかった。柱間寸法は桁行 1.9～2.1m，梁行 1.4～1.9m，平面積 12.0㎡を測る。柱穴は不整楕円形を呈し，長径 69～100cm，短径 66～72cm，深さ 20～53cm を測る。埋土は黒褐色粘質シルトで



1. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
2. 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト
3. 黒褐色(7.5YR1.7/1)粘質シルト
4. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト(0.5～1cm大の円礫を多く含む)
5. 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト
6. 黒褐色(10YR1.7/1)粘質シルト
7. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(1～2cm大の円礫を多く含む)
8. 黒褐色(7.5YR2/1)粘質シルト(3～5cm大の円礫を多く含む)
9. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(にぶい黄褐色土ブロックが混じる)
10. 黒褐色(10YR2/1)粘質シルト(黒色土ブロックが混じる)
11. 極暗褐色(7.5YR2/1)粘質シルト(にぶい黄褐色土が粒状に混じる)

図3－128　SB1

ある。遺物は各柱穴より弥生土器と土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SB2（図3－129）

調査区中央部南寄りに位置する。桁行3間(6.1m)，梁行2間(4.6m)の南北棟で，棟方向はN－3°－Wである。柱穴の一部は精査をしたが検出できなかった。柱間寸法は桁行1.9～2.2m，梁行2.3m，平面積28.0㎡を測る。柱穴は不整円形を呈し，長径62～117cm，短径58～92cm，深さ16～53cmを測り，埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土し，P6から出土した土師器1点(492)を図示した。

出土遺物（図3－130）

492は土師器の皿で，丸みを帯びた底部はヘラ切りのち丁寧にナデ消す。内外面ともに回転ナデ調整が施される。

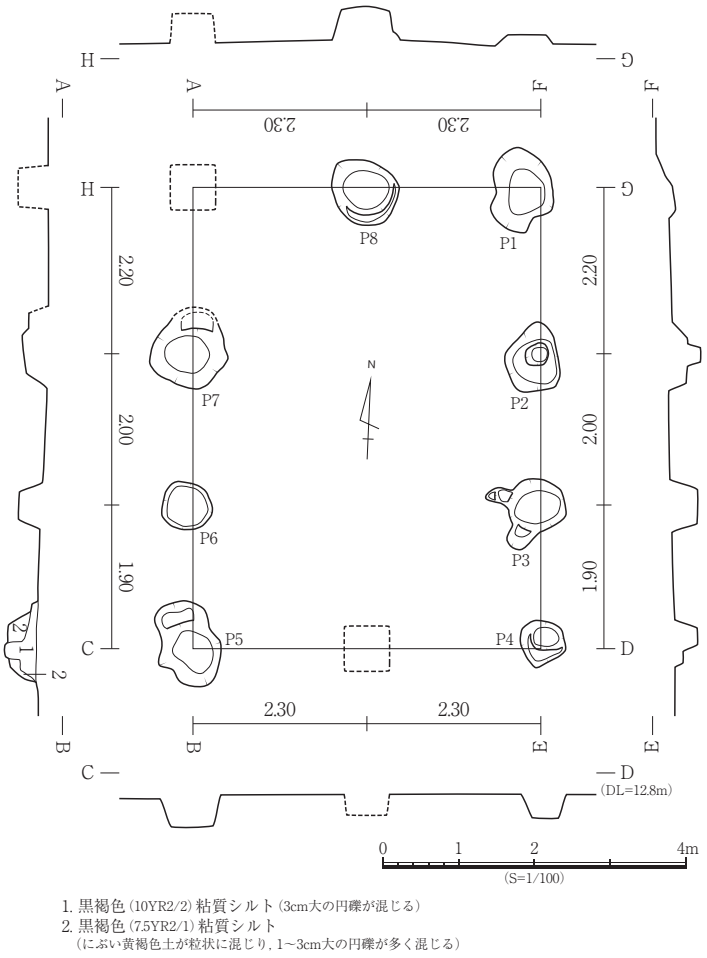


図3－129　SB2

SB3（図3－131）

調査区北部東寄りに位置する。桁行3間(6.0m)，梁行1間(2.9m)の南北棟で，棟方向はN－7°－Eである。柱間寸法は桁行1.9～2.1m，梁行2.9m，平面積17.4㎡を測る。柱穴は楕円形を呈し，長径40～67cm，短径40～61cm，深さ36～67cmを測り，埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器と須恵器，陶磁器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

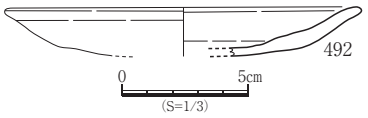


図3－130　SB2出土遺物実測図

SB4（図3－131）

調査区西側に位置する。桁行2間(3.7m)，梁行2間(2.6m)の南北棟で，棟方向はN－1°－Eである。柱穴の一部は精査をしたが検出できなかった。柱間寸法は桁行1.8～1.9m，梁行1.3m，平面積は9.6㎡を測る。柱穴は円形または楕円形を呈し，長径27～109cm，短径25～59cm，深さ14～49cmを測り，埋土は黒褐色シルトである。遺物は弥生土器と土師器，須恵器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SB5（図3－131）

調査区南西側に位置し，桁行1間(2.4m)，梁行1間(2.5m)の南北棟で，棟方向はN－14°－Eである。平面積は6.0㎡を測る。柱穴は楕円形を呈し，長径35～64cm，短径31～58cm，深さ31～53cmを測り，

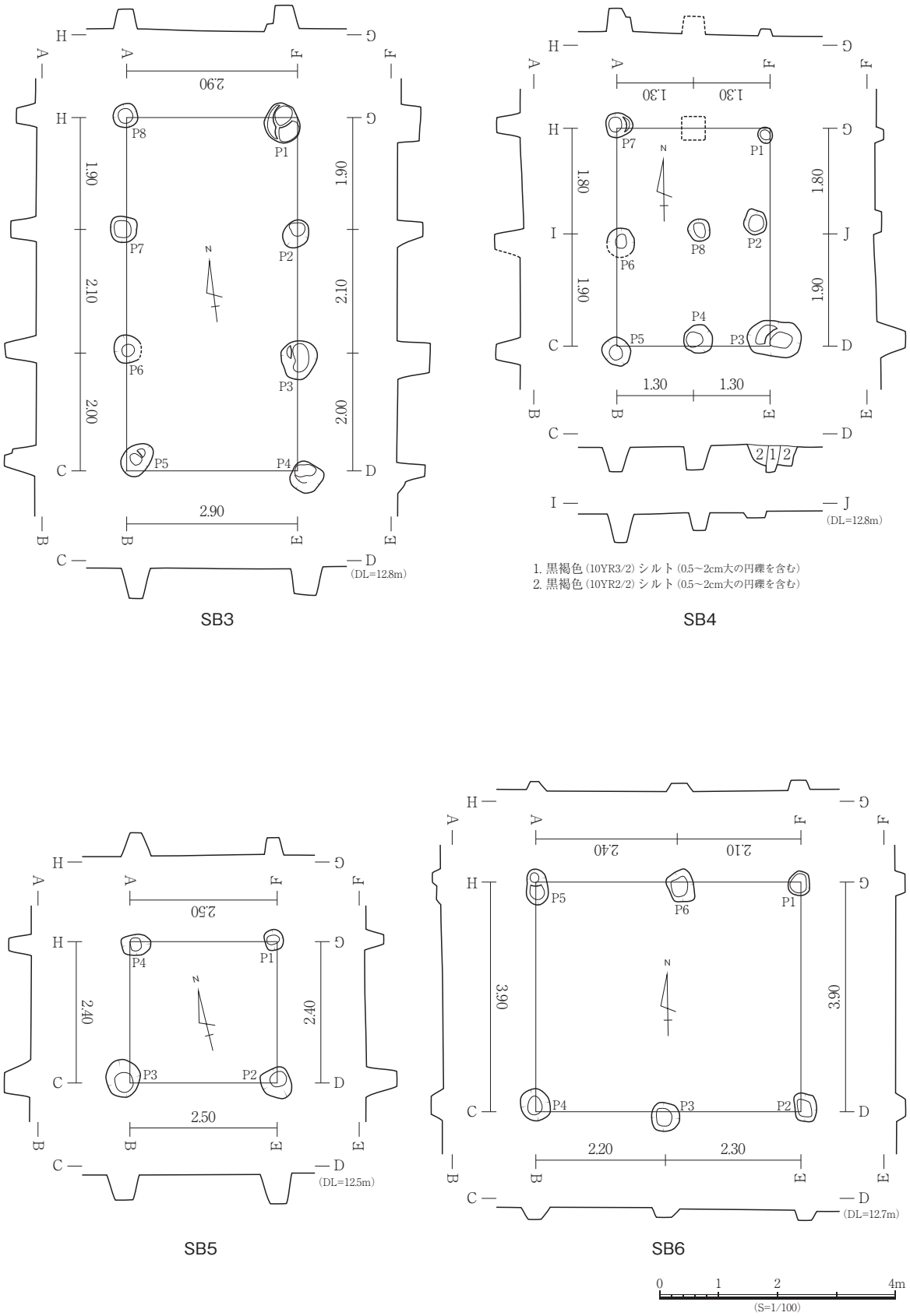

SB3
SB4
SB5
SB6
(DL=12.8m)
(DL=12.8m)
(DL=12.5m)
(DL=12.7m)
1. 黒褐色（10YR3/2）シルト（0.5～2cm大の円礫を含む）
2. 黒褐色（10YR2/2）シルト（0.5～2cm大の円礫を含む）
0 1 2 4m
(S=1/100)

図3－131　SB3～6

埋土は黒褐色シルトである。遺物は土師器と須恵器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SB6（図3－131）

調査区南東側に位置し，桁行2間(4.5m)，梁行1間(3.9m)の東西棟で，棟方向はN－89°－Eである。柱間寸法は桁行2.1～2.4m，梁行3.9m，平面積は17.5㎡を測る。柱穴は楕円形を呈し，長径41～74cm，短径36～54cm，深さ8～21cmを測り，埋土は黒褐色シルトである。遺物は弥生土器と土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

② 柵列跡

SA1（図3－133）

調査区南東側に位置し，主軸方向はN－25°－Eである。柱間寸法は1.0～1.4mを測る。柱穴は円形または楕円形を呈し，長径28～76cm，短径25～68cm，深さ12～34cmを測り，埋土は黒褐色シルトである。遺物はP2から出土した弥生土器1点(493)，P7から出土した土師器1点(494)を図示した。

出土遺物（図3－132）

493は弥生土器の甕である。短い頸部から外反する口縁部の端部はわずかに上方に摘み上げる。内面の口縁部から頸部は板状工具によるヨコ方向のナデ調整，外面の頸部から下は粗いハケ調整である。494は土師器の高杯である。大きく「ハ」の字に開く脚部の外面はヨコナデ調整のちヘラミガキが施される。

③ 土坑

SK1（図3－134）

調査区南側に位置する。平面形は円形を呈し，直径0.96m，深さ36.5cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで，円礫が多量に投げ込まれる。遺物は弥生土器，土師器，須恵器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SK2（図3－134）

調査区北東側に位置する。検出時は一つのSKとしていたが，複数のピットが重なっていたものである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器と須恵器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

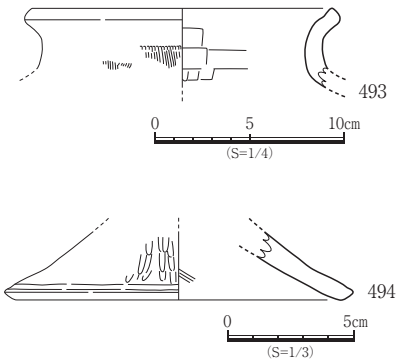


図3－132　SA1出土遺物実測図

SK3（図3－134）

調査区北東側に位置し，南東角を近現代の撹乱に壊される。平面形は楕円形を呈し，長径1.77m，短径1.08m，深さ21cmを測る。主軸方向はN－4°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

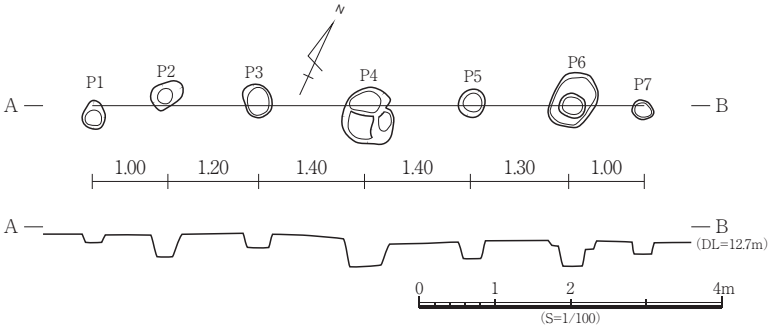


図3－133　SA1

SK4（図3－134）

調査区北東側に位置し，西側

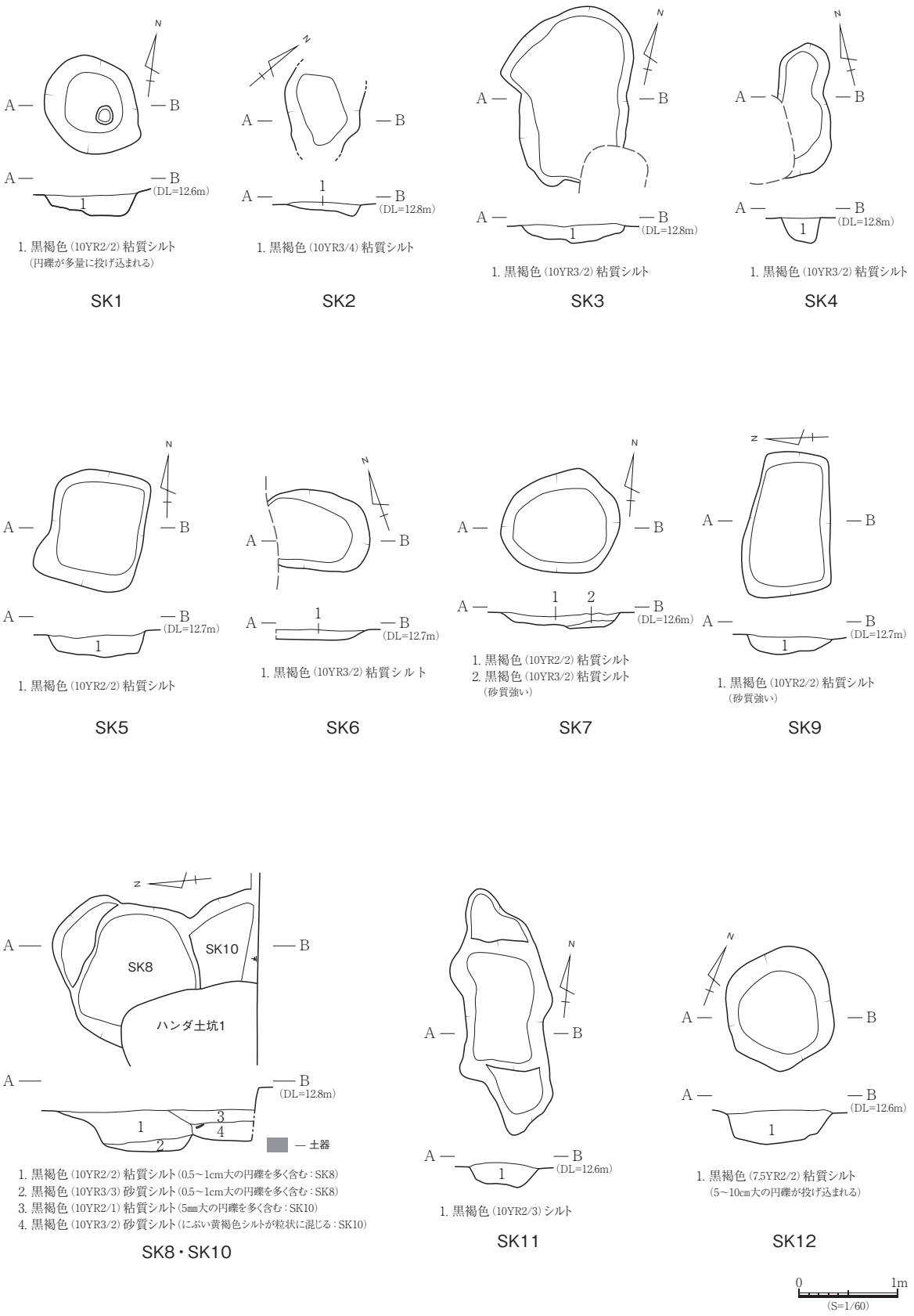

N
A
B
(DL=12.6m)
1
1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト
（円礫が多量に投げ込まれる）
SK1
(DL=12.8m)
1. 黒褐色（10YR3/4）粘質シルト
SK2
(DL=12.8m)
1. 黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
SK3
(DL=12.8m)
1. 黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
SK4
(DL=12.7m)
1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト
SK5
(DL=12.7m)
1. 黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
SK6
2
(DL=12.6m)
1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト
2. 黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
（砂質強い）
SK7
(DL=12.7m)
1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト
（砂質強い）
SK9
SK8
SK10
ハンダ土坑1
3
4
(DL=12.8m)
土器
1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト（0.5～1cm大の円礫を多く含む：SK8）
2. 黒褐色（10YR3/3）砂質シルト（0.5～1cm大の円礫を多く含む：SK8）
3. 黒褐色（10YR2/1）粘質シルト（5mm大の円礫を多く含む：SK10）
4. 黒褐色（10YR3/2）砂質シルト（にぶい黄褐色シルトが粒状に混じる：SK10）
SK8・SK10
(DL=12.6m)
1. 黒褐色（10YR2/3）シルト
SK11
(DL=12.6m)
1. 黒褐色（7.5YR2/2）粘質シルト
（5～10cm大の円礫が投げ込まれる）
SK12
0
1m
(S=1/60)

図3－134　SK1～12

を近現代の撹乱に壊される。平面形は楕円形を呈し，長径1.36m，短径0.70m，深さ26cmを測る。主軸方向はN－9°－Eである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SK5（図3－134）

調査区南東側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.19m，短軸0.94m，深さ26cmを測る。主軸方向はN－8°－Eである。埋土は黒褐色粘質シルトで，遺物は土師器と須恵器が出土し，3点（495～497）を図示した。

出土遺物（図3－135）

495･496は土師器の杯である。495はベタ底の底部片で，ヘラ切りのちナデ調整が施される。内面はユビナデの凹凸がみられる。496はベタ底の底部片で，ヘラ切りのちナデ調整が施される。体部は直線的に立ち上がる。内面にはユビナデによる凹凸がわずかにみられる。497は須恵器の杯の底部片である。断面方形状の高台を貼り付ける。

SK6（図3－134）

調査区南東側に位置し，西側を近現代の撹乱に壊される。平面形は楕円形を呈し，残存部分で長径0.97m，短径0.80m，深さ10cmを測る。主軸方向はN－66°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトで，遺物は出土しなかった。

SK7（図3－134）

調査区南東隅に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.20m，短径1.03m，深さ15.6cmを測る。主軸方向はN－85°－Eである。埋土は黒褐色粘質シルトで，底の部分は砂質が強い。遺物は土師器が出土し，1点（498）を図示した。

出土遺物（図3－135）

498は土師器の杯の口縁部片である。体部は丸みをもって立ち上がり，口縁部はわずかに外反し，端部は肥厚させ丸くおさめる。

SK8（図3－134）

調査区南東端に位置し，SK10に切られる。平面形は楕円形を呈し，残存部分で長径1.44m，短径1.16m，深さ43cmを測る。主軸方向はN－75°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルト主体で，小円礫

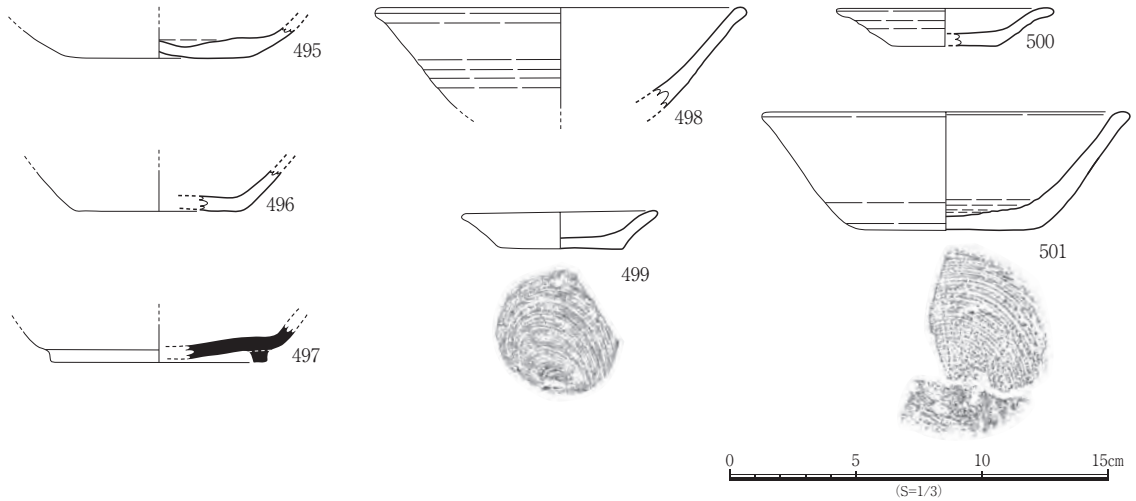


図3－135　SK5・7・8・10出土遺物実測図

を多く含む。遺物は土師器と土師質土器が出土し，土師質土器1点(499)を図示した。

出土遺物(図3－135)

499は土師質土器の小皿である。底部は回転糸切りで，体部は底部からわずかに段をもって外反気味に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデ調整である。

SK9(図3－134)

調査区南側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.45m，短軸0.88m，深さ24.7cmを測る。主軸方向はN－85°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトで，砂質が強い。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SK10(図3－134)

調査区南東端に位置し，SK8を切る。南側の一部が調査区外のため平面形は不明である。検出部分で長さ0.89m，幅0.54m，深さ32cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘質シルトで，細かい円礫を多く含み，下層は黒褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色シルトが粒状に混じる。遺物は土師器と土師質土器が出土し，2点(500･501)を図示した。

出土遺物(図3－135)

500は土師質土器の小皿である。底部はヘラ切りのち丁寧なナデ調整が施される。体部は外反して立ち上がり，口縁部は水平に近くなる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデ調整で，底部内面にはユビナデによる凹凸がみられる。501は土師器の杯である。底部は回転糸切りで，体部はベタ底の底部から直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが，底部内面にユビナデによる凹凸がみられる。

SK11(図3－134)

調査区南側に位置する。平面形は不整長方形を呈し，長軸2.48m，短軸0.9m，深さ25cmを測る。主軸方向はN－7°－Wである。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK12(図3－134)

調査区南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.23m，短径1.17m，深さ41.6cmを測る。主軸方向はN－1°－Eである。埋土は黒褐色粘質シルトで，円礫が投げ込まれている。遺物は土師器と須恵器の細片が出土したが，図示し得るもの

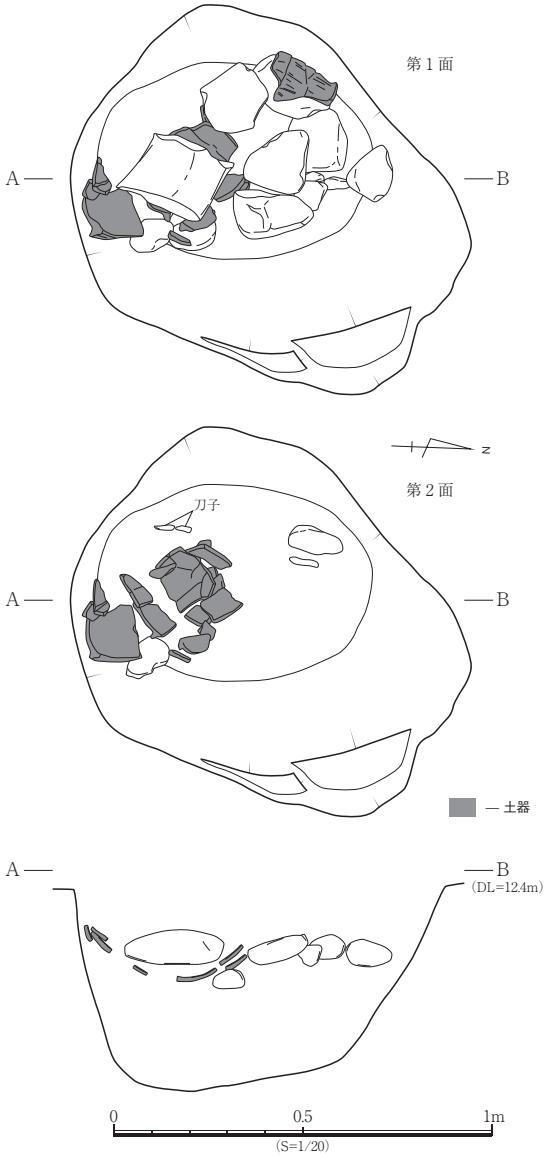


図3－136　SK13出土状況図

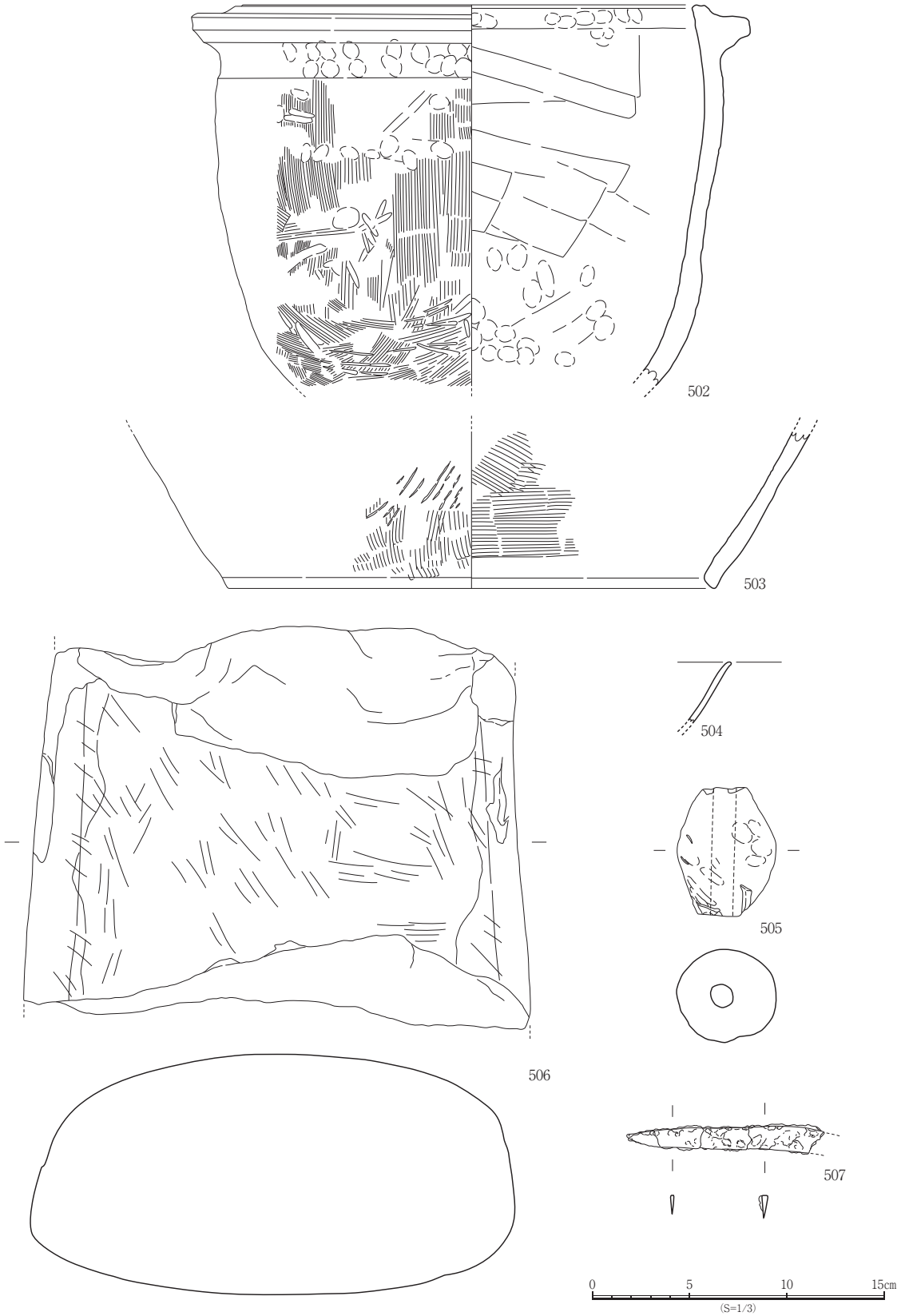


図3－137　SK13出土遺物実測図

はなかった。

SK13（図3－136）

調査区南西端に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径 1.08m，短径 0.88m，深さ 53.9cm を測る。主軸方向はＮ－6°－Ｅである。埋土は黒褐色粘質シルトで，円礫と砂粒を多く含む。埋土上層に投げ込まれた礫に押しつぶされた形で土師器の羽釜が出土した。その他に灰釉陶器の細片，土錘，刀子が出土し，6点（502～507）を図示した。

出土遺物（図3－137）

502・503 は土師器である。502 は摂津型の羽釜で，ほぼ完形であるが底部を欠く。口縁部直下に断面方形の鍔が付く。503 は甑の底部片である。504 は灰釉陶器の椀の口縁部片である。施釉は薄く，外面は薄緑色に斑に発色する。505 は土錘である。中央部に最大径をもち，長さ 6.7cm，幅 5.1cm，厚さ 4.8cm，孔径 1.1cm，重さ 138.9g を測る。外面に指頭圧痕が残る。506 は砂岩で，被熱し，全体に赤色化する。両側面は煤が付着するため，カマドなどの側石と考えられる。507 は刀子である。断面は三角形で，基部を欠損する。残存部分での長さ 10.2cm，幅 1.4cm，厚さ 0.3cm，重さ 10.0g を測る。

SK14（図3－138）

調査区南西隅に位置する。平面形は不整楕円形を呈し，長径0.96m，短径0.76m，深さ26.4cmを測る。主軸方向はＮ－7°－Ｗである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SK15（図3－138）

調査区南西端に位置する。南側の一部は調査区外のため平面形は不明である。SD6 と切り合うが前後関係は不明である。検出部分で長径 1.03m，短径 0.92m，深さ 23.1cm を測る。埋土は黒褐色粘質シルトで，底に炭化物が多く混じる。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SK16（図3－138）

調査区中央部に位置し，P234に切られる。平面形は不整形を呈し，残存部分で長さ0.94m，幅0.64m，深さ 16.2cm を測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は弥生土器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

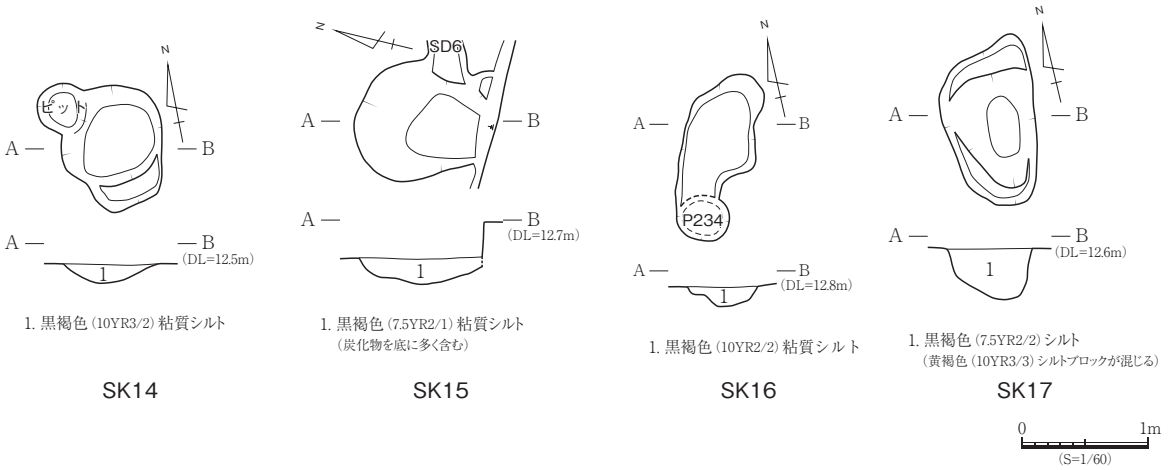


図3－138　SK14～17

SK17（図3－138）

調査区西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.24m，短径0.72m，深さ43.3cmを測る。埋土は黒褐色シルトで，黄褐色土のブロックが混じる。底には炭化物が多く混じる。遺物は弥生土器と土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

④ 土器棺墓

調査区北西部で4基を検出した。遺構番号は高田遺跡全体の通し番号となっている。いずれも小児用と考えられるが，周囲に竪穴建物跡がなく，Ⅱ区で検出された2基（SG1･2）とは埋葬場所に差異がみられる。

SG3（図3－139）

調査区北西側に位置し，上部が後世の削平を受ける。平面形は楕円形を呈し，長径0.33m，短径0.31m，深さ16.5cmを測る。埋土はほぼなく，土器棺がぴったりと嵌る形に掘られ，直立状態で埋納される。出土した弥生土器1点（508）を図示した。

出土遺物（図3－141）

508は土器棺の身として使用された壺である。削平により下胴部のみ残存する。平底で，胴部は中央部付近に最大径をもち丸く張る。外面の上胴部はヨコ方向，下胴部はタテ方向のハケ調整である。全体にタタキ目が残る。内面の調整は器面の剥離が著しく不明である。

SG4（図3－140）

調査区中央部に位置し，上部が後世の削平を受け，P234にも切られる。平面形は楕円形を呈し，残存部分で長さ0.42m，幅0.47m，深さ16.8cmを測る。埋土はほとんどなく，土器棺がぴったりと嵌る形に

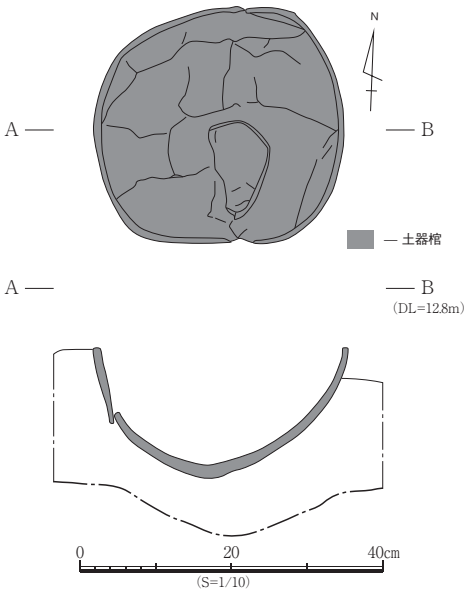
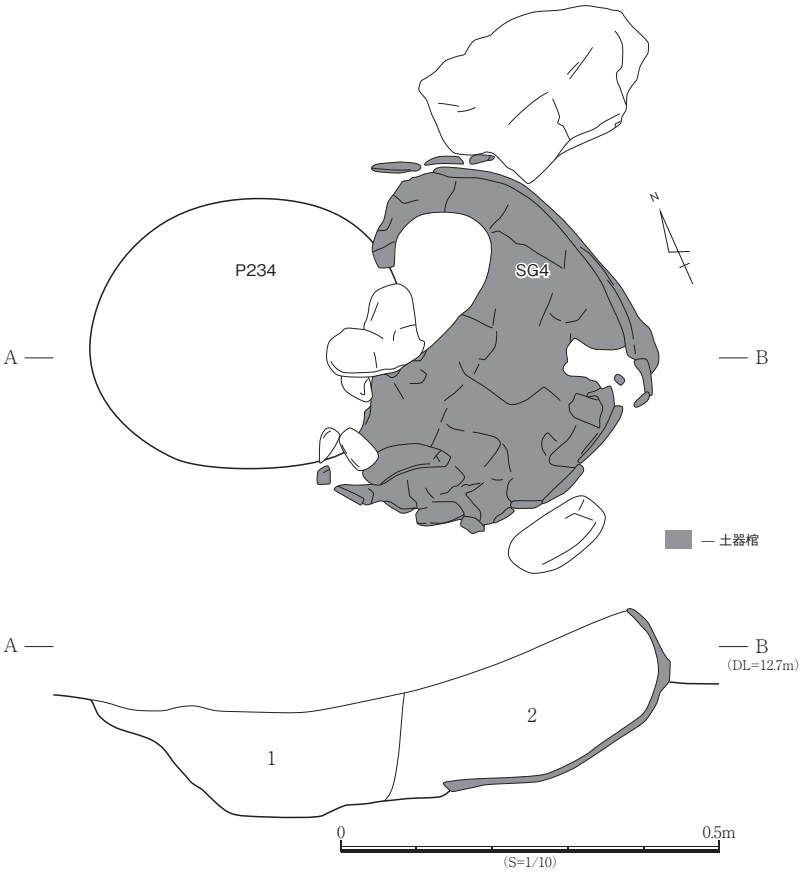


図3－139　SG3出土状況図



1. 黒褐色（10YR2/2）粘質シルト（P234）
2. 黒褐色（10YR3/3）粘質シルト（SG4）

図3－140　SG4出土状況図

掘られ，横位に埋納される。主軸方向はN－55°－Wである。出土した弥生土器１点(509)を図示した。

出土遺物(図3－142)

509は土器棺の身として使用された壺である。削平により胴部の一部のみ残存する。平底で，胴部は底部から屈曲して立ち上がる。中央部付近に最大径をもち丸く張る。外面はヘラミガキが施され，上胴部にはナナメ方向のハケ目が残り，底部側面にわずかにタタキ目が残る。内面の調整は器面の剥離が著しく不明瞭であるが，指頭圧痕が残る。

SG5(図3－143)

調査区北西側に位置し，上部が後世の削平を受ける。平面形は楕円形を呈し，長径0.50m，短径0.45m，深さ16.6cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトである。土器棺は下胴部を底に付け，口をナナメ上に向けて埋納され，主軸方向はN－0°である。出土した弥生土器2点(510・511)を図示した。

出土遺物(図3－143)

510は土器棺の蓋として使用された壺である。上半部は打ち欠かれ，下半部を使用する。外面は全体にヘラミガキが施され，内面はヘラケズリで上部にはナデがみられ，指頭圧痕が残る。511は土器棺の身として使用された壺である。頸部から上を打ち欠き，頸部根元の文様部分から胴部を使

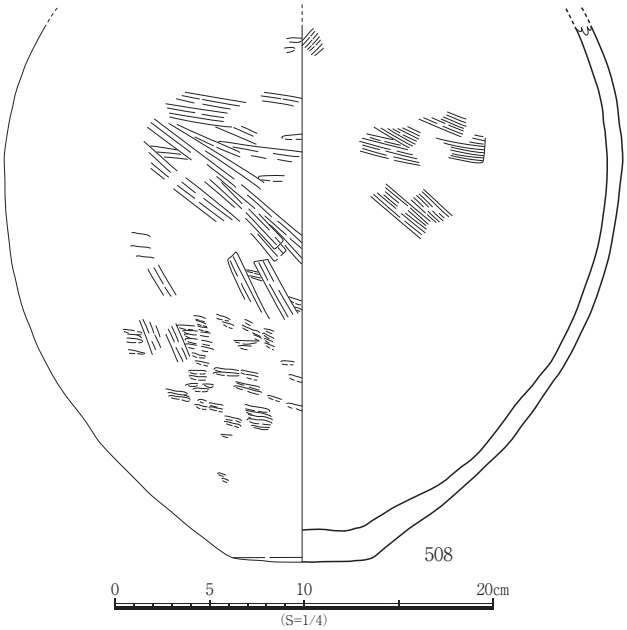


図3－141　SG3出土遺物実測図

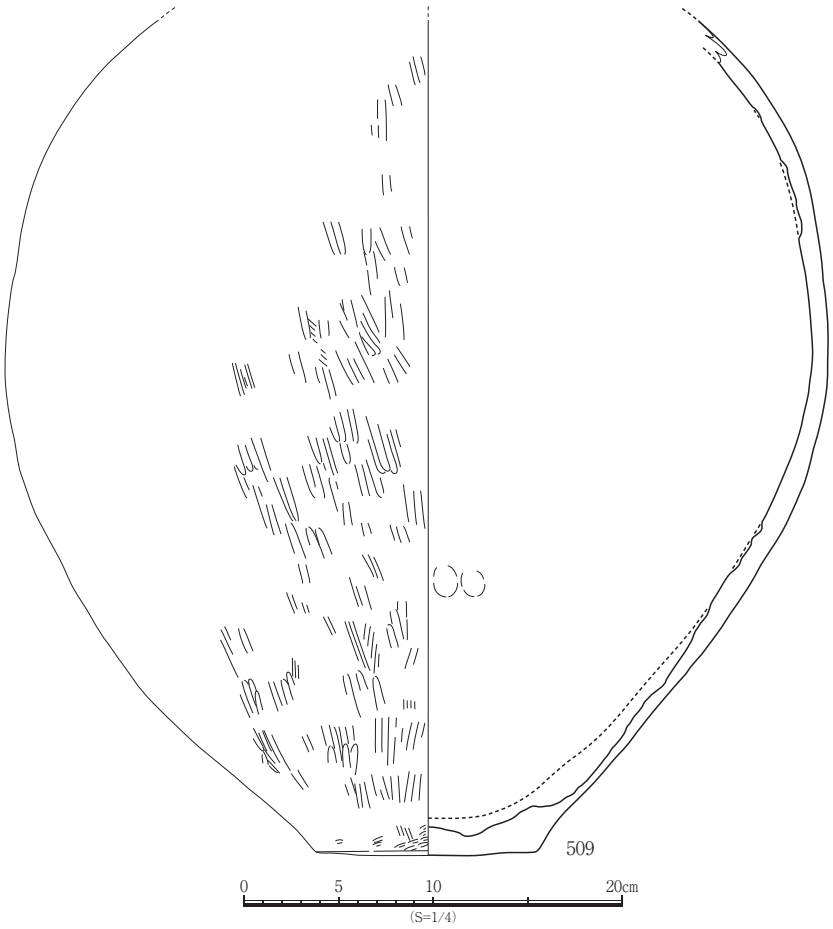


図3－142　SG4出土遺物実測図

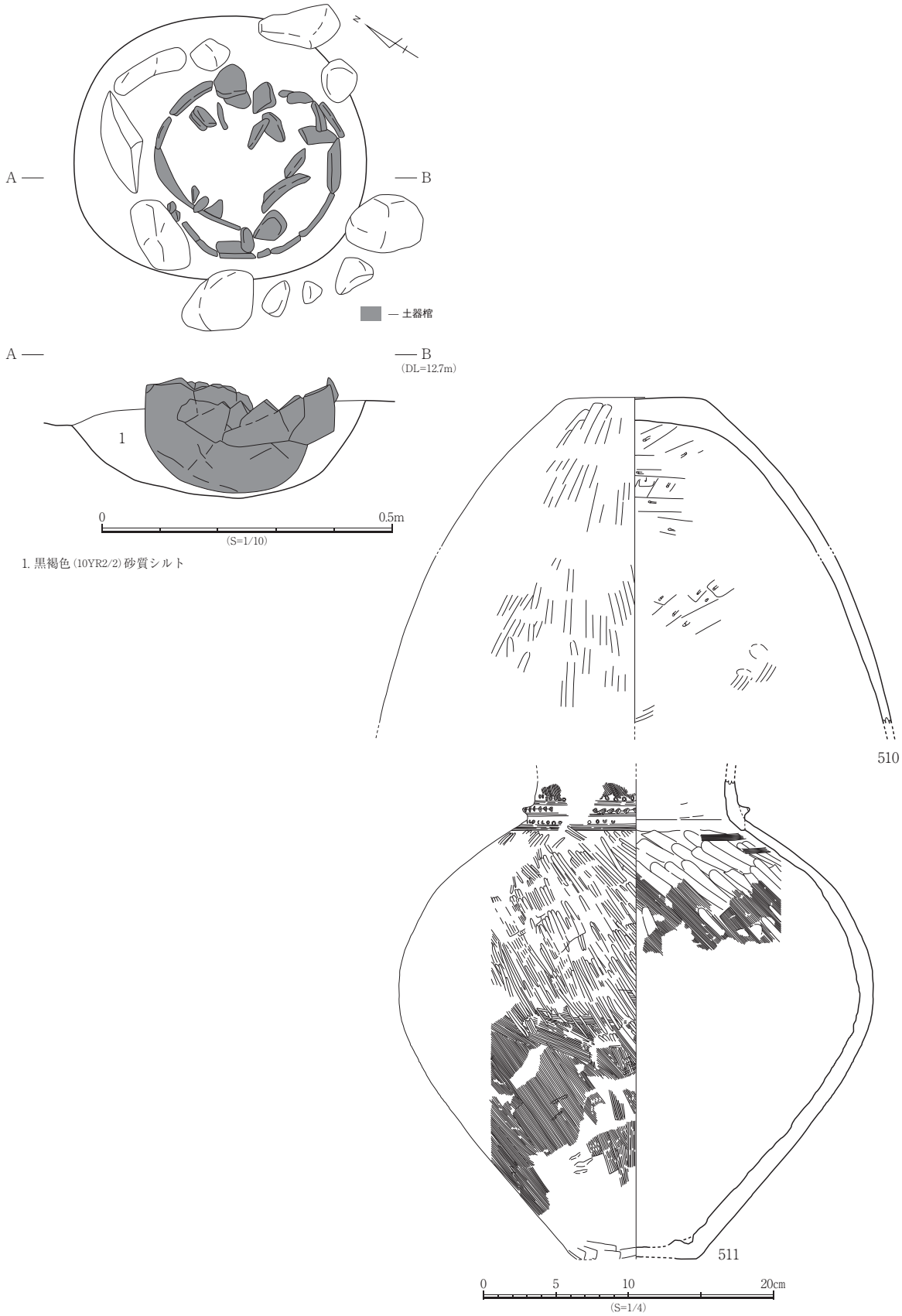
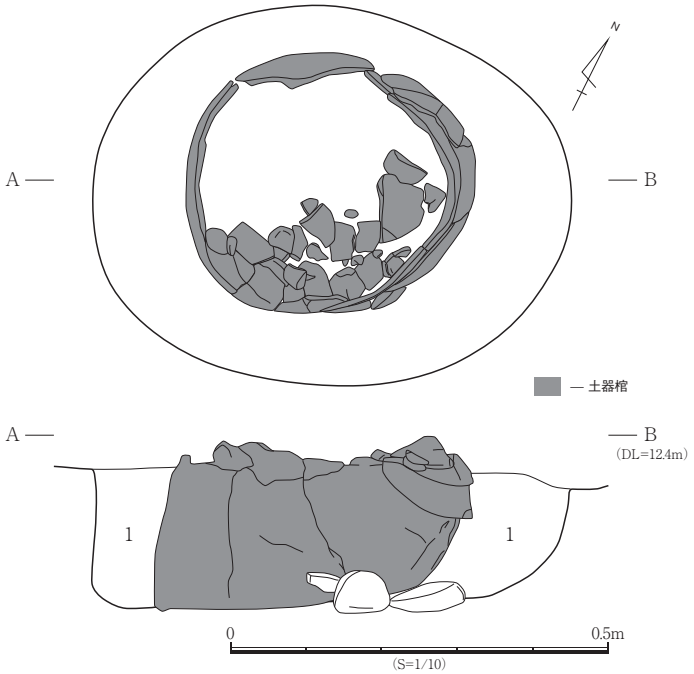


図3－143　SG5出土状況図・出土遺物実測図



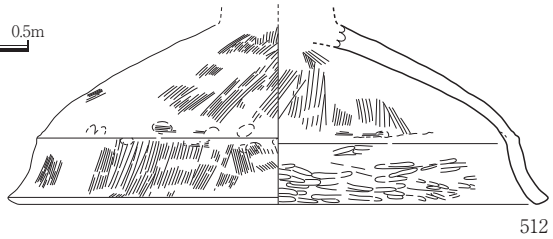


図3－144　SG6出土状況図・出土遺物実測図

用する。平底で，胴部は底部から直線的に立ち上がり，最大径を上胴部にもつ。頸部の根元に断面三角形の刻目突帯を貼付し，その下に竹管文を施す。

SG6（図3－144）

調査区北西隅に位置し，上部が後世の削平を受ける。平面形は楕円形を呈し，長径0.63m，短径0.49m，深さ18.2cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトである。土器棺は下胴部を底に付け，上胴部に円礫を敷き，口をナナメ上に向けて埋納される。主軸方向はN－64°－Eである。出土した弥生土器2点(512・513)を図示した。

出土遺物（図3－144）

512は土器棺の蓋として使用された有稜高杯の杯部である。脚部は打ち欠かれる。外面は全体にタテ方向のハケ調整が施され，稜はナデ調整である。内面の口縁部にはミガキが施され，下部はハケ調整である。513は土器棺の身として使用された壺である。頸部から上部は打ち欠かれ，体部を使用する。胴部は底部から段をもって立ち上がり，最大径を中央部にもつ。内面はナデのちハケ調整で，下半部から底部にかけて器面が剥離する。外面は全体にハケとナデ調整が施され，わずかにタタキ目が残る。

⑤ 溝跡

調査区全域で6条を検出した。後世の削平を受けたとみられ，いずれも残存状態が良くなかった。

SD1（図3－145）

調査区北西隅に位置する。調査区の北に延び，南は調査区内で途切れる。検出部分で長さ9.8m，幅0.35～0.6m，深さ10～20cmを測り，主軸方向はN－5°－Eである。断面は逆台形で，埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器，須恵器の細片が出土し，銭貨1点(514)を図示した。

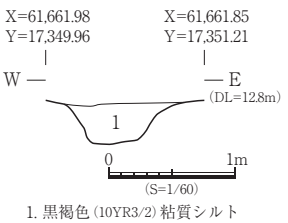


図3－145　SD1

出土遺物（図3－146）

514は寛永通宝である。銭径2.5cm，内径2.0cm，銭厚0.2cm，量目2.8gを測る。「寶」の字が潰れ気味であるが，他の文字は明瞭である。背文は「文」である。

図3－146　SD1出土遺物実測図

SD2

調査区北東隅に位置する。調査区の北に延び，南は調査区内で途切れる。検出部分で長さ9.25m，幅0.45～0.8m，深さ6～13cmを測る。緩やかに湾曲し，主軸方向はN－2°～22°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトで，小円礫を含む。遺物は土師器，須恵器，黒色土器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SD3

調査区北東隅，SD1南端の西側に位置する。検出部分で長さ2.85m，幅0.5～0.65m，深さ8～18cmを測り，主軸方向はN－31°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SD4

調査区東側中央部に位置する。検出部分で長さ4.15m，幅0.25～0.35m，深さ7～13cmを測り，主

軸方向はN－72°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

SD5

調査区南東側に位置する。検出部分で長さ1.95m，幅0.2～0.3m，深さ5～11cmを測り，主軸方向はN－83°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD6

調査区南西側に位置する。検出部分で長さ1.65m，幅0.3～0.4m，深さ6～10cmを測り，主軸方向はN－72°－Wである。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土師器の細片が出土したが，図示し得るものはなかった。

⑥ ハンダ土坑

土坑の壁面から底までを漆喰で塗り固め，水溜めなどに利用されたと考えられる遺構である。調査区南東隅で2基を検出した。埋土はいずれも黒褐色粘質土で，円礫や漆喰の破片を多く含む。ハンダ土坑1からは煙管の吸口が1点出土したのみである。ハンダ土坑2からは土師器の細片の他に土師質土器の焜炉と磁器が出土し，2点(515・516)を図示した。

出土遺物(図3－147)

515は土師質土器の焜炉である。鉢形の体部に輪高台が付く。前面の開口部の下に刻印が施される。516は染付碗である。外面は網目文，口縁部内面に格子目文が描かれる。見込みには圏線の中央部に二重の環状文様が描かれる。高台の畳付は露胎し，砂が付着する。

⑦ 性格不明遺構(図3－148)

調査区の東側でSX1～5を検出した。いずれも大量の川原石が投げ込まれている。平面形は楕円形または隅丸長方形を呈し，長径1.6～1.9m，短径1.5～1.8m，深さ35～70cmである。なお，SX1は掘削すると浅い凹みであったため欠番とした。SX2の東側は調査区外である。SX3・4は埋土のほとんどが円礫であるために切り合い関係が不明瞭であるが，SX3が切っていると考えられる。SX5は上面を現代の撹乱に壊されており，他の遺構と比較すると円礫は少量である。各遺構からは，土師器，須恵器，陶器などが出土したが，図示し得たものはSX3･4から出土した1点(517)のみである。

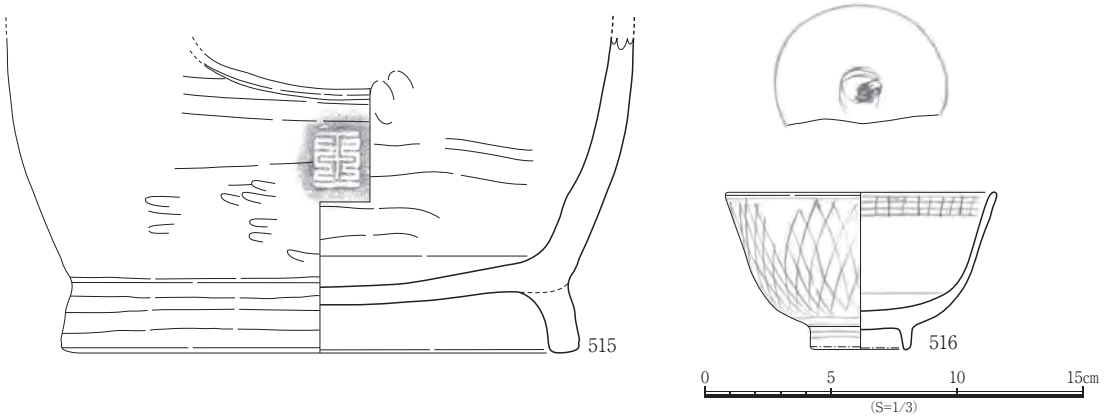


図3－147　ハンダ土坑2出土遺物実測図

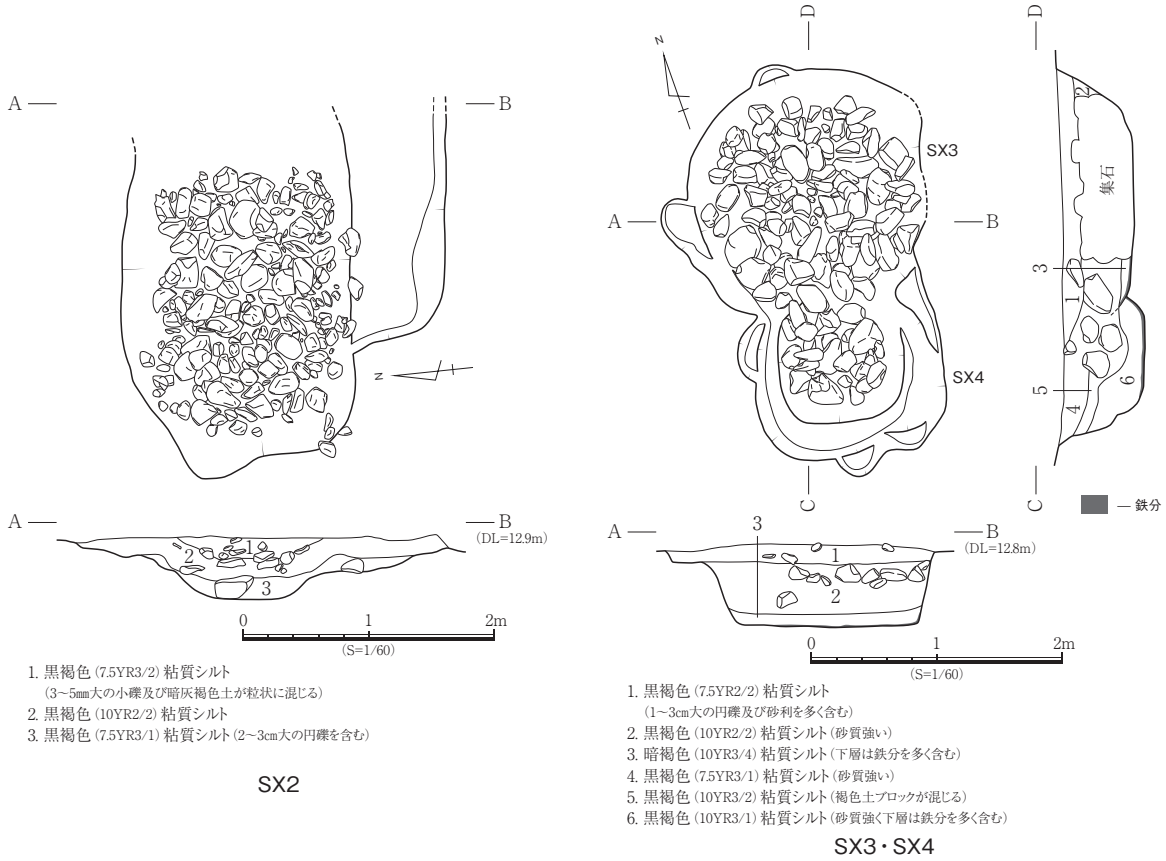


図3－148　SX2～4出土状況図

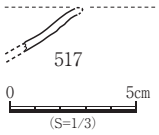


図3－149　SX3･4出土遺物実測図

出土遺物(図3－149)

517は陶器の皿の口縁部片である。口縁端部も欠損し，摩耗が著しく調整は不明である。

⑧ ピット

調査区全域で592個を検出した。出土した遺物のうち13点(518～530)を図示した。

出土遺物(図3－150)

518はP3から出土した須恵器の壺である。胴部は内外面ともに回転ナデ調整である。底部の内面は回転ナデ調整による凹凸がみられ，外面は切り離し痕を丁寧にナデ消す。高台は断面方形で「ハ」の字に開く。519はP22から出土した須恵器の高杯の杯部である。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁部は厚みを減じて緩やかに外反し，端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデ調整である。520はP85から出土した弥生土器の鉢の底部片である。体部は厚みのある小さな平底からわずかに内湾しながら立ち上がる。外面はタタキ成形のち軽いナデ調整で，タタキ目が残る。内面はハケ調整である。底部内面に板状工具による調整痕が残る。521はP89から出土した土師器の甕の口縁部片である。内面に稜をもち「く」の字に外反し，端部は強いヨコナデにより面をなす。内外面ともに回転ナデ調整である。522はP136から出土した弥生土器の高杯の脚部である。大きく「ハ」の字に開く脚の裾部片で，内外面ともに丁寧なナデ調整がみられ，端部は強いヨコナデにより面をなす。523はP144から出土した弥生土器の甕の上胴部片である。外面はタタキ成形のちタテ方向のハケ調整，

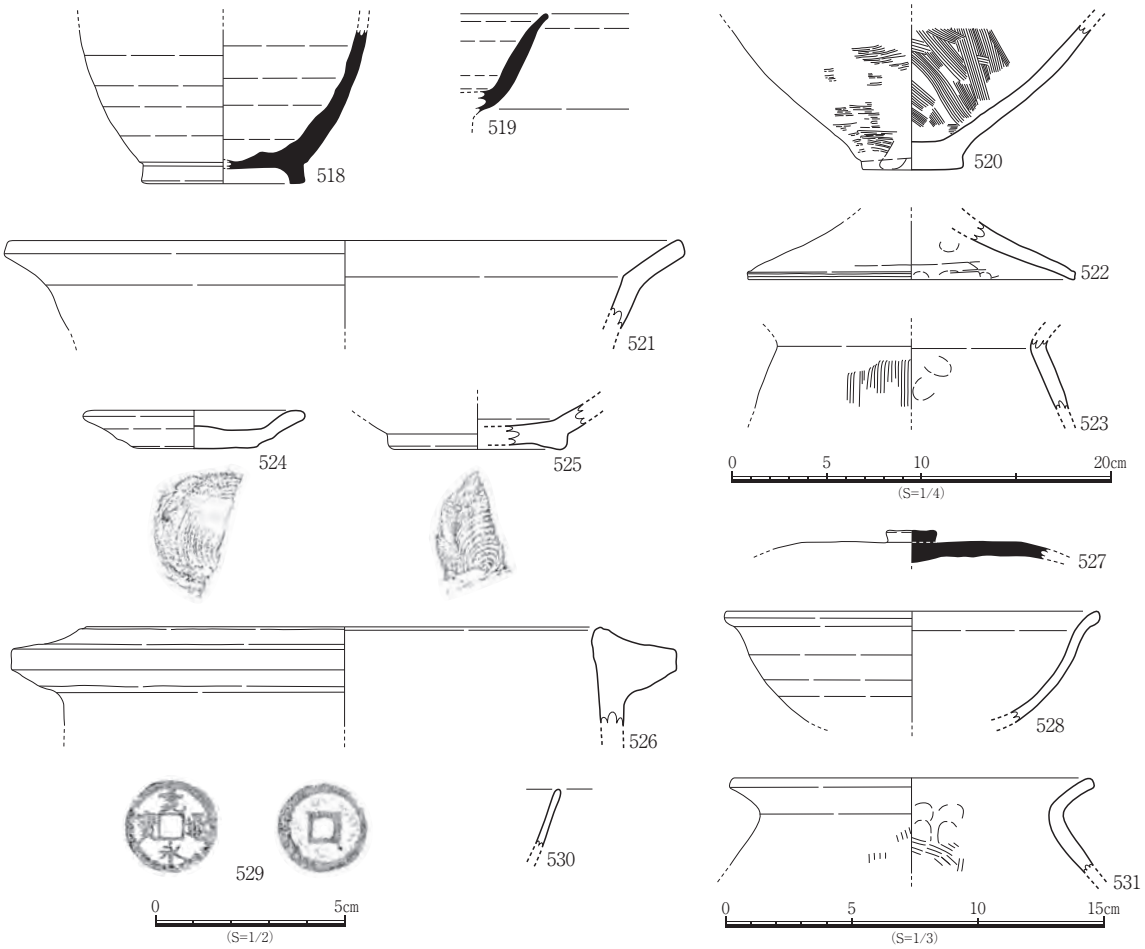


図3－150　ピット出土遺物実測図

内面はヨコナデ調整でわずかに指頭圧痕が残る。524はP159から出土した土師器の小皿である。底部は回転糸切りで，簾状の圧痕が残る。口縁部の一部に煤が付着することから灯明皿と考えられる。525はP160から出土した土師器の椀の底部片である。底部は糸切りの円盤状高台で，中央部は凹む。内面は丁寧な回転ナデ調整により平滑に仕上げられる。526はP215から出土した土師器の羽釜の口縁部片である。口縁部直下に鍔が付く摂津型の羽釜である。527はP242から出土した須恵器の杯蓋である。上面はほぼ平坦で，基部がわずかに括れた円筒形のつまみが付く。外面はケズリ，内面はナデ調整である。528はP255から出土した土師器の椀の口縁部片である。体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は外反する。端部は玉縁状に肥厚させる。内外面ともに回転ナデ調整である。外面は被熱により赤色化し，内面と断面には煤が付着する。529はP261から出土した銭貨である。背文のない寛永通宝で，銭径2.5cm，内径2.0cm，銭厚0.2cm，量目3.6gを測る。530はP269から出土した陶器の碗である。近世の京焼系とみられる。531はP272から出土した土師器の甕である。「く」の字に外反する口縁部で，内外面ともにヨコナデ調整がみられ，端部は面をなす。頸部内面に指頭圧痕が残る。

⑨ 包含層出土遺物

本調査区では包含層を基本層序のⅢ層とⅣ層としているが，全体的に薄くⅢ層とⅣ層が判別できない場所があるため，Ⅳ層と判別できたもの以外は包含層一括として報告する。

Ⅳ層出土遺物

弥生土器(図3－151)

532～534は壺で，532は口縁部片である。内傾する頸部から大きく外反し，端部は強いヨコナデにより四角くおさめる。533は底部片である。体部は平底からわずかに屈曲して立ち上がる。外面はタタキ成形のちタテ方向のハケ調整を行い，下半部にわずかにタタキ目が残る。内面はナデ調整による指頭圧痕が残る。534は底部片である。体部は丸みをもった平底の底部からわずかに段をもち丸みをもって立ち上がる。磨耗が著しく調整は不明瞭だが，外面にわずかにハケ目がみられる。535～541は甕である。535の口縁部は「く」の字に外反し，端部は面をなし，肥厚させる。外面はタテ方向の粗いハケ調整，内面はヨコ方向の粗いハケ調整である。536の口縁部は「く」の字に屈曲し，端部は面をなす。外面は強いヨコ方向のナデ調整により凹凸がみられ，指頭圧痕が残る。内面はヨコ方向のハケ調整である。537の口縁部は「く」の字に外反し，端部は面をなす。外面の口縁部と端部はヨコナデ，頸部はタテ方向の粗いハケ調整である。内面はヨコ方向の粗いハケ調整である。538の口縁部は内面に稜をもって外反し，端部は面をなす。内外面ともに強いヨコナデによる凹凸がみられる。外面はタタキ成形のちタテ方向のハケ調整，内面は板状工具によるナデ調整のちユビナデ調整で，指頭圧痕が残る。539の口縁部は丸みをもった体部から屈曲して外反する。頸部は内外面ともにヨコナデ調整である。上胴部外面はタタキ成形のちナデ調整，内面はナデ調整による指頭圧痕が残る。540･541は底部片である。540は平底で，外面はタタキ目が残り，内面は板状工具によるタテ方向のナデ調整である。541は内面は板状工具と指頭によるナデ，外面は板状工具によるナデ調整である。542は鉢である。丸みをもった体部に口縁部は短く外反する。端部は強いヨコナデにより面をなす。体部の外面はタテ方向のハケ調整のちナデ消すが，ハケ目が残る。内面はヨコナデ調整のちタテ方向の細かいハケ調整である。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。543は蓋のつまみ部分である。外面に指頭圧痕と指紋が残る。

土師器(図3－152)

544～546は皿である。544の底部はヘラ切りで，未調整のまま凹凸が残る。体部はわずかに内湾し

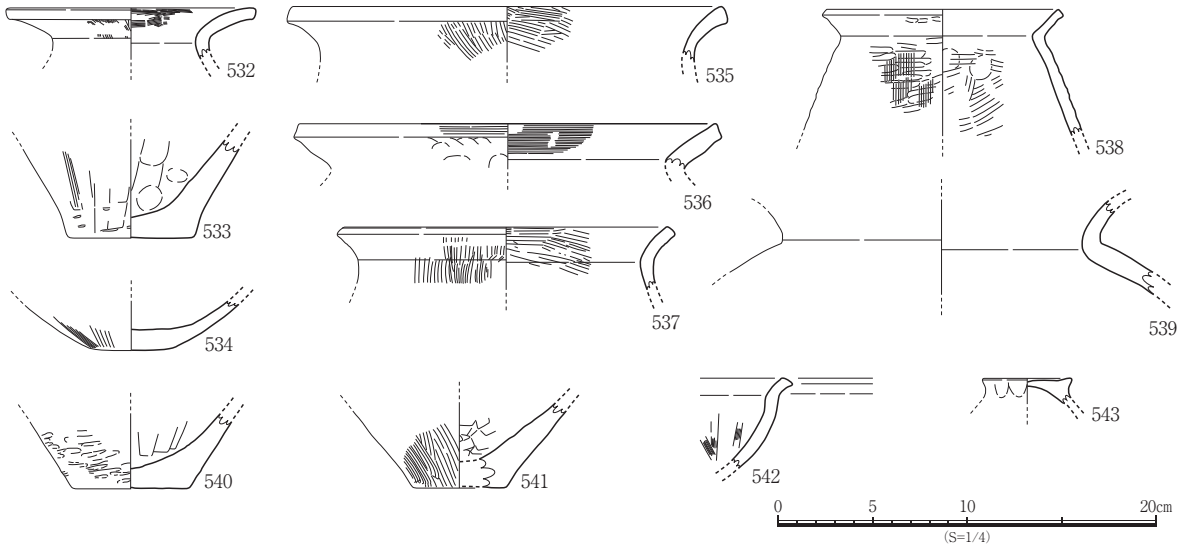


図3－151　第Ⅳ層出土遺物実測図1

ながら立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。545 の底部はヘラ切りのちナデ調整である。口縁部は外反し，端部は丸くおさめる。546 は底部に糸切り痕が残る。厚みのある短い口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。547 は盤としたが，蓋または高杯の杯部の可能性もある。口縁端部の内側が折り込み状に丸まる。外面の屈曲部に刻目状の刺突がみられる。548 ～ 556 は杯である。548 は丸みをもった体部から短く外反する口縁部の外側に沈線が 1 条施される。口縁部内面は剥離して欠損する。内面には放射状の暗文を施す。体部外面はタテ方向のハケ調整である。549 は器壁の薄い作りである。底部はヘラ切りのちナデ調整で，体部は底部からわずかに段をもち直線的に立ち上がる。550 の底部はヘラ切りで，内面には回転ナデ調整の指頭による凹凸がみられる。体部は底部からわずかに段をもち直線的に立ち上がる。551 の底部は回転ヘラ切りのちナデ調整である。体部は底部から丸

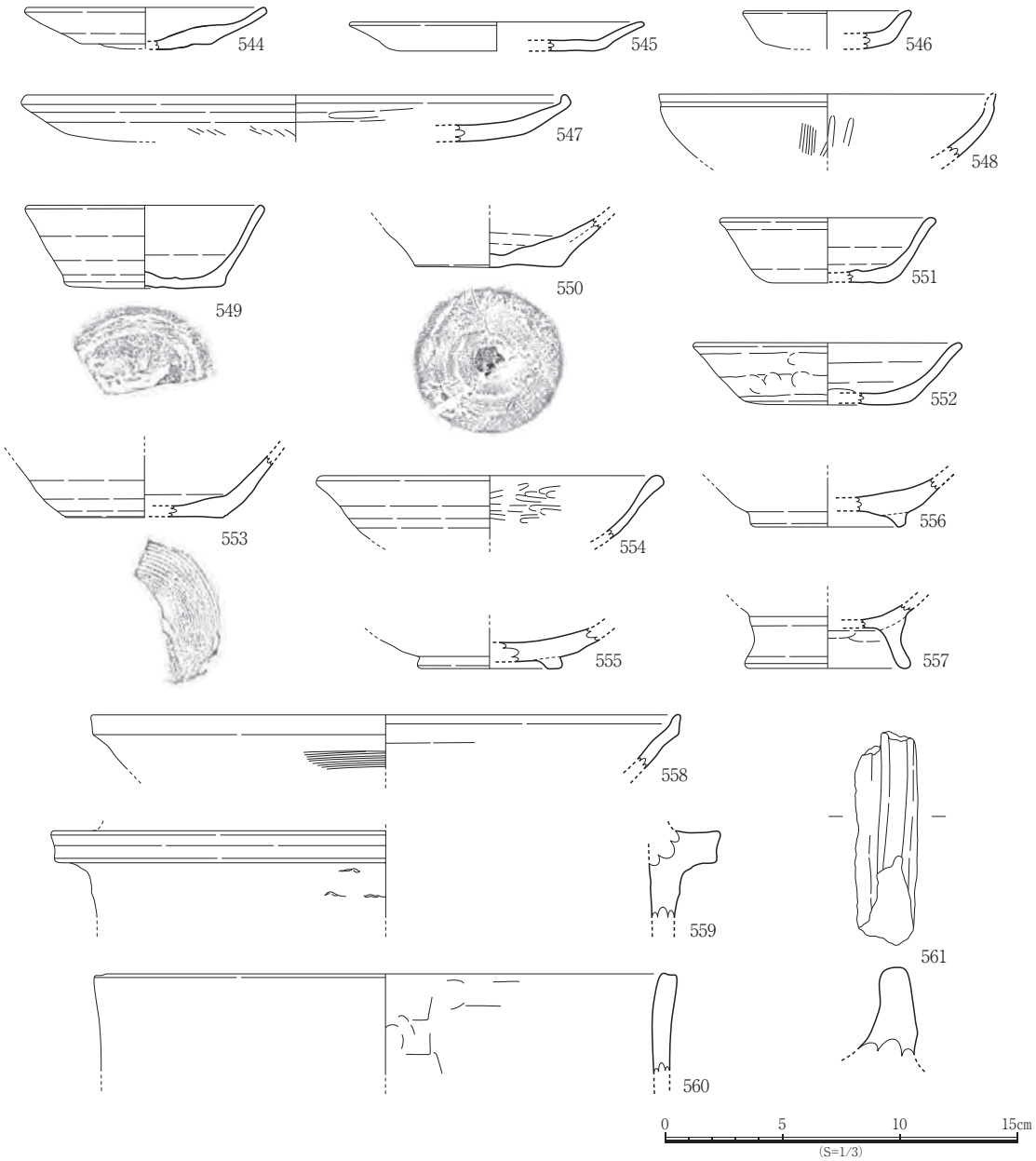


図3－152　第Ⅳ層出土遺物実測図2

みをもって立ち上がり，口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。552 の底部の切り離し痕は不明瞭であるが，ナデが施される。口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。553 の底部は回転糸切りである。内外面ともに回転ナデ調整で，指頭による凹凸がみられる。554 の体部は緩やかに内湾し、わずかに外反する口縁部は端部を丸く肥厚させる。内面にはナデ調整のちミガキが施される。555 は底部に断面方形状の輪高台が「ハ」の字に付く。556 は糸切りの底部に断面台形状の輪高台が付く。内面はナデ調整である。557 は足高高台椀の底部片である。558 は甕である。口縁部は屈曲して外反し，端部は上方に摘み上げる。外面は口縁部の下までヨコ方向の粗いハケ調整である。559 は摂津型の羽釜である。断面方形状の鍔を口縁部外面に貼り付ける。鍔の端部は強いヨコナデにより凹みがみられる。560 は甑の口縁部片である。561 は移動式カマドの焚き口の鍔部と考えられる。

須恵器（図3－153）

562･563 は皿である。562 の体部は平底の底部から短く外側に立ち上がる。口縁部は外反し，端部は四角くおさめる。口縁部内面は強いナデにより凹む。563 の底部はヘラ切りのちナデ調整である。体部はやや丸みを帯びて直線的に外側に立ち上がり，口縁部は厚みを減じて丸くおさめる。564 ～

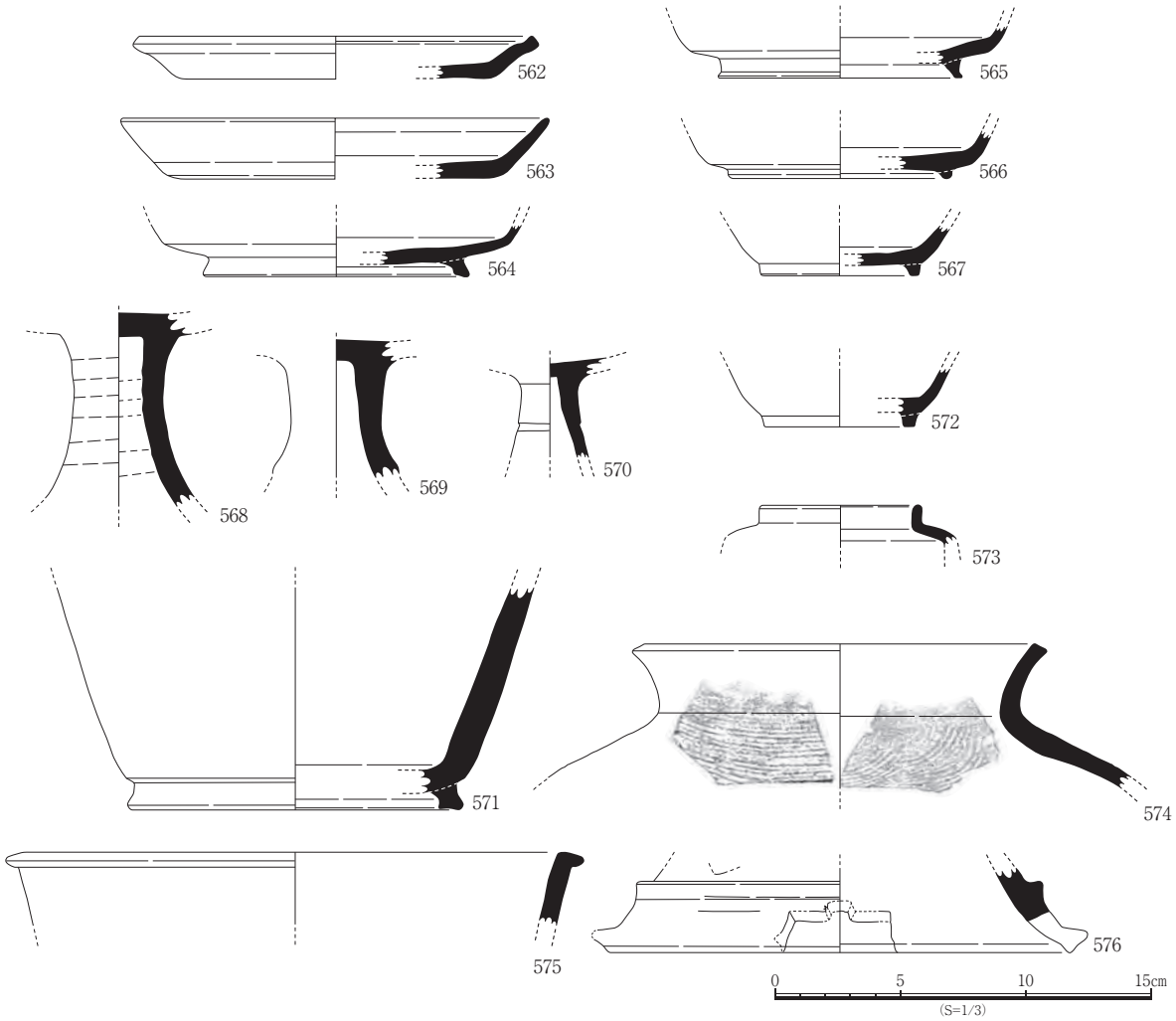


図3－153　第Ⅳ層出土遺物実測図3

567 は杯である。564 は底部の内側に断面方形状で端部が内傾した高台が付く。体部は底部から屈曲して立ち上がる。底部は回転ケズリのちナデ調整である。565 は底部の内側に断面台形状の高台が付き，端部は外側に摘み出す。体部は底部から屈曲して立ち上がる。566 は底部の内側に断面方形状の高台が付く。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。外面はナデ調整で，底部には爪状圧痕が残る。567 は底部の外側に断面台形状の高台が付く。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。568 ～ 570 は高杯の脚部である。568 の外面は回転ナデ調整，内面は上部がナデ調整，下部が回転ナデ調整である。569 は分割成形で，杯部との接合痕がみられる。570 は外面上部に沈線を 1 条施す。571 ～ 573 は壺である。571 は底部に断面台形状の高台が付き，端部は内外に摘み出し，強いナデにより凹む。体部は直線的に立ち上がる。外面はタタキ成形のちナデ消し，内面はヨコナデ調整である。572 は底部に断面方形状の高台が付く。573 は短頸壺である。頸部は肩の張った体部から短く立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。574 は甕である。口縁部は外反しながら立ち上がり，端部は四角くおさめ，強いナデによりわずかに凹む。外面は平行なタタキ目に自然釉がかかる。内面は円弧状のタタキ目をナデ消す。575 は鉢である。口縁端部を外側に屈曲させる。端部の上下は強いヨコナデにより面状になる。576 は円面硯の脚部片である。凸形とみられる透かしが入り，下端は開口する。突帯の上部にも透かしの痕跡がわずかに認められる。

黒色土器，緑釉陶器，瓦器，白磁，土製品，瓦，石製品，鉄滓（図3－154）

577は黒色土器の椀である。内黒で，断面台形状の高台が付く。578は緑釉陶器の杯または皿である。高台端部の内側に段をもつ。全面に施釉し，畳付部は削り取る。579 は瓦器の椀である。口縁部はわずかに外反し，端部は丸くおさめる。内面はヘラミガキが施される。580 は白磁の碗である。口縁部

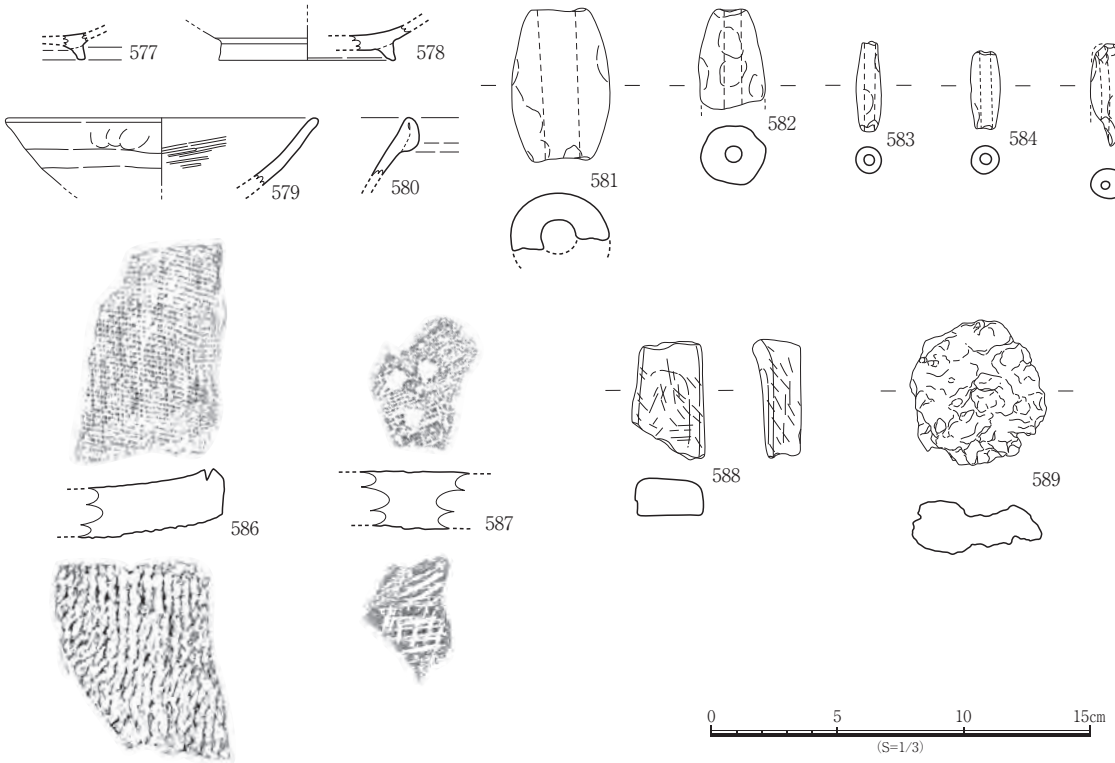


図3－154　第Ⅳ層出土遺物実測図4

は玉縁状に厚く肥厚させる。胎土に微細な気泡を含む。581 ～ 585 は土錘である。585 の外面は丁寧なナデ調整により平滑に仕上げられる。586･587 は平瓦である。586 は上面の布目痕が側端面まで付く。下面はタタキ成形による粗い縄目痕がみられ，側面は切断痕が残る。587 は上面に 3 ヶ所くぼみ状の欠損がある。588 は砥石である。砂岩製で，裏面は打割面をそのまま残す。589 は鉄滓である。

包含層出土遺物

弥生土器（図3－155）

590･591 は壺の底部片である。591 の底部外面には格子状の圧痕が残る。592 は鉢である。底部内面に指頭圧痕が残る。

土師器（図3－156）

593 は小皿で，底部は回転糸切りである。口縁部の内外面に煤が付着するため，灯明皿としての使用が考えられる。594 は赤色塗彩の皿である。口縁部の内面に沈線を 1 条施す。内外面ともに丁寧なミガキ調整である。595 は赤色塗彩の盤である。底部に断面方形状で端部が内傾した高台が付く。高台の内側と底部は無塗彩である。596 ～ 598 は杯である。596 の底部はヘラ切りで，丸み

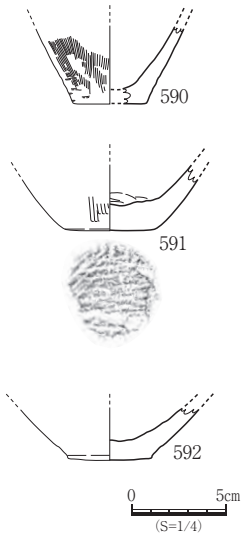


図3－155　包含層出土遺物実測図1

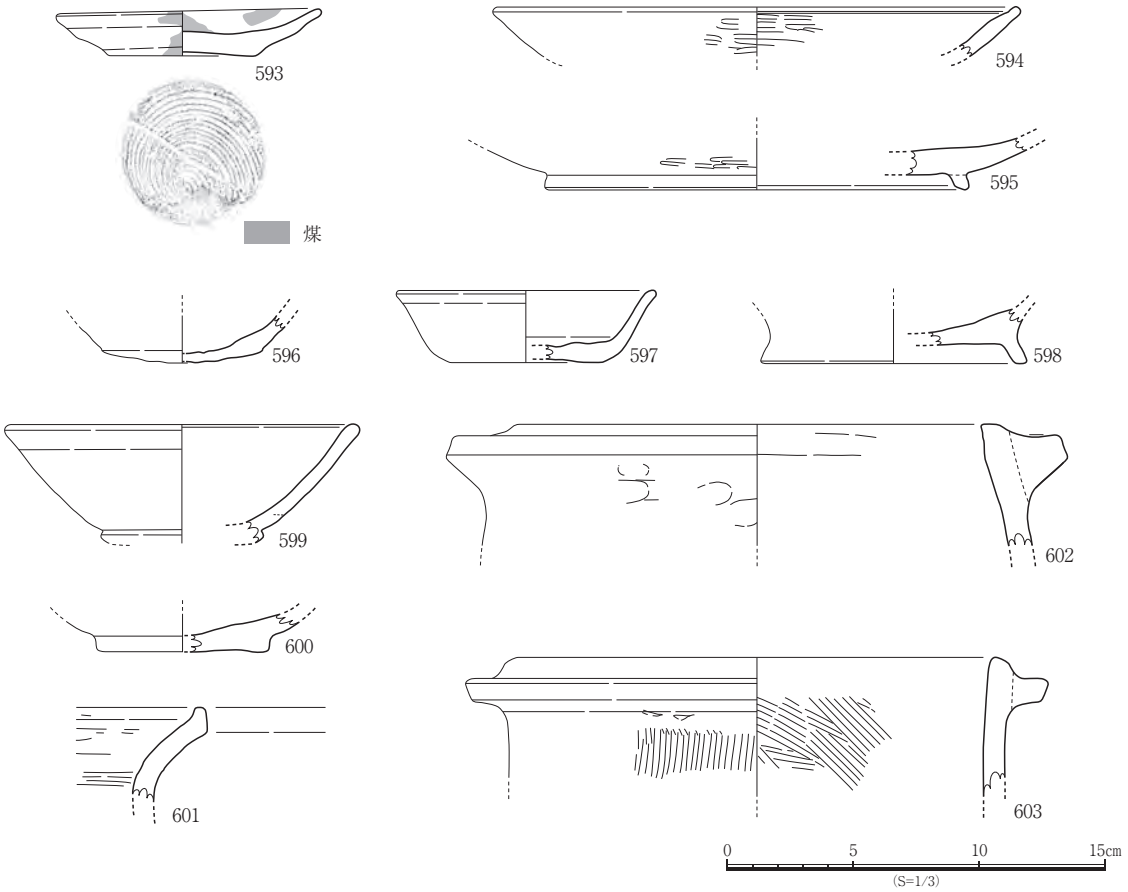


図3－156　包含層出土遺物実測図2

をもつ。体部は底部からわずかに段をもって立ち上がる。内面は回転ナデ調整により平滑に仕上げる。597 の底部外面の切り離し痕は不明瞭である。底部内面は回転ナデ調整による凹凸がみられる。598 は底部に断面長方形状の高台が付く。内面はナデ調整により平滑に仕上げる。磨耗により不明瞭であるが，底部の中央に穿孔していた可能性がある。599･600 は椀である。599 の底部はほとんど欠損するが，ベタ高台と考えられる。体部は底部からわずかに内湾しながら立ち上がり，口縁部は端部を肥厚させ丸くおさめる。内面はナデ調整により平滑に仕上げる。600 の底部は糸切りの円盤状高台である。601 は甕である。外反する口縁部の端部は上方に摘み上げる。外面はヨコナデ調整，内面はヨコ方向のハケ調整である。602･603 は摂津型の羽釜である。602 は内傾する口縁部の外面直下に断面台形状の鍔が付く。603 はほぼ直立する口縁部の外面に断面方形状の鍔が付く。外面はタテ方向の粗いハケ調整，内面はナナメ方向の粗いハケ調整である。

須恵器（図3－157）

604 ～ 606 は杯である。604 は底部に断面方形状の「ハ」の字に開く高台が付く。端部は強いナデにより外側に摘み出し，内傾する。605 は底部の端に断面方形状の高台が付き，端部は強いナデによりわずかに凹む。体部は丸みをもって立ち上がる。606 は底部の端に断面方形状の高台が付き，端部は強いナデによりわずかに凹む。607 ～ 609 は蓋である。607 は緩やかな丸みをもった天井部から口縁部を下方に屈曲させ，端部は丸くおさめる。口縁部内面に断面三角形のかえりが付く。608 の口縁部はにぶい稜をもって下方に屈曲させ，端部は丸くおさめる。609 は天井部から段をもって開いた口縁

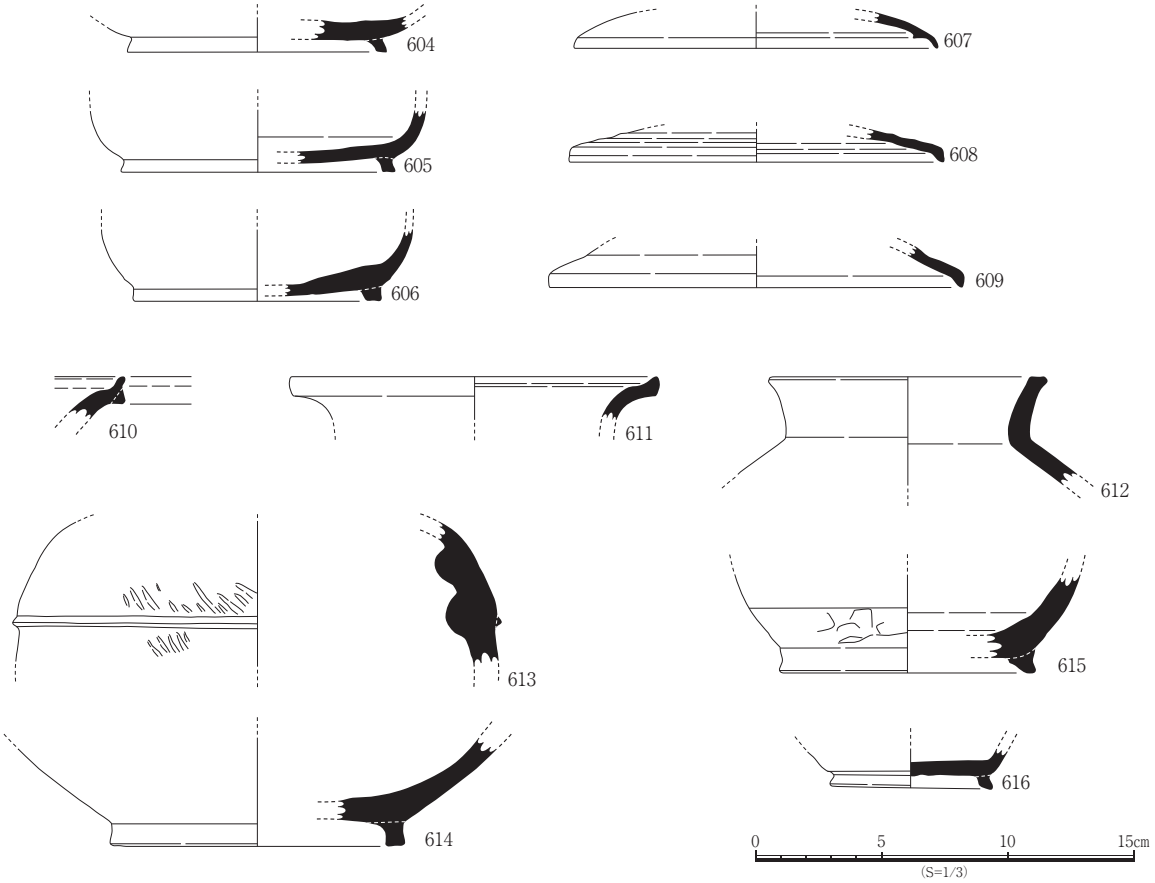


図3－157　包含層出土遺物実測図3

部を下方に屈曲させ，端部は丸くおさめる。610～616は壺である。610の口縁部は外反して大きく開き，端部は上方に摘み上げ，下方に断面三角形の粘土帯を貼付して拡張する。611の口縁部は外反して水平近く開き，端部は上方に摘み上げ，内面は強いナデにより凹みがみられる。612の口縁部は「く」の字に屈曲してわずかに外反しながら立ち上がる。端部は強いナデによりわずかに凹む。胴部外面に格子状のタタキ目が残る。613は焼成時に粘土中の気泡の膨張により変形したものである。外面の上胴部とみられる部分に断面三角形の突帯を貼付する。突帯の上下にタタキ目が残る。614は底部の外側に断面方形状の高台が付く。615は底部の外側に断面三角形状の高台が付き，端部は強いナデにより外側に「ハ」の字に開く。下胴部外面に接合痕が残る粗雑な仕上げである。616は底部の外側に断面方形状の高台が「ハ」の字に付き，端部は内傾し，強いナデにより外側に摘み出す。

緑釉陶器（図3－158）

617･618は，どちらも体部の細片であるため器形は不明である。617は素地が須恵質で，灰オリーブ色の薄手の釉がかかる。内外面に細かい擦痕が認められる。618は灰白色の胎土で，灰オリーブ色の釉がわずかに残る。

土製品，瓦，金属製品，石製品，陶器（図3－158）

619は土錘である。620は平瓦である。磨耗が著しい細片であるが，上面に布目痕，下面には斜格子状のタタキ目が残る。621は金属製品であるが，断片であるため器形などは不明である。青銅製で，筒状の内面に木片が付着する。622はサヌカイト製の石鏃である。623は瀬戸焼の灰釉菊皿である。薄い灰釉が見込みから体部外面にかかる。底部外面と高台は無施釉である。見込みの二重圏線と内外面の花弁を丸ノミ状の工具により表す。見込みに胎土目痕が3ヶ所残る。

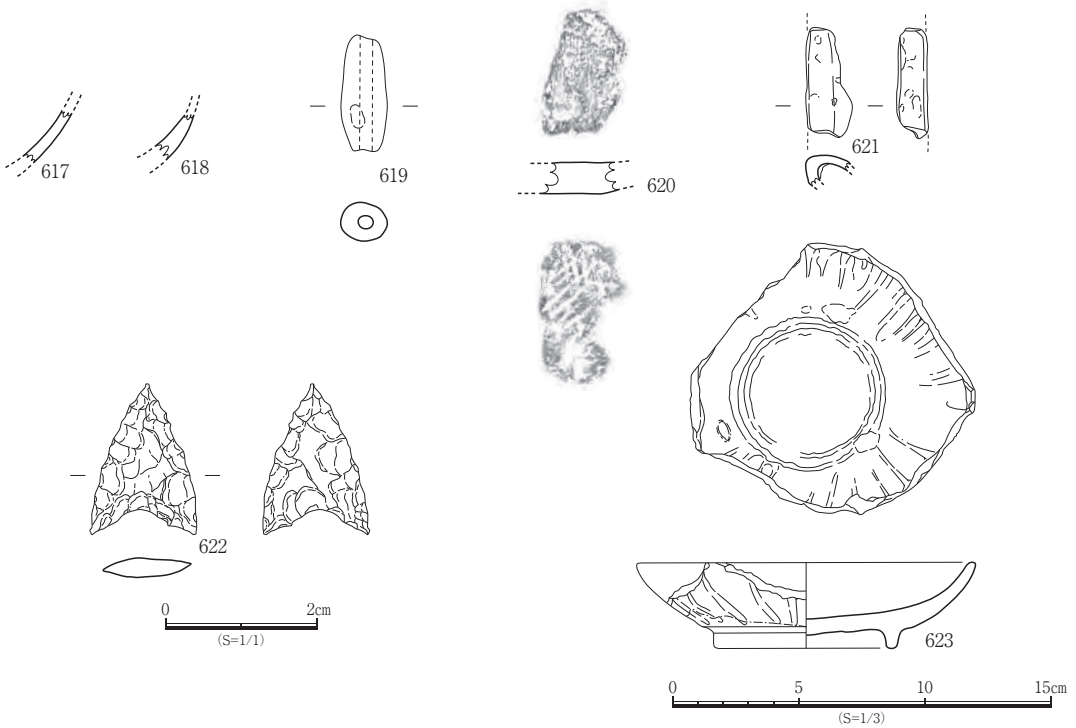


図3－158　包含層出土遺物実測図4

第Ⅳ章　宇賀遺跡

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

調査対象地の東端に位置する調査区で，面積は2,735 ㎡である。遺構は調査区の西側から検出されており，土坑１基，溝跡24条が検出されている。遺物は弥生時代から中世のものが若干出土し，表採から縄文時代のものと思われる石器剥片が1点出土している。

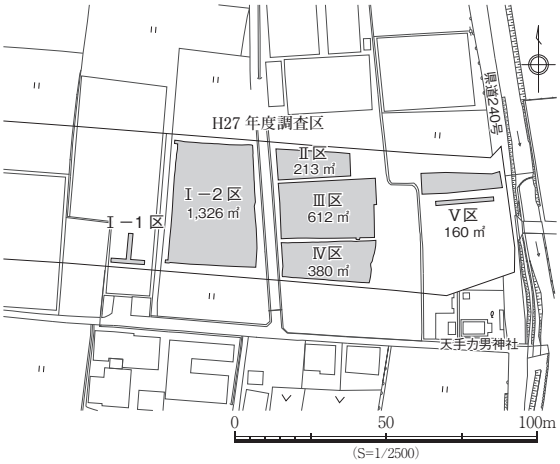


図4－1　宇賀遺跡調査区配置図

(2) 基本層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ－1区西壁セクション

第Ⅰ層　現耕作土

第Ⅱ層　褐灰色粘土層(数cmの風化礫を含む：包含層)

第Ⅲ層　二次堆積とみられる黒灰色粘質土層(調査区全域的に分布する黒ボク層：包含層)

第Ⅳ層　橙灰色粘土質シルト層(下層に2～10数cm大の円礫を含む：地山)

Ⅰ－2区北壁セクション

第Ⅰ層　現耕作土

第Ⅱ層　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト層(黒ボクが混じる：床土)

第Ⅲ層　褐灰色(10YR5/1)細砂混じりシルト層

第Ⅳ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂混じりシルト層(床土)

第Ⅴ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂混じりシルト層(50cm大以下の河原石(砂岩)極少含：地山)

第Ⅵ層　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質粘土層(50cm大以下の河原石(砂岩)極少含：地山)

第Ⅶ層　明黄褐色(10YR6/6)細砂混じりシルト質粘土層(30cm大以下の河原石を多く含む：地山)

Ⅲ区北壁セクション

第Ⅰ層　現耕作土

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層(“黒ボク層”土器微細片をわずかに含む：包含層)

第Ⅲ層　褐灰色シルト質粘土層(数mm～2cm大の風化円礫を含む：包含層)

第Ⅳ層　褐黄色シルト質粘土層(3cm大までの円礫を含む)

第Ⅴ層　黄灰色シルト質粘土層(30数cm大までの円礫を多く含む)

Ⅳ区北壁セクション(図4－2)

第Ⅰ層　現耕作土

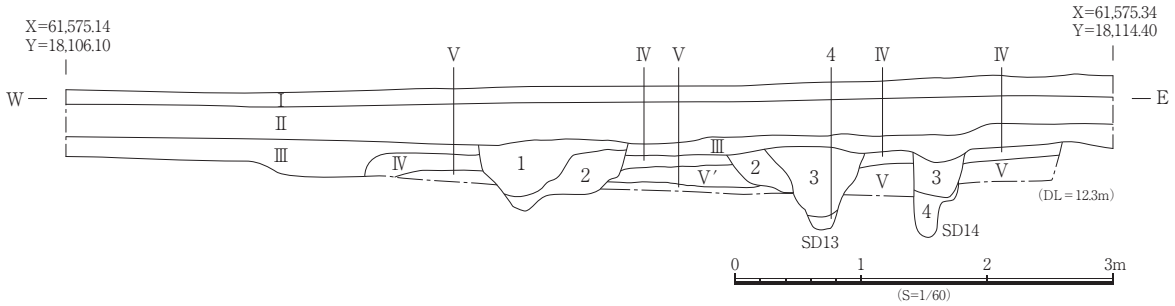
第Ⅱ層　黒褐灰色粘質土層

第Ⅲ層　黒褐灰色土層(黒ボク層)

第Ⅳ層　暗褐色火山灰層(上下層に比べて橙色がかる)

第Ⅴ層　暗褐色土層(数mm大の礫を含む)

第Ⅴ'層　暗褐色土層(Ⅴ層よりやや暗色の層)



層位
第Ⅰ層　現耕作土
第Ⅱ層　黒褐灰色粘質土層
第Ⅲ層　黒褐灰色土（耕作土）層（黒ボク層）
第Ⅳ層　暗褐色火山灰層（上下層に比べて橙色がかる）
第Ⅴ層　暗褐色土層（数mm大の礫を含む）
第Ⅴ′層　暗褐色土層（Ⅴ層よりやや暗色の層）

遺構埋土
1. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（0.1～0.5cm大の礫を含む）
2. 黒色（10YR1.7/1）粘土質シルト
3. 黒色（10YR1.7/1）粘土質シルト（0.1～0.5cm大の礫を含む）
4. 黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト（Ⅳが斑に混じり，0.1～0.5cm大の礫を含む）

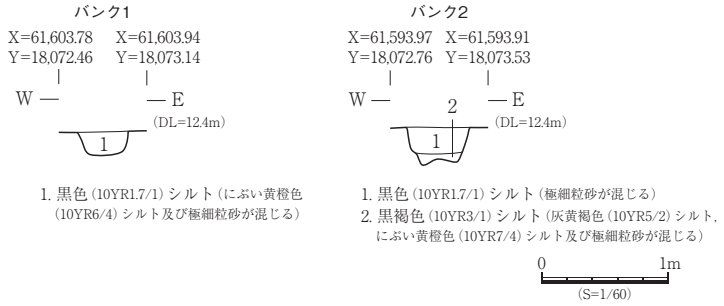
図4－2　Ⅳ区北壁セクション図

2. 検出遺構と遺物

(1) 溝跡

SD16（図4－3）

Ⅰ－2区の東寄りに位置し，南北へと延びる溝で，SD5・17・18を切り，調査区外へと延びる。確認延長は40.07 m，幅0.43～0.57 m，深さ11.7～32.4 cmを測る。埋土は1層が黒色（10YR1.7/1）シルト，2層が黒褐色（10YR3/1）シルトで，出土遺物は図示できるものはなかった。



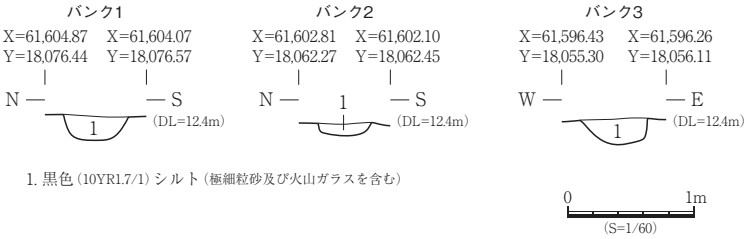
1. 黒色（10YR1.7/1）シルト（にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト及び極細粒砂が混じる）

1. 黒色（10YR1.7/1）シルト（極細粒砂が混じる）
2. 黒褐色（10YR3/1）シルト（灰黄褐色（10YR5/2）シルト，にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト及び極細粒砂が混じる）

図4－3　SD16セクション図

SD17（図4－4）

Ⅰ－2区の北東隅から南西隅へと延びるL字形の溝で，SD19を切り，SD16に切られる。確認延長は東西23.44 m，南北33.83 m，幅0.43～0.70 m，深さ8.9～27.0 cmを測る。埋土は極細粒砂と火山ガラスを含む黒色（10YR1.7/1）シルトで，出土遺物は図示できるものはなかった。



1. 黒色（10YR1.7/1）シルト（極細粒砂及び火山ガラスを含む）

図4－4　SD17セクション図

SD18（図4－5）

Ⅰ－2区からⅡ区の北側に位置し，東西へと延びる溝で，SD16に切られる。確認延長はⅠ－2区10.71 m，Ⅱ区4.31 m，幅0.26～0.43 m，深さ1.6～13.8 cmを測る。埋土は1層が黒色（10YR1.7/1）シルト，2層がにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトで，出土遺物は図示できるものはなかった。

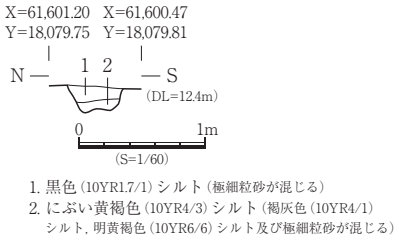


図4－5　SD18セクション図

(2) 出土遺物

Ⅰ－2区（図4－6）

1は調査区の検出面より出土した弥生土器の甕である。内面は口縁部にヨコハケ，端部はナデ調整がみられ，外面口縁部にはタテハケ，胴部はハケが認められる。2は調査区の包含層より出土した陶器の碗である。内面に施釉し，見込みには胎土目痕が認められる。外面は体部の一部に施釉し，高台際から高台内は露胎する。

Ⅲ区（図4－6）

3は調査区の表土より出土した青磁の皿である。内外面に厚みのある釉が施される。4は調査区の検出面より出土した陶器の擂鉢である。擂目の単位は7条以上と考えられる。5は調査区の包含層より出土した土師器の皿である。器面の摩耗が著しいが，貼付高台を有し，外面の底部は切り離し痕をナデ消す。

Ⅴ区（図4－6）

6・7は調査区のⅡ層より出土した。6は土師質土器の杯である。内外面に回転ナデが認められる。7は磁器の碗である。内面には方形の中に菱万字文様，見込み際に二重圏線，外面は口縁端部に1条の圏線が認められる。8は調査区のⅢ層より出土した土師器で，皿と考えられる。手づくね成形で，内外面にナデ調整と指頭圧痕が認められる。

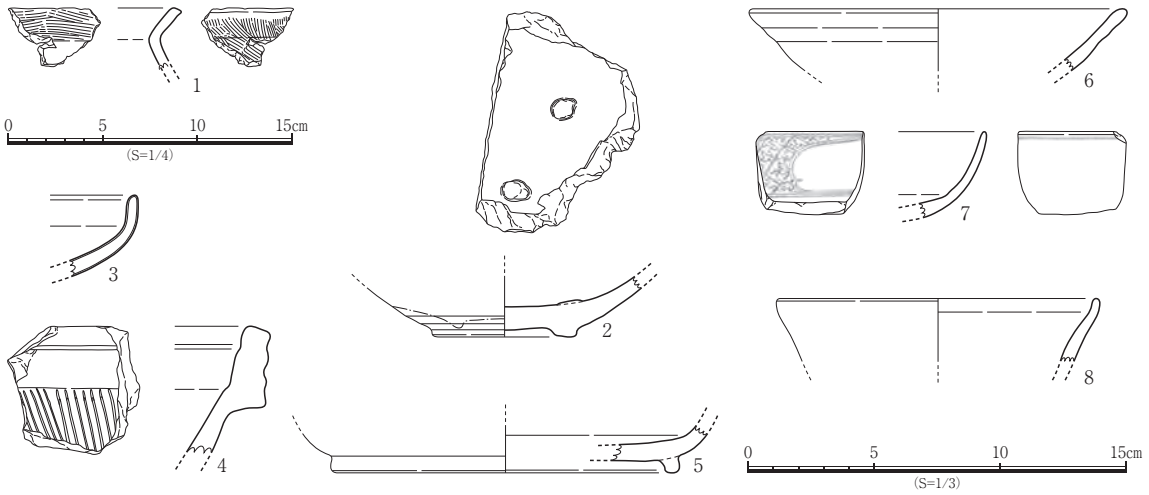


図4－6　出土遺物実測図

3.まとめ

今回の調査では，建物跡に関連する柱穴は確認されておらず，遺構密度も低いことから調査区内は集落の居住域ではなく，畑地や水田などの耕作に関連した生産域であると考えられる。溝跡群が機能していた時期についても，出土遺物が僅少で確定は困難である。しかしながら，弥生土器や古代の土師器皿，中世の所産とみられる陶器の擂鉢，初期の肥前産陶器皿が出土し，さらに縄文時代に属する可能性の高いチャート剥片が表採されたことは，当地或いは近隣地に連綿と続く生活の場所が遺存する可能性を示唆するものである。実施した自然科学分析の成果とも併せて，宇賀遺跡のかつての生活環境の復原に寄与する貴重な資料となった。

第Ⅴ章　自然科学分析

1. 高田遺跡調査第Ⅱ区出土の火葬人骨について

パリノ・サーヴェイ株式会社
金井慎司

はじめに

出土した骨の同定を行ったのでその結果について報告する。

(1) 試料

試料は，SK20から1試料(No.1)，SX11から20試料(No.2～21)，SX9から4試料(No.22～25)の合計25試料である。いずれも白色を呈した骨片であり，泥分と混入する状態にある。試料の詳細は，表1に示す。

(2) 分析方法

試料を水洗すると微細な破片となりうると判断したため，そのままの状態で観察し，形態的特徴から種・部位を同定する。

(3) 結果

結果を表2に示す。確認された部位は，いずれもヒトの焼骨である。以下，遺構ごとに結果を示す。

・SK20

左距骨である。ほぼ完存する。

・SX11

No.2で前頭骨・右下顎骨，No.3で右側頭骨，No.4で橈骨/尺骨，No.6で大腿骨，No.9・10で大腿骨近位端の可能性がある破片，No.11で右側頭骨錐体部，No.15で肋骨，No.17で脛骨の可能性がある破片，No.20で後頭骨，鎖骨の可能性がある破片がみられる。この他は，ヒトの可能性がある頭蓋骨，肋骨/四肢骨，四肢骨などの破片である。

・SX9

No.22で上腕骨/大腿骨近位端の可能性がある破片，距骨の可能性がある破片，指趾骨(基節骨/中節骨)，No.23で手根骨(左有頭骨)，足根骨(右舟状骨)，指趾骨(基節骨/中節骨)などが確認される。この他は，ヒトの可能性がある肋骨/四肢骨，四肢骨などの破片である。

(4) 考察

確認された部位は，いずれもヒトである。それ以外の骨も特徴的な部位がみられないものの，おそらくはヒトに由来すると思われる。

表1.　分析試料の一覧

No.	遺構名	層位	個数	重量(g)	備考
1	SK20	マ	1	10.0	祭祀遺構?
2	SX11	マ	25	27.1	骨1. 火葬墓?
3	SX11	マ	16	14.0	骨2
4	SX11	マ	52	19.1	骨3
5	SX11	マ	25	13.6	骨4
6	SX11	マ	16	18.1	骨5
7	SX11		110	73.4	
8	SX11		120	10.8	
9	SX11	マ	115	63.4	
10	SX11	マ	167	81.5	
11	SX11	マ	268	142.8	
12	SX11	マ	49	2.3	
13	SX11	マ	11	5.3	
14	SX11	マ	158	61.0	
15	SX11	マ	16	12.5	
16	SX11	マ	20	2.8	
17	SX11	マ	3	7.9	No. B1
18	SX11	マ	53	13.0	No. B1
19	SX11	マ	1	3.4	拡張
20	SX11	マ表層	126	69.9	
21	SX11	マ	40	11.7	南壁部分
22	SX9		549	204.5	火葬墓?
23	SX9		167	38.2	
24	SX9	マ	21	12.0	
25	SX9	上層	103	17.5	

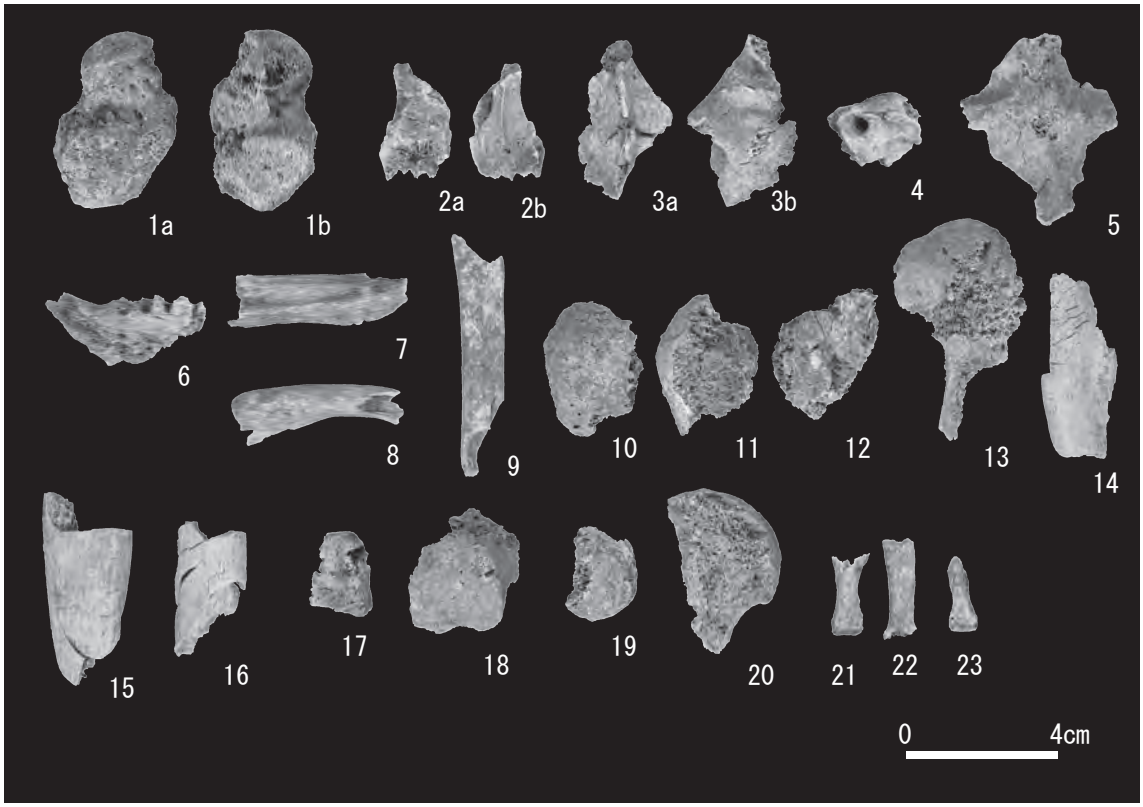
表2.　骨同定結果

No.	遺構名	層位	種類	部位	左	右	部分	数量		被熱
1	SK20	マ	ヒト	距骨	左		略完	1		○
2	SX11	マ	ヒト	前頭骨			破片	1		○
				下顎骨		右	破片	1		○
			ヒト?	頭蓋骨			破片	14	+	○
3	SX11	マ	ヒト	側頭骨		右	破片	1		○
				頭蓋骨			破片	11	+	○
4	SX11	マ	ヒト	橈骨/尺骨			破片	1		○
			ヒト?	肋骨/四肢骨			破片	18	+	○
5	SX11	マ	ヒト?	肋骨/四肢骨			破片	25	+	○
6	SX11	マ	ヒト	大腿骨			破片	1		○
				下肢骨			破片	1		○
			ヒト?	肋骨/四肢骨			破片	10	+	○
7	SX11		ヒト?	四肢骨			破片	7		○
				不明			破片	48.11	g	○
8	SX11		ヒト?	不明			破片	10.41	g	○
9	SX11	マ	ヒト	大腿骨			近位端?	3		○
			ヒト?	不明			破片	49.33	g	○
10	SX11	マ	ヒト	大腿骨			近位端?	1		○
			ヒト?	不明			破片	69.81	g	○
11	SX11	マ	ヒト	側頭骨		右	錐体部	1		○
			ヒト?	四肢骨			破片	10		○
				肋骨/四肢骨			破片	9		○
				不明			破片	95.73	g	○
12	SX11	マ	ヒト?	不明			破片	2.67	g	○
13	SX11	マ	ヒト?	不明			破片	5.73	g	○
14	SX11	マ	ヒト?	四肢骨			破片	3		○
				肋骨/四肢骨			破片	10		○
				不明			破片	43.29	g	○
			土器				破片	1.02	g	
15	SX11	マ	ヒト	肋骨			破片	4		○
			ヒト?	四肢骨			破片	1		○
				不明			破片	5.76	g	○
16	SX11	マ	ヒト?	不明			破片	3.03	g	○
17	SX11	マ	ヒト	脛骨?			破片	3		○
18	SX11	マ	ヒト?	肋骨/四肢骨			破片	25	+	○
				不明			破片	1.49	g	○
19	SX11	マ	ヒト?	不明			破片	3.92	g	○
20	SX11	マ表層	ヒト	後頭骨			破片	1		○
				鎖骨?			破片	2		○
			ヒト?	四肢骨			破片	3		○
				不明			破片	49.96	g	○
21	SX11	マ	ヒト?	不明			破片	12.06	g	○
22	SX9		ヒト	上腕骨/大腿骨?			近位端?	1		○
				距骨?			破片	1		○
				指趾骨(基節骨/中節骨)			近位端欠	2		○
				指趾骨			両端欠	1		○
			ヒト?	四肢骨			破片	9		○
				肋骨/四肢骨			破片	11		○
				不明			破片	135.88	g	○
23	SX9		ヒト	手根骨(有頭骨)	左		破片	1		○
				足根骨(舟状骨)		右	破片	1		○
				指趾骨(基節骨/中節骨)			近位端欠	1		○
			ヒト?	不明			破片	32.78	g	○
24	SX9	マ	ヒト?	肋骨/四肢骨			破片	20	+	○
25	SX9	上層	ヒト?	不明			破片	17.29	g	○
			焼土					0.48	g	○

白色を呈し，表面に細かなひび割れが生じるなど焼骨の特徴を示す。このことから，それぞれの遺構には，火葬骨が埋まっていたと考えられる。各遺構から検出された人骨は，年齢や性別を判断できるような部位が確認できず，埋葬者の情報は得られない。ただし，大きさなどからみて少なくとも成人には達していた可能性が高い。

なお，検出される火葬骨は，いずれも小さく，大型の破片がみられない。また，人骨1体分としては数量的にも少ない。この点に関しては，考古学的知見などを併せて，さらに検討を行っていく必要がある。

図版1　出土骨



1. ヒト左距骨（No. 1：SK20）
2. ヒト前頭骨（No. 2：SX11）
3. ヒト右側頭骨（No. 3：SX11）
4. ヒト右側頭骨（No. 11：SX11）
5. ヒト後頭骨（No. 20：SX11）
6. ヒト右下顎骨（No. 2：SX11）
7. ヒト肋骨（No. 15：SX11）
8. ヒト鎖骨？(No. 20：SX11)
9. ヒト橈骨／尺骨（No. 4：SX11）
10. ヒト大腿骨（No. 9：SX11）
11. ヒト大腿骨（No. 9：SX11）
12. ヒト大腿骨（No. 9：SX11）
13. ヒト大腿骨（No. 10：SX11）
14. ヒト大腿骨（No. 6：SX11）
15. ヒト脛骨？(No. 17：SX11)
16. ヒト下肢骨（No. 6：SX11）
17. ヒト左手根骨（有頭骨）(No. 23：SX9)
18. ヒト距骨？(No. 22：SX9)
19. ヒト右足根骨（舟状骨）(No. 23：SX9)
20. ヒト上腕骨／大腿骨？(No. 22：SX9)
21. ヒト指趾骨（基節骨／中節骨）(No. 22：SX9)
22. ヒト指趾骨（No. 22：SX9）
23. ヒト指趾骨（基節骨／中節骨）(No. 23：SX9)

2. 宇賀遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
馬場健司・松元美由紀

はじめに

今回の分析調査では，溝跡の埋土を対象として埋没環境に関する情報を得るために植物珪酸体分析と種実遺体分析を実施した。

(1) 試料

分析試料は，Ⅰ－２区のSD17の黒褐色を呈するシルト混じり細粒砂，Ⅳ区のSD1とSD5の暗褐色を呈するシルト混じり細粒砂である。

(2) 分析方法

① 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下，短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ)を，近藤(2010)の分類を参考に同定，計数する。

分析の際には，分析試料の乾燥重量，プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し，堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は，植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際，100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)，合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また，各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

② 種実遺体分析

試料を常温乾燥後，水を満たした容器に投入し，容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く撹拌した後，容器を傾斜させて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて常温乾燥させる。常温乾燥後，粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて，同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は，現生標本および石川(1994)，中山ほか(2010)，鈴木ほか(2012)などを参考に実施し，個数を数えて結果を一覧表で示す。

分析残渣は，(水に浮いた)植物片・炭化材主体と(水に沈んだ)砂礫類主体に大まかに分け，粒径別の乾燥重量を表示する。

分析後は，抽出物を種類別に容器に入れて保管する。

(3) 結果

① 植物珪酸体分析

結果を表１と図１に示す。各試料からは，植物珪酸体含量が多く検出される。しかし，保存状態は悪く，検出される分類群も少ない。

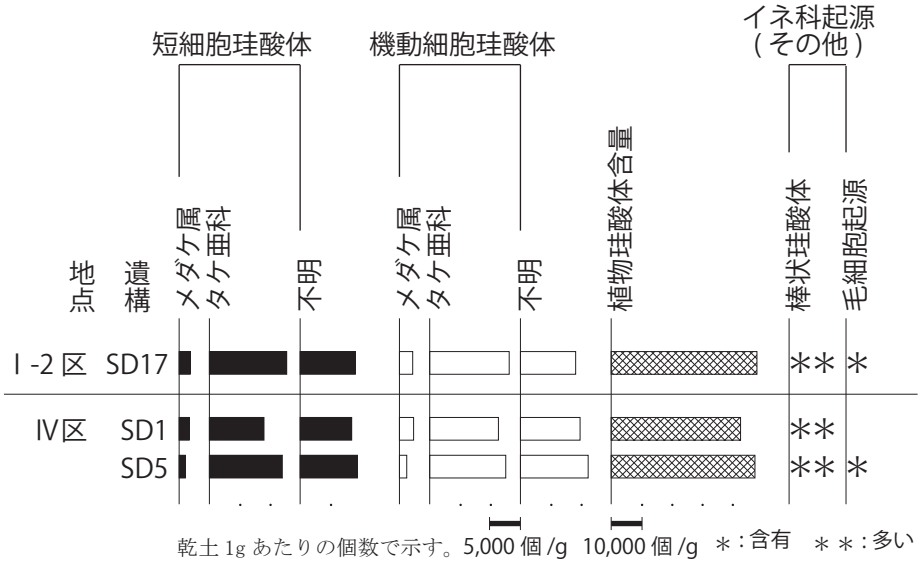


図 1.　植物珪酸体含量

Ⅰ－２区の SD17 およびⅣ区の SD1 と SD5 では，植物珪酸体含量が 40,000 ～ 50,000 個 /g の範囲に有る。いずれの試料でも，メダケ属を含むタケ亜科や分類群の特定が困難である不明が認められる。イネ属などの栽培植物に由来する植物珪酸体は産出しない。なお，その他のイネ科起源として棒状珪酸体や毛細胞起源が検出され，概して棒状珪酸体が多く見られる。

表1.　植物珪酸体含量　（個/g）

分類群	Ⅰ-2区 SD17	Ⅳ区 SD1	Ⅳ区 SD5
イネ科葉部短細胞珪酸体			
メダケ属	1,800	1,700	1,000
タケ亜科	12,800	9,000	12,100
不明	9,100	8,500	9,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
メダケ属	2,200	2,300	1,200
タケ亜科	13,100	11,400	12,600
不明	9,100	9,900	11,200
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	23,700	19,200	22,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	24,500	23,600	25,000
植物珪酸体含量	48,200	42,800	47,600
イネ科起源（その他）			
棒状珪酸体	＊＊	＊＊	＊＊
毛細胞起源	＊	－	＊

含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100：100個/g未満
－：未検出，＊：含有，＊＊：多い

② 種実遺体分析

結果を表 2 に示す。また検出された分類群の写真を図版 1 に示して，同定根拠とする。

Ⅰ－２区の SD17 とⅣ区の SD1 では各試料 500g，Ⅳ区の SD5 では試料 200g の合計 1200g を水洗した。その結果，Ⅳ区の SD1 と SD5 では分類群が明確な炭化種実は検出されない。Ⅰ－２区の SD17 から草本のキンバイザサの種子が 3 個，コキンバイザサの種子が 2 個，ヒゴクサ類の果実が 1 個の合計 6 個の炭化種実が認められる。また不明炭化種実片が，SD17 から 3 個，SD1 から 1 個，それぞれ検出される。

分析残渣は，植物片・炭化材主体が合計 0.2g，砂礫類主体が合計 116.4g を量る。SD17 は砂礫類が多く（81.5g），SD1 は植物片・炭化材が多い（0.2g）。また SD17 と SD1 からは鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah: 町田・新井 ,1978）に由来すると考えられる火山ガラスが確認される。

以下，炭化種実の 3 分類群について形態的特徴を述べる。

・キンバイザサ（Curculigo orchioides Gaertn.）キンバイザサ科キンバイザサ属

種子は黒色，完形ならば長さ 2.8 ～ 3.0mm，幅 2.1mm，厚さ 1.6mm の楕円体を呈し，基部の片

表2.　種実遺体分析結果

分類群	部位	状態		Ⅰ-2区 SD17	Ⅳ区 SD1	SD5 備考
草本						
キンバイザサ	種子	完形	炭化	3	-	-
コキンバイザサ	種子	完形	炭化	1	-	-
		破片	炭化	1	-	-
ヒゴクサ類	果実	完形	炭化	1	-	-
不明		破片	炭化	3	1	-
種実合計				9	1	-10個
分析残渣						
植物片・炭化材主体		1-0.5mm		0.02	0.20	0.02 乾重(g)
砂礫類主体		>2mm		66.98	13.17	7.35 乾重(g)
		2-1mm		6.45	4.55	2.39 乾重(g)
		1-0.5mm		8.07	3.48	4.00 乾重(g)
火山ガラス(K-ah)				+	+	-
分析量				500	500	200 重量(g)

側から長さ 1.0mm の太い鉤状突起が伸びる。出土種子は残存径 1.3mm を測る。種皮は硬く，断面は柵状。突起以外の表面には，多数の細い縦隆条が配列し，まばらに縦長の網目模様が形成される。

・コキンバイザサ(Hypoxis aurea Lour.)キンバイザサ科コキンバイザサ属

種子は炭化しており黒色，長さ 1.1mm，径 0.8mm 程度の広楕円体を呈し，基部の片側から下方へ曲がる突起がある。種皮表面には短い円錐状突起が密生する。

・ヒゴクサ類(Carex sect. Extensae)カヤツリグサ科スゲ属

果実は黒色，長さ 1.3mm，径 0.9mm の三稜状倒卵体を呈す。頂部の柱頭部分は円盤状。果皮表面はやや平滑。

(4) 考察

Ⅰ－２区の SD17 およびⅣ区の SD1 と SD5 の埋土では，いずれもイネなどの栽培植物に由来する種実遺体や植物珪酸体が産出しなかった。この産状を見る限り，これらの遺構がイネなどの栽培に関わる可能性や近辺で栽培植物が利用された可能性を積極的に支持することは難しい。

なお，植物珪酸体において多産するタケ亜科は他のイネ科と比較して風化に強く，また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤 ,1982; 杉山・藤原 ,1986)，他の種類よりも残留しやすいことが知られている。今回の産状はタケ亜科が土層中に相対的に多く残留したために，その産出が目立つ結果になったと考えられる。ただし，少なくともメダケ属などのタケ亜科が調査区の周辺に生育していたことが想定できる。タケ亜科にはメダケ属など乾燥した土地条件を好む種類が多いことを考慮すれば，溝周辺には乾燥した地表環境をなす草地が広がっていたことが確認される。

ただし，Ⅰ－２区の SD17 より検出された種実遺体には，草本のキンバイザサ，コキンバイザサ，ヒゴクサ類の炭化種実が確認される。これらは，暖地の山林内に生育する多年草である。この点を考慮すれば, 調査の周辺には森林の存在も示唆することができ, 着目される分析結果と言える。よって，キンバイザサ，コキンバイザサ，ヒゴクサ類については，その生態性にもとづくと，調査区周囲に存在した林内やその林縁などに生育していたことが疑われる。なお，これらの種実遺体は炭化していることから，火を受けたと見なされる。この要因が，農耕などの人為的なものか，野火などの自然発生的な要因によるものか，今回の産状から判別を付けることは難しい。キンバイザサ，コ

キンバイザサ，ヒゴクサ類の炭化種実の解釈については，今後さらに発掘調査所見を含めて考える必要がある。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

近藤錬三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

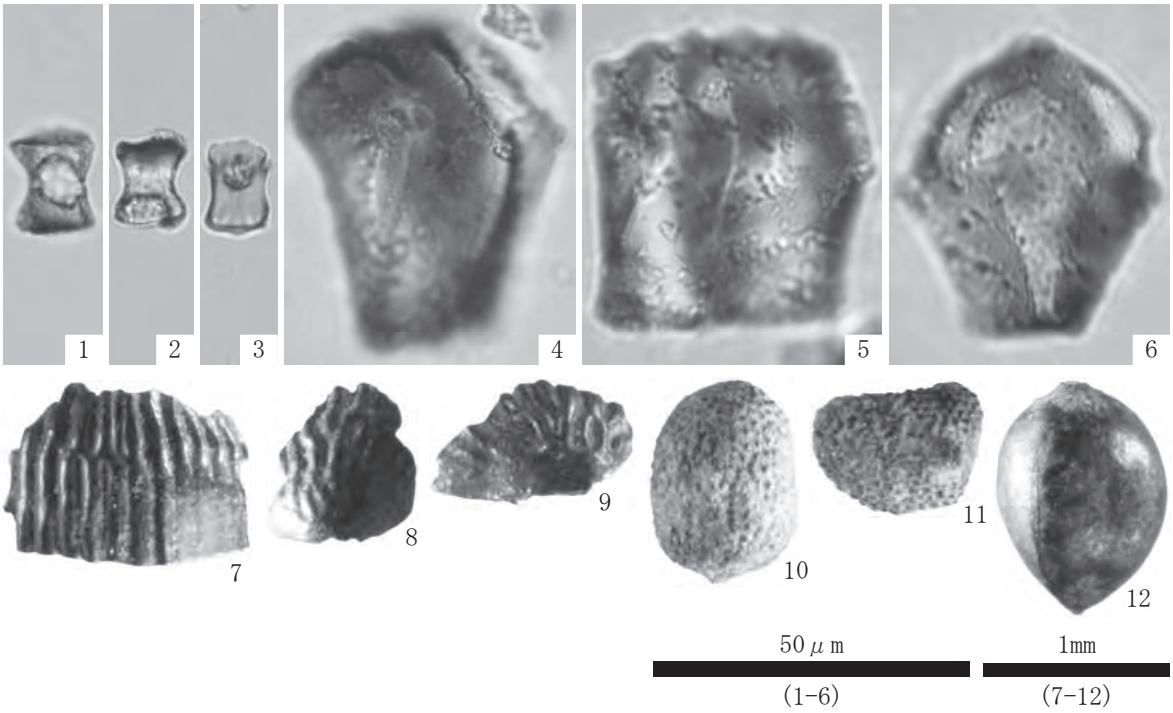
町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.

杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－.考古学と自然科学,19,69-84.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社,272p.

図版1　植物珪酸体・種実遺体



1．メダケ属短細胞珪酸体(Ⅳ区;SD1)
2．メダケ属短細胞珪酸体(Ⅳ区;SD5)
3．メダケ属短細胞珪酸体(Ⅰ-2区;SD17)
4．メダケ属機動細胞珪酸体(Ⅳ区;SD1)
5．メダケ属機動細胞珪酸体(Ⅳ区;SD5)
6．メダケ属機動細胞珪酸体(Ⅰ-2区;SD17)
7．キンバイザサ　種子(Ⅰ-2区;SD17)
8．キンバイザサ　種子(Ⅰ-2区;SD17)
9．キンバイザサ　種子(Ⅰ-2区;SD17)
10．コキンバイザサ　種子(Ⅰ-2区;SD17)
11．コキンバイザサ　種子(Ⅰ-2区;SD17)
12．ヒゴクサ類　果実(Ⅰ-2区;SD17)

遺物観察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが，土製品・石製品・金属製品の場合は口径が全長(cm)，器高が全幅(cm)，底径が全厚(cm)，銭貨の場合は口径が銭径(cm)，器高が内径(cm)，底径が銭厚(cm)と読み替えている。それ以外の値については，特徴・備考または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
1	Ⅰ区	ST1 埋土	弥生土器 壺	19.2	(11.0)	−	−	広口壺。直立気味の頸部から口縁部が強く外反。端部に櫛描波状文，肩部櫛描波状文。内面口縁部ハケ，頸部ハケ・ナデ。外面口縁部回転ナデ，頸部タテハケを一部ナデ消す。	
2	〃	〃 〃	〃 甕	−	(11.5)	−	5.0	平底。内外面ハケをナデ消す。	
3	〃	〃 〃	〃 〃	11.9	14.3	11.4	4.0	小型甕。器面摩耗。内面口縁部～胴部粗いハケのちナデ，底部ナデ・指頭圧痕。外面粗いヘラミガキ，煤ける。	
4	〃	〃 〃	〃 鉢	−	(6.0)	−	3.8	平底。内面ナデ。外面タタキのちナデ，ヘラミガキで仕上げる。一部煤ける。	
5	〃	〃 〃	〃 〃	−	(9.4)	9.4	3.6	内外面ナデ。底部高台状，一部煤ける。	
6	〃	〃 〃	〃 高杯	15.7	(11.3)	−	−	径1.2㎝の穿孔4ヶ所。分割成形。杯部口縁部ヨコナデ，端部面をなす。内面丁寧なナデ，外面ハケ・ナデ。脚部内面ナデ，外面ヘラミガキ。接合部の穴と穿孔は同一の道具か。	
7	Ⅱ区	ST2 検出面	〃 壺	−	(6.6)	5.8	2.2	ミニチュア壺。内外面指頭圧痕・ハケ	
8	〃	〃 〃	土製品 土錘	(3.9)	1.3	−	1.2	重量(5.4)ｇ。孔径0.5㎝。丁寧なナデ	
9	〃	〃 下層	弥生土器 鉢	14.6	6.7	−	4.2	内面ハケのちナデ，口縁端部は面をなす。外面タタキのちナデ	
10	〃	〃 〃	〃 〃	10.6	4.9	−	3.0	器面摩耗。口縁部ヨコナデ，体部ミガキ	
11	〃	〃 埋土	〃 甕	(17.2)	(8.6)	−	−	内面口縁部ハケ，胴部ナデ・指頭圧痕。外面口縁部タテハケ，胴部タタキ	
12	〃	〃 〃	〃 〃	16.1	(6.4)	17.0	−	内面口縁部ハケ，胴部ナデ。外面口縁部ハケのちヨコナデ，胴部タテハケ，煤ける。	
13	〃	〃 〃	〃 〃	12.6	(4.8)	−	−	器面摩耗。内面口縁部ハケ，端部は面をなし，胴部ナデ・指頭圧痕。外面口縁部ハケのちヨコナデ，胴部タテハケ，煤ける。	
14	〃	〃 〃	〃 鉢	−	(5.6)	−	3.0	内面丁寧なナデ，爪のような圧痕あり。外面ハケ・一部ミガキが認められる。	
15	〃	〃 〃	〃 壺	19.4	(1.5)	−	−	広口壺。内面ハケのちミガキ，口縁端部ハケ状原体の斜格子の刻目。外面ハケのちナデ	搬入品
16	〃	〃 〃	〃 高杯	−	(5.7)	−	18.7	径0.8㎝の穿孔が認められる。内面ハケ，裾部ヨコナデ。外面ヘラミガキ，裾部ヨコナデ	
17	〃	〃 〃	〃 〃	−	(7.7)	−	17.2	内外面裾部ヨコナデ。脚部内面ハケ，外面タテハケ，調整のち全体にミガキ。受部との接合部付近に板状の圧痕。穿孔1ヶ所	ST1検出面と接合
18	〃	〃 〃	〃 壺	(20.4)	(3.2)	−	−	器面摩耗著しい。ハケ調整，鋸歯文が施される。	ST3上層と接合
19	〃	ST3 上層	〃 〃	−	(1.9)	−	−	内面口縁部ヨコ方向のミガキ，口縁端部を上下に拡張し，凹線文を巡らせる。外面口縁部ナデ	
20	〃	〃 〃	〃 高杯	−	(4.4)	−	18.2	径1.0㎝の穿孔1ヶ所。内面ヨコハケのちナデ，外面ハケのちミガキ	
21	〃	〃 中層	〃 壺	15.1	(4.7)	−	−	器面摩耗。内面ナデ，口縁端部は面をなす。外面口縁部ヨコナデ，頸部タテハケ	
22	〃	〃 〃	〃 甕	17.2	(5.7)	−	−	内面口縁部ヨコナデ，丸みをもって外反，端部は面をなし，頸部ハケ，胴部ケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ，煤付着	
23	〃	〃 〃	〃 〃	−	(7.1)	−	4.7	内面ハケ・ナデ。外面ハケ，底部にも一部ハケが認められる。煤付着	
24	〃	〃 〃	〃 〃	−	(5.3)	−	6.4	内面ナデ，外面タテハケ	
25	〃	〃 〃	〃 鉢	14.2	8.7	−	4.0	内面ハケ，外面タタキのちハケをナデ消す。煤付着	

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
26	Ⅱ区	ST3 下層	弥生土器 壺	−	(12.0)	13.7	4.8	器面やや摩耗。内面ナデ・ハケ，外面ハケのちミガキ	
27	〃	〃 〃	〃 甕	18.6	(14.0)	23.5	−	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，胴部ハケ。外面口縁部ヨコナデ，胴部タタキ目をナデ消したのちハケ調整	
28	〃	〃 〃	〃 〃	15.1	(5.5)	−	−	内面口縁部ナデ，端部は面をなし，頸部ハケ・ナデ，胴部ケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ，煤付着	
29	〃	〃 〃	〃 〃	13.8	(8.0)	16.3	−	内面口縁部ハケ・ナデ，端部は面をなし，胴部ナデ。外面口縁部ハケ，頸部ヨコナデ，胴部ハケ，煤ける。	
30	〃	〃 〃	〃 〃	−	(13.2)	15.2	4.1	器面摩耗著しい。内面ナデ，外面タタキ・ハケ	
31	〃	〃 〃	〃 〃	17.5	(3.8)	−	−	内面口縁部ナデ，胴部ケズリ。外面ナデ	
32	〃	〃 〃	〃 〃	−	(14.5)	−	6.2	内面胴上部ハケ，中央部ケズリ，下部ナデ。外面タタキ目をハケで消す。底部ナデ・一部ハケが認められる。煤付着	
33	〃	〃 〃	〃 鉢	12.0	7.5	−	3.2	口縁部ヨコナデ。内面体部丁寧なナデ，底部指頭圧痕。外面体部ハケ・ナデ	
34	〃	〃 〃	〃 〃	14.4	6.5	−	4.2	内面口縁部ヨコ方向ナデ，体部～底部丁寧なナデ。外面口縁部ヨコ方向ナデ，体部ハケをナデ消す。底部やや丸みを帯びる。	
35	〃	〃 〃	〃 〃	19.4	(9.5)	−	−	器面摩耗著しい。口縁部ナデ，内面ハケ・ナデ，外面タテハケ	
36	〃	〃 〃	〃 〃	15.7	(6.7)	−	−	内面ナデ・指頭圧痕。外面ハケ・指頭圧痕	
37	〃	〃 〃	〃 〃	17.2	(6.5)	−	−	内面口縁部ヨコハケ，体部ナデのち粗いハケ。外面ハケ	
38	〃	〃 〃	〃 〃	17.1	11.3	−	4.6	内面口縁部～口縁直下ヨコ方向ミガキ，体部タテ方向丁寧なミガキ。外面口縁部ヨコナデ，口縁直下～体部ケズリ，一部口縁直下～体上半部ヨコ方向ミガキ，体中央～下半部タテ方向ミガキ	
39	〃	〃 〃	〃 〃	15.5	9.2	−	4.3	内面ミガキ，底部ナデ。外面口縁部ヨコ方向のミガキ，体部タテ方向のミガキ，煤付着	
40	〃	〃 〃	〃 〃	16.3	10.2	−	4.2	内面口縁部ヨコ方向のミガキ，体部ハケのちタテ方向のミガキ。外面口縁部ヨコナデ，体部ナデのち粗いミガキ	
41	〃	〃 〃	〃 高杯	14.3	11.1	−	7.8	器面やや摩耗。脚部4ヶ所に径0.5cmの穿孔。杯部内面ハケのちミガキ，外面ハケのちミガキ，口縁部ヨコナデ，端部直下にヨコ方向ミガキ。脚部内面ナデ・一部ミガキ，外面タテ方向ミガキ	
42	〃	〃 〃	〃 鉢	15.8	(3.4)	−	−	口縁部ヨコ方向のヘラミガキ，端部にもミガキが施される。体部タテ方向のヘラミガキ	搬入品
43	〃	〃 〃	石製品 管玉	2.2	0.5	−	0.5	重量0.7g。孔径0.2cm。全面丁寧な研磨により滑らか。碧玉製。明緑灰色	
44	〃	〃 埋土	弥生土器 壺	17.6	(4.1)	−	−	広口壺。口縁部はラッパ状に外反し，端部を上下に拡張する。内面摩耗するが，指頭圧痕が確認できる。外面口縁端部ヨコナデ，端部直下タテハケのちヨコナデ，頸部タテハケ	
45	〃	〃 〃	〃 甕	15.8	(28.0)	20.0	6.0	口縁部内外面摩耗。内面口縁部ナデ，胴部ハケ。外面胴部ハケのち一部ミガキ，煤付着	
46	〃	〃 〃	〃 〃	15.7	23.5	17.6	4.1	内面口縁部ヨコナデ，頸部ハケ，胴部ケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ，煤ける。	
47	〃	〃 〃	〃 〃	15.8	(11.3)	17.4	−	器面摩耗。内面口縁部ヨコハケ，端部は面をなし，中央部凹む。頸部接合部までハケ，胴部丁寧なナデ。外面口縁部～肩部タタキのちナデ，肩部～胴部タタキのちハケ，煤ける。	
48	〃	〃 〃	〃 〃	15.0	(12.9)	19.0	−	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，胴部は頸部直下からケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部タタキ目をハケで消す。	
49	〃	〃 〃	〃 〃	−	(19.1)	20.9	5.2	内面ナデ，外面ハケのちミガキ	
50	〃	〃 〃	〃 〃	14.4	(3.3)	−	−	内面口縁部ハケのちヨコナデ，頸部指頭圧痕。外面ヨコナデ	

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
51	Ⅱ区	ST3 埋土	弥生土器 鉢	17.4	10.4	－	5.3	内面タテ方向のミガキ，口縁端部は面をなす。外面口縁部～体上部ヨコ方向のミガキ，体中央～下部タテ方向のミガキ	
52	〃	〃 〃	〃 〃	17.5	10.5	－	5.1	内面口縁部ヨコナデ，やや内傾，体部ハケ，底部ナデ。外面口縁部ヨコナデ，体部タタキ目をナデ消す。	
53	〃	〃 〃	〃 高杯	－	(7.3)	－	－	内面ナデ，裾部ハケ。外面ミガキ・一部ハケが残る。	
54	〃	〃 〃	須恵器 杯	14.8	(2.9)	－	－	内外面回転ナデ，外面底部ヘラケズリ	
55	〃	〃 〃	金属製品	9.3	0.7	－	0.4	重量8.3g。鉄製	
56	〃	ST4 上層	弥生土器 甕	12.6	(5.5)	－	－	内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ	
57	〃	〃 〃	土師器 杯	16.4	(3.8)	－	－	内外面回転ナデ。内面上半部ナナメ方向のミガキ，下半部タテ方向のミガキ。外面粗いミガキ	混入
58	〃	〃 〃	須恵器 蓋	16.6	2.5	－	－	二次被熱。外面に炭化物付着。径2.7㎝の擬宝珠形のつまみが付く。内面ナデ・指頭圧痕。外面回転ナデ	
59	〃	〃 下層	弥生土器 壺	－	(5.5)	－	5.3	内面ナデ・指頭圧痕。外面ミガキ，底部ナデ	
60	〃	〃 〃	〃 甕	16.1	(8.4)	－	－	内面口縁部ヨコハケ，端部は面をなし，胴部ナデ。外面口縁部指頭圧痕，胴部タタキ目をハケでナデ消す。	
61	〃	〃 〃	〃 〃	15.8	(5.3)	－	－	内面口縁部ヨコハケ，端部に刻目，頸部指頭圧痕，胴部ヘラケズリ。外面口縁部ナデ・指頭圧痕，頸部～胴部タタキ	
62	〃	〃 〃	〃 〃	16.3	(14.1)	20.8	－	内面口縁部ナデ，頸部ハケ，胴部ナデ・ヘラケズリ。外面口縁部ナデ，頸部ハケ，胴部タタキ・ハケ	
63	〃	〃 〃	〃 鉢	11.1	7.0	－	4.4	内外面口縁部ヨコハケ・一部ミガキ，体部ミガキ	
64	〃	〃 〃	〃 〃	20.5	8.7	－	4.9	内面口縁部ヨコハケ，体部ハケをナデ消す。外面口縁部ハケ・ナデ，体部ハケ	搬入品
65	〃	〃 〃	〃 〃	－	(4.6)	－	3.6	内面丁寧なヘラミガキ。外面ハケ・ヘラミガキ，底部ナデ，煤ける。	
66	〃	〃 〃	〃 〃	－	(2.7)	－	6.6	台付鉢。内面ナデ，外面ナデ・指頭圧痕	
67	〃	〃 〃	〃 高杯	－	(7.7)	－	－	径1.1㎝の穿孔が2ヶ所に認められる。受部内面ナデ，外面ハケ。脚部内面ナデ，外面ヘラミガキ	
68	〃	〃 〃	〃 壺	－	(7.2)	6.9	3.2	ミニチュア壺。内面ナデ・指頭圧痕。外面ナデ・一部ミガキ状，胴上半部に一部タタキ目残る。下半部に一部ハケ残る。煤付着	
69	〃	〃 〃	金属製品 鉄鏃か	(5.3)	2.7	－	0.4	重量(13.0)g。柳葉式か。茎部欠損	
70	〃	〃 床面	弥生土器 甕	14.6	22.0	16.4	3.7	器面摩耗著しい。内面口縁部ハケ，胴部ナデ。外面口縁部～肩部ハケ，胴部タタキ目をハケで消す。煤付着	
71	〃	〃 〃	石製品 叩石	16.3	11.7	－	5.0	重量1306.2g。砂岩製。側面に使用痕	
72	〃	〃 中央P	弥生土器 甕	11.8	(11.5)	14.4	－	器面摩耗。内面口縁部ハケ，口縁端部は面をなし，胴上半部ナデ，中央部ケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ，煤ける。	
73	〃	〃 埋土	〃 〃	14.4	(4.8)	－	－	内面口縁部ヨコナデ，頸部ハケ，胴部ヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ	
74	〃	〃 〃	〃 〃	15.2	(11.2)	16.5	－	内面口縁部ハケのちナデ，胴部ヘラケズリ・指頭圧痕。外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ，煤ける。	
75	〃	〃 〃	〃 鉢	14.0	(4.9)	－	－	内面ミガキ。外面口縁部ナデ，体部ミガキ	

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
76	Ⅱ区	ST4 埋土	金属製品 鉄釘	6.0	1.3	−	1.1	重量10.7g。断面方形状か。	
77	〃	ST5 検出面	弥生土器 壺	21.6	(4.5)	−	−	内面ハケのちナデ。外面摩耗，鋸歯文が施される。	
78	〃	〃 〃	〃 鉢	−	(3.2)	−	3.7	内面ナデ・ヘラナデ・ハケ。外面タタキ目に一部ハケ，煤ける。	
79	〃	〃 〃	土師器 皿	10.4	2.3	−	6.2	手づくね。内外面指頭圧痕・丁寧なナデ。外面底部板状圧痕	混入
80	〃	〃 上層	弥生土器 鉢	25.4	(6.2)	−	−	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，体部ハケのちナデ。 外面口縁部ヨコナデ，体部ハケ，煤ける。	
81	〃	〃 〃	須恵器 壺	−	(9.1)	−	9.0	内外面回転ナデ。内面底部自然釉が溜まる。高台端部は凹む。	
82	〃	〃 〃	〃 〃	−	(8.3)	−	12.6	内外面回転ナデ。外面底部に黒いシミ状のものが認められる。	
83	〃	〃 下層	弥生土器 甕	16.2	(5.9)	−	−	器面摩耗。内面口縁部ハケ・ナデ，端部は面をなし，胴部ハケ・指頭圧痕。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ	
84	〃	〃 〃	〃 〃	−	(6.3)	−	5.0	内面ナデ，外面ハケ，煤ける。	
85	〃	〃 〃	〃 鉢	11.2	6.2	−	2.7	内面ナデ，外面タタキ	
86	〃	〃 〃	〃 〃	14.7	8.4	−	3.5	口縁部内外面ヨコナデ，体部ハケ	
87	〃	〃 〃	〃 〃	28.0	(3.0)	−	−	内面ハケのちナデ，口縁端部は面をなす。外面口縁部ナデ・指頭圧痕，体部ハケ	
88	〃	〃 〃	〃 〃	−	(7.4)	−	4.0	内面ハケ・ナデ。外面タタキ目をハケで消す。	
89	〃	〃 〃	〃 〃	19.8	(7.8)	−	−	内面口縁部ナデ，体上半部ハケ，下半部ハケ・ナデ。外面タタキ目をハケで消す。	
90	〃	〃 〃	〃 壺	3.8	(2.5)	−	−	ミニチュア壺。器面摩耗。内面口縁部ハケ，頸部ナデ。外面ハケ・ミガキ	
91	〃	〃 〃	金属製品	(4.7)	0.7	0.3	−	重量(3.8)g。鉄製	
92	〃	〃 床面	弥生土器 甕	15.1	22.0	15.7	3.6	器面摩耗著しい。内面口縁部ナデ，胴上部ハケ・指頭圧痕。外面口縁部～頸部タテハケ，胴部タタキ，煤ける。	後期末
93	〃	〃 〃	〃 〃	12.8	23.8	16.8	4.6	内面口縁部ハケのちナデ，端部は面をなし，胴部ナデ，底部指頭圧痕。外面口縁部～頸部タタキのちタテハケ，胴上半部タタキ，下半部タタキ目をタテハケで消す。底部タタキ目が顕著，煤ける。	
94	〃	〃 〃	〃 鉢	10.9	12.8	11.1	4.4	内面口縁部ヨコナデ，体部ハケ・ナデ。外面体部ハケ，厚みのある底部はナデ	
95	〃	〃 〃	〃 〃	15.6	7.6	−	1.9	内外面ハケ，口縁部ヨコナデ，端部は面をなす。外面煤ける。	
96	〃	〃 〃	〃 〃	16.6	7.5	−	3.8	内面口縁部ハケ，体部ナデ。外面タタキのちナデ	
97	〃	〃 〃	〃 〃	−	(2.4)	−	3.4	内面ナデ，外面タタキ目をナデ消す。	
98	〃	〃 埋土	〃 甕	9.4	(8.8)	9.8	−	内面ナデ・指頭圧痕，口縁部ハケ。外面口縁部ナデ，胴部タタキのちハケ，煤ける。	
99	〃	〃 〃	〃 〃	15.5	(8.0)	−	−	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，胴部ハケ・指頭圧痕。 外面口縁部～頸部ヨコナデ，胴部タタキ	
100	〃	〃 〃	〃 〃	−	(3.7)	−	3.4	内面ハケ，外面タタキ	

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
101	Ⅱ区	ST5 埋土	弥生土器 鉢	29.2	(5.2)	–	–	内面口縁部ヨコナデ，端部は強いナデにより凹む。体部ハケ。外面タタキ・ハケ	
102	〃	〃 〃	〃 〃	22.4	(6.2)	–	–	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，体部ハケのちミガキ。外面口縁部ヨコナデ，体部ナデ・ハケ・一部タタキ目が残る。煤ける。	
103	〃	〃 〃	〃 〃	9.1	(5.7)	–	–	内面口縁部ヨコナデ・指頭圧痕，胴部ハケ。外面口縁部ヨコナデ，胴部内面とは違うハケ	
104	〃	〃 〃	〃 壺	7.2	15.0	14.5	3.6	内面口縁部～頸部ヨコナデ，胴部ナデ・指頭圧痕。外面口縁部～頸部ヨコナデ，胴上半～中央部ハケ・ミガキ，下半部ミガキ，煤ける。	搬入品
105	〃	〃 〃	須恵器 甕	–	(6.8)	–	–	内外面回転ナデ，口縁端部ナデにより凹む。外面口縁部と胴部にタタキ目が残る。	
106	〃	〃 〃	石製品 砥石	11.7	7.2	–	2.0	重量314.8g 。砂岩製。表面・両側面の3面に使用痕がみられる。	
107	〃	ST6 検出面	弥生土器 壺	6.5	(8.5)	10.0	–	小型壺。内面ナデ。外面口縁部～頸部ナデ，胴上部ハケのちナデ，胴中央～下部ハケ	
108	〃	〃 〃	〃 甕	14.6	(2.9)	–	–	内面口縁部ハケのちナデ，端部は面をなし，肩部ハケ。外面口縁部ヨコナデ，肩部ハケ，吹きこぼれの痕がみられる。	
109	〃	〃 〃	〃 〃	17.2	(5.9)	–	–	内面口縁部ハケ，端部は面をなし，胴部ナデ。外面口縁部タタキのち粗いハケ，胴部タタキ・一部ハケ	
110	〃	〃 〃	〃 〃	15.0	(3.3)	–	–	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，頸部ハケ，肩部異なるハケ，接合痕顕著。外面口縁部ヨコナデ，肩部タテハケ，煤ける。	
111	〃	〃 上層	〃 〃	14.2	(7.4)	14.6	–	内面口縁部ハケ，端部は面をなし，胴部ナデ。外面口縁端部直下に成形時の粘土塊が付着する。口縁部～胴部丁寧なタテハケ・一部タタキ目が残る。	
112	〃	〃 〃	〃 鉢	8.5	3.9	–	2.3	内面ハケ，外面丁寧なナデ	
113	〃	〃 〃	〃 〃	–	(3.4)	–	3.2	内面丁寧なハケ，外面ナデ	
114	〃	〃 〃	須恵器 杯	–	(1.8)	–	9.0	器面摩耗著しい。内面回転ナデ。貼付高台	混入
115	〃	〃 〃	金属製品 棒状鉄片	(3.1)	1.7	–	0.3	重量(4.4) g	
116	〃	〃 中層	弥生土器 壺	20.5	(12.4)	–	–	内面口縁部ヨコナデ，頸部ナデ・指頭圧痕。外面口縁部ヨコナデ，端部に2条の凹線文，頸部タタキ目をハケで消す。	
117	〃	〃 〃	〃 甕	8.9	11.8	9.5	–	丸底。内面丁寧なナデ。外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ	
118	〃	〃 〃	〃 鉢	12.5	5.8	–	3.2	器面摩耗著しい。内面ハケ，外面タタキ・ナデ	
119	〃	〃 〃	〃 〃	19.0	(7.1)	–	–	内面口縁部ハケのちナデ，体上部ハケ，体中央部ナデ。外面口縁部ヨコナデ，体部タタキ・ナデ	
120	〃	〃 〃	〃 〃	11.1	5.4	–	–	口縁部の1ヶ所をU字状に凹ませ注口状を呈する。内面ハケ状原体による粗いナデ。外面ミガキ	
121	〃	〃 〃	〃 〃	9.6	4.7	–	2.6	内面ハケ，口縁端部は面をなし，底部ナデ。外面タタキのちナデ	
122	〃	〃 〃	〃 〃	9.7	3.6	–	2.2	手づくね。内面指頭圧痕・ナデ，外面指頭圧痕	
123	〃	〃 〃	〃 〃	21.8	7.8	–	4.4	内面ハケ，口縁端部は摘みにより面をなす。外面タタキ	
124	〃	〃 〃	〃 〃	13.3	8.2	–	3.8	内面ハケ，外面タタキのちナデ	
125	〃	〃 〃	〃 〃	14.2	6.5	–	3.0	内面ハケ，外面タタキのちナデ，内外面一部煤ける。	

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
126	Ⅱ区	ST6 中層	金属製品 棒状鉄片	2.9	1.4	−	0.2	重量3.0g	
127	〃	〃 下層	弥生土器 鉢	11.8	5.6	−	2.3	内面ハケ。外面口縁部～体上部タタキのちナデ，体中央～下部タタキ，体下部はタタキを施した際の面が残る。	
128	〃	〃 〃	金属製品 鉄釘	5.7	0.8	−	0.5	重量5.3g	
129	〃	〃 埋土	弥生土器 甕	−	(6.5)	−	8.6	内面胴部ハケ，底部ナデ。外面タタキ・粗いハケ	
130	〃	〃 〃	〃 〃	15.6	(24.6)	18.0	−	内面口縁部ハケ，端部は面をなし，胴部ナデ。外面口縁部～頸部ヨコナデ，胴部タテハケ，煤ける。	
131	〃	〃 〃	〃 〃	16.1	(7.7)	−	−	器面摩耗。口縁部は「く」の字状に屈曲する。内面ハケ。外面口縁部ハケ・ナデ，胴部タテハケ，煤付着	
132	〃	〃 〃	〃 〃	12.3	17.3	13.0	2.8	内面口縁部ヨコハケ，頸部ナデ・指頭圧痕，胴部～底部タテ方向ナデ。外面口縁部～頸部タタキのちタテ方向のハケ，胴上部タタキ・ハケ，胴中央～下部タタキ目をタテ方向のハケで消す。煤ける。	
133	〃	〃 〃	〃 〃	−	(25.5)	18.3	3.9	内面口縁部ハケ，胴部ナデ，接合痕顕著。外面肩部ハケ，胴上半～中央部タタキ，胴下半部タテハケ，煤ける。	
134	〃	〃 〃	〃 〃	9.7	12.6	−	4.0	小型甕。内面口縁部ハケ，胴部丁寧なナデ，底部指頭圧痕。外面口縁部ナデ，胴部タタキ，底部タタキ目が残る。	
135	〃	〃 〃	〃 鉢	10.9	5.6	−	2.6	内面ハケ，外面ナデ	
136	〃	〃 〃	〃 〃	−	(5.5)	−	4.5	内面ハケ，底部指頭圧痕。外面ハケ	
137	〃	〃 〃	〃 〃	30.6	(12.0)	−	−	内面口縁部ハケのちヨコナデ，端部は凹状をなし、体部ミガキ。外面タタキ目をハケで消す。	
138	〃	〃 〃	〃 〃	13.5	7.3	−	4.0	内面ハケのちミガキ，底部指頭圧痕。外面口縁部ナデ，体部タタキのちミガキ，底部タタキ目が残る。	
139	〃	〃 〃	〃 〃	19.3	8.7	−	4.6	器面摩耗。内面ハケ。外面体上半部タタキのちナデ，体中央部タテハケ，体下半部タタキのちナデ	
140	〃	〃 〃	〃 〃	15.1	6.1	−	4.2	内面ハケ，口縁端部は面をなす。外面タタキのちナデ，底部は丸みを帯びる。	
141	〃	〃 〃	〃 〃	17.3	9.6	−	1.7	丸底。内面ハケ，口縁端部は面をなす。外面タタキのちナデ	
142	〃	〃 〃	〃 〃	9.6	5.6	−	2.4	内面口縁部指頭圧痕，体部ハケ。外面ナデ・指頭圧痕，底部は高台状を呈する。	
143	〃	〃 〃	〃 〃	−	(4.9)	−	3.2	内面ハケのちナデ。外面ハケ，一部タタキ目が残る。	
144	〃	〃 〃	〃 〃	17.7	9.6	−	3.2	内面ハケ，口縁端部摘む。外面ハケ，体下半部タタキ目が残る。	
145	〃	〃 〃	〃 高杯	−	(7.4)	−	22.0	径0.8cmの穿孔3ヶ所。内面上部ナデ，中央部ハケ，裾部ヨコナデ。外面ハケ・一部ミガキ。	
146	〃	〃 〃	〃 〃	−	(8.8)	−	−	径1.0cmの穿孔2ヶ所。杯部内底丁寧なナデ。内面脚部ナデ，裾部ハケ。外面丁寧なミガキ	ST3検出面と接合
147	〃	ST7 検出面	〃 〃	−	(4.5)	−	−	内面口縁部ヨコナデ，杯部ハケ。外面ミガキ	
148	〃	〃 下層	〃 鉢	12.8	(5.9)	−	−	内面ハケ，口縁端部ハケのちナデ，面をなす。外面ナデ	
149	〃	〃 埋土	〃 甕	17.2	(14.9)	17.5	−	内面口縁部ヨコナデ，端部指頭圧痕，頸部接合痕顕著，胴部タテ方向のケズリ。外面口縁部ナデ，胴部タタキのちミガキ，煤ける。	
150	〃	〃 〃	〃 〃	−	(4.8)	−	5.2	内面粗いケズリ。外面タテハケ，胴部細やかなハケ調整，煤ける。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
151	Ⅱ区	ST7 埋土	弥生土器 甕	－	(5.6)	－	5.8	内面ナデ。外面タタキのちハケ，底部ナデ	
152	〃	〃 〃	〃 鉢	17.6	9.0	－	2.6	丸底に近い。内面口縁部ヨコハケのちナデ，端部は面をなし，体部ハケのちナデ，底部摩耗。外面口縁部ヨコナデ，体部ハケ，煤ける。	
153	〃	〃 〃	小型丸底鉢	－	(6.7)	10.8	－	内面頸部ヨコ方向のミガキ，体部ハケのちミガキ。外面頸部ナデ，体部ミガキ	
154	〃	〃 〃	石製品 石包丁	9.8	3.6	－	0.6	重量31.2g。貢岩製。両側に抉り，両面に背ミガキ	
155	Ⅰ区	ST8 埋土	弥生土器 甕	－	(7.5)	－	4.6	内面ナデ。外面タタキ目をナデ消す。底部をわずかに摘み出す。	
156	〃	〃 〃	土師器 杯	10.2	3.5	－	6.3	内外面ナデ，外面底部回転ヘラ切りのちナデ	
157	〃	〃 〃	〃 甕	－	(2.8)	－	－	内外面ハケのちナデ，口縁端部は強いナデにより凹む。	搬入品
158	〃	〃 〃	黒色土器 椀	14.1	(3.4)	－	－	内外面黒色処理，ヘラミガキ。口縁部内面に1条の沈線	搬入品(楠葉B類)11c前半
159	〃	〃 〃	土師質土器 杯	11.0	2.7	－	6.2	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラ切り	
160	〃	〃 〃	〃 甕	24.8	(6.6)	(20.9)	－	内面口縁部ヨコナデ，端部は面をなし，胴部ハケのちナデ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ	
161	〃	〃 〃	〃 羽釜	21.0	(4.1)	－	－	口縁端部強いナデにより凹状。内面一部ハケが残るナデ。外面ヨコナデ，鍔端部に強いナデによる凹み	搬入品(摂津系)11c前半
162	〃	〃 〃	金属製品	(4.2)	(1.8)	－	1.0	重量(10.6)g。銅製か。	
163	〃	〃 〃	〃	5.1	3.1	－	1.2	重量43.0g。鉄製	
164	〃	〃 〃	土師器 甕	18.8	(9.0)	17.4	－	内面口縁部ハケのちヨコナデ，端部は面をなし，胴部ケズリ。外面口縁部タテハケのちヨコナデ，胴部ハケ・ナデ，煤ける。	包含層Ⅲ層と接合
165	〃	〃 〃	〃 カマド	29.6	(8.8)	－	－	器面摩耗。口縁部ヨコナデ，端部は面をなす。被熱で器面割れる。	包含層Ⅰ層と接合
166	Ⅱ区	ST9 埋土	弥生土器 壺	－	(2.7)	－	－	二重口縁壺。内面ヨコナデ，口縁端部は面をなす。外面ハケのちナデ	
167	〃	〃 〃	土師質土器 椀	－	(1.8)	－	7.5	器面摩耗著しく調整不明。貼付高台	
168	Ⅰ区	SB3 P1	須恵器 壺	17.1	(5.6)	－	－	内外面ナデ，口縁端部は面をなす。	
169	〃	SB4 P7	土師器 蓋	14.3	(1.9)	－	－	器面摩耗。内外面ナデ，外面化粧土か。	
170	Ⅱ区	SB5 P10	金属製品	8.0	4.3	－	0.6	重量102.3g	鉄塊か。
171	〃	SB6 P9	須恵器 高杯	－	(2.8)	－	－	脚部欠損。内外面回転ナデ，外面底部ケズリ	
172	〃	SB7 P3	石製品 砥石	(8.9)	(7.1)	－	2.8	重量(201.8)g。砂岩製。2面使用痕あり。	P31出土の可能性あり。
173	〃	SB7 P10	須恵器 壺	－	(3.7)	－	5.2	内外面回転ナデ	SB14P2と接合
174	〃	〃 〃	〃 皿	13.6	1.4	－	10.8	内外面回転ナデ	
175	〃	〃 〃	〃 杯	13.2	3.4	－	9.3	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラ切り	SB14P2と接合

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
176	Ⅱ区	SB7 P11	須恵器 蓋	16.6	2.3	－	－	つまみ径33cm。器面摩耗。つまみ部扁平に近く，中央部やや凸状をなす。内面回転ナデ。外面天井部回転ヘラケズリ，口縁部回転ナデ。	
177	〃	SB8 P3	土師質土器 椀	15.3	5.3	－	6.1	内面回転ナデ・一部ミガキ。外面回転ナデ。貼付高台	
178	Ⅰ区	SB10 P4	石製品 叩石	11.7	8.8	－	3.9	重量541.5g。砂岩製。側面に使用痕	
179	〃	〃 P6	土師器 羽釜	－	(6.7)	－	－	内面ナデ。外面口縁部～鍔下部ナデ，胴部タテハケ，煤ける。	搬入品(摂津C2)
180	Ⅱ区	SB11 P1	金属製品 鋤先か	(9.2)	3.3	－	1.2	重量(47.5)g。鉄製。装着部はY字状の断面形	
181	〃	SB12 P4	瓦器 椀	16.2	3.6	－	5.0	内面口縁部ナデ，体部粗いミガキ。外面口縁部ナデ，体部指頭圧痕。高台は三日月状に外反する。和泉型に似せた在地産	P36出土の可能性あり。
182	〃	〃 〃	土師質土器 椀	－	(3.4)	－	6.8	器面摩耗。内面ミガキ。外面回転ナデ・一部ミガキ。貼付高台	P37出土の可能性あり。
183	〃	〃 〃	白磁 碗	－	(3.4)	－	－	口縁部外反する。	
184	〃	〃 〃	土製品 土錘	(5.9)	(2.3)	－	4.6	重量(55.3)g。有溝土錘。ナデ・指頭圧痕	P37出土の可能性あり。
185	〃	〃 〃	金属製品 紡錘車か	4.2	4.2	－	0.3	重量13.0g。鉄製	
186	〃	〃 P7	石製品 叩石	9.4	8.8	－	7.9	重量851.8g。砂岩製。片面に敲打痕	
187	〃	〃 P8	〃 砥石	14.8	14.7	－	4.1	重量1360.5g。砂岩製。4面に使用痕が認められる。	
188	〃	〃 P9	須恵器 甕	20.2	(4.3)	－	－	二次被熱。内外面回転ナデ	
189	〃	〃 〃	〃 皿	15.0	2.3	－	11.2	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラ切り	
190	〃	〃 P10	製塩土器	－	(5.2)	－	－	内面に布目痕が認められる。	
191	〃	〃 〃	土師器 カマド	－	(4.8)	－	－	内面ケズリ，外面ハケ	
192	〃	〃 P12	土師質土器 椀	－	(2.1)	－	7.6	内外面回転ナデ。貼付高台	
193	〃	〃 〃	土製品 土錘	(4.3)	1.9	－	1.7	重量(10.8)g。孔径0.5cm。摩耗し調整不明	
194	〃	〃 P13	須恵器 杯	－	(1.1)	－	9.0	底部内面ナデ，外面ヘラ切り。貼付高台，端部中央部凹む。	
195	〃	〃 〃	〃 蓋	－	(1.6)	－	－	二次被熱。径2.1cmの宝珠形のつまみが付く。内外面ナデ	
196	〃	〃 P15	〃 壺	－	(8.4)	16.2	9.9	内外面回転ナデ。高台を有する。	
197	〃	SB14 P3	土師器 杯	14.7	3.7	－	8.7	内面口縁部強いナデにより凹状をなし，体部～底部ナデのちミガキ，底部中央強いナデにより凸状に盛り上がる。外面ナデのちミガキ，底部ヘラ切りのちナデ	
198	〃	〃 〃	土製品 土錘	3.8	1.3	－	1.2	重量5.2g。孔径0.5cm。摩耗するが，ナデ調整が認められる。	
199	〃	〃 P5	土師器 杯	14.4	2.8	－	8.6	器面摩耗著しく体部の調整不明。外面底部回転ヘラ切り	
200	〃	SB15 P3	弥生土器 甕	19.0	(3.5)	－	－	器面摩耗。内外面ナデ，口縁端部は面をなす。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
201	Ⅱ区	SB15 P11	須恵器 皿	15.6	2.0	−	11.4	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラ切り	
202	〃	SB18 P1	土師質土器 小皿	8.0	1.4	−	5.0	器面摩耗。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
203	〃	〃 P10	〃 椀	13.5	4.3	−	7.6	器面摩耗著しい。外面回転ナデが確認できる。底部切り離し痕をナデ消す。	
204	Ⅰ区	SB19 P7	土師器 椀	13.0	5.7	−	7.7	器面摩耗。内面口縁部ヨコナデ，体部放射線状にハケ，底部ナデ。外面回転ヨコナデ。貼付高台	
205	〃	SB21 P1	〃 杯	15.3	3.6	−	10.3	器面摩耗。ロクロ成形。内外面回転ナデ，内面口縁部ナデにより凹状，端部は面をなす。外面底部回転ヘラ切りのち丁寧なナデ	
206	〃	SB22 P9	土製品 土錘	7.6	5.2	−	4.9	重量150.3g。孔径1.4㎝。指頭圧痕・ナデ，両端部は面をなす。	
207	〃	SB24 P3	土師質土器 椀	−	(1.9)	−	6.6	器面摩耗。外面底部回転ヘラ切り，断面方形状の貼付高台	12c頃
208	〃	〃 〃	〃 小皿	9.0	1.8	−	5.5	内面回転ナデ。外面口縁部回転ナデ，底部回転糸切り	柱根から出土
209	〃	〃 P12	〃 椀	13.4	4.8	−	6.3	器面摩耗。内面ナデ，広範囲にタール付着。外面ナデ，底部に回転糸切りがわずかに認められる。	
210	Ⅱ区	SB27 P4	土師器 甕	26.6	17.2	22.1	7.6	内面口縁部ハケ，端部ナデ，胴部ハケ。外面ハケ	
211	〃	SA2	須恵器 円面硯	−	(4.3)	−	17.9	陸部欠損。台脚部に十字状の透かし	
212	Ⅰ区	SK1	土師器 杯	9.7	4.0	−	6.2	手づくね。内面ナデ。外面口縁部ヨコナデ，体部指頭圧痕，底部ヘラ切り。粘土帯接合痕顕著	
213	〃	〃	〃 皿	9.5	2.5	−	7.4	手づくね。内面ナデ。外面口縁部ナデ，体部指頭圧痕，底部ヘラ切り	
214	〃	SK2	土師質土器 椀	14.0	6.1	−	5.8	口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ナデ。外面体上半部ナデ，下半部ケズリ。貼付高台，接合部顕著	
215	〃	〃	〃 〃	−	(4.6)	−	6.3	器面摩耗。外面底部糸切り痕残る。貼付高台，接合部丁寧なナデ	
216	Ⅱ区	SK3	土師器 皿	19.2	(1.8)	−	−	器面摩耗著しい。内外面回転ナデ，化粧土	SK17・18と接合
217	〃	SK6	瓦器 椀	15.4	(4.3)	−	−	内面ミガキ，外面指頭圧痕・一部ミガキ	
218	〃	〃	土師質土器 椀	−	(1.8)	−	6.2	内面ナデ，外面回転ナデ。貼付高台	
219	〃	〃	〃 〃	15.6	(4.2)	−	−	器面摩耗。一部強い被熱痕。内外面回転ナデ，外面下半部回転ヘラケズリ	
220	〃	SK8	〃 〃	15.6	4.5	−	11.4	内外面ミガキ。貼付高台	
221	〃	SK9	弥生土器 甕	13.4	(5.9)	−	−	器面摩耗著しい。内外面にハケ調整が認められる。	
222	〃	〃	土師器 皿	16.0	1.5	−	10.6	内外面ミガキ	
223	〃	〃	須恵器 皿	15.6	2.4	−	11.2	内外面回転ナデ，外面底部ヘラ切り	
224	〃	〃	〃 甕	20.0	(4.2)	−	−	器面摩耗著しく調整不明	
225	〃	〃	土製品 土錘	3.8	1.3	−	1.2	重量4.6g。孔径0.5㎝。摩耗し調整不明	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
226	Ⅱ区	SK9	金属製品 鋤先か	4.2	2.2	−	1.1	重量15.2g。鉄製	
227	〃	〃	鉄滓	5.0	4.7	−	2.0	重量29.6g	
228	〃	SK11	土師質土器 椀	−	(1.4)	−	7.0	内面ミガキ，外面回転ナデ。貼付高台	
229	〃	SK15	弥生土器 高杯	−	(5.6)	−	−	器面摩耗著しい。杯部内底一部ミガキが認められる。脚部内面ナデ	
230	〃	SG1	〃 甕	33.6	46.1	36.5	8.2	内面ハケ，口縁端部は面をなし，底部に指頭圧痕，接合痕顕著。外面口縁部ナデ，胴部ハケ，一部口縁部にまで達する。底部は平底で一部圧痕がみられる。煤ける。	
231	〃	SG2	〃 壺	−	(42.3)	33.1	9.5	内面ハケのちナデ。外面口縁部タテハケ・一部ミガキ，胴上～中央部ハケのち粗いミガキ，胴下部ハケ	後期後葉
232	〃	〃	〃 甕	−	(7.7)	−	6.1	内面タテ方向のハケ。外面胴中央部ヨコ方向のハケ，下半部タテ方向のハケ	〃
233	〃	〃	〃 鉢	26.0	(12.0)	−	−	器面摩耗。内面口縁部ハケのちナデ，体部ハケ。外面ハケ	〃
234	〃	P1	土師質土器 小皿	7.8	1.4	−	4.4	器面摩耗著しい。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
235	Ⅲ区	P2	瓦器 椀	14.9	(2.4)	−	−	内面ナデのちミガキ。外面指頭圧痕・ナデのちミガキ	
236	〃	P3	土師器 椀	14.5	6.0	−	6.1	内面口縁部～体部ヨコナデ，底部ミガキ。外面体上半～中央部回転ナデ，下半部は回転ヘラケズリ。貼付高台，底部回転ヘラ切り	
237	Ⅰ区	P4	石製品 叩石	12.4	10.9	−	2.8	重量584.5g。砂岩製。側面に使用痕あり。	
238	〃	P5	土師器 杯	14.2	2.7	−	9.0	器面摩耗。内面回転ナデ，底部指頭圧痕・ナデ。外面回転ナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
239	〃	P6	〃 〃	13.8	(2.7)	−	−	器面摩耗。内面ナデ，外面ヨコナデ	
240	〃	P7	金属製品 紡錘車か	4.9	4.9	−	1.9	重量15.8g。鉄製	
241	〃	P8	土師器 杯	10.0	3.3	−	6.8	ロクロ成形。内外面回転ナデ，外面底部ヘラ切りのちナデ	
242	〃	〃	〃 〃	11.2	4.2	−	7.0	ロクロ成形。内外面回転ナデ，外面底部ヘラ切りのちナデ	10c頃か。
243	〃	〃	〃 〃	11.6	3.8	−	7.1	器面摩耗。外面ヨコナデ，底部回転ヘラ切り	
244	〃	〃	〃 〃	11.5	3.3	−	7.9	器面摩耗激しい。内外面回転ナデ	
245	〃	〃	〃 〃	10.4	3.2	−	7.2	器面摩耗。内面体部ヨコナデ，外面底部ヘラ切り痕をナデ消す。	
246	〃	P9	〃 椀	−	(3.1)	−	7.2	器面摩耗。外面ナデ。貼付高台	
247	〃	〃	〃 皿	9.7	1.4	−	7.6	内外面ナデ。底部内面指頭圧痕・ナデ，外面ヘラ切りのちナデ	
248	〃	〃	黒色土器 椀	−	(2.7)	−	7.6	内面黒色処理。内面ミガキ，外面ナデ	
249	〃	P10	須恵器 杯	13.8	(2.8)	−	−	内外面回転ヨコナデ	
250	〃	P11	石製品 石包丁	9.1	4.5	−	0.8	重量41.5g。結晶片岩製。両側に抉り，使用痕あり。一部ミガキ。両面に自然面残る。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
251	Ⅰ区	P12	弥生土器 高杯	−	(5.5)	−	−	内面ミガキ，外面摩耗。ハケがわずかに認められる。	
252	〃	P13	〃 甕	−	(10.3)	−	5.2	内面ナデ，底部指頭圧痕。外面摩耗，タタキ目が残る。底部をわずかに摘み出す。	
253	〃	P14	須恵器 壺	−	(7.0)	−	−	長頸壺。内外面回転ナデ	
254	〃	〃	土師質土器 小皿	8.4	1.5	−	5.7	内外面丁寧な回転ナデ，外面底部回転糸切り	
255	〃	P15	土製品 土錘	3.4	1.9	−	1.9	重量11.0g。孔径0.6㎝。摩耗し調整不明	
256	〃	P16	黒色土器 椀	−	(2.7)	−	−	内外面黒色処理。内面ミガキ，口縁端部ナデ。外面一部ナデが残るミガキ	
257	〃	〃	金属製品 鉄釘	(5.2)	1.5	−	2.0	重量(18.5)g	
258	〃	P17	土師質土器 椀	14.8	6.0	−	5.1	器面摩耗。内面ナデ。外面体上半～中半部回転ナデ，下半部ヘラケズリ。底部回転糸切りのち高台を貼付	
259	〃	P18	土師器 皿	11.0	2.2	−	7.0	手づくね。口縁部ヨコナデ。内外面体部～底部ナデ・指頭圧痕。外面底部に板状の圧痕あり。	
260	〃	〃	〃 〃	10.3	2.3	−	7.0	手づくね。口縁部ヨコナデ。内面口縁部より下方は摩耗。内外面ナデ・指頭圧痕	
261	〃	〃	〃 〃	10.9	2.5	−	6.9	手づくね。口縁部ヨコナデ。内面口縁部より下方は摩耗。内外面ナデ・指頭圧痕	
262	〃	〃	〃 〃	10.3	2.1	−	6.3	手づくね。口縁部ヨコナデ。内外面ナデ・指頭圧痕	
263	〃	P19	弥生土器 甕	25.9	(6.8)	−	−	内面口縁部ハケのちヨコナデ，端部は面をなし，胴部ハケのちナデ。外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ	
264	〃	P20	鉄塊	11.9	7.7	−	2.9	重量242.5g	
265	〃	P21	須恵器 蓋	17.8	1.9	−	−	つまみ径2.5㎝，高さ1.2㎝。擬宝珠形，先端部潰れる。天井部外面ヘラケズリのちナデ。口縁部回転ナデ，端部は垂直に落ちて面をなす。内面ナデ，口縁端部は凹状をなす。	
266	Ⅱ区	P22	土師器 皿	10.6	2.5	−	8.0	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ・指頭圧痕，外面指頭圧痕	
267	〃	〃	土師質土器 杯	11.0	3.0	−	4.8	内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り・板状圧痕	
268	〃	P23	土師器 皿	16.5	1.9	−	13.1	内面丁寧なナデ・一部ミガキ。外面丁寧なナデ，底部切り離し痕をナデ消す。	
269	〃	P24	〃 〃	25.5	3.2	−	20.4	台付皿。内外面ナデのちミガキ，口縁部は段を有する。外面底部ヘラ切りのちナデ，貼付高台，一部煤ける。	
270	〃	P25	弥生土器 鉢	7.8	7.7	−	2.8	口縁部内外面指頭圧痕。体部内面ナデ，外面タタキ・ナデ。丸底の底部にもタタキ目がみられる。	
271	〃	P26	石製品 磨石	13.9	4.8	−	2.9	重量317.0g。片岩製。両端に使用痕あり。	
272	〃	P27	土師器 皿	16.0	2.2	−	12.0	内外面ミガキ，外面底部ヘラ切り	
273	〃	P28	〃 〃	13.0	1.9	−	9.0	内外面ミガキ，外面底部にもミガキが施される。ヘラ切り	
274	〃	〃	〃 〃	17.7	(1.5)	−	(12.6)	内外面ミガキ，外面底部ナデ。高台部分は欠損	
275	〃	P29	〃 杯	13.9	3.5	−	8.8	内外面回転ナデ・一部ミガキ，外面底部回転ヘラ切り	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
276	Ⅱ区	P29	須恵器 杯	15.4	(5.0)	−	−	内外面回転ナデ。高台を有していたと考えられる。	
277	〃	P30	土師器 甕	19.4	(8.4)	−	−	器面摩耗。内面上半部ハケ，下半部ナデ，口縁端部は面をなす。外面口縁部ナデ，胴部ハケ，煤ける。	
278	〃	〃	〃 〃	23.1	(5.1)	−	−	器面摩耗。内面口縁部ハケ，胴部ナデ。外面胴部タテハケ	
279	〃	〃	〃 皿	18.0	2.2	−	13.0	内外面回転ナデ・粗いミガキ	
280	〃	〃	緑釉陶器 椀	−	(1.6)	−	6.3	内外面施釉。輪高台畳付～見込み無施釉	
281	〃	P32	須恵器 杯	−	(2.5)	−	9.2	内外面回転ナデ。高台を有する。	
282	〃	P33	瓦質土器 杯	13.4	4.2	−	10.6	器面摩耗著しいが，ナデ調整が確認できる。	
283	〃	P34	石製品 叩石	9.3	9.2	−	6.4	重量781.5g。砂岩製。側面に使用痕あり。	
284	〃	P35	須恵器 壺	−	(8.2)	−	12.4	内外面回転ナデ	
285	〃	〃	土師質土器 椀	−	(3.5)	−	6.9	内外面回転ナデ。貼付高台	
286	〃	〃	土製品 土錘	7.2	5.5	−	5.4	重量173.5g。孔径1.0㎝。ナデ・指頭圧痕，両端部面取り	
287	〃	P38	土師質土器 鍋	−	(12.2)	−	−	内面ナデ。外面上部ヨコナデ，下部タタキ，煤ける。	
288	〃	P39	白磁 碗	14.6	4.9	−	5.8	口縁部端反。内面施文，外面無文。高台～見込み無施釉	
289	〃	P40	土師器 杯	12.6	2.9	−	8.2	内外面回転ナデ，外面底部ヘラ切り	
290	〃	P41	土製品 土錘	2.9	1.9	−	1.9	重量10.4g。孔径0.5㎝。完存。ナデ・指頭圧痕，両端部は面取りが施される。	
291	〃	P42	土師質土器 椀	−	(2.4)	−	6.8	器面摩耗著しい。内外面ナデが認められる。円盤状高台	
292	〃	〃	石製品 石包丁	8.4	4.9	−	1.2	重量73.0g。凝灰岩製。片側に抉りを施し，自然面が残る。	
293	〃	P43	土師質土器 椀	16.4	(4.1)	−	−	二次被熱。器面摩耗。調整不明	
294	〃	P44	〃 杯	14.6	4.3	−	6.4	内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
295	〃	〃	〃 小皿	8.6	1.9	−	6.8	器面摩耗。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
296	〃	P45	〃 椀	−	(3.8)	−	7.0	内面回転ナデ。外面は摩耗するが，ナデ調整が確認できる。底部回転糸切り	
297	〃	P46	〃 〃	14.7	5.0	−	6.4	器面摩耗。内外面回転ナデ，外面底部に板状圧痕が認められる。貼付高台	
298	〃	P47	〃 杯	−	(2.6)	−	7.8	器面摩耗著しい。内面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
299	〃	〃	〃 椀	15.4	5.3	−	6.0	器面摩耗著しい。内外面回転ナデ。貼付高台	
300	〃	P48	弥生土器 鉢	11.4	10.9	−	4.1	内外面ハケ，外面に一部タタキ目が残る。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
301	Ⅱ区	P49	土師質土器杯	−	(2.2)	−	6.9	内外面回転ナデ，外面底部切り離し痕をナデ消す。	
302	〃	P50	弥生土器甕	17.0	(8.5)	−	−	内面口縁部～端部ハケ，胴部ハケ・ナデ。外面は摩耗するが，ハケ調整が認められる。	
303	〃	P51	土師器杯	13.8	3.3	−	9.5	器面摩耗著しく調整不明	
304	〃	P52	須恵器杯	13.0	4.0	−	9.4	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラケズリ	
305	〃	P53	土師器蓋	23.6	(1.8)	−	−	器面の摩耗が著しいが，ナデ調整と外面の一部にミガキが認められる。	
306	Ⅰ区	SX6	弥生土器甕	−	(2.8)	−	−	遠賀川式の特徴。口縁端部刻む。内外面ヨコナデ，外面に1条の沈線	
307	〃	〃	〃 〃	21.5	(10.1)	22.4	−	遠賀川式の特徴。口縁端部に刻目。内外面ハケのちナデ，口縁部と胴部境に2条の沈線，煤ける。	弥生前期末～中期初か。
308	〃	〃	〃 不明	−	(2.6)	−	−	口縁端部に刻目。内面ナデ，粘土帯を貼付し刻む。外面ハケ，煤ける。	
309	Ⅱ区	SX9	土師器皿	10.8	2.2	−	7.6	手づくね。器面摩耗著しい。指頭圧痕	
310	〃	〃	〃 〃	11.0	2.2	−	7.6	手づくね。器面摩耗。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより凹状。体部内面ナデ，外面の一部に指頭圧痕，一部煤ける。	
311	〃	〃	〃 〃	10.7	1.9	−	6.7	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより凹状。体部内面ヨコナデ，外面に指頭圧痕。底部外面に板状圧痕	
312	〃	〃	金属製品鉈か	(9.1)	1.2	−	0.3	重量(12.6)g。鉄製	
313	〃	〃	〃 鉄釘	3.5	0.7	−	0.3	重量1.3g	
314	〃	〃	〃 〃	4.0	0.7	−	0.3	重量1.3g	
315	〃	〃	〃 〃	4.7	0.8	−	0.3	重量1.4g	
316	〃	〃	〃 釘か	(2.1)	0.8	−	0.3	重量(0.8)g。銅製	
317	〃	SX11	土師器皿	10.8	2.1	−	7.6	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヨコナデ・一部指頭圧痕，外面に指頭圧痕。底部外面に板状圧痕	
318	〃	〃	〃 〃	11.0	2.3	−	8.0	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより凹状。体部内面ヨコナデ・一部指頭圧痕，外面指頭圧痕	
319	〃	〃	〃 〃	10.9	2.1	−	7.4	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより凹状。体部内面ナデ・指頭圧痕，外面指頭圧痕。底部外面に板状圧痕	骨が付着した状態で出土
320	〃	〃	〃 〃	10.8	2.0	−	6.8	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより浅く凹状。体部内面ナデ，外面指頭圧痕・一部に粘土紐接合痕がみられる。底部外面に板状圧痕	
321	〃	〃	〃 〃	11.0	2.2	−	7.6	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより凹状。体部内面ナデ・指頭圧痕。底部外面に板状圧痕。内外面煤ける。	
322	〃	〃	〃 〃	11.3	2.3	−	7.8	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，外面強いナデにより浅く凹状。体部内面ナデ・指頭圧痕，外面指頭圧痕。底部外面に板状圧痕，内面一部煤ける。	
323	〃	SX12	土師質土器小皿	8.4	1.5	−	5.0	器面摩耗著しい。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
324	〃	Ⅰ～Ⅱ層	緑釉陶器皿	10.8	(1.7)	−	−	硬質。内外面施釉。口縁部内面に1条，外面に2条の凹線。釉が溜まる。	
325	Ⅰ区	〃	瓦	(3.8)	(7.5)	−	1.7	内面に布目痕	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
326	Ⅱ区	Ⅰ～Ⅱ層	石製品 石包丁	7.6	4.4	－	1.0	重量47.3g。砂岩製。両端に抉り，両面に自然面が残る。	
327	〃	Ⅱ～Ⅲ層	弥生土器 壺	21.7	(7.3)	－	－	内面ハケのちヨコナデ，口縁端部ナデにより凹状。外面ヨコナデ	
328	〃	〃	〃 甕	17.4	(10.6)	18.2	－	内面口縁部直下は強いナデにより浅い凹状，胴部ハケのちナデ・指頭圧痕。外面口縁部ヨコナデ，煤ける。胴部に2条・3条・2条の凹線文を巡らせ，その間に浅いタテの凹線文を施す。	
329	〃	〃	〃 〃	13.8	(6.0)	－	－	内面口縁部～肩部ヨコナデ，胴部ケズリ，口縁端部は強いナデにより凹状，上下に拡張する。外面口縁部ヨコナデ，胴部丁寧なタテハケ，煤ける。	
330	Ⅰ区	〃	〃 鉢	－	(5.2)	－	－	内面ハケのち粗いミガキ，口縁端部一部ミガキ。外面口縁部ヨコナデ，直下に2条の凹線文，体部ハケのち粗いミガキ	
331	〃	〃	〃 高杯	－	(8.0)	－	－	器面摩耗。内面に絞り目，外面ハケのちミガキ	
332	Ⅱ区	〃	土師器 杯	14.8	3.5	－	10.3	内外面ナデのち粗いミガキ，外面底部ヘラ切り	
333	〃	〃	〃 〃	15.4	3.4	－	9.6	器面摩耗著しい。内外面ナデのちミガキ，外面底部ヘラ切り痕をナデ消す。	
334	〃	〃	〃 〃	16.0	5.0	－	7.4	器面の摩耗が著しいが，ナデが認められる。外面底部切り離し痕をナデ消す。貼付高台	
335	〃	〃	〃 皿	11.2	2.6	－	6.7	手づくね。内外面ナデ，外面底部板状圧痕	
336	〃	〃	〃 〃	17.0	2.2	－	14.0	器面摩耗著しい。内面一部ミガキ，底部に赤色顔料が残存。外面一部ミガキ，底部切り離し痕をナデ消す。	赤色塗彩
337	〃	〃	〃 鍋	－	(5.5)	－	－	被熱。内外面ナデ	12c～
338	〃	〃	〃 甑	32.2	(11.5)	－	－	内面摩耗・一部ハケが認められる。口縁部煤ける。外面口縁部ナデ，胴部タテハケ	
339	〃	〃	〃 カマドか	22.6	(6.6)	－	－	器面摩耗。口縁部～鍔部ヨコナデ(摂津C型の羽釜と類似)	
340	〃	〃	須恵器 杯	－	(1.7)	－	10.0	内外面回転ナデ。高台を有する。	
341	〃	〃	〃 〃	14.4	4.6	－	10.0	内外面回転ナデ，内面底部ナデ。高台を有する。	
342	〃	〃	〃 〃	12.1	4.3	－	8.6	内外面回転ナデ。高台を有する。	
343	〃	〃	〃 〃	14.1	4.3	－	8.0	内外面回転ナデ，外面底部回転ヘラ切り	
344	〃	〃	〃 〃	－	(3.1)	－	11.2	内外面回転ナデ。高台を有する。	
345	〃	〃	〃 皿	－	(2.6)	－	9.4	内面ナデ，外面回転ナデ。高台を有する。	
346	〃	〃	〃 壺	－	(3.4)	－	9.7	内外面回転ナデ。高台を有する。自然釉がかかる。	
347	〃	〃	〃 〃	－	(5.5)	－	11.5	内外面回転ナデ。高台を有する。	
348	〃	〃	〃 〃	－	(7.1)	－	11.0	内面回転ナデ，底部に自然釉がかかる。外面上半部ナデ，下半部ケズリ，底部蛇ノ目状にケズリ・ナデ	
349	〃	〃	〃 〃	－	(8.2)	－	2.2	内外面回転ナデ	
350	〃	〃	〃 〃	－	(4.7)	－	9.6	脚付壺。内外面回転ナデ。脚端部は強いヨコナデにより凹状を呈し，端部を摘み上げる。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
351	Ⅱ区	Ⅱ～Ⅲ層	須恵器 壺	－	(3.9)	－	11.1	脚付壺。内外面回転ナデ，脚端部を摘み上げる。	
352	〃	〃	〃 甕	19.4	(5.2)	－	－	二次被熱。内外面回転ナデ，外面に自然釉	
353	〃	〃	〃 〃	13.6	(7.0)	－	－	口縁部内外面回転ナデ。胴部内面同心円状のタタキ，外面格子状のタタキ	
354	〃	〃	緑釉陶器 椀	18.0	(5.6)	－	－	内外面施釉（ハケ塗り）	洛北か大原野 9c中葉～
355	〃	〃	〃 椀か	－	(1.5)	－	6.0	軟質。内面施釉（ハケ塗り）。外面畳付～高台内無施釉。輪高台（やや段状を呈する）	
356	〃	〃	〃 椀	－	(1.9)	－	6.4	軟質。全面施釉。円盤状高台（Ⅰ類削り出し）	大原野か。 9c頃
357	〃	〃	〃 〃	－	(1.6)	－	7.6	軟質。器面摩耗著しい。内底部・高台際・高台内に釉が認められる。輪高台	
358	〃	〃	〃 不明	－	(1.7)	－	7.8	硬質。全面施釉。輪高台	篠か。 10c頃
359	〃	〃	〃 〃	－	(1.5)	－	9.2	硬質。全面施釉。蛇ノ目高台	大原野 9c頃
360	〃	〃	〃 〃	－	(1.5)	－	7.3	硬質。全面施釉。輪高台。本遺跡出土の輪高台の中では一番古いもの	9c後半
361	〃	〃	灰釉陶器 椀	－	(2.6)	－	－	内外面施釉	
362	〃	〃	〃 〃	－	(1.6)	－	7.2	内面施釉。外面ケズリ。内外面ともに重ね焼きの際の高台接地痕が認められる。三日月高台	
363	〃	〃	〃 椀か	－	(1.7)	－	7.2	内面体部の一部と見込みに蛇ノ目状に施釉。外面体部施釉，高台際～高台内無施釉。三日月高台	
364	〃	〃	土師質土器 杯	－	(3.1)	－	6.4	内外面回転ナデ，底部内面摩耗，外面回転糸切り	
365	〃	〃	〃 〃	－	(3.0)	－	5.8	内面丁寧なナデ。外面回転ナデ，底部回転糸切り	
366	〃	〃	〃 小皿	7.8	2.0	－	4.4	器面摩耗著しい。回転ナデ，外面底部回転糸切り	
367	〃	〃	〃 〃	8.0	1.6	－	5.0	器面摩耗。内外面ナデ，外面底部回転糸切り	
368	〃	〃	〃 皿	－	(2.8)	－	15.1	内面丁寧なナデ，外面回転ヘラケズリ	
369	〃	〃	〃 椀	16.5	5.7	－	6.2	器面摩耗。内外面回転ナデ，外面底部は円盤状高台，回転糸切り	
370	〃	〃	〃 〃	－	(3.5)	－	6.1	内外面回転ナデ，外面底部は円盤状高台，回転糸切り	
371	〃	〃	〃 羽釜	25.7	(4.4)	－	－	内面口縁部ハケ。外面口縁部～鍔部ヨコナデ，鍔下部ハケ	摂津Ｃ型
372	〃	〃	〃 〃	22.3	(4.1)	－	－	器面摩耗。内外面ナデ	〃
373	〃	〃	〃 〃	23.4	(6.1)	－	－	内面ナデ，口縁端部は面をなす。外面口縁部～鍔部ヨコナデ	
374	〃	〃	白磁 碗	14.0	(2.6)	－	－	口縁部は玉縁状に肥厚	白磁Ⅳ類
375	〃	〃	〃 〃	13.8	(2.4)	－	－	内外面施釉。口縁部は玉縁状に肥厚	〃

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
376	Ⅱ区	Ⅱ～Ⅲ層	白磁 碗	15.6	(2.6)	－	－	内外面施釉。口縁部は玉縁状に肥厚	
377	〃	〃	〃 〃	14.0	(2.5)	－	－	内外面施釉。細かい鬆が入る。口縁部やや玉縁状	
378	〃	〃	〃 〃	15.4	(2.9)	－	－	内外面施釉。外面に鬆が入る。	
379	〃	〃	〃 〃	12.8	(1.9)	－	－	内外面施釉	
380	〃	〃	〃 〃	－	(2.1)	－	6.6	内面施釉。外面ケズリ，体部の一部に施釉	
381	〃	〃	〃 〃	－	(2.7)	－	7.6	内面施釉。外面体部に施釉，成形時のケズリ痕が残る。	
382	〃	〃	青磁 碗	－	(2.0)	－	6.4	全面施釉。高台内に砂塊が付着	
383	〃	〃	瓦 平瓦	(5.2)	(6.2)	－	2.2	側面ヘラケズリ，凹面に布目痕，凸面には縄目状のタタキ目	
384	〃	〃	〃 〃	(8.0)	(4.6)	－	(1.7)	側面ヘラケズリ，凹面に布目痕，凸面にはタタキ目	
385	〃	〃	〃 〃	(6.4)	(6.4)	－	(2.3)	側面ヘラケズリ，凹面に布目痕，凸面には縄目状のタタキ目	
386	〃	〃	〃 〃	(6.5)	(4.4)	－	(1.6)	側面・凹面にヘラケズリ，凹面に布目痕，凸面にはタタキ目	
387	〃	〃	磁器 皿	－	(2.1)	－	4.5	灰釉皿。全面施釉。内面見込みと外面高台に砂が付着	唐津
388	〃	〃	土製品 支脚	－	(6.0)	－	－	内面ナデ。外面ハケのちナデ・指頭圧痕，煤ける。	
389	〃	〃	〃 土錘	7.7	5.1	－	(3.0)	重量(112.0)g。孔径1.2cm。摩耗著しいが，ナデが認められる。	
390	〃	〃	〃 〃	7.8	(4.1)	－	4.0	重量(91.5)g。孔径1.5cm。摩耗著しく調整不明	
391	〃	〃	〃 〃	(7.7)	(3.1)	－	5.7	重量(98.7)g。有溝土錘。ナデ	
392	〃	〃	〃 〃	3.7	2.1	－	2.1	重量12.5g。孔径0.7cm。摩耗著しく調整不明	
393	〃	〃	〃 〃	4.1	1.8	－	1.4	重量10.9g。孔径0.6cm。丁寧なナデ，両端面取り	
394	〃	〃	〃 〃	4.1	1.9	－	1.3	重量12.4g。孔径0.5cm。摩耗するが，ナデ	
395	〃	〃	〃 〃	4.9	1.8	－	1.6	重量(12.6)g。孔径0.5cm。摩耗するが，ナデ	
396	〃	〃	〃 〃	5.9	2.4	－	2.3	重量26.2g。孔径0.5cm。丁寧なナデ	
397	〃	〃	〃 〃	8.7	2.8	－	2.4	重量59.5g。孔径0.5cm。ナデ・指頭圧痕	
398	〃	〃	金属製品	7.0	1.6	－	0.7	重量16.9g。鉄製	
399	〃	〃	〃	(3.5)	1.1	－	0.4	重量(3.4)g。鉄製	
400	Ⅰ区	〃	〃 棒状鉄片	(5.3)	1.6	－	0.3	重量(6.1)g	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
401	Ⅱ区	Ⅱ～Ⅲ層	鉄滓	7.5	6.4	－	2.6	重量127.5g	
402	Ⅰ区	Ⅲ層	弥生土器 壺	9.3	(9.6)	11.7	－	内面口縁部ナデ・ミガキ，端部ナデ，胴部ナデ・指頭圧痕。外面口縁部ナデ，頸部タテハケ，肩部ミガキ・ヘラ描沈線文，胴上半部ミガキ，下半部粗いミガキでハケが残る。	前期か。
403	〃	〃	〃 甕	18.4	(3.6)	－	－	内面口縁部ヨコハケ，端部指頭圧痕，肩部ナデ。外面タテハケ，煤付着	
404	〃	〃	〃 不明	－	(4.0)	－	－	内面摩耗。外面葉文様が描かれる。	
405	〃	〃	土師器 甕	17.1	(4.5)	－	－	器面摩耗。内面口縁部ヨコナデ，胴部ナデ。外面口縁部ナデ，胴部タテハケのちヨコハケ，一部煤ける。	
406	〃	〃	〃 〃	－	(6.7)	－	－	器面摩耗。内面ヨコナデ，外面指頭圧痕，タール付着	
407	〃	〃	〃 鍋	25.6	(6.4)	－	－	器面摩耗。被熱。内外面ナデ	
408	〃	〃	〃 カマド	－	(5.7)	－	35.4	内外面ナデ・指頭圧痕	
409	〃	〃	須恵器 杯	－	(3.3)	－	10.6	内外面回転ナデ。高台を有する。端部はわずかに凹み，内側に突出	
410	〃	〃	〃 壺	10.7	(2.0)	－	－	内外面回転ナデ	
411	〃	〃	〃 〃	－	(5.6)	－	10.2	内面胴部回転ナデ，底部ナデ。外面胴部ナデ，高台際回転ナデ。作りが粗雑で，所々形が歪む貼付高台	
412	〃	〃	〃 〃	－	(4.0)	－	－	内面回転ナデ。外面斜格子状のタタキ目，断面三角形の突帯が巡る。自然釉がかかる。	
413	〃	〃	〃 〃	－	(3.1)	－	5.8	内外面回転ナデ，高台端部は凹状をなす。	
414	〃	〃	〃 甕	－	(3.8)	－	－	内外面回転ナデ，口縁部下に突帯を貼付し，その下に2種類の波状文が認められる。	
415	〃	〃	緑釉陶器	－	1.9	－	－	水注の把手か。型押し	長門
416	〃	〃	灰釉陶器 椀	－	(3.0)	－	－	口縁部玉縁状	
417	〃	〃	〃 皿	－	(1.8)	－	8.0	内面見込みは蛇ノ目状に塗り分ける。外面体部のみ施釉	K90 9c後半～
418	〃	〃	製塩土器	－	(5.0)	－	－	器面摩耗。調整不明	
419	〃	〃	土師質土器 杯	14.8	3.8	－	8.2	内外面回転ナデ，内面丁寧なナデ，外面底部回転糸切り	
420	〃	〃	〃 小皿	8.8	1.7	－	6.0	内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り・板状圧痕あり。	
421	〃	〃	〃 〃	8.0	1.7	－	5.0	内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
422	〃	〃	〃 椀	15.6	5.5	－	5.9	器面摩耗。二次被熱。内外面回転ナデ。貼付高台	
423	〃	〃	白磁 碗	－	(1.7)	－	－	口縁部は玉縁状に肥厚	
424	〃	〃	〃 〃	12.8	(2.0)	－	－	内面に鬆が入る。	
425	〃	〃	〃 〃	－	(4.4)	－	6.9	外面底部ケズリ。高台畳付摩耗	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
426	Ⅰ区	Ⅲ層	青磁碗	－	(2.2)	－	5.1	蛇ノ目高台。底部の摩耗具合からよく使用されていたと考えられる。	越州窯9c初か。
427	〃	〃	土製品羽口	(7.0)	－	－	－	孔径2.1㎝。先端部に発泡した鉄滓付着。周辺赤色。3ヶ所面取りがみられる。表面赤灰色～橙色，断面浅黄橙色	
428	〃	〃	石製品石包丁	8.1	3.5	－	0.8	重量26.4g。未成品。結晶片岩製。2ヶ所穿孔	
429	〃	〃	鉄塊	7.6	4.9	－	2.3	重量126.6g	
430	〃	〃	鉄滓	6.3	5.5	－	3.5	重量116.0g	
431	〃	〃	鉄塊	9.5	5.6	－	2.6	重量170.3g	
432	Ⅱ区	Ⅲ～Ⅳ層	弥生土器壺	16.4	(4.3)	－	－	内面口縁部強いヨコナデにより浅く凹状をなし，ハケ，頸部ナデ。外面口縁部ヨコナデ，頸部までタテハケ，煤ける。	
433	Ⅰ区	〃	〃甕	－	(5.0)	－	6.8	内面ナデ，底部指頭圧痕。外面タタキのちハケ，底部は摘み出す。	
434	〃	〃	〃鉢	18.4	8.1	－	4.4	内外面ハケ。底部は摘み出し高台状をなす。	
435	〃	〃	土師器高杯	－	(7.2)	－	－	杯部欠損。八角形に面取り(1.8～2.0㎝幅)。内面ナデ，外面丁寧なミガキ	搬入品
436	Ⅱ区	〃	〃高杯か	17.4	(1.5)	－	－	脚部欠損。内面ナデのちミガキ。外面口縁部ナデのちミガキ，体部ヘラケズリのちミガキ。内外面明赤褐色	
437	〃	〃	〃蓋	－	(2.1)	－	－	つまみ径2.2㎝，高さ1.3㎝の宝珠状のつまみが付く。内面ミガキ，外面丁寧なナデ。	
438	〃	〃	〃〃	－	(1.6)	－	－	内面ナデ，外面ナデのち粗いミガキ	
439	〃	〃	〃杯	15.0	(4.1)	－	－	内面ヨコナデのち放射線状のヘラミガキ，口縁端部にもヘラミガキが施される。外面ハケ・一部ナデ	
440	〃	〃	〃〃	15.0	3.1	－	8.0	内外面回転ナデ。底部内面丁寧なナデ，外面ヘラ切り	
441	〃	〃	〃〃	14.8	4.3	－	7.8	内外面回転ナデ。底部内面中央が強いナデにより凸状に盛り上がる，外面ヘラ切りのちナデ	
442	〃	〃	〃皿	10.1	1.9	－	7.4	手づくね。内外面ナデ・一部指頭圧痕が認められる。外面底部切り離し痕をナデ消す。	
443	〃	〃	〃〃	10.6	2.8	－	7.4	手づくね。口縁部内外面ヨコナデ，体部～底部ナデ・指頭圧痕	
444	Ⅰ区	〃	須恵器杯	12.1	3.4	－	8.8	内外面回転ナデ	
445	Ⅱ区	〃	〃〃	－	(1.7)	－	6.4	内面丁寧なナデ，火襷。外面ナデ，底部回転糸切り	
446	〃	〃	〃〃	－	(3.1)	－	6.6	内面回転ナデ，火襷，底部にコテ当て痕。外面回転ナデ，底部回転糸切り	
447	〃	〃	〃皿	15.8	1.9	－	13.0	内外面回転ナデ，外面底部切り離し痕をナデ消す。	
448	〃	〃	〃高杯	－	(7.4)	－	－	杯部内底ナデ，脚部内外面回転ナデ	
449	Ⅰ区	〃	〃円面硯	18.9	5.8	－	20.0	陸部欠損。台脚部に十字状の透かし。内面に自然釉が認められる。穿孔は十字形が5孔か。	
450	〃	〃	〃甕	－	(3.3)	－	－	内面回転ナデ。外面ヨコハケ，タテ方向の深いヘラ描沈線，ヨコ方向の浅いヘラ描沈線	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
451	Ⅱ区	Ⅲ～Ⅳ層	緑釉陶器 椀	－	(1.6)	－	6.2	軟質。器面摩耗著しい。全面施釉。内面にトチン痕が認められる。円盤状高台。	洛北 9c
452	〃	〃	灰釉陶器 椀	－	(1.4)	－	5.8	内面の一部と外面に施釉。高台際にケズリが認められる。高台は摩耗し，丸みを帯びる。見込みに回転糸切り痕	9c前半頃
453	〃	〃	瓦器 椀	－	(1.8)	－	4.7	内面ミガキ，外面指頭圧痕・ナデ。貼付高台	
454	〃	〃	〃 皿	9.5	2.0	－	6.5	器面摩耗。口縁部タール付着・一部ミガキが認められる。外面口縁部ヨコナデ，底部指頭圧痕。	灯明皿か。
455	〃	〃	製塩土器	－	(6.0)	－	－	器面摩耗著しい。内面に布目痕	
456	〃	〃	〃	－	(3.8)	－	－	外面摩耗著しく調整不明。内面に布目痕	
457	〃	〃	〃	－	(4.5)	－	－	器面摩耗著しい。内面に布目痕	
458	〃	〃	〃	－	(3.8)	－	－	器面摩耗著しい。内面に布目痕	
459	〃	〃	土師質土器 小杯	8.0	3.3	－	6.1	内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り・板状圧痕あり。	
460	〃	〃	〃 杯	11.3	4.7	－	7.4	器面摩耗。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り	
461	Ⅰ区	〃	〃 〃	14.5	5.4	－	6.5	器面摩耗(内面が著しい)。内外面回転ナデ，外面底部回転糸切り・板状圧痕あり。	
462	Ⅱ区	〃	〃 〃	15.0	4.4	－	7.5	器面摩耗著しい。外面底部回転糸切り	
463	Ⅰ区	〃	〃 椀	－	(2.9)	－	7.0	内面ナデ，外面回転ナデ。貼付高台，端部摩耗。	
464	Ⅱ区	〃	〃 〃	－	(2.3)	－	6.8	器面摩耗著しい。内面ナデ。貼付高台	
465	〃	〃	〃 〃	－	(2.5)	－	6.6	器面摩耗著しい。内面コテ当て痕。貼付高台	
466	〃	〃	〃 〃	15.4	5.7	－	6.4	器面摩耗著しい。二次被熱。内外面回転ナデ。内面底部凹む。外面底部回転糸切り，円盤状高台。口縁部外面に一部施釉，灰釉か。	10c後半
467	Ⅰ区	〃	〃 壺	9.8	5.4	9.5	6.7	小壺。器面摩耗。内面回転ナデ，口縁部外反。外面回転ナデ，煤付着，体部下半ヘラ状工具で面取り，底部回転糸切り	
468	〃	〃	〃 羽釜	22.4	(3.9)	－	－	内外面ヨコナデ，口縁端部は外傾する。鍔下部タテハケ	
469	Ⅱ区	〃	〃 〃	24.6	(3.7)	－	－	内外面回転ナデ，口縁端部は外傾する。鍔下部指頭圧痕	
470	Ⅰ区	〃	白磁 碗	13.2	(1.5)	－	－	口縁部は玉縁状に肥厚	
471	Ⅱ区	〃	瓦 丸瓦	(6.6)	(9.8)	－	(4.5)	凹面に布目痕	野中廃寺と同時期か。
472	Ⅰ区	〃	土製品 羽口	－	－	－	－	孔径(2.4) cm 。被熱。外面指頭圧痕	
473	Ⅱ区	〃	〃 土錘	3.8	2.3	－	2.2	重量15.3g 。孔径0.8㎝。摩耗著しく調整不明	
474	〃	〃	〃 〃	9.0	4.6	－	4.7	重量158.7g 。孔径1.2㎝。摩耗するが，指頭圧痕・ナデ・一部工具による圧痕がみられる。両端部面取り。	
475	Ⅰ区	〃	〃 〃	(4.5)	1.6	－	1.6	重量(8.5) g 。孔径0.7㎝。摩耗するが，ナデ	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
476	Ⅰ区	Ⅲ～Ⅳ層	石製品 石包丁	8.1	4.3	－	0.9	重量48.6g。片岩製。両側に抉り，両面に自然面が残る。	
477	〃	〃	〃 〃	9.3	4.8	－	1.7	重量83.5g。片岩製。両側に抉り，両面に自然面が残る。	
478	〃	〃	〃 石鏃	3.9	2.2	－	0.4	重量3.3g。サヌカイト製。打製。両側に抉り，片面に一部自然面が残る。成形時に欠損か。	
479	Ⅱ区	〃	金属製品 鉄釘	6.4	1.1	－	0.9	重量10.1g	
480	〃	〃	〃 〃	5.6	0.8	－	0.9	重量4.3g	
481	Ⅰ区	〃	〃 不明	(4.6)	(3.8)	－	0.3	重量(12.0)g	
482	Ⅱ区	〃	〃 棒状鉄片	5.2	1.4	－	0.3	重量9.2g	
483	Ⅰ区	〃	〃 〃	(3.5)	0.8	－	0.3	重量(3.8)g	
484	Ⅱ－2区	SD1	弥生土器 壺	－	(2.0)	－	－	内外面ともにヨコ方向のナデ。外面は指頭による凹凸がみられる。	
485	〃	P7	〃 鉢	－	(2.6)	－	3.6	摩耗が著しい。内面は丁寧なナデにより平滑な仕上げ。外面はタテ方向の粗いハケ，底部側面に指頭圧痕が残る。	
486	〃	P19	〃 〃	－	(1.9)	－	3.3	内面は丁寧なナデ，指頭圧痕が残る。外面は底部側面からタテ方向の粗いハケ，底部はナデ	
487	〃	P31	石製品 砥石	10.3	5.5	－	9.4	重量1015.4g。砂岩製。表面に擦痕，裏面も使用している可能性がある。被熱し，赤色化	
488	〃	包含層	弥生土器 壺	－	(6.3)	－	－	内面の胴部～頸部はヨコナデ，指頭圧痕，口縁部は粗いハケ。外面の頸部はヨコナデのちヘラミガキ，上胴部はハケのちヘラミガキ	
489	〃	〃	〃 甕	9.4	(4.0)	－	－	内面の上胴部はナデ，口縁部～頸部はナナメ方向のハケ。外面はタテ方向のハケのちヨコナデ，口縁上部外面に煤が付着	
490	〃	〃	〃 鉢	8.2	(2.3)	－	－	小型鉢。口縁部は内外面ナデ，指頭圧痕が残る。外面はタテ方向の細かいハケ	
491	〃	〃	土師器 椀	－	(3.2)	－	5.7	摩耗が著しい。内外面ともに回転ナデ，指頭による凹凸。断面台形状の高台を貼付，端部はわずかに凹む。	
492	Ⅳ区	SB2 P6	〃 皿	13.8	1.9	－	－	内外面ともに回転ナデ。底部内面はユビナデによる凹凸，底部外面はヘラ切りのち丁寧にナデ消す。	9c末～10c初
493	〃	SA1 P2	弥生土器 甕	15.8	(4.2)	－	－	内面の口縁部～頸部はヨコ方向の板ナデ，頸部から下はナデ。外面の口縁部はヨコ方向の粗いハケ，頸部から下は粗いハケ	
494	〃	〃 P7	土師器 高杯	－	(2.7)	－	13.0	内面は丁寧なナデ。外面はヨコナデのちヘラミガキ	
495	〃	SK5	〃 杯	－	(1.2)	－	7.4	摩耗が著しい。内外面ともに回転ナデ。底部内面はユビナデによる凹凸，外面はヘラ切りのちナデ	
496	〃	〃	〃 〃	－	(1.6)	－	6.6	内外面ともに回転ナデ。底部内面はユビナデによりわずかに凹凸，外面はヘラ切りのちナデ	
497	〃	〃	須恵器 杯	－	(1.5)	－	8.6	底部内面は回転ナデ，中央部が凹む。外面は摩耗が著しく調整不明瞭。断面方形状の高台	
498	〃	SK7	土師器 杯	14.4	(4.0)	－	－	内外面ともに摩耗するが，回転ナデ	
499	〃	SK8	土師質土器 小皿	7.5	1.5	－	5.0	内外面ともに回転ナデ。底部外面は回転糸切り	
500	〃	SK10	〃 〃	8.5	1.5	－	4.4	内外面ともに回転ナデ。底部内面はユビナデにより凹凸，外面はヘラ切りのち丁寧なナデ	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
501	Ⅳ区	SK10	土師器 杯	14.3	4.7	－	7.7	摩耗が著しく調整は不明瞭。底部内面にユビナデによる凸凹がみられる。底部外面は回転糸切り	
502	〃	SK13	〃 羽釜	23.3	(19.6)	－	－	内面は工具によるナデ。外面は胴部にハケ，一部にミガキ，鍔下方は工具によるナデ，接合部に指頭圧痕	摂津型
503	〃	〃	〃 甑	－	(8.1)	－	25.0	内面は粗いハケ。外面はタタキのち下方に粗いハケ，端部は細かいハケのちナデ。下端部は内外面ともにナデ	
504	〃	〃	灰釉陶器 椀	－	(3.1)	－	－	施釉薄い。外面は薄緑色に斑に発色	
505	〃	〃	土製品 土錘	6.7	5.1	－	4.8	重量138.9g。孔径1.1㎝。中央部に最大径をもつ。外面は指頭圧痕が残る。	
506	〃	〃	自然石	(20.8)	26.1	－	12.4	重量10.6kg。砂岩。表面は被熱し，赤色化。両側面は煤で黒ずむ。	カマドなどの側石か。
507	〃	〃	金属製品 刀子	(10.2)	1.4	－	0.3	重量(10.0)g	
508	〃	SG3	弥生土器 壺	－	(28.4)	32.7	7.4	内面下半部は剥離が著しい。外面はタタキのち上胴部はヨコ方向，下胴部はタテ方向のハケ，全体にタタキ目が残る。	土器棺(身)
509	〃	SG4	〃 〃	－	(44.2)	43.6	11.8	内面は剥離が著しいが，指頭圧痕が残る。外面はヘラミガキ，上胴部にナナメ方向のハケ，底部側面にわずかにタタキ目が残る。	土器棺(身)
510	〃	SG5	〃 〃	－	(22.3)	－	9.6	内面はヘラケズリ，上部にナデ・指頭圧痕が残る。外面はヘラミガキが底部まで施され，わずかにハケが残る。	土器棺(蓋)
511	〃	〃	〃 〃	－	(33.2)	32.8	8.2	内面の胴部上半はナデとハケ。外面は頸部に断面三角形の刻目突帯，竹管文，胴部上～中央にヘラミガキ	土器棺(身)
512	〃	SG6	〃 高杯	27.5	(9.5)	－	－	有稜高杯。口縁部内面はミガキ，口縁部より下方はハケ。外面はタテ方向のハケ，稜の接合部はナデ	土器棺(蓋)
513	〃	〃	〃 壺	－	(41.5)	35.0	8.6	内面はナデのちハケ，下半部から底部にかけて剥離。外面は全体にハケとナデ，わずかにタタキ目が残る。底部に指頭圧痕	土器棺(身)
514	〃	SD1	金属製品 銭貨	2.5	2.0	－	0.2	寛永通宝。量目2.8g。「寶」を含む外側の一部が潰れるが，他の文字は明瞭に鋳抜かれる。「文」の背文あり。	
515	〃	ハンダ土坑2	土師質土器 焜炉	－	(12.6)	－	20.6	内面ナデ。外面ナデ，体部にミガキを加え，断面長方形状の輪高台を貼付。外面は薄く化粧土。開口部の下に刻印。内面に煤付着	
516	〃	〃	磁器 染付碗	10.7	6.3	－	3.8	内面に格子目文，外面に網目文，見込みには圏線の中央部に二重の環状の文様。高台畳付は露胎し，砂が付着	肥前焼 19c
517	〃	SX3・4	陶器 皿	－	(1.7)	－	－	内面の底部近くにわずかに段。外面の口縁部の下に強いナデによる凹み	
518	〃	P3	須恵器 壺	－	(6.1)	－	6.5	内面は回転ナデによる凹凸。外面は回転ナデ，底部は切り離し痕を丁寧にナデ消す。貼付輪高台の接合痕残す。	
519	〃	P22	〃 高杯	－	(4.0)	－	－	内外面ともに回転ナデ	
520	〃	P85	弥生土器 鉢	－	(7.7)	－	5.4	内面はハケ，底部は指押さえと板状工具による凹凸。外面はタタキのち軽いナデ，タタキ目が残る。底部は丁寧なナデ，側面に指頭圧痕	
521	〃	P89	土師器 甕	26.6	(3.6)	－	－	器面は著しく摩耗し調整不明瞭。内外面ともに回転ナデ	
522	〃	P136	弥生土器 高杯	－	(3.1)	－	17.2	摩耗が著しく調整不明瞭。裾部は内外面ともに丁寧なヨコナデ，端部は強いヨコナデにより面をなす。内面に指頭圧痕	
523	〃	P144	〃 甕	－	(3.7)	－	－	内面はヨコナデでわずかに指頭圧痕。外面はタタキのちタテ方向のハケで一部に煤が付着	
524	〃	P159	土師器 小皿	8.5	1.5	－	5.0	内外面ともに回転ナデ。底部内面中央部のみユビナデ，底部外面は回転糸切り，簾状の圧痕。口縁部の一部に煤が付着	灯明皿か。
525	〃	P160	〃 椀	－	(1.8)	－	7.0	内面は丁寧な回転ナデにより平滑。外面は摩耗著しく調整不明瞭，底部は糸切り，円盤状高台の一部が糸切りの糸で削れる。	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
526	Ⅳ区	P215	土師器羽釜	20.3	(3.8)	−	−	摩耗が著しく調整不明瞭。内面ナデ。鍔の端部から胴部外面は強いナデ。二次被熱し，赤色化する。わずかに煤が付着	摂津型
527	〃	P242	須恵器蓋	−	(1.3)	−	−	内面はナデ，外面はケズリ。焼成不良により赤褐色に発色する。径2.0㎝の円筒形のつまみが付く。	
528	〃	P255	土師器椀	14.8	(4.4)	−	−	摩耗著しく調整不明瞭。内外面ともに回転ナデ。外面は被熱し，赤色化。内面と断面に煤付着	
529	〃	P261	金属製品銭貨	2.5	2.0	−	0.2	寛永通宝。量目3.6g。背文なし	
530	〃	P269	陶器碗	−	(3.3)	−	−	近世	京焼系か。
531	〃	P272	土師器甕	14.2	(3.8)	−	−	口縁部は内外面ともにヨコナデ。頸部内面は指頭圧痕が残る。体部外面はナデ	
532	〃	Ⅳ層	弥生土器壺	13.0	(2.7)	−	−	内面口縁部はハケ，頸部はナデ。外面はハケのちヨコナデ	
533	〃	〃	〃 〃	−	(5.2)	−	6.4	内面はナデにより指頭圧痕が残る。外面はタタキのちタテ方向のハケで下半部にわずかにタタキ目が残る。底部はナデ	
534	〃	〃	〃 〃	−	(2.6)	−	4.5	摩耗が著しく調整は不明瞭。内面はナデ。外面はハケ	
535	〃	〃	〃 甕	22.7	(3.0)	−	−	内面はヨコ方向の粗いハケ。外面はタテ方向の粗いハケ	
536	〃	〃	〃 〃	22.0	(2.4)	−	−	内面はヨコ方向のハケ。外面は強いヨコ方向のナデにより凹凸，指頭圧痕が残る。	
537	〃	〃	〃 〃	17.0	(3.4)	−	−	内面はヨコ方向の粗いハケ。外面口縁部と端部はヨコナデ，頸部はタテ方向の粗いハケ	
538	〃	〃	〃 〃	12.2	(6.7)	−	−	口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部内面は板状工具によるナデのちユビナデ，指頭圧痕。外面はタタキのちタテ方向のハケ	
539	〃	〃	〃 〃	−	(5.0)	−	−	摩耗が著しく調整不明瞭。上胴部外面はタタキのちナデ，内面はナデ，指頭圧痕。頸部は内外面ともにヨコナデ	
540	〃	〃	〃 〃	−	(4.0)	−	6.2	内面は板状工具によるタテ方向のナデ。外面タタキのちナデ，タタキ目が残る。	
541	〃	〃	〃 〃	−	(4.5)	−	5.0	内面は板状工具と指頭によるナデ。外面は板状工具によるナデ，底部はナデ	
542	〃	〃	〃 鉢	−	(4.8)	−	−	口縁部は内外面ともにヨコナデ。内面はヨコナデのちタテ方向の細かいハケ。外面はタテ方向のハケのちナデ，ハケ目が残る。	
543	〃	〃	〃 蓋	−	(1.3)	−	−	天井部径4.6㎝。内外面ともにユビナデ，上方に摘み出し，外面に指頭圧痕と指紋が残る。	
544	〃	〃	土師器皿	10.0	1.8	−	5.6	内外面ともに回転ナデ，底部外面はヘラ切りで未調整	9c末～10c初
545	〃	〃	〃 〃	12.3	1.3	−	9.2	内外面ともに回転ナデ，底部外面はヘラ切りのちナデ	〃
546	〃	〃	〃 〃	7.0	(1.6)	−	5.6	内外面ともに回転ナデ，底部外面は糸切り痕が残る。	11c後半～12c初
547	〃	〃	〃 盤	23.0	(2.0)	−	−	摩耗が著しく調整不明瞭。外面の屈曲部に刻目状の刺突がみられる。	蓋又は高杯の可能性もある。
548	〃	〃	〃 杯	14.4	(2.8)	−	−	内面はヨコナデのち放射状の暗文。外面の口縁部はヨコナデ，体部はタテ方向のハケ，口縁部外側に沈線を1条施す。	7c中頃 TK217並行
549	〃	〃	〃 〃	9.9	3.5	−	6.5	内外面ともに回転ナデ。底部内面は指頭による凹凸がみられる。底部外面はヘラ切りのちナデ	10c前半
550	〃	〃	〃 〃	−	(2.1)	−	6.3	内外面ともに回転ナデ。底部内面に凹凸がみられる。底部外面は回転ヘラ切り	〃

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
551	Ⅳ区	Ⅳ層	土師器 杯	9.0	2.8	－	5.2	内外面ともに回転ナデ。底部内面には指頭による凹凸，底部外面は回転ヘラ切りのちナデ	10c後半
552	〃	〃	〃 〃	11.2	2.7	－	7.0	内外面ともに回転ナデ，外面に凹凸，指頭圧痕が残る。底部外面の切り離し痕は不明瞭だが，ナデを施す。	10c後半～11c初
553	〃	〃	〃 〃	－	(2.7)	－	6.8	内外面ともに回転ナデ，指頭による凹凸。底部内面は一部ユビナデにより凹む。底部外面は回転糸切り	12c
554	〃	〃	〃 〃	14.4	(2.7)	－	－	内外面ともに回転ナデ。内面はナデのちミガキ，一部ナデ痕が残る。	〃
555	〃	〃	〃 〃	－	(1.7)	－	6.1	摩耗が著しく調整不明瞭。断面方形状の輪高台が「ハ」の字に付く。	
556	〃	〃	〃 〃	－	(2.1)	－	6.6	摩耗が著しく調整不明瞭。内面はナデ。外面はナデによる凹凸，糸切りの底部に断面台形状の輪高台を貼付	
557	〃	〃	〃 椀	－	(2.7)	－	6.8	足高高台椀。摩耗が著しく調整不明瞭。内外面にヨコナデを施す。「ハ」の字に開く高台を貼付	
558	〃	〃	〃 甕	25.0	(2.3)	－	－	内外面ともに回転ナデ。外面は口縁部の下までヨコ方向の粗いハケ	
559	〃	〃	〃 羽釜	－	(3.7)	－	－	内面はヨコナデで平滑に仕上げる。外面はナデによる凹凸，鍔端部は強いヨコナデにより凹む。鍔より下方に煤が付着	摂津型
560	〃	〃	〃 甑	23.6	(4.3)	－	－	摩耗が著しく調整不明瞭。内面から口縁部外面に指頭圧痕が残る。外面はわずかにタテ方向の調整痕がみられる。	
561	〃	〃	〃 カマド	－	－	－	－	焚き口の鍔部と考えられる。移動式カマドか。	
562	〃	〃	須恵器 皿	15.7	1.7	－	12.6	内外面ともに回転ナデ。底部はナデ。口縁部内面は強いナデにより凹む。	
563	〃	〃	〃 〃	16.9	2.4	－	13.2	内外面ともに回転ナデ。底部内面は摩耗により調整不明瞭，底部外面はヘラ切りのちナデ	
564	〃	〃	〃 杯	－	(2.1)	－	10.7	内外面ともに回転ナデ。底部内面は回転ナデのちナデ，底部外面は回転ケズリのちナデ，底部の内側に断面方形状の高台を貼付	8c前半
565	〃	〃	〃 〃	－	(2.1)	－	9.6	内外面ともに回転ナデ。底部内面は回転ナデのちナデ。底部の内側に断面台形状の高台を貼付	〃
566	〃	〃	〃 〃	－	(2.0)	－	8.6	摩耗が著しく調整不明瞭。内外面ともにナデ。底部内面はナデによる凹凸がみられる。底部外面は爪状圧痕が残る。	焼成不良 発色茶色
567	〃	〃	〃 〃	－	(2.0)	－	6.4	内外面ともにナデ。底部の外側に断面台形状の高台を貼付	
568	〃	〃	〃 高杯	－	(7.8)	－	－	杯部内面はナデ。脚部外面と内面下部は回転ナデ，内面上部はナデ	
569	〃	〃	〃 〃	－	(5.5)	－	－	摩耗が著しく調整不明瞭。杯部内面はナデ。脚部は内外面ともにヨコナデ。分割成形で杯部と脚部の接合痕が残る。	
570	〃	〃	〃 〃	－	(4.0)	－	－	摩耗により調整は不明瞭。脚部外面はナデ，一部に自然釉がみられる。脚上部に沈線を1条施す。分割成形。	
571	〃	〃	〃 壺	－	(8.9)	－	13.2	内面はヨコナデ。外面はタタキのちナデ消す。底部に断面台形状の高台を「ハ」の字に貼付	
572	〃	〃	〃 〃	－	(2.3)	－	6.0	内外面ともに回転ナデ。底部に断面方形状の高台を貼付	
573	〃	〃	〃 〃	6.3	(1.7)	－	－	短頸壺。内外面ともに回転ナデ	
574	〃	〃	〃 甕	15.6	(5.8)	－	－	口縁部～頸部は内外面ともに回転ナデ。内面は円弧状のタタキ目をナデ消す。外面は平行なタタキ目に自然釉がかかる。	
575	〃	〃	〃 鉢	21.2	(2.9)	－	－	摩耗が著しい。内面はナデ，外面は回転ナデ	

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
576	Ⅳ区	Ⅳ層	須恵器円面硯	－	(3.3)	－	(18.3)	脚部に断面三角形の突帯を貼付。裾部に凸形とみられる透かしが入り，下端は開口する。突帯の上部にも透かしの痕跡あり。	
577	〃	〃	黒色土器椀	－	(1.1)	－	－	内黒。外面はヨコナデ。底部に断面台形状の高台を「ハ」の字に貼付	
578	〃	〃	緑釉陶器杯又は皿	－	(1.4)	－	7.0	摩耗が著しい。全面に施釉し，高台の内側段部から畳付を削り取る。	近江産 10c後半
579	〃	〃	瓦器椀	12.2	(2.7)	－	－	内面はヘラミガキ。外面はヨコナデ，指頭圧痕が残る。	和泉産か。12～13c
580	〃	〃	白磁碗	－	(2.3)	－	－	口縁部は玉縁状に厚く肥厚させる。胎土に微細な気泡を含む。	Ⅳ類 11c後半
581	〃	〃	土製品土錘	6.1	3.9	－	(2.2)	重量(42.3)g。孔径1.4cm。摩耗が著しいが，指頭圧痕が残る。	
582	〃	〃	〃〃	(4.0)	2.6	－	2.4	重量(22.1)g。孔径0.7cm。摩耗が著しいが，指頭圧痕が残る。	
583	〃	〃	〃〃	3.6	1.0	－	1.1	重量2.8g。孔径0.4cm。指頭圧痕が残る。	
584	〃	〃	〃〃	3.1	1.2	－	1.1	重量3.4g。孔径0.4cm。指頭圧痕が残る。	
585	〃	〃	〃〃	(4.1)	1.4	－	1.2	重量(5.4)g。孔径0.3cm。外面は丁寧なナデにより平滑に仕上げる。指頭圧痕が残る。	
586	〃	〃	瓦平瓦	(7.7)	(6.3)	－	2.0	上面は側端面まで布目痕。下面はタタキ成形による粗い縄目痕。側面は鋭利なヘラ状工具による切断痕が残る。	
587	〃	〃	〃〃	(6.1)	(4.4)	－	2.3	摩耗が著しい。上面は布目痕，くぼみ状の欠損が3ヶ所ある。下面にはタタキ痕	
588	〃	〃	石製品砥石	4.7	2.9	－	1.5	重量32.4g。砂岩製。3面を使用する。表面は使用により凹み，擦痕がみられる。裏面は平坦に割られた自然面	
589	〃	〃	鉄滓	5.8	5.4	－	2.1	重量89.6g	
590	〃	包含層	弥生土器壺	－	(4.0)	－	3.8	内面はナデ。外面は底部までタテ方向のハケ，わずかにタタキ目が残る。底部外面はナデ，わずかに指頭圧痕が残る。	
591	〃	〃	〃〃	－	(3.5)	－	4.8	摩耗が著しい。外面にタテ方向のハケ。底部内面に強いナデによる指頭圧痕が残る。底部外面に格子状の圧痕が残る。	
592	〃	〃	〃鉢	－	(2.7)	－	4.4	摩耗が著しい。内面はタテ方向のハケ，底部指頭圧痕。外面はナデ，底部近くにわずかに段をもつ。	
593	〃	〃	土師器小皿	10.4	1.9	－	5.8	ほぼ完形。底部は平底で回転糸切り。内外面ともに回転ナデ。外面はロクロ目が残る。口縁部の内外面に煤が付着	灯明皿か。11c後半～12c初
594	〃	〃	〃皿	20.6	(1.9)	－	－	内外面ともに丁寧なミガキ。口縁部はヨコナデで，内面に1条沈線を施す。	赤色塗彩
595	〃	〃	〃盤	－	(2.1)	－	16.6	高台内側と底部は無塗彩。内面ナデ，摩耗によりミガキ痕はみえない。外面は回転ナデのちヘラミガキ	〃
596	〃	〃	〃杯	－	(1.9)	－	6.4	内外面ともに回転ナデ，内面は平滑に仕上げる。底部外面はヘラ切りのちナデ，ヘラ切り痕が残る。	
597	〃	〃	〃〃	10.1	2.9	－	6.2	内外面ともに回転ナデ。底部内面は凹凸	
598	〃	〃	〃〃	－	(1.8)	－	10.4	内面はナデにより平滑に仕上げる。外面はナデ，底部は丁寧なナデ，高台端部は被熱により赤色化。底部に煤が付着	底部中央に穿孔の可能性あり。
599	〃	〃	〃椀	13.8	(4.7)	－	6.5	内外面ともにナデ，内面はナデにより平滑に仕上げる。	
600	〃	〃	〃〃	－	(1.5)	－	6.8	摩耗が著しく調整は不明瞭。底部は糸切り，円盤状高台	播磨系か。10c後半

図版番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
601	Ⅳ区	包含層	土師器甕	－	(3.8)	－	－	摩耗により内面の調整は不明瞭だが，ヨコ方向のハケ。外面はヨコナデ	
602	〃	〃	〃 羽釜	19.0	(4.8)	－	－	摩耗著しい。内外面ともに回転ナデ。口縁部外面直下に断面台形状の鍔が付く。鍔より下方は剥離により調整不明	摂津C1型
603	〃	〃	〃 〃	19.0	(5.5)	－	－	内面はナナメ方向の粗いハケ。外面はタテ方向の粗いハケ，口縁部から鍔の下方までヨコナデ	摂津型
604	〃	〃	須恵器 杯	－	(1.4)	－	10.2	内外面ともにナデ，内面は凹凸がみられる。底部に断面方形状の高台が「ハ」の字に開いて付く。	
605	〃	〃	〃 〃	－	(2.4)	－	10.9	内外面ともにナデ。底部の端に断面方形状の高台が「ハ」の字に付く。	
606	〃	〃	〃 〃	－	(2.9)	－	9.8	内面はナデにより凹凸。外面はナデ，底部はヘラ切り痕がわずかに残るナデ。底部の端に断面方形状の高台を貼付	
607	〃	〃	〃 蓋	14.4	(1.4)	－	－	口縁部から内面は回転ナデ，口縁部内面に断面三角形のかえりが付く。外面は回転ヘラケズリ	8c前半
608	〃	〃	〃 〃	14.8	(1.3)	－	－	内外面ともに回転ナデによる凹凸がみられる。	
609	〃	〃	〃 〃	16.3	(1.6)	－	－	内外面ともに回転ナデによる凹凸がみられる。	
610	〃	〃	〃 壺	－	(1.1)	－	－	内外面ともに回転ナデ。口縁端部は上方に摘み上げ，外面に断面三角形の粘土帯を貼付し，拡張する。	
611	〃	〃	〃 〃	14.6	(1.7)	－	－	内外面ともに回転ナデ，口縁端部内面は強いナデにより凹む。	
612	〃	〃	〃 〃	10.8	(4.3)	－	－	摩耗が著しい。口縁部から頸部は内外面ともにヨコナデ。胴部内面はナデ，外面は格子状のタタキ目が残る。	
613	〃	〃	〃 〃	－	(5.8)	－	－	粘土中の気泡の膨張により変形。外面の上胴部とみられる部分に断面三角形の突帯を貼付，突帯の上下にタタキ目が残る。	
614	〃	〃	〃 〃	－	(3.9)	－	11.5	内面は摩耗が著しく調整不明瞭。外面はナデ，底部の外側に断面方形状の高台を貼付	
615	〃	〃	〃 〃	－	(3.9)	－	10.2	粗雑な仕上げで，外面に粘土帯や高台の接合痕が残る。断面三角形状の高台端部は強いナデにより外側に「ハ」の字に開く。	
616	〃	〃	〃 〃	－	(1.6)	－	6.5	内外面ともにナデ。底部の外側に断面方形状の高台が「ハ」の字に付き，端部は内傾する。	
617	〃	〃	緑釉陶器	－	(2.1)	－	－	釉は灰オリーブ色に発色。内外面に細かい擦痕。素地は須恵質で，薄手の釉がかかる。	洛西か篠 9c後半
618	〃	〃	〃	－	(1.8)	－	－	釉は灰オリーブ色に発色，摩耗によりわずかに釉が残る。	
619	〃	〃	土製品 土錘	4.6	1.9	－	1.6	重量10.6g。孔径0.6㎝。摩耗が著しいが，外面に指頭圧痕が残る。	
620	〃	〃	瓦 平瓦	(5.9)	(3.8)	－	1.3	摩耗が著しい。上面は布目痕。下面には斜格子状のタタキ目	
621	〃	〃	金属製品	(4.4)	(1.3)	－	－	重量(15.0)g。青銅製。形状不明。内面に木片が付着	
622	〃	〃	石製品 石鏃	3.0	2.1	－	0.4	重量1.7g。完形。サヌカイト製。打製石鏃で凹基式	
623	〃	〃	陶器 皿	13.4	3.4	－	7.3	灰釉菊皿。見込みの二重圏線と内外面に丸ノミ状の工具により花弁を表す。薄い灰釉，底部外面と高台は無施釉。胎土目痕が3ヶ所	瀬戸焼 17c前半

宇賀遺跡　遺物観察表1

図版番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
1	Ⅰ－2区	検出面	弥生土器 甕	－	(3.0)	－	－	内面口縁部ヨコハケ，口縁端部ナデ。外面口縁部タテハケ，胴部ハケ	
2	〃	包含層	陶器 碗	－	(2.4)	－	5.7	内面施釉。見込みに胎土目痕。外面体部の一部に施釉，高台際～高台内露胎	17c
3	Ⅲ区	表採	青磁 皿	－	(3.2)	－	－	内外面施釉(厚みのある釉)	
4	〃	検出面	陶器 擂鉢	－	(5.0)	－	－	擂目の単位は7条以上と考えられる。	
5	〃	包含層	土師器 皿	－	(1.9)	－	13.4	器面摩耗著しい。外面底部切り離し痕をナデ消す。貼付高台	
6	Ⅴ区	〃 Ⅱ層	土師質土器 杯	14.6	(2.4)	－	－	内外面回転ナデ	
7	〃	〃 〃	磁器 碗	－	(3.4)	－	－	内面方形の中に菱万字文様，見込み際に二重圏線。外面口縁端部に1条の圏線	
8	〃	〃 Ⅲ層	土師器 皿か	12.6	(2.5)	－	－	手づくね。内外面ナデ・指頭圧痕	

遺構計測表

竪穴建物跡

調査区	番号	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	床面標高(m)	時期	備考
Ⅰ区	ST1	隅丸方形	4.77	4.74	22.6	11.86	弥生終末～古墳初頭	ST8に切られる。
Ⅱ区	ST2	不整方形	7.13	6.67	47.6	11.79	弥生終末	SK10・11に切られる。ベッド・壁溝あり。
〃	ST3	〃	5.66	5.44	30.8	11.80	〃	SB6に切られる。焼土・壁溝あり。
〃	ST4	円形	7.38	7.00	51.7	11.60	〃	ST5・SB7に切られる。壁溝あり。
〃	ST5	隅丸方形	6.50	5.86	38.1	11.67	弥生終末～古墳初頭	ST4を切る。焼土・壁溝あり。
〃	ST6	〃	6.90	6.49	44.8	11.84	〃	SD2・SX8に切られる。焼土・壁溝あり。
〃	ST7	不整方形	4.50	3.14	14.1	11.86	〃	
Ⅰ区	ST8	〃	3.97	3.97	15.8	11.75		ST1を切る。
Ⅱ区	ST9	隅丸方形	4.16	3.57	14.9	12.06		カマドがあったと考えられる。焼土あり。

掘立柱建物跡

調査区	番号	規模（桁行×梁行）	面積(㎡)										
			0～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～35	35～40	40～45	45～50	50～55
Ⅰ区	SB1	2間以上×2間		○									
〃	SB2	3間×2間			○								
〃	SB3	〃				○							
〃	SB4	2間×2間			○								
Ⅱ区	SB5	4間×2間						○					
〃	SB6	5間×2間								○			
〃	SB7	4間×2間							○				
〃	SB8	〃					○						
Ⅰ区	SB9	3間×2間				○							
〃	SB10	〃				○							
Ⅱ区	SB11	2間以上×1間			○								
〃	SB12	5間×3間											○
Ⅱ・Ⅱ－2区	SB13	4間×3間							○				
Ⅱ区	SB14	3間×2間				○							
〃	SB15	〃			○								
〃	SB16	〃			○								
〃	SB17	〃				○							
〃	SB18	〃					○						
Ⅰ区	SB19	〃					○						
〃	SB20	2間×2間		○									
〃	SB21	4間×2間						○					
〃	SB22	4間×3間											○
〃	SB23	3間×2間						○					
〃	SB24	3間×3間								○			
Ⅰ・Ⅱ区	SB25	5間×1間						○					
〃	SB26	〃						○					
Ⅱ区	SB27	3間×2間				○							
〃	SB28	4間×2間			○								
〃	SB29	〃			○								
〃	SB30	〃					○						
〃	SB31	〃			○								
〃	SB32	2間×2間			○								
〃	SB33	4間×2間					○						
〃	SB34	3間×2間				○							
Ⅳ区	SB1	2間×2間			○								
〃	SB2	3間×2間						○					
〃	SB3	3間×1間				○							
〃	SB4	2間×2間		○									
〃	SB5	1間×1間		○									
〃	SB6	2間×1間				○							

土坑

調査区	遺構番号	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
Ⅰ区	SK1	不整形	0.80	0.71	25.9	
〃	SK2	不整隅丸長方形	1.50	0.57	24.3	
Ⅱ区	SK3	不整隅丸方形	1.13	0.94	20.3	SK17を切る。
Ⅰ区	SK4	不整隅丸長方形	1.55	1.03	12.6	石列を検出
Ⅱ区	SK5	不整隅丸方形	1.35	1.29	21.9	SB15P6を切る。
〃	SK6	不整楕円形	2.05	1.40	19.9	SB12P2・3に切られる。
〃	SK7	不整隅丸長方形	1.33	0.70	13.5	
〃	SK8	〃	2.20	1.04	13.1	SB12P10・11を切る。
〃	SK9	不整形	2.44	1.60	36.1	SB12P12・13に切られる。
〃	SK10	不整方形	1.39	1.07	19.0	ST2とSB12を切る。
〃	SK11	〃	1.19	1.17	21.7	ST2を切る。
Ⅰ区	SK12	隅丸方形	0.97	0.90	15.7	
Ⅱ区	SK13	不整隅丸方形	1.17	1.12	13.1	SK14に切られる。
〃	SK14	不整隅丸長方形	1.17	0.37	12.7	SK13を切り，ピットに切られる。
〃	SK15	〃	1.74	0.43	16.7	
〃	SK16	〃	2.24	0.90	23.0	SD1に切られる。
〃	SK17	不明	0.94	0.54	14.6	SK3・18に切られる。
〃	SK18	不整隅丸長方形	1.94	1.06	16.1	SK17を切る。
〃	SK19	〃	2.46	0.59	8.7	ピットに切られる。
〃	SK20	不整楕円形	1.13	0.59	18.8	SD2を切る。人骨出土，埋納遺構か。
Ⅳ区	SK1	円形	0.96	0.96	36.5	
〃	SK2	不整形	－	－	－	複数のピットが重なる。
〃	SK3	〃	1.77	1.08	21.0	現代攪乱に切られる。
〃	SK4	〃	1.36	0.70	26.0	現代攪乱に切られる。
〃	SK5	隅丸長方形	1.19	0.94	26.0	
〃	SK6	楕円形	(0.97)	0.80	10.0	現代攪乱に切られる。
〃	SK7	〃	1.20	1.03	15.6	
〃	SK8	〃	1.44	1.16	43.0	SK10を切り，ハンダ土坑1に切られる。
〃	SK9	隅丸長方形	1.45	0.88	24.7	
〃	SK10	不明	(0.89)	(0.54)	32.0	
〃	SK11	不整長方形	2.48	0.90	25.0	
〃	SK12	楕円形	1.23	1.17	41.6	
〃	SK13	〃	1.08	0.88	53.9	
〃	SK14	不整楕円形	0.96	0.76	26.4	
〃	SK15	不明	(1.03)	0.92	23.1	SD6を切る。
〃	SK16	不整形	(0.94)	0.64	16.2	SG4を切り，P234に切られる。
〃	SK17	楕円形	1.24	0.72	43.3	

土器棺墓

調査区	遺構番号	平面形状	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
Ⅱ区	SG1	楕円形	0.61	0.45	15.0	甕1(身)
〃	SG2	不整楕円形	0.49	0.44	14.0	壺1，甕1，鉢1
Ⅳ区	SG3	楕円形	0.33	0.31	16.5	壺1(身)
〃	SG4	楕円形	(0.42)	0.47	16.8	壺1(身)，P234に切られる。
〃	SG5	楕円形	0.50	0.45	16.6	壺2(身1，蓋1)，主軸N－0°
〃	SG6	楕円形	0.63	0.49	18.2	壺1(身)，高杯1(蓋)，主軸N－64°－E

図 版

高田遺跡
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区

調査前風景（東より）

調査区南壁セクション（北東より）

図版２

Ⅰ区遺構検出状態（北より）

Ⅱ区遺構検出状態（東より）

Ⅰ区遺構完掘状態（東より）

Ⅱ区遺構完掘状態（東より）

図版４

ST8セクション（南より）

ST1・8完掘状態（北東より）

ST3床面検出状態（南東より）

ST3完掘状態（南より）

図版６

ST4・5セクション（南より）

ST4・5完掘状態（南より）

ST6セクション（南西より）

ST6完掘状態（南西より）

図版８

SB2・3・9・10完掘状態（東より）

SB6セクション（南より）

SB6完掘状態（西より）

SB28完掘状態（南西より）

図版10

ST2弥生土器(9)出土状態

ST3東西セクション(南より)

ST3焼土検出状態(南東より)

ST3石製品(43)出土状態

ST3作業風景

ST3弥生土器出土状態

ST3弥生土器(46)出土状態

ST4・5焼土検出状態(南東より)

ST6弥生土器（116）出土状態

ST7弥生土器（152）出土状態

SB7P11須恵器（176）出土状態

SB22P9土製品（206）出土状態

SK1土師器（212・213）出土状態

SK20骨出土状態

SG1弥生土器（230）出土状態

SG2弥生土器（231～233）出土状態

図版12

P17土師質土器(258)出土状態

P18土師器(259～262)出土状態

P44土師質土器(294)出土状態

SX9遺物出土状態

SX11北側検出状態

SX11南側土師器(317～322)出土状態

第Ⅲ層青磁(426)出土状態

第Ⅲ～Ⅳ層須恵器(449)出土状態

SG1 弥生土器（甕）

図版14

SG2弥生土器（壺）

弥生土器（壺・甕・高杯）

図版16

62

93

116

117

130

133

弥生土器（壺・甕）

弥生土器（壺・鉢）

図版18

52

63

64

68

86

94

95

112

弥生土器（壺・鉢）

120

121

125

127

134

138

140

141

弥生土器（甕・鉢）

図版20

152

177

204

209

233

236

258

369

弥生土器（鉢），土師器（椀），土師質土器（椀）

土師器（高杯），土師質土器（杯・椀），青磁（碗），土製品（羽口・土錘）

図版22

弥生土器（甕・鉢），須恵器（蓋），土師質土器（羽釜），石製品（管玉・石包丁），金属製品

土師器（杯・皿），須恵器（円面硯），土師質土器（小皿），石製品（叩石・石包丁）

図版24

261

262

265

267

269

279

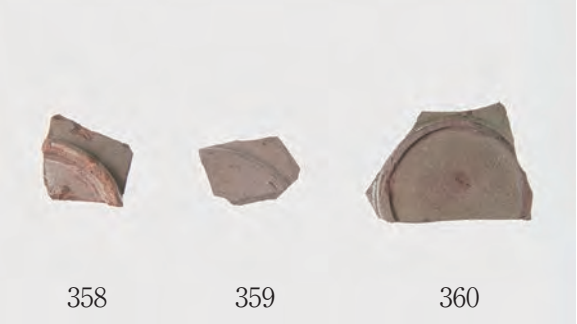
289

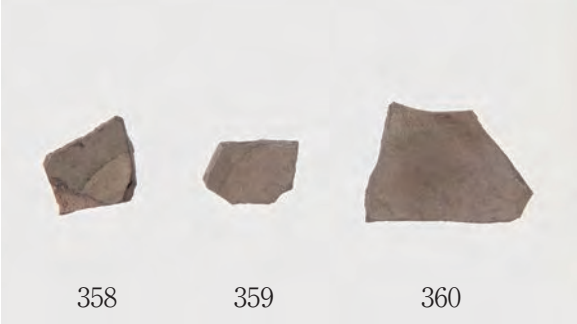
294

304

316

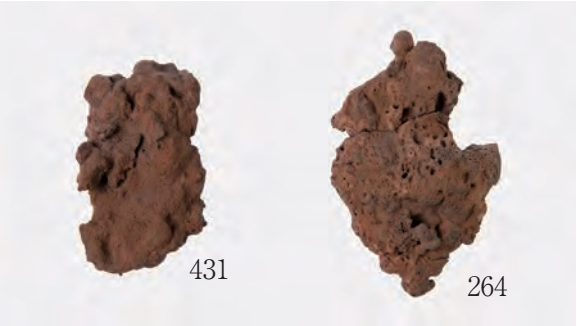
土師器（杯・皿），須恵器（蓋・杯），土師質土器（杯），金属製品（銅釘）





土師器（皿・カマド），緑釉陶器，土製品（支脚）

図版26



須恵器（甕・円面硯），緑釉陶器（椀），石製品（石鏃），金属製品，鉄塊

Ⅱ－２区

遺構検出状態（北西より）

遺構完掘状態（北西より）

図版28

SB13完掘状態（南より）

SB13P1セクション（南より）

SB13P2セクション（南より）

SB13P3セクション（西より）

485

490

491

487

弥生土器（鉢），土師器（椀），石製品（砥石）

Ⅳ区

調査前風景（南東より）

遺構検出状態（東より）

図版30

遺構完掘状態（上空より）

調査区北壁セクション（南東より）

調査区下層北壁セクション（南東より）

SB1完掘状態（南より）

図版32

SB2完掘状態（南より）

SB3完掘状態（南より）

SA1完掘状態（北東より）

SG6弥生土器（512・513）出土状態

図版34

SK13遺物出土状態

SK13土師器(502)出土状態

SB1P1セクション（南より）

SB1P2セクション（南より）

SB1P3セクション（南より）

SB1P3完掘状態（南より）

SB1P4セクション（西より）

SB1P5セクション（西より）

SB1P6セクション（西より）

SB4P3セクション（南より）

SG3検出状態（北より）

SG3半裁状態（南より）

SG4検出状態（東より）

SG4・P234セクション（南より）

SG4弥生土器（509）出土状態

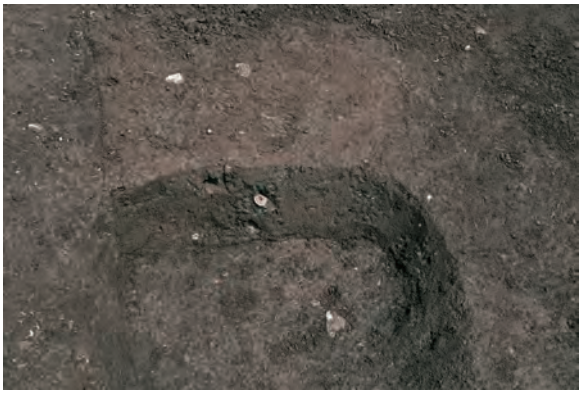
SG5検出状態（北より）

SG5半裁状態（西より）

SG6検出状態（南東より）

SD1完掘状態（南東より）

SD1セクション（南より）


SD1金属製品（514）出土状態

SD2セクション（南より）

SD3セクション（北より）

SD4セクション（東より）

SD5セクション（西より）

SD6セクション（西より）

図版38

SK1セクション（南より）

SK2セクション（南東より）

SK3セクション（南より）

SK4セクション（南より）

SK5セクション（南より）

SK6セクション（南より）

SK7セクション（南より）

SK8・10セクション（西より）

SK8土師質土器(499)出土状態

SK9セクション(西より)

SK10セクション(北より)

SK10土師器(501)出土状態

SK11セクション(南より)

SK12セクション(南より)

SK13灰釉陶器(504)出土状態

SK13土製品(505)出土状態

SK14セクション（南より）

SK15セクション（西より）

SK16セクション（南より）

SK17セクション（南より）

P159土師器（524）出土状態

P160土師器（525）出土状態

P215土師器（526）出土状態

SX2集石出土状態

SX3・4集石出土状態

SX5集石出土状態

表土掘削作業風景（北東より）

遺構検出作業風景（南より）

遺構掘削作業風景（南東より）

地元説明会風景

航測作業風景（南東より）

埋め戻し作業風景（北東より）

図版42

502

508

509

511

512

513

遺構出土遺物：弥生土器，土師器

492

493

499

501

503

504

505

506

514 529

514 529

遺構出土遺物：弥生土器，土師器，土師質土器，灰釉陶器，土製品，石製品，金属製品

図版44

515

516

517

518

520

526

527

528

530

531

遺構出土遺物：弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶器，磁器

532

533

537

538

539

549

550

559

571

574

Ⅳ層出土遺物：弥生土器，土師器，須恵器

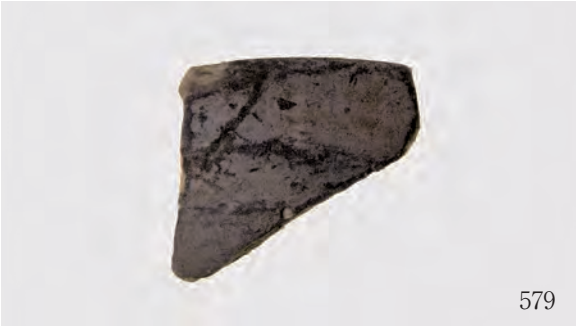
図版46

568

576

578

578


579

580

586

586

587

587

Ⅳ層出土遺物：須恵器，緑釉陶器，瓦器，白磁，瓦

588

593

595

603

611

612

613

581 584 585 619

618

618

Ⅳ層及び包含層出土遺物：土師器，須恵器，緑釉陶器，土製品，石製品

図版48

620

620

621

621

622

622

623

623

包含層出土遺物：陶器，瓦，石製品，金属製品

宇賀遺跡

調査前風景（東より）

Ⅰ－２区北部遺構検出状態（南より）

図版50

Ⅰ－2区南東部遺構完掘状態（北西より）

Ⅰ－2区北部遺構完掘状態（南より）

Ⅰ－2区遺構掘削作業風景（北西より）

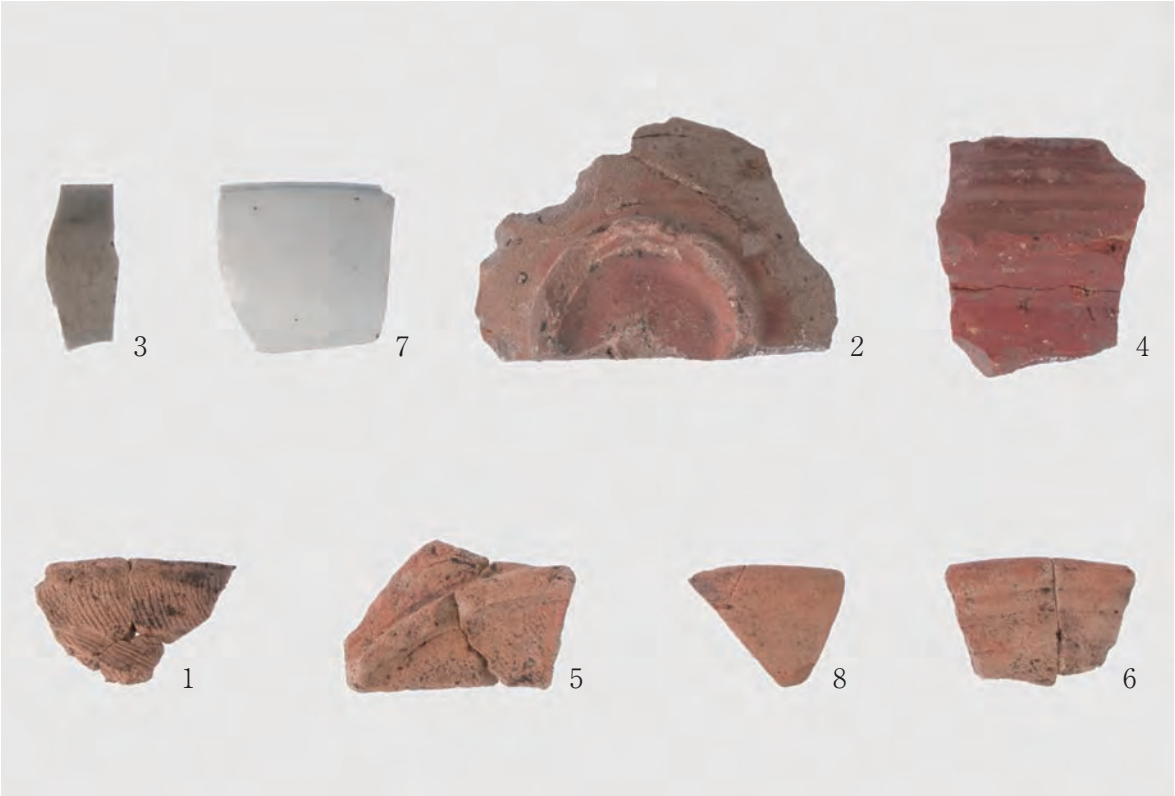
SD2バンクセクション（東より）

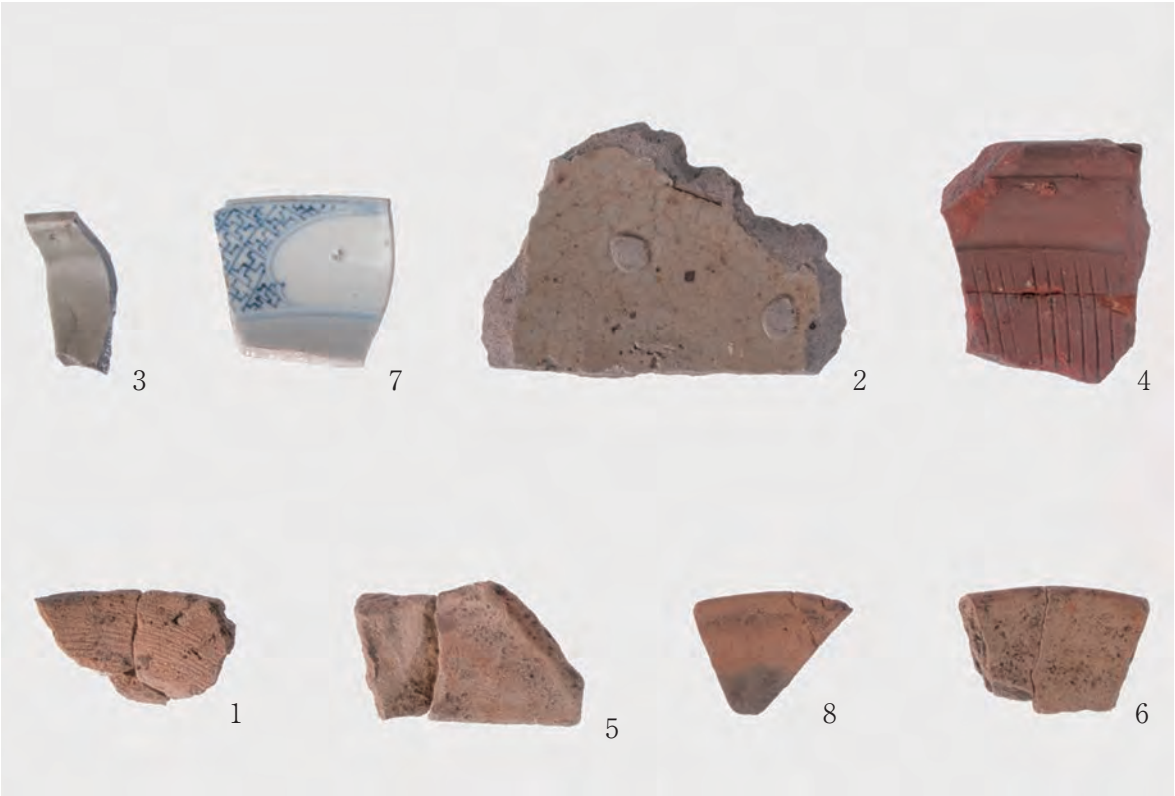
Ⅳ区遺構完掘状態（西より）

Ⅲ区表土掘削作業風景（東より）

Ⅳ区遺構掘削作業風景（北西より）

図版52





弥生土器（甕），土師器（皿），土師質土器（杯），陶器（碗・擂鉢），青磁（皿），磁器（碗）

報告書抄録

ふ り が な	たかだいせきいち・うかいせき
書　　名	高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡
副 書 名	南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅺ
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第151集
編著者名	坂本裕一，矢野雅子，パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所 在 地	高知県南国市篠原1437－1
発行年月日	2018年2月28日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
高田遺跡（たかだいせき）	〒781-5235 高知県（こうちけん） 香南市（こうなんし） 野市町下井（のいちちょうしもい）	39211	200025	33° 33′ 21″	133° 41′ 12″	2015.8. 3 ～ 2016.4. 4 2016.4.27 ～ 2017.2.28	4,316㎡	記録保存調査
宇賀遺跡（うかいせき）			200052	33° 33′ 19″	133° 41′ 42″	2015.4.13 ～ 2015.7.31	2,735㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世 近世	竪穴建物跡 9軒 掘立柱建物跡 40棟 柵列 3列 土器棺墓 6基 土坑 37基 溝跡 10条 火葬遺構 3基 性格不明遺構 16基	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 黒色土器 緑釉陶器 灰釉陶器 近世陶磁器	中世の火葬遺構は県内では初確認。
宇賀遺跡	集落跡	近世以降	土坑 1基 溝跡 24条	石器剥片 弥生土器 土師器 土師質土器 国内産陶器 近世陶磁器 瓦	

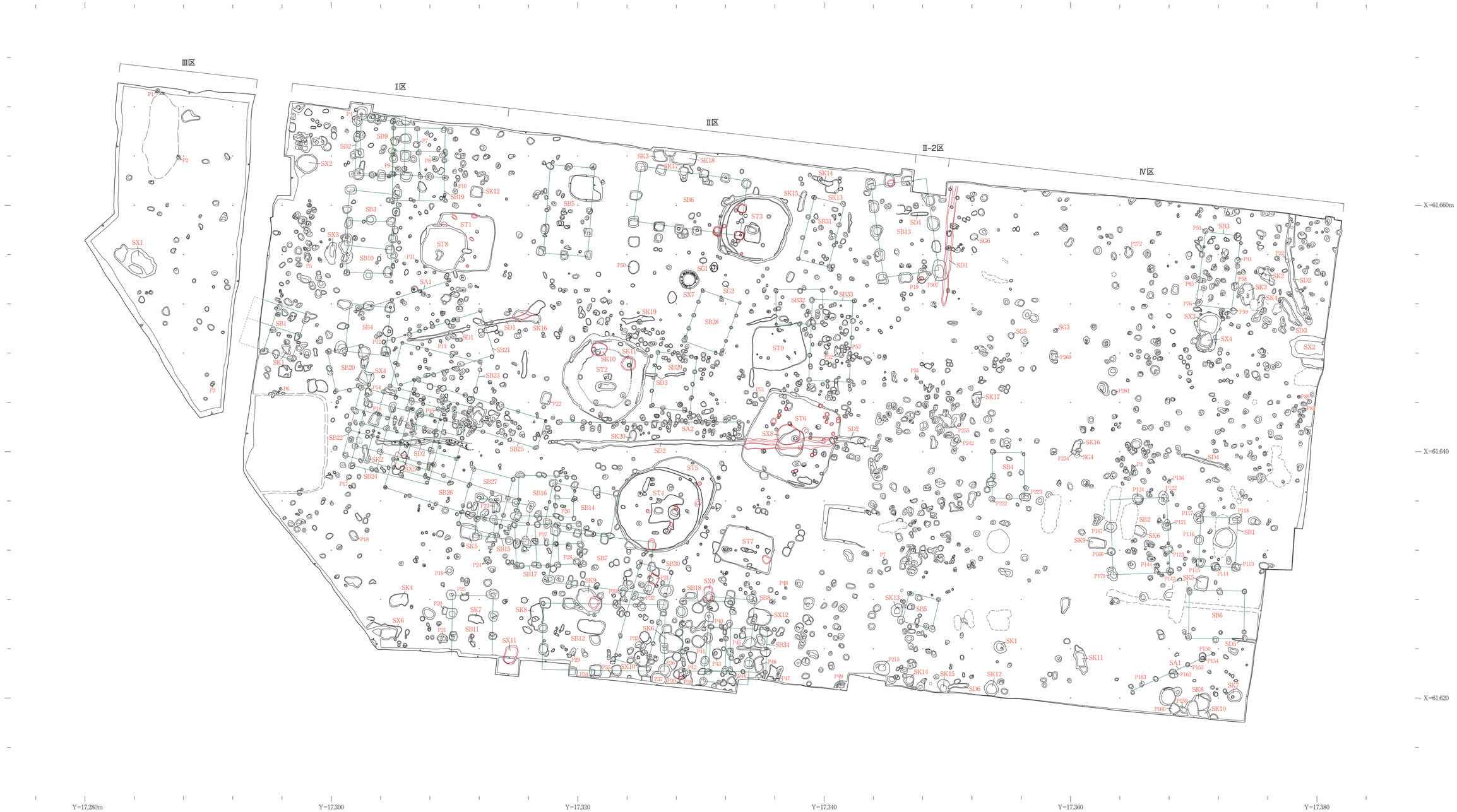
要約

高田遺跡

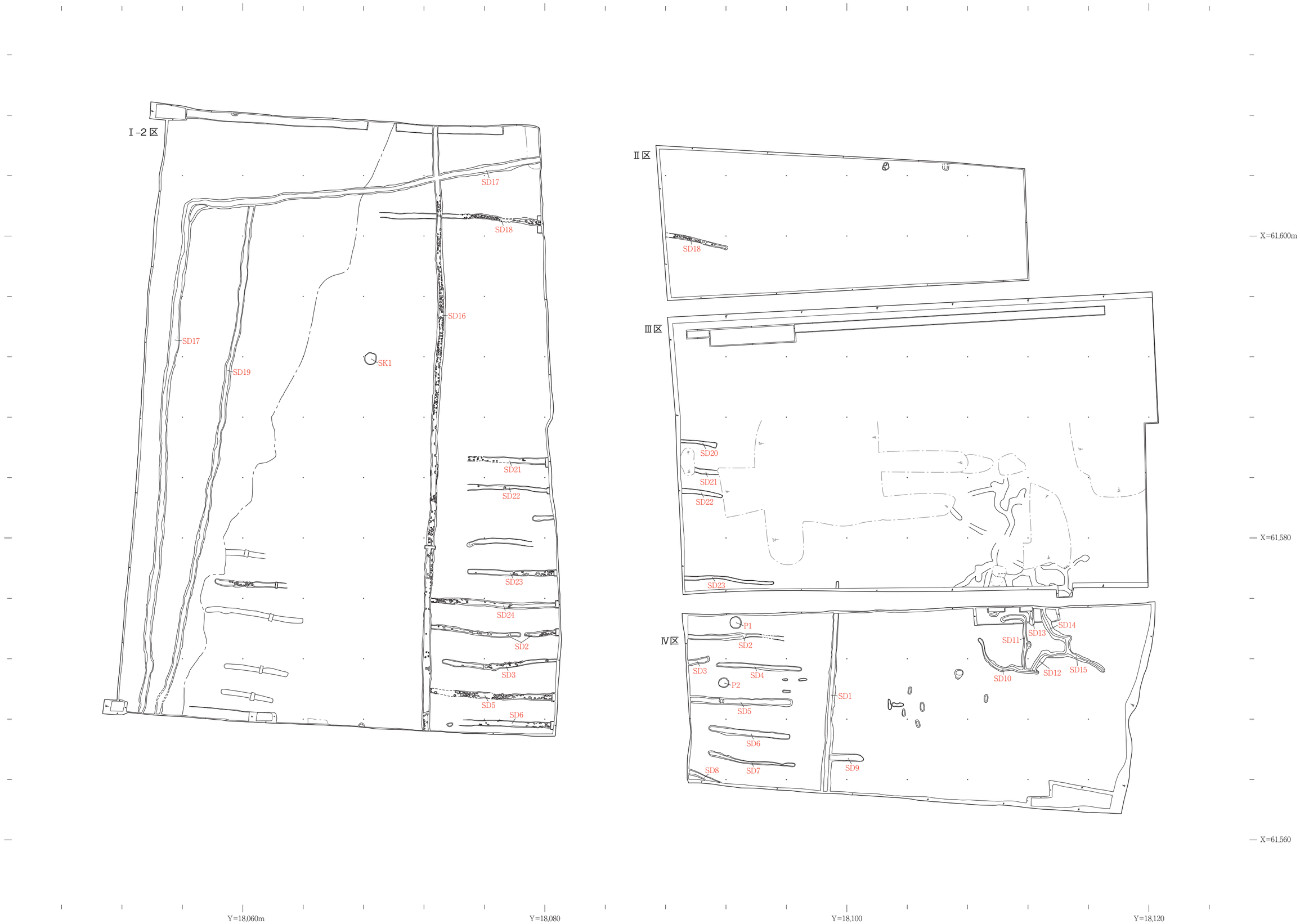
弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物跡や土器棺墓を検出し，物部川下流域左岸の河岸段丘の縁辺部に立地する集落の存在が確認された。古代では，企画性をもった掘立柱建物跡群を検出した。赤色塗彩土師器や緑釉陶器，灰釉陶器，円面硯，刀子などが出土しており，物部川下流域における官衙関連の施設とみられる。

宇賀遺跡

建物跡となる遺構は確認できなかったが，溝跡を多数検出したことから，畑地や水田などの耕作に関連した生産域とみられる。



付図1　高田遺跡調査第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅱ－2・Ⅳ区遺構平面図（S=1/200）



付図2　宇賀遺跡遺構平面図（S=1/200）

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第151集

高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅺ

（高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ）

2018年2月28日

発行　（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437－1

Tel. 088－864－0671

印刷　共和印刷株式会社